

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

2月号



2-FEBRUARY '67

奇譚クラブ

昭和四十一年二月号

定価 三五〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka, Japan



294 * 350

緊縛美態代表作品一二〇葉

一部二〇〇〇円(千共) 略号「美11」

上神高首袴布筆全引麗股猿後口屋風威初な立
半妙々紋ら団筒襪き身問間ぐ手し示繩大々が核
身なとめれにの猪頭に縛柱つ縛づきはなししが
をる背のゆ無環宙さ痛りをわりでれ紫乳き目星
五縛負裸く程に吊れ々の見のを強た肌民緊は縛
つしっ身通に両りに入上嘴探調縛を縛し
にめたを程時足に女き浴げま身し人い責美男て
くの後さをか首でド股ボるさ麗た形ろめ体を融
び楊手ら描せ吊悶け間し奴れわ双のどる燃誘ら
る身縛すくるりゆい縛ズ録るし丘美る手ゆうす

木長水山竹須伊川前花川伊四岡愛津 杉 桜四加梨
村野本路野川吹端本坂端吹方谷川川 井方茂花

424140393837363534333231302928272625242322

可水高猿美投黒遊背全兩双両龜荒木柔柔豊汚
橋に々々しげ縄園後機手丘手甲繩のか肌溝肌
な膚とつきだに地での吊に吊縛が聞きをなを
目れ華わ肌し身に刺くり喰りり美貌美く緊受女
つたつにてをて青育の一片の肌れ肌む縛付
き後たと映縛ゆ繁音女裸入足緊を僅に切美て前
で手後またえらだ縛交股身る華國強のかる体機手
見縛手とそれねき又間も股け感然繁か俄を念
る麻縛う委たる縛縛だ開縛の縛縛る縛誘す
の女囀り眼瞼脚女るりりゆ縛り美り肌紐りるる

花梨田 津 山竹加 藤 須山梨川桜 梨 絹益東松 絹
本花中 原野茂 川原花雄 共谷花川田浦井川

[illegible]

野郎もち上げて投げて出なく熱海
美しき脚線を裸に授け出す艦
破られたシムミーズ
樹間に全裸身を縮める村田
逆エビ責めていた黒おる東浦
瘦身に痛むボイズする加茂
裸足の肌を反る足指する栗井
片問に責めぬかれた末美木
拷問に責めぬかれた末美木
恋人との緊縛のプレイ新井
緊縛折り縛りの痛さ新井
木馬責めにうめく刺青山原
カニ縛りに這いまわる雲井
豊かな降注り裸身を跨る若原
豊かかな裸身を跨る若原
後手縛の痛さにあへぐ文井
浣腸器のある全裸女体玉田
赤い麗巻の似合う縛る女津川
美しき顔をめぐり縛る女春丘
赤い麗巻の似合う縛る女津川
Sマニア垂漣の間股縛梨花
セーラー服で縛られ情る川端
泥まゾウ女性股間縛る表情る
全裸両中での戸外縛る愛川
両手づかり吊り縛る女体大塚
猿越中に裸される美女五月
白学生服白マッシュリ梨花
女学生服白マッシュリ梨花
股間縛り全身縛り四方坂
初々しき緊縛女体燃ゆる四
強烈縛りに苦悶表情る関谷
エビ縛りに苦悶表情る関谷
始めは乙女の洗身長野
絶妙の悲愁を漂す鼻責春花
絶妙の悲愁を漂す鼻責春花

一部 一〇〇〇円(下共) 略号△美10▽

「出浪千太郎」
 ○増田みゆき○木村洋子○大塚啓子○絹川文代○山原清子
 ○長野良子○玉田美佐子の十名の美女。

ビチビチとした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に徹しく掛った
縄目。これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかりで
百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊にて
十名の美女モデルの緊縛姿一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届くこ
のです。特製アート紙に対する極鮮明なグラビア印刷の女性緊縛のフ
ォトを、心よりお楽しみ下さい。

◎美しき縛しめ「第十集」責められる美女百態内容◎

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
立木の枝から逆さ吊り	松樹に晒された奴隷	脚裸美も露わな女体	瘦身は縄にくびれる	M女性の陶醉の表情	インナーベルト縛り	逆さ吊りの緊縛女体	Pタイルに転がされる	豊臀を無理に晒される	剥がされたパンティ	少女羞らいの緊縛裸像	少打ちに悶えぬく	足首で引回される女	縄でくびる豊麗な女身	全身緊縛首攻めの場面
(木村)	(木村)	(美木)	(木村)	(木村)	(増田)	(増田)	(美木)	(美木)	(一宮)	(一宮)	(東浦)	(東浦)	(東浦)	(東浦)

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16

色づいた乳首を晒す（大塚
全裸後手縛り豊満女体（玉田
二の腕に喰ひ込む紐（木村
鏡に写す縛られた裸身（大塚
細目と唇響にあえぐ（東浦
細目後手足首連繫縛り（玉田
長髪をアツクににして（長野
華麗な刺青裸身並峙り（山原
後手縛りに空ろな表情（木村
柔肌に喰ひ込む眼目（山原
後手網縛りの美女裸体（蒲川
諦観の若々しい裸身（一宮
片足吊りにある女体（大塚
後手吊りに喰ぐ全裸身（東浦
緑の柱に晒された女（玉田

65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

女トイの品定め（大塚）
強烈股間縛りに泣く女（東浦）
強めに縛りに恥じる（一宮）
隣室に見た驚異の縛り（大塚）
乳房の巨大になる縛り（山原）
吊りを嫌がるモデル嬢（玉田）
真紅の腰巻でポーズ（山原）
驚つかみこまれた黒髪（東浦）
麻縄縛りにのびた女体（大塚）
開孔器による鼻責め（大塚）
エロ孔器に耐えぬく女（東浦）
豊胸を黒帯に托して（長野）
雪白の柔肌を晒す縄巨（大塚）
人身御供の緊縛全裸像（大塚）
股間縛りに投げ出す脚（一宮）
エビ縛りに苦悶の表情（大塚）
伸びやかな二本の脚線（一宮）
宿車後手吊りの準備（大塚）
ゆきさの素顔と緊縛像（増田）
竹に拘束された洋子嬢（木村）
姫家の縁に縛られる（大塚）
輝く白肌を晒す全裸身（絹川）
身動きできぬ後手縛り（大塚）
腰巻を剥ぎとられる（木村）
大の字逆さ吊り女体（増田）
美しい裸身からむ縄（美木）
後手肌のすべてを晒して（一宮）
後手股間足首縛り（東浦）
浴室の荒縄縛りにあう（山原）
股間縛りと腰縄縛り（木村）
緑苔の庭を背景にして（大塚）
立木で両手吊りにあう（大塚）
縄の反応とその表情（一宮）
強烈縛りてなる弓反り（大塚）
麻縄は豊かな肌を挟る（東浦）

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

懐物境のMの表情(山原 胡坐縛りでもたえる 桐川)
股間縛り正面で立つ(大塚)
ムチ打ちを願うポーズ(木村)
伸びやかな女体の親目(一宮)
責めめかれた股間縛り(一宮)
後手滑車吊りにあう女(大塚)
縛られて歩かされる(大塚)
亀甲縛りと股間縛り(美木)
正坐で放置する縛体(木村)
夫から鼻責めを受ける(増田)
可愛い小悪魔の表情(一宮)
徐々吊るされる片足(大塚)
強烈縛りで受ける鼻責(美木)
均斉のとれた美麗縛体(大塚)
室の隅に逃げた女奴隷(美木)
首縄股間縛瑠璃の表情(美木)
可愛い裸身の鑑賞(木村)
セーラー服の後手縛り(大塚)
後手股間縛りで引回し(一宮)
海老責めで耐え忍ぶ(木村)
縄でくびつた柔肌地獄(一宮)
エビ縛りの苦悶と戦う(大塚)
台上に晒す緊縛裸身(山原)
火あぶりにあう女囚(大塚)
アダラ縛りで頑張る女(大塚)
がっちりした後手縛り(東浦)
柱縛りでもがく清子(山原)
石橋の上に放置される(玉田)
ムチ打ちに悶える女体(大塚)
瑠璃を三面鏡に映す(大塚)
庭園を引き回される(山原)
首屈にあえず哀婉表情(大塚)
太腿が柔肌をくびる(大塚)
大の字尻縄ハリツケ(山原)

サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

増刊 花と蛇

小説・絵画

特集号

目下発売中!

定価五〇〇円 略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」

テーマ画集 十六葉

8 7 6 5 4 3 2 1
折曲げられて弄ばれる女体
逆エビ廻りで引き回される女体
水を顔面に浴びせかける男
汚水と薬品の洗禮を受ける女
いちじく院腸を施される女
淫囃とオシメカバの羞恥
ガラス製イルリガートルの淫囃
強烈なイルリガートルの淫囃

16 15 14 13 12 11 10 9
尻打ちの痛さに泣き喚く女体
片足吊りに狂いまわる女体
女体滑車吊りの準備万端完了
お灸責めに汗を流す女体
トイレで排泄の強要を受ける女
後手縛りで宙ぶらりんの女体
美女の背の中を這ぐ黒い女体
グリエリの中を這ぐ黒い女体

団鬼六作 長篇小説 花と蛇 内容見出し一覧

第一章 密室の秘密シヨ

第二章 脱走の失敗

第三章 悪魔と鬼女の饗宴

第四章 鬼女の計画

第五章 美津子の脱走

第六章 美津子の脱走

第七章 美津子の脱走

第八章 美津子の脱走

第九章 美津子の脱走

第十章 美津子の脱走

第十一章 美津子の脱走

第十二章 美津子の脱走

第十三章 美津子の脱走

第十四章 美津子の脱走

第十六章 落花無残の修羅場

第十七章 淫らな美女の調教

第十八章 美少女の脱走

第十九章 悪魔の相談

第二十章 千代夫人と悪徳弁護士

第二十一章 鬼女の嬌声

第二十二章 地獄の花嫁

第二十三章 美しい敗北者

第二十四章 プレイ開始

第二十五章 白い指

第二十六章 恐ろしい仕事

第二十七章 全身美容

第二十八章 悪魔の寝室

第二十九章 猫とねずみ

第三十章 侵入者

第三十一章 風前の灯

第三十二章 再教育

第三十三章 勝利に酔う悪魔

第三十四章 白いコンビ

第三十五章 開幕準備

第三十六章 嵐のあと

第三十七章 二人の花形

第三十八章 美女合戦

第三十九章 変身

第四十章 舌と唇

第四十一章 流血

第四十二章 猿の血

第四十三章 舞台衣裳

第四十四章 バラ夫人の心得

第四十五章 第二十華々しき美女の屈伏

第四十六章 酔った

第四十七章 身体検査

第四十八章 第二十一 対峙する

第四十九章 嵐に立つ令嬢

第五十章 美女対峙

第五十一章 悲しき説得

第五十二章 調教開始

第五十三章 第二十二 あくどい陥穽

第五十四章 修羅図

第五十五章 失心する小夜子

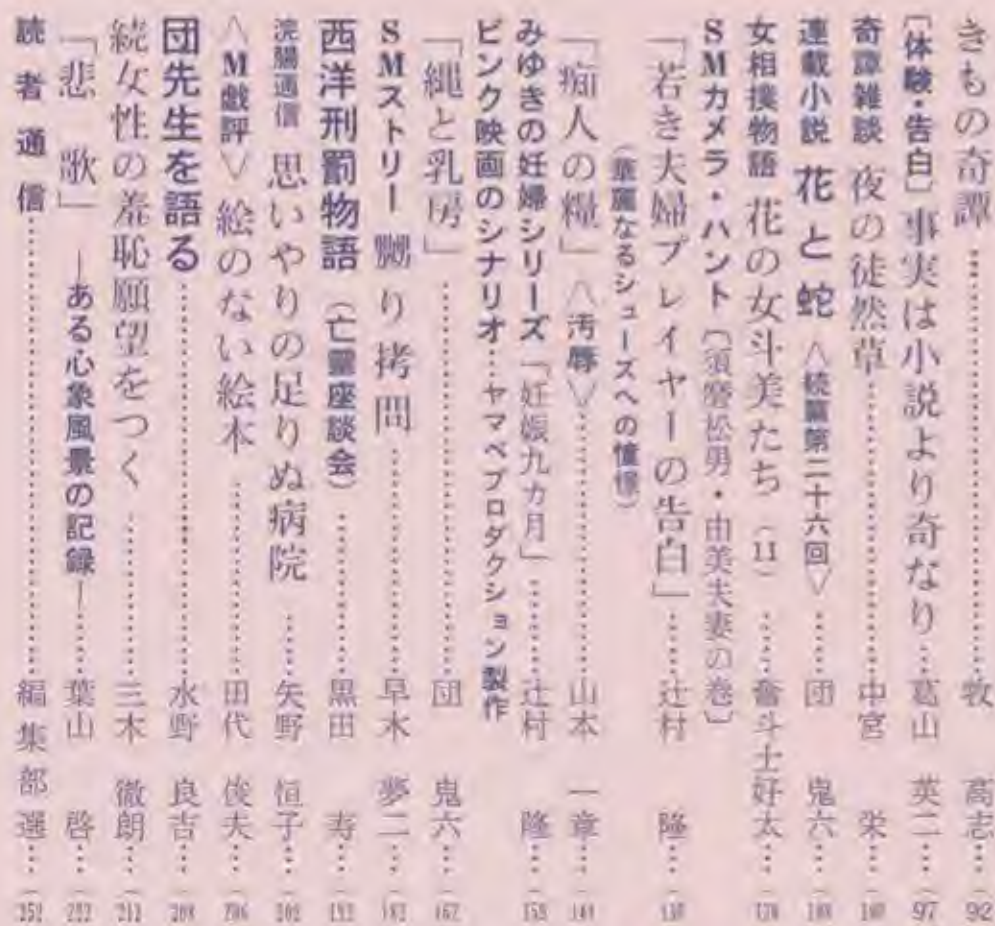
第五十六章 悪魔の部屋

第五十七章 第二十三 羞恥図絵の展開

第五十八章 復讐の生贄

第五十九章 汚辱に泣く令嬢

第六十章 小夜子の屈服



☆増田みゆき夫人双胎蛙腹作品分譲☆

双胎臨月蛙腹鑑賞

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
たいよう臨月を迎えて、張りき
った双胎の妊娠腹は、まるでお餅
がのっぺらぼうになつた蛙腹で、見
事に突き出している稀有の資料。

明瞭な臨月妊娠線

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
もうこれ以上大きくなれば破裂
してしまいそうになる太鼓腹の表
面に鮮やかに印せられてゐる妊娠
線が美しいアクセントを呈す。

全裸の臨月腹鑑賞

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
一条まとわぬ若々しい姿を露ら
せているが、大きなお腹をつき出し
トによつて鑑賞を待っています。

双胎臨月腹の威容

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
双生児妊娠という又と得難いチ
ャンスを得て、ここにその見事な
臨月腹の威容を公開して、資料の
一端に加えて頂きたいと思う。

垂れた太鼓腹陳列

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円

臨月蛙腹のアップ

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
四つ道いになり或は俯伏せにな
って、大きな臨月腹を垂れ下から
せたポーズで苦しさに耐えて動物
的なムードに暫し浸る妊婦。

便々たる臨月蛙腹

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
普通でも臨月腹となれば、その
大きさに驚かされるのに、これは
又双生児というのであるから、そ
便々たる蛙腹は想像に余りある。

蛙腹に腹帯をする

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
このほれそうに大きな蛙腹に晒木
綿の腹帯を自らの手で巻いてゆく
妊婦の有様を順を追つて角度を変
えて、とくと御覧にいたします。

誇示する双生児腹

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
臨月ともなれば、その大きなお
腹をもて余し、あたかも誇るが如
く威張つてお腹をつきだすもので
あるが、そのポーズの一端を。

仰臥する臨月蛙腹

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
予定日にあと僅か、いつなんど
き陣痛が起るかも知れないといふ
蛙腹を堂々と天井へ向けて仰臥し
た素晴らしい大きな妊婦深身。

臨月の股間しぼり

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
待ちに待つた臨月を迎つて強烈
な股間しぼりで小山のような腹部の
頂点を二つに割つて拘束した増田
夫人ならではの貴重な緊縮資料。

亀甲縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
首から胸、腹部へかけて厳重な
装束が、巨大な乳房と蛙腹を強調
するようにならなつてゆく情容散
ない本格的な臨月妊婦の装束。

後手縛り引き回し

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
お腕のようにならなつて上下から締
めつけて後手に縛つた腕尻をぐい
ぐいと引きしぼつて、追いついて追
いたて蛙腹をつき出して歩かす。

乳房縛りで弄る

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
巨乳を達まで後手縛りにされた
妊婦は臨月腹を膨らませて、髪を

乳房緊縛の臨月腹

驚つかみにされていじめ弄らる。
大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
乳房をくびるように縄を掛ける
と膨れあがつた臨月腹は一層のポ
リウムを以て圧迫するように眼前
におおいかぶさつてくる。

浣腸される妊産婦

大手札三枚一組 略号四〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
浣腸は分娩を前にした臨月の妊
婦にとつては欠かすことの出来な
行事である。今や夫の手によつ
て浣腸を施される臨月の妊婦。

双胎臨月剥玉子腹

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
着物の前を開くと、まるで茹玉
子の皮を剥いたように真白な臨月
腹がむくむく盛り上り、その妊孕
美は目もくらむばかりである。

豆絞りの猿ぐつわ

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
豆絞りの猿ぐつわは、臨月の口
それだけに苦しいのに、更に口
の中に布片を押し込まれて豆絞
の猿ぐつわを噛まされたのだ。

臨月腹に革具装着

大手札四枚一組 略号五〇〇円
増田みゆき 略号八〇〇円
顔面から股間に至るまで、胸、
腹、脇と全身拘束の黒革具。

奇クサロシ

ダイコームジックに於いて秋山夫妻のハアブノーマル演劇と謳ったショーが上演されていることを本誌一月号誌上で紹介していましたが、私の見たままを次に述べてみましょう。

秋山夫妻のショーをダイコーでやっているのを私は前後三回、見に行きました。偶々大阪へ出張できていて、夕刊の広告で知って行ったのが最初です。ショーの責めが実に真に迫っているのに驚き、且つ大変興味深く感じ、続いて三回も見えてしまいました。

最初、秋山夫人が独りでアクロバットを踊り、踊り疲れてマットの上へ長々と寝ているところへ男がやってきて、女の右手首に縄を巻きつけ、背中へキスします。女が驚いて逃げようとしませんが、右手首が縄で縛られているので、男の手によって手元へ引き寄せられてしまいます。

更に逃げようともかく女を捕えてリアルに後手に縛ってしまいま

す。この後手に縛ってゆく過程が大変よく、縛り方もアイデアも立派でした。次いで夫婦プレイの色々な責めをやり、最後に近くなつて実際にムチで叩く場面があります。この時、女は「痛いから、もうやめて！」と言います。

男が女の肌の上に蠟をたらすゼスチュアをする時、女は後手に括られた不自由な形のままで逃げまわるところを、男が髪を驚づかみにして引き起す動作なんかは、実にうまいと思いました。最後に男が蠟燭の火を女の肌に当てて消す時、女は悶絶します。

ここで男は女の体を愛撫しながら順次縄を解いてゆきます。ショーが終って二人が揃って立ちあがり、観客に向かって礼をしますが、この動作なんかも、見ていてなかなか好感が持てました。

男がムチで女の肌を実際に叩くとき、女は「痛いから、もうやめて！」と叫びます。ショーはここで終ってしまうのですが、私の考えでは、ここで男がやめてしまわず、「うるさいッ」と怒鳴って女の口の中へ、実際にハンカチを押し込んで、手拭で顔の半面を覆うくらいまでにサルグツワかましてやったら、一層迫力を増し且つ「責め」としての演出効果も挙げたのではないかと思います。

秋山夫妻のショーや青木順子さん（現在は牧野ナオ子と改名されたようです）のショーをこれから是非見たいと思うのですが、大阪では夕刊に親切にショーの案内が出ていて見に行くチャンスがあるのに東京では新聞の演劇案内欄には、のっておりません。

このような「責め」の演劇は今のところ、余り多く上演されていらないようですが、何時何処で上演されるかというのを是非事前に知りたいと思います。特定の芸能社あたりで専門に斡旋するのだったら、そこで今後のスケジュール

もわかると思うのですが、こういったところの内情は至って複雑そうなので、長期に亘ってスケジュールを組むということは、なかなかむづかしい実情だと思っています。もし本誌編集部で調べていただ

いて、事前にわかるようでしたら誌上に御紹介いただければ幸いです。又、秋山夫妻ショーや青木順子ショーに類似した「責め」のショーがありましたら誌上に載せて下されば有難いです。「責め」の演劇については、故伊藤晴雨氏が相当熱心に努力されたようで舞台装置や演出指導に直接タッチされたというのを聞いておりますし、又、ストリップの一分野として時折り行っているのを見聞したこともあります。

しかし、秋山夫妻、青木順子さんのように、明らかに「責め」専門の軽演劇として出発したものは、特異な存在だろうと思います。

私は本誌愛読十年選手の男性ですが、「責め」の演劇ばかりではなく、映画の中で、八美女の縛られる場面Vのあるものにも興味を抱いております。従来、本誌上にはこの種の紹介が熱心に行われておりますが、今後更に詳細に亘って掲載されるよう望みます。

「責め」演劇雑感

桑田 時 次 郎

サロソ楽我記

辻村 隆

(第三十二回)

かねて鶴首していた岐阜の水野弘夫妻の来訪が遂に実現した。私が彼を紹介した京都のT氏も急拠多忙を割いて駆けつけられ、陋宅でのひるのひととき、ついである夜、かなり強烈な激しいSMのプレイを続行し、流石にタフな水野夫人も少々グロッキー気味であった。その夜午後三時頃まで、興の趣く尽に盃を交して語り合い、狭い四帖半の部屋で私の家内も含めて計五人、その俣難魚寝してしまつた。酔余の夢うつつにT氏と水野夫人のプレイ、それに水野弘の押し殺した声など、混んとした脳裡の奥に記憶していたが、それもいつしか夢の中。午前六時、暗がりから叩き起されて、早朝の彼等の出発を駅まで車で送った。

到着した夕方岐阜よりお子様の急病の電話あって、プレイの夢さめれば、そこは親心、気もそぞろに発って行かれた。精しいことはカメラ・ハントで書くつもりですが、今月号には到底間に合いそうもないので、一寸簡単ながら。

× × ×

箕田編集長から連絡があつて、モデル募集で応募して来た女性の中に、早速O・Kという人がある。ので撮りに行かないか、との結構な電話——。飛び立つ思いだったが、約束の日、運の悪いことにぬきさしならぬ急用が出来て行けなくなつてしまつた。箕田氏も始めての女性を一人で撮るよりは相棒が居つた方が都合いいらしくピンチヒッターとして、『痴人の糧』の山本一章氏に急拠連絡、二人で撮りにいってかなりいいフォトをものにされたとか。豊中市の女性で大島照代さんというグラマーで、箕田氏より参考にと送つてこられた二葉のフォトから見つて仲々の美人。大魚を逸したが、いずれ又撮る機会もある筈と、今回は指をくわえた。その後数回山本一章氏が彼女を撮つたとのことですが、私に代つて是非そのカメラ・ハントを書いて頂きたいと切望しています。この冬、私が撮る機会があれば、又私なりの観点で書いて見たいと思っています。山本さん、年末には是非一度お目にかか

りましょうや。SM談義に花が咲くことでしょう。

× × ×

増田みゆき夫人の双胎の太鼓腹もいよいよふくらみ、九カ月の身重とは相成り、最早、増田氏母堂の応援を仰がねばならぬ羽目に立到つて来たので慌ただしくとりにゆく。

ところが、見舞がてら家内も行くと言ひ出した。女房帯同でフォトを撮るなんて、私も初めてであ

僕のイメージ画集「メス犬の部屋」 室井亜砂路画



る。ままよと妻を助手席にのせ、彼のアパート訪問、女房の眼前でパチリパチリやつたが、みゆき夫人全然、動ずる気配もなく泰然自若である。動きたくてもポンポンがふくれ過ぎ動けぬのが真相であろうが、それにしても女房連れのカメラ・ハントなんて、恐らく私以外には余りないでしょう。(精しくは妊婦シリーズをどうぞ)箕田氏はこれ又、急用で行けなかつた。お互いにどうもうまくゆかな

いものである。

× × ×

奇クサロン一月号の「縛られてみたい私」という河森真理子さん。私が御所望なので、連絡したら、折返えし速達で返事が来た。いつでもいいから、是非プレイしたいとの有難いお便りであるが、プレイして欲しい条件を箇条書きにされた、そのどれもが公開を憚られるようなもの許りであって奇クサロン欄の彼女の文のような生易しいものではない。女房にそ

の便り見せるのも気がひけるくらいのだぎつさで、本当はいいのかもしれないと疑って見たくなる程のものである。

別段それに恐れをなしたわけでもないが、未だ今の処逢っていない。私の仕事が一忙がしいからであろうが、女房の手前喜こんで行くには一寸憚られる内容からでもあろうか。一週間に一度くらい次々と便りが来て、現在で三通、段々空恐ろしくなってくる。カメラ・ハントには絶好である

が、過ぎたるは及ばざるが如しとか——。反って書けないような気もする。執れは当って砕けるつもりであるが——。(これを読まれた河森さん気にしないで下さい。本当の私の本心は、とりたくてウズウズしているのですが、女房が見てしまった、あのお便りではどうも——余り正直に書き過ぎたですネ。これからのお便り、もう少し婉曲にネ)

× × ×

懸案の須磨松男氏の邸宅訪問を

評価に本腰が入ったことを特筆大書したのである。

夜居氏については、すでに「晴雨ノート」第一回目を読んで、すぐ次号に紹介の労をさせて頂いたので、正月号に掲載された、その(2)について少しふれたい。

すでに知る風俗文献研究家の第一人者である氏は、また文献収集家でもある。それ故、本文には、氏が足で求めた貴重な資料がかなり多く写真カットとして挿入されている。生きた文章とあわせて楽しい実のある読物だ。ハハア、責めの大家が、逆に女になぐられる、なぐられた伊藤晴雨というのは、一種の罪ほろぼしになります

過日やっとな行した。彼の邸宅の余りの豪壮さに、いささか度胆をぬかれた。彼の最近作をかずかずその折拝見したが、すべてカラー作品で色もいい。これが全部須磨氏自身のプリントによるものだから感謝させらる。今の処、カラーフィルムの実像のみ、未だメーカーに出しているそうだが、これが自作出来ると、もっと凄い傑作をとるのだと張切っておられた。プレイの模様はカメラ・ハントの方をどうぞ。

ね などという紹介は、夜居氏であってこそ筆にし発表できる秘話でもあろうか——。

新しい風俗文献誌を標榜する奇譚クラブに、氏の如きその道のオーソリティを迎えたことは、小説手記などくらべて、とかくこの方面の人材少なき折から、よろこばしきことだ。しかも、これを氣運として一層の新風が吹きこまれ夜居氏の今後の御健筆はもとより氏の知己なども寄稿される糸口などともなれば、何よりのことである。その為にも大方読者の氏に対する支持ある声も期待し、晴雨再評価の投稿の後に続くことを望みたい。

乱れ髪



晴雨再評価

本腰をよろこぶ

久我庄一

間を要した。

——ここに、齊藤夜居氏が「伊藤晴雨ノート」を二回に亘って発表されたことで、ようやく晴雨再

菱縄マニアのたわごと 早木 夢二



新年号で久しぶりに新田ゆう子夫人のプレイフオートにお目にかかった。豊満な乳房を緊縛し、堂々と股間縛りを誇示しているのは、いつもながら見事なものである。それに今度は、二の腕にも縄が回してあって、甚だ結構なものである。唯、菱縄マニアの私にいわせるなら、一度この豊満な胸部に菱縄をかけていただきたいと思うのだが、どうでしょうか。菱縄をかけ股間縛りとくると、私がいつも描いている彼女の緊縛姿となつて大いに満足するのだが……いや、

これは全く以て、虫のいい話というものである。私もK子との緊縛、夫婦プレイを綿々と書いて、表現に節度を弁えないので、編集部に変えて迷惑をおかけしているようで申し訳ありません。ついつい筆がすべってしまふのと、未熟なためなので、深くお詫びする次第です。まだまだ彼女とのプレイの種々相を書いてゆきたいと思っているが、何分にも事実を専らに書くしかないの

私はこの境地をのり越えて、色々様々の責め模様を描きたいのが念願である。殊に史上有名な拷問される人たち、それが男であれ女であれ、その人たちの汚辱と苦痛の姿

を描いてみたいと思うのだが、どうも中々そこまで行くには時間がかかりそうである。

いまのところ、せいぜいK子とのらちもないプレイの有様を書き時々にはちょっと脱線して色々とお勉強しているというところですが、いわば、責めの私小説、そんなところ、今の私の分相応というものであろう。

同じ新年号の「マゾ年代記」を興味深く読んだ。私の感じでは、私と略同時代位の人と推察するが私たち位の年輩になると、どうしても過去の歴史も長いし、而もその歴史の中で人知れず、或は楽しく、或は悲しく育んできた世界のことを、こうして吐き出してみたい気が泌々としてくるものだ。淡々たる筆致の中に、映画や文学のことを織り込んで、時代の影もうかがわれて、私には大変興味深い読物であった。未完とあるので、次を期待している。

私の「責める」(十一月号)のさし絵は、菱縄の複合体のような亀甲縛りの女が描いてあって大変嬉しかった。いつか「続「菱縄」に憑かれて」というようなものを書いて、先頃の文中で洩らしている緊縛女性の姿を映画や小説の中

代理部だより

○臨時増刊「花と蛇」特集号の発刊予告をしましたところ、多数のファンの方々からの予約のお申込みを頂き有難うございました。十二月月上旬発刊という予告通り、十二月六日に完成、予約下さいました方々には、七日に一斉発送申し上げました。

○当初予想しておりましたより非常に多くの予約を頂き且つ引続いて毎日のようにご注文が殺到しておりますので、今更のように「花と蛇」の人氣に驚いております。書店向けの配本は普通号の約二割減となっております故、忽ち売切れになるものと思われまふ。未入手の方は、是非直接発行所へ代金五〇〇円(当分の間送料は当社に特に負担いたします)同封の上略号「花と蛇」とご記入してお申し込み下さい。

○前回の写真絵画小説「花と蛇」特集号が案外早く売切れになってしまつて多くの読者の方々に迷惑をおかけしてしまい、未だに強い要求がありながら、補充できない状態です。古本店に稀に姿を見



「愛妻ゆう子の緊縛フォト」

新田 英雄

で求めてみたいと思っている。
何かで読んだのだが、大体女性を縛るのには、後手に括りさえすればいいのに、菱縄などというものを発明したのは、余程好きな奴に違いないと書いてあったが、これも一説によると、女は乳房があるので、緊縛するのには菱縄が一番目的に叶っているのだという。そういえば、昔の柳行李などを括るのには、菱形の縛り方をしたも

のだが、これも一番強く括れるからであった。
然し、いずれにしても、菱縄ぐらい女の緊縛の美しさ、哀れさを現わすものはない。とこの菱縄マニアは信じている。それが、色情的な情念を感じさせるからだろう。いってはいけないか。それはない、いってはいけない。それはない、腰巻一枚で菱縄をかけられた女の姿など、そうそうザラに見れる

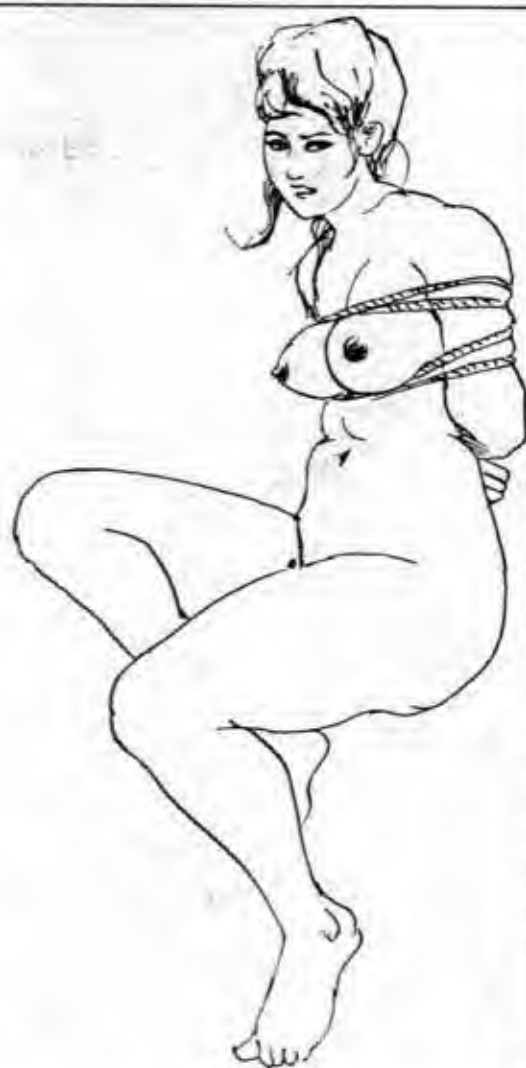
ものではない。「拷問」という映画、丁度奇クが発売された日に、私は四回目鑑賞を行った。もう筋など覚えつくしているの、責め場以外は、薄暗がりの中で奇クを読みながら、その場面になるとさっと顔をあげて、菱縄を喰い入るように見詰めるのだった。我ながら菱縄マニアであることに、唯々呆れる位である。

× × ×

ゆう子の「乳房」を強調した狂いで三枚のフォトをお送りいたします。現像の際、液温で失敗しましたため大変フラットな写真になってしまいました。乳房の上下を締め上げて大きさを増し、お臍の中心を通して臍をくびり、更に腰のところから股のつけ根に縄をまわし、胴縄と股間縛りの縄とを連繫しました。妻に聞くところによると、この縛り方は非常に緊縛感があるということでした。

名古屋の小川様、東京の新田です。お便りありがとうございます。た。せっかくお約束しながらお会い出来ず残念でした。そのうち又機会を見てお会いしましょう。貴方がた御夫妻のプレイフォトも是非御紹介下さい。

それでも定価の倍以上もしている有様ですので、今回は若干多い目に保有しておりますから、何卒どしどしお申込み下さい。売切れになりましたら補充はつきかねます。
○分譲品をお申込み下さるときお届先は必ず楷書ではっきりお書き願います。中には町名だけで府郡名のないものや極端なもの、全然住所氏名の書いてないもの或いは氏名のないものなどがあって送達できないものがございます。
○切手代用にて御送金下さいませのは結構でございますが、必ず一割増の計算でお願いします。紙に貼りつけたり、ばらばらに切り離したりしないで下さい。
○雑誌の送料は、新刊既刊に拘らず一部につき20円御加算下さい。但し三カ月分以上御予約に限り当方にて負担いたします。
○先月号にて増田夫人の九カ月腹の分譲品発表がなかったといつて問合せになった方がありました。十一月月中旬に撮影の都合上、先月号に発表できませんでした。尚臨月腹は双生児にて早産のおそれもあるため、十二月上旬に撮影しました故、今月号の発表に踏みきりました。カラー写真と九カ月腹は次号に発表します。



煉獄

(れんごく)

黒井 珍平

「ふふふ」

妻のけいべつの笑い、先ほどから、ずっとつづいた沈黙。

どうしてこんな変なことが好きなの、世間を常識を恐怖の武器として、私の心にちくりちくりと茨のとげを刺す。

これがノーマルな人達なのか。私の言ってるのが非常識かどうか。今、電話をかけましょうか。Oさんに、Dさんに、勤め先のみんなに。それでも好いの。

SM好きの私は、かわいい妻、かわいい女性のくぐられた姿に心をとろかしこそすれ、心理的な、本当の、あそびでない加虐被虐に

は、生理的には嫌悪以上の怒りを持っている。たとえ猫であれ、パッタであれ、いじめるのも、いじめられるのを見るのもいやだ。むらむら怒りがくる。

ノーマルを自認する妻の私への心理的加虐に私は耐え切れぬ。お前の今の心理はサディズムだといいたい言葉が、のどもとまで出てくる。

長い長い沈黙。ふかふかとふとんをひっかぶって寝てしまった翌朝。大切なコレクションが一纏四方の細かい紙切れになって、うず高く積み重ねてあった。捨ててらっしゃい、今すぐ、どこへでも。自

分の大事な娘をずたずたにひきさかれた父親の心境、それでも、その一かけらでも好い、私はかくした。いましめられた美女の小さいカット画をお守り札の様に肌につける。定期券の間にひそませる。ナムアミダブツ。

身からでた錆。いいしれないコンプレックス。

もう結婚して十年。いくら本屋から買ってきても好いわよ。見つけ次第、かたっぱしから破ってやるから、一冊破るたびに胸がすうっとするの。もはやヒステリー気味を帯びた妻の目から外らし、ただ、劇場の幕やライトの色がさつと変る様に、ぱっと妻の心理が平静にもどるのを待つばかりだ。

こんな恐ろしい瞬間の妻がある時愛撫の中で、手首を後へ回してもやわらかい紐でたとえ十分でも胸に一卷きしても甘えの声しか洩らさない。その同じ妻が。判らぬ。い。どうしても判らない。何日かたつと又恐ろしいおかしがくる。

ノーマル人とは、SMをもっていても自覚しない人種なのか？

十年前、恋の逢引きの時、ほのぐらい喫茶店で並んで坐っていた時、片手を後へ回していた彼女の手をぐつとにぎりしめ、やがて、

両方の手も後に回させて抱きよせた時、彼女はうっとりとして言った。「しばらくはいてみるみたい」

この一言が私をしびれさせた。しかし、その後はつきりと自分のSMを打出さなかった私が、SMと縁を切れなかった私が、悪いのか。しかし、やはりあれだ。悪書追放というマスコミの大攻撃が、妻をぐんとはなしてしまった。四面楚歌だった。

こんなにSMを嫌う妻が、きげんの好い時、幼い頃母にくぐられた話や、お産の話や、私のSMをうずかせるような話を持ちだすのは何故なのか。その時の妻と、しぼられた美女のテレビ場面のスイッチを無情にカチッとひねる妻は、まるっきり違う。

SMがブームになったって？こわい。実にこわい。数々のブームの歴史をみてごらんさい。ブームの去ったあとを。根こそぎ倒されていくから。ブームに熱中し、又さめて行く人は、もともとSMに無縁の人達なのだ。だっこちゃんブーム、安部ブーム、ベトナムブーム、ロングスカートブーム、一体何が残っている。家康ブームが去って来年は明治百年ブーム。テレビの何かの歌らしい息子が

夫婦プレイフトに寄せて

今田 雄三

うたっている……昔の兵隊さんは鉄砲がついで……今の兵隊さんはジェット機とばして。今も昔も変らぬものは——ああ背すじが寒く

なった。西ドイツのある州でナチ党が勝ったそうなの。
「サドの一生」保守の世界で獄に
つながれた彼。フランスに革命が

起り、又サドは獄につながれた。保守からも左翼からも見はなされたサド。これはSM者の宿命か。天国への道も、地獄への道もふ

さがれしものの行きつくところ、それは煉獄——。
▽カット・山岸 三郎△

最近KKサロンに夫婦プレイの投稿が多く載せられているのに、私も大いに力を得て私達の夫婦プレイの事もKKサロンに出してみようと思いついた次第です。

私が初めてKKを発見したのは昭和二十九年だから、今日迄で十三年以上愛読して来たことになりました。その間KKにもいろいろの変化がありました。私の一身上にも変化がありました。KKを知ってから約三年して結婚、今では子供も二人儲け、せいたく生活は出来ませんが、平凡ながら平和な生活を営んでいます。

結婚当初はKKを購入し読むたびに妻と口論し挙句の果、何回か本を破られたこともありましたが次男が生れた頃からは本のことと言いつつ争うこともなくなり、それが一年程前からは妻もKKを読み始

めだし、SMに少し宛興味を持ってきたようです。半年ほど前よりプレイにも興味を持つようになり私の唯一の趣味のカメラが、役に立つことになりました。

最近やっと引伸機も買い、素人ながらDPEも出来る様になり、私達夫婦のプレイ写真が次々と仕上りました。二カ月前に妻の身体に鎖ブラジャーと胴鎖を装着して写真をとりました。この鎖は犬の鎖を改造したものです。ブラジャーは真鍮の錠で前の方で止めてあるので、錠がないと脱すことができません、その錠は私が持っているから、私がいけない限り錠は除くことはできません。

肩の紐はスリッパの替紐です。で風呂に入るのにも鎖をつけたまままで上ってから紐だけ取替えが出来ますし、胴鎖も最初の頃は錠で



止めていましたが、今では最後に止めた所だけハンダ付けしてあるので、女性の力では切ることも出来ず、今では妻もこの二つを平常も身体につけたままです。結婚当初、あれほど嫌がっていた妻が、この頃では身体がしまって気が持っていると喜んで居る始末です。私もブラジャーは乳房責には欠

かせないし、胴鎖りには一本たせば股責め縛りになるので、これからは責具については、KK誌上で皆さんと共に色々アイディアを考えたいと思っています。写真まことに拙いものですが八枚お送りいたしますから、いいのがありましたら誌上に載せて下さるようお願いいたします。

愛読十五年歴の弁

春風 春太郎



奇ク誌上に私の拙い文を（一月号）載せていただいた。一身上の都合で暫く奇クには投稿せず静かに愛読していただだけに、やはり載せられると懐しいやら嬉しいやらで、送られてきた雑誌を思わず抱きしめてしまった。

新聞、雑誌、同人雑誌といろいろ投稿したもの、何んといつても奇クの文献性は、私にとってもかけがえのないもので愛読歴もきわめて長いのだ。嘗て誌上を賑わした伊吹真佐子嬢の健在はやはり懐しくて仕方がない。

私は伊吹真佐子、梨花悠紀子、

花坂道子、館典子嬢は特に大好きだった。その時代々々に新鮮さを出していたからである。和服姿で綺麗だった花坂道子嬢の名が最近分譲品に名をつらねるのを見ると感慨ひとしおである。館典子の初々しさが忘れられない、梨花悠紀子嬢は和装洋装とも似合って、モデルとしては申し分なかった。

始めて奇クを手にしたのは、昭和二十七、八年頃であり分厚い頁にきれいな色刷りや豊富なグラビアがあった。その頃類似誌も二、三出たようだが、奇クは現在尚文献誌として健在なのは頼もしい。

湖畔女相撲について

雄松 比良彦

分譲写真「すや」並に「すゆ」「すよ」拝見しました。野外であり、しかも湖畔の砂浜であるので両モデル嬢ともノビノビとしていて、従来のものよりも面白く拝見いたしました。このようなものは今後当分は作られないだろうと思います。枚数も多いことでもあり時間をかけてゆっくり観賞するつもりであります。腕をあげて相対したものなどは、何か彫刻的な味わいがあり、又横位置の一本背負いの二枚が二つの女体の作る美しい形として最高によいものだと思います。

演出について将来いつの日にか又撮影されるときは御参考にお願しいたしますと、一、モデル嬢はしきりに「腰投げ」をする傾向があります。これは相撲的ではありません。つまり脚をふみ込んで背中をあわせる投げ技はむしろ柔道のもので相撲では稀です。相撲に多用される投げは、上手投、下手投、小手投、ヤグラ共、大体胸をあわせて相対した位置からかかるもので、これが相撲独自の美し

さとなっております。もっとも、この種の投げは本当に倒れてしまいい、しかも痛いので（中間で静止できない）、腰投げはポーズとして自由に出来ますから、こうなるうだと思えます。一、相撲禪のうしろの結び目を美しく結んでいただくと思えます。この結び目（うしろ三ツ）の美しさや、それが解けてゆくとところは、やはり伝統の格調としての相撲の美しさの大切な一ツであります。

一、今後いつか又撮られるときは「仕切り」「蹲踞の対峙」もやってもらって下さい。今までのフォトでは仕切りは一ツもないようです。仕切りはやはり最高に美しいものの一ツで、撮る角度はナナメがよろしいと存じます。「蹲踞の対峙」は以前のフォト（室内）に一枚ありましたが、ただシャッターでいるだけのものではしたので演出によって美しい型にやってもらってほしいと思うものです。美しい型というのは、◎腿を出来るだけ開くこと、◎胸をはること、◎相手をみつめること、◎正当な間隔

古い寄稿家や執筆者が今日に至るまで奇クで未だに活躍しているのには、私は驚いたり感心したりしている。根気のよい人達でもあり又、奇クの隆盛に尽した功績も少くないと思う。

新年号に映画の事をよく書いて下さったものだと思う位、奇クサロン、読者通信に「拷問」を、なんとまあ精しくと驚いたものだ。私は女性の下着に何んといつても魅力がある。和服、洋装用のスリップ、お腰など、自分で見立てて買ってくるのが楽しみである。真赤なネルのお腰に、赤い長襦袢、ピンクの伊達メ、ナイロンのすそよけ、木綿製の赤いお腰。スリップはナイロンで真白、レース模様の幅の大きい、肌になめら

オムツ・・・マニア

宇都宮 武

店内へ入れば女客ばかり、これだけでも恥しいのに、私の買物は更に恥しいものでした。売り場所がわからなかったら帰ろうと考えながら店内を進みました。ウインドーに展示されているものは、婦人用品が大半で女店員が無意識的

かにホンノリ温かなナイロンのシユミーズ、断然素敵だ。お腰などは生地を買ってきて呉服屋さんの娘さんか奥さんに縫って貰っている。自分が注文した寸法で出来上った時の嬉しさは格別である。

男の人にしては詳しいですね、と云われたり、奥さんのですかと、と呉服屋の女店員に冷やかされたことがある。参りました。これには――。顔が知られているだけにてれくさい。奥さんに余程頭が上らない人だと、世間の人はそう思うだろう。なんて想像する。私の趣味で、私の好きな人に着せたいからなのもあるし、又自分の好みの娘さんに、身にまといてなめたい、そんな趣味の私。

× × ×

に私の姿を追っているように感じてこのまま通りすぎて出てしまおうとする心でいっぱいでした。

しかし、あったのです。ショールウィンドーの上のカゴの中にぎっしり入っていました。店員が若い女性だったのもついていました。人間は自分の羞恥を同性にさらすのは嫌なものです。その場でうろうろしては変に思われると思いを決して声をかけました。



をとること。ですが、チリ切りの形でもやってくればゴキゲンなのですけれども。一、大塚さんの演技力はいしたもので、東浦さんもこれ又中々うまいものですが演出された女相撲はこういう演技力が必要だと思います。

一、シャッターチャンスは大体両体のバランスが安定しているとき(組んでいるか吊っているか倒れているか)ということになりませんが、倒れる瞬間のバランスの全くとくずれているところに美しさがあります。早いシャッターを用いて頂ければ面白いと思います。

一、演出では困難ですが風紀を乱さぬ程度に褌の乱れた写真もとれば楽しいと思います。一、「寄倒し」のフोटが従来ありませんが、これは負け方の方が背中を打ちますのでイヤがられると思いますが、すけれど、それならば組んで倒れたところを作り、これをナナメ後から撮っていただく美しいものになると思います。土俵四股平氏も申された「河津がけ」の型は、静的ですが美しいものです。しかし、いずれにせよ、これだけの女相撲のフोटが出来たことはいはうれしいです。

私の浣腸レポート

笠井世津子

先日のお手紙がのりました十二月号にイチジク浣腸を洋裁学校の生徒が買うのはセルフサービスのためではないかという記事を拝見して、ふとほえましく感じました。たしかに面白い考えですが、やはりこれは男性の感覚です。空想ではともかく、現実の問題として器具を使用するなど未婚の女性に、そんな勇気がありますかどうか。既婚者なら別でしょうけど。

二、二の悪友に聞いてみましたら、やはり私と同様ももをびったり合わせるだけで、器具を使用する人はいませんでした。この種のことを書くのは浣腸同様の露出的な楽しさと羞恥を覚えます。浣腸から排泄に至る生理をくわしく書くのはこのほか恥しいです。はじめに浣腸の味は本誌で知ったように書きましたが、ほんとはずっと前、高一のときからです。で、もう三年以上も続いているのです。それに浣腸しないと充分に排便出来ない点では便秘患者ともいえそうです。連続三日間のプレイも生理的な要求も多分にあるのですから、月曜からしばらく浣腸

を休むのも、その習慣性を恐れるからにはかなりません。火曜日には便秘して水、木、金と自然排泄が続きますが、少しずつで金曜日はもうあったりなかったり、土曜には必ず便秘します。

といっても、とりわけ苦しいことはありませんが、週末の気のゆるみからか浣腸の誘惑には勝てません。何かの都合で浣腸を怠ると便が硬化して翌日は浣腸してもなかなか出ず、最高の快感が味わえますので意識して翌日まで我慢することもあります。これが一週間の浣腸の生理ですが、正確には便秘症というべきなのでしょう。

私が今のように浣腸に興味を持つようになったのは、潜在的に子供の頃の体験があるように思われます。今でも思い出されるのは小学校四年のときのことです。そのころ湘南の住宅地に住んでいました。同級生に秋山というかわいらしい男の子がいました。彼はその頃ぼつぼつ出来はじめた公団住宅の六階で、両親は共稼ぎで留守勝ちでした。そんな彼から見せられた絵からアヌスに興味を

僕のイメージ画集「浣腸器とゴムマリ」

室井 亜砂路



抱いたことを今でも不思議と思い出されてなりません。

次に私がアヌスに関心を持ったのは、中学校も終りに近く初潮を迎えたころでした。メンスが終る度にひどい便秘に苦しみ、いつも便意にまで達しない直腸の異和感（潜在的な便意ともいえますか）に苦しむうち、いつの間にか指でアヌスを刺激して便意をさそうことを覚えたのです。

このことを境に便秘もそんなに恐れなくなりました。でも深夜家人が寝しずまってから、或は放課後友達と別れてトイレの中で、こんな行為をしているところを、もし人が見たら狂人と思われたかもしれせん。でも、もうその気の遠くなるような快感からはすでに逃れられなくなっていたのです。それに不思議なことは不潔感がなくなっていたことでした。といって

も一旦排泄したものは汚く感じますが、人体で一番不潔視される筈のアヌスは私にとっては決していやなところではなくなったのでし

た。こんなこともすでに常規を逸していたのでしょうか。そして高校に入った夏、度々の刺戟に直腸が慣れてしまったのか

強度の便秘のため、とうとう母に連れられて医院で浣腸される破目になりました。このときから私の浣腸は、家の中で公認となりました

た。このときのことは、また筆を改めて書きたいと思います。

(横浜・笠井世津子)



夫婦プレイフォト

『なめし皮』

小竹 一浩

「責め衣」というより写真でごらんのごとく、下着といった方が良いかも知れない。時折りこれを着用させた上に、じかにワンピースやレインコート、冬ならオーバー

を着せて連れ歩くことがある。勿論、猿轡、鼻責め用のマスクは室内のプレイ用なので、外出時には大きめのガーゼマスクをさせる。胸衣は背で、パンティは両脇で相当強く締め上げることができ、が、このまま眠りにつかせるような長時間の責めには加減する必要がある。乳房はぐっとひき出すようにすると、ムックリ固くふくれ上り乳首責めを加えると激しい身もだえを見せ、プレイの意欲をひとしお、そえられる。

このなめし皮は、東京秋葉原の問屋で買ってきて小生自身の手で作ったのですが、意外に丈夫なものです。作ってから、もう四年程になります。鳩目の部分以外は、そんなにいたんでいません。只、皮の欠点として濡れると仕末がわるいものです。特に股間の部分などが困ります。

増田さん、長田さん等の他にも色々な責め具、責め衣を考案、自作していられる方が沢山おられることと思います。是非是非、これからの誌上に発表して下さい。私も一つ素晴らしいのを作りたいと思っています。今回のものは御参考の一端にさせて頂きたく投稿したものです。



日劇ミュージックホール所見

——高見緋紗子の女腹切——

南方 純

日劇ミュージックホールの十一、二月公演「乾杯ノイブとあな」が尻上りの好評を得ている。週刊誌もいろいろ取上げて鵬アリサの入浴シーンやガイ氏即興人形劇場と組んだ松永てるほの甲板掃除が写真入りで大きく報道された。

演出家岡聡氏がいうように、日劇ミュージックは陰気なイメージを拒否し、あくまで明るい生の喜びをうたい上げていると思う。この態度は根本的に正しい。だから敢えていうなら、この公演は堂々と芸術祭参加と称してもよいし、文部省あたりが推選してもおかしくはないと思う。

豪華絢爛、まことに目をうばう場面のかずかず、その中に奇く好みのシーンを、適当に入れる製作者のセンスは天晴れなものだ。

第一部第四景パリの街角で。ジプシーの女松永てるほが長身の白い肉体をくねられて、男、藤本久

男と踊るシーン。平手打ち、けとばし、髪の毛をつかんでのふり廻し、手荒く脱がされて、いよいよ興奮してだきついて行く運びの面白さ。

第六景死。これが庄巻と思う。

フイリッピンで戦死した将校の遺骨をさがして、将校の妻高見緋紗子がガイドと共にジャングルに入ってくる。ガイドがこんなに骨ばかりあったのではどれが御主人か判らないと言うが、将校の妻は必ずわかるというて、ついに骸骨をたずねあてて、だきしめる。ガイド「負けた、奥様の執念の勝ちだ。だが私の執念もとげさせてもらわなければ……」といって挑みかかる。トドお約束どおり高見裸となる。そこへ。物かげから日本刀（これは実は二十年前その将校から奪ったものだが）をひっさげた山賊があらわれて、ガイドを一刀のもとに斬り殺す。つぎにどくろをかかえている高見に刀をつきつ

け、どくろを取上げてポイと後に捨てる。刀を高見の乳の下にあて立たせる。高見大きな樹を後にして立ち上ると、たれ下っている夢を切って、高見を樹に二重に縛りつける。そして刀をふり上げ前方に合図してサッとうちおろすと、ヒューと音がして矢が飛んで来る。高見がよけると矢はすれすれに樹につき立つ。

山賊がもう一度刀をふりおろすと、今度は見事、高見の腹につきささり、ふき出す血汐、点々と白いパンツまで赤く染るすごさ。この仕掛けは極めて傑作。更に一度合図すると。喉元にグサリ、肩からしたたる血汐がもり上った乳房を伝わって流れ落ち、高見は縛られたまま、長い髪をたれてこと切れる。山賊が刀を乳にすりつけて血にそまて刀身をかざしてニッコリ笑う、血染めの美女にスポットをあてたまま舞台暗くなる。

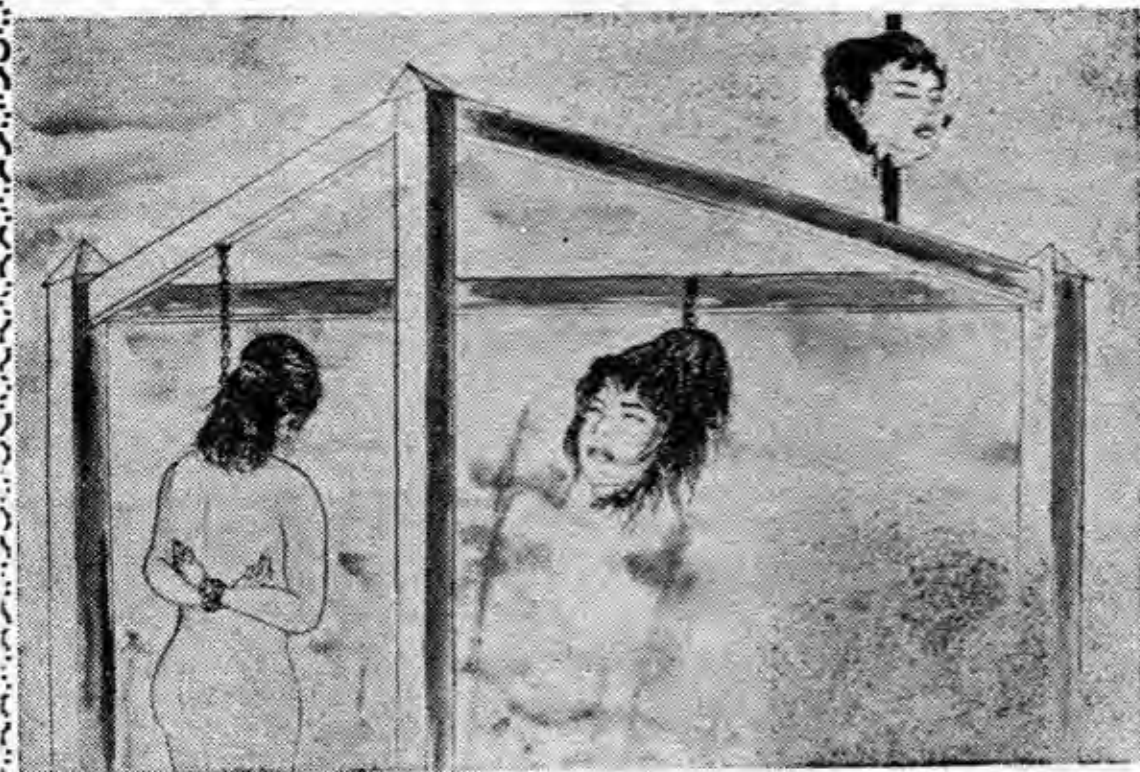
第二部の紙芝居忠臣蔵では、この高見が判官をやる。十分間で全通しをやるうというのだから無駄は一切ない。四段目判官切腹、幕があくと正面切腹の座にいるのが高見緋紗子上手に介錯の武士松美はじめが刀を抜いて立っている。高見肩衣をはずし、白衣を脱ぐ、

編集部だより

○十月号以降増頁の上定価の値上げを断行したが、漸次内容が充実してきたという評をよく受ける。それかあらぬか、売行きもますます良好のようである。愁眉をひらいいてる次第である。編集部としては、二年前のグラビア廃止が第一の難関であったが、定価の値上げも第二の関門といってよいだろう。

○頁数の上からだけいえば、もっとも厚い方が、あれやこれや盛沢山に載せられて編集する者の側はたのしいのだが、これ以上定価が上るといふことは決して好ましいことではない。ただただ発行部数が増えることによって、頁数の増すことを念じたい。

○今回完成の臨時増刊八花と蛇の特集号は、続篇第一回から第二十四回までを収録した。従って新年号からの分が、これに続くことになるわけだ。「花と蛇」といえば、来年は更に筆硯をあらたにして、力筆をものしようという団鬼六先生からの便りを貰った。それによれば二カ月に一回か三カ月に一回の割りで八鬼六談義Vも送って下



私の「汝ナ魔マ苦ク美ビ帳」より

前川 成雄

松美刀をふりかぶって構える。高見白い襦袢を思い切りよく右から脱ぐ、乳房が見え。松美それを見てフラフラする思い入れ、高見一層元氣よく左の方を脱ぐ、松美刀をさげてポツとしている。高見右手で九寸五分を取上げ、左手で三

方を尻の後におき、帯をおし下げ、短刀を左脇腹におしあてる。ここで女腹切りの型となるのだが、そこがアチャラカ松美の方を振り返って「早く切んなさいよ。……どうして切んないの」松美ヘタヘタとして「一緒に逃げよ

【短歌】『いたぶり』

高村 初子

うよ「高見「ヘンな侍」

高見緋紗子の女腹切は以上の通り全くの未遂ですが、女腹切ファンの方には週刊文春十二月五日号のグラビアがやや渴を癒やすのではないかと御推賞いたします。

× × ×

必死にてとずれどやがて足首をくくりし縄に膝のわれゆく
つきでたる足のせ台にくくられてさらされし肌朱に染まりつ
いやいやと叫べど無下に割られゆく膝がしらふとふるえとまりぬ
泣き声を挙げる力も消えうせてただうううと呻めくおみなは
足指にひとの視線のかかるときひとしお赤く顔はじらいつ
うつむけに押し倒されて両腕をうしろにくくる縄の痛さよ
黒髪が歯にきりきりとあたるとき思わずもだえ足を曲げいぬ
これだけは守りぬこうと思いに縄の痛さにゆるめいしかな
毛むくじやの指に責められ泣きいつつ思いはそとに遊びいしかな
十八の乙女の紅き花びらは蕾にましてかなしかりけり
黒髪の乱れなやまし乙女子の肌にかかりし縄のくろさよ

さる由にて、ここ当分は、安心して八花と蛇Vを楽しめるといふことである。

○増田夫人は十二月に入ってから以来もういつ何んとき陣痛が起つてくるかもわからないというので、そうそうに臨月腹の撮影を敢行、初めて妊婦のカラーフォトも作成した。双生児であるため、予定日より早い目に出産ということもあり得るそうなので、千載一遇のチャンスを確認に掴んでおいた。

○若い女性のモデル志願者がこのところ、ぼつぼつ便りを寄せてくれるのは有難い。スチール写真ばかりでなく、団鬼六氏脚本のピンク映画に主演してくれるような女性があれば、本誌推薦というところでスターになって貰えれば愉快なのだ、若し御希望の方があれば、お便りしてほしい。素質さえあれば、テレビの出演も斡旋すると団先生が力こぶを入れている。○夫婦プレイのフォトや挿絵・カットの投稿が相つき、大分誌上を賑わしてきているが、最近結婚者や恋人の緊縛フォトを投ぜられる勇敢な方もある。限定版グラビア写真集が企画できるほど集まると面白いのだが、中に露出の不適正なものがあるのが残念だ。

偶然の出来事

福田 久文

奇妙な経験をした。十月二十九日土曜日午後九時過ぎ、わたしは国鉄立川駅前ポリボックス裏の銀行らしい建物と茶房やバーの間にある小路へはいるうとした。戦後米軍が駐留するようになって一層悪名の高くなったこの街へ同僚たちは土曜日曜によく出かけるのであるが、わたしは一度洋画を見に行っただけだった。それが、この夜宿舎の近くの小さなバーですこし飲んだあと、割烹旅館のスタン・ドでも見つけて飲み直そうと思つて立川へ出たのである。不案内な土地なので駅前の繁華街を一廻りしたあと、この辺以外にこまじなところはなさそうだと思ひ、その小路の奥を竹んで見渡したのち、そこへはいりかけると、一人の洋服の女がわたしに寄り添つてついて来たのに気がついた。すこし痩せていて色が白かった。いやらしさのない年取った夜のご婦人（ととっさに思った）は、さも嬉しそうに笑顔でわたしを見上げて、たぶん時計がついていたのであるう、四つ折りにした紙幣の枚数を

手にしたまま（なぜお金をもっていたのか。たぶん横にあった茶房から、あわてて出て来たのであるう）手をさし出して、「もう九時過ぎたでしょう」といった。言葉は柔らかく、濁つてもいなかった。狭い路に自動車がつうつと寄つて来た。この種のご婦人は車の手配までするのかと感心しながら、よく見ると、助手席にも男がいて、わたしと女とをまじめな顔つきで振り返つて見ているのである。関係ないのかと思つてためらいがちに女について行くと、路が突き当りになって、女の曲つた方はまっ暗だった。わたしはようやく意を決して立ちどまつた。門限までに一時間半足らずしかなかったし、わたしは妻以外の女を知らぬ男である。一冊の書物に万を超える代金を払うのに何のためらいもないが、ノーマルなこの種のセックスの購入には、長期出張先でもそれほど積極的でない。と、若いサラリーマン風の男が二人わたしの背後から現われて女に追いつき、二人して女にな

「二頭立馬車」

春川 ナミオ・画



にか、しきりに話しながら歩いて行つた。

（客はじゅうぶんにある）

と思ひながら引き返えしたとき、あの女は未知の若い男と逢おうとしていたのではないかと気がついた。右と左さえ忘れることがあるから、これぐらいの粗忽は普通のことである。すべてが過ぎ去っているのを承知の上でわたしはただ確認したかった。引き返えし

て歩き初めていたのをまた廻れ右をして歩いて行くと、さらに折れ曲つたところは空地で、細い路はメインストリートに通じていた。三人は空地に沿つてさらに折れ曲つた小路にはいった筈である。その小路にはいると、泉水つきの割烹旅館の入口があった。うすぐらい小路のなかに、ひとときわ明るくて、普請もこつていた。スタンドもついていて、のれん越しに感じ

のよい設備が見えたが、奇妙な偶然でせっかく探していたスタンドを見出しながら、わたしは失望したように通りすぎた。

余分になったのはどちらの青年か知るよしもないが、一人は顔を瞥見した。気持がよいという顔つきでもなかったし、わたしは気の張る会合の帰りでカフスポタンまで替えていた。もし女がわたしの推定どうり相当の教育を受けた育

ちのよい寡婦だったら、終始一言もいわず、ためらいながらもしばらくくついて歩いたわたしを、思い出しているかも知れない。青年期のわたしには恵まれなかったが、機会はあるものらしい。童貞と中年女——サジズムはなくても充分にサジスチックだ。

宿舎のガラス戸はいま一面の漆黒、虫の音が一層静かさをひきたせるようだ。妻子を遠く離れ

て、女の匂いの全くないところでひとり明るい蛍光灯に向っている。と、重苦しい特異な性的負担が二十代の烈しさを伴って生々しくよみがえることがある。一人の青年がサジスチックな初老の女とあえて結婚することや自分の性癖にあった一人の寡婦と逢う瀬を重ねるというようなことはただ偶然にまつしかない。わたしの性的不満は青年期の終焉とともに満た

されることのないものとなった。幻の婦人はついに現われず、少年の頃から育てて来た詩想もまた身を支える詩的眞実にまで昇華しなかった。それらはともにわたしの青春の夢想の一つとして色あせたのだろうか。負担の多い青春だったが、あのひたむきな憧れが懐かしい。

× × ×

女性週刊誌に現われた縛られ方秘法

柴 利 好



婦人雑誌にセックスの花盛りは今さらのことではないが、女性自身(四十一年七月十八日号)に奇クそのけの記事が現われたのにはいささか驚いた。暴漢に襲われたときの対抗策がテーマとなって

おり、合気道よろしくの技法が説明されていることは前例も多いのだが、問題はその冒頭を飾った三つのグラビヤ写真なのだ。それというのは後ろ手に手首を合せてロップで縛り上げられた女の背面写

- 1 両手の指を縛りしめて縛られること
- 2 手首の腹(内側)を合せて縛られないこと
- 3 手首は縦に重ねるようにして縛られること

以上の三点を実行すればたとえ縛られても縛り目に締め緩みができてくるから縄脱けが可能であるという訳である。この内1についてはいささか疑点がある。即ち手首は指を開いたときの方が握りし

めたときより太い。それはその筋肉などの動作でそうなるのだが説明文の通りに手の指を握りしめて縛られるということは手首を細い状態にして縛られるのだから縄脱けを意図するのであれば反対に手首を普段よりも太い状態にしておくべきだと思う。それ故説明としては誤りである。2、3、についてはその通りで特に3は忍法の縄脱術でも行われていた。これらの縛られ方を利用すれば逆に縄脱けのできない状態に陥るわけだからマゾの秘法にもなるというものである。何にしても一般的な女性週刊誌上に、こうしたテーマが写真入りで出されることは面白い現象だと思う。

奴隷の幸福

春川 ナオミ 文・画

広々とした洋室である。真白い壁に緑のジュウタン、豪華な装飾品は目を眩るばかりである。片隅にはホームバーが妖しい光を投げかけている。しかし、調度品の中には全く珍奇なものが並んでいるのだ。四角い檻が置かれている。巾一米、長さは二米はあるだろう。檻はガンジョウな鉄棒で囲ってあるが、上には椅子がとりつけてあった。その椅子には穴があけてあって腰かけると、尻だけがすっぽり檻の中へ入る仕掛けになっていた。その中には、まさしく一人の色の浅黒い痩せこけた男が首をうなだれ、何かを考えるかのような姿で入れられていた。

その男は一郎と云い、元は平凡なサラリーマンであったが、この家の主人春日ユミのトリコとなつてしまったのだ。ユミは大阪南の盛り場で一流のバーを経営しているマダムだった。その東洋人特有の神秘的な瞳、いつもは和服を着ているが、その上からでも、はつきりと体の線が見える程熟しきった肉体は中年女性の魅力を十分に

発揮し、ユミを崇敬する男性も数多くいた。

一郎も何度か通ううちにユミのトリコになり、あげくの果ては会社の金に手をつけてしまった。そんな一郎をユミは条件付きで養っているのである。養っているというよりはユミの奴隷として生涯を送ろうとしているのだ。

一、お前はユミの奴隷である。

一、命令は何事に拘らず一切背いてはならない。

一、お前はユミの専用便器でありユミの排泄時間は、お前の食事の時間である。

以上の様な誓いをたてると、一郎はユミの足下に身を横たえて生温い洗礼を受けたのである。

部屋がパツと明るくなった。ユミが帰ってきたのである。大きく手足をひろげて背のびをすると、窮屈な和服を次々と脱ぎすてた。大理石のような肌はピンク色に染まり豊かな乳房は激しく息づいていた。つかつかと檻に近づくと何のためらいもなく椅子式便器にどつかと腰を下ろし、二、三回ゆす



ると、きっちり巨大な尻が便器にすっぽりはまり込んだ。深々と沈んだ巨臀の下には一郎の青白い顔が待ちかまえていた。朝から腹に納めたのはユリの排泄物だけの彼は、今はこの時間が待ち遠しくてたまらない様になっていた。もう完全にユミの便器である。ユミは気持良さそうに目を閉じて、その感触を楽しんだ。

「よし、口を大きく開けな。もっと大きくだよ。ほしくないのか」ユミは面白半分に一郎をじらした。一郎はもう必死で大きく息を吸い込んだ。

「さあ、食べな。それ！」一郎は息つく間もなく食べ且つ飲み込んだ。かなりの量である。全部食べ終った一郎は満腹感がして、大きく息を吸い込んだ。と、ユミの口から命令がとんだ。

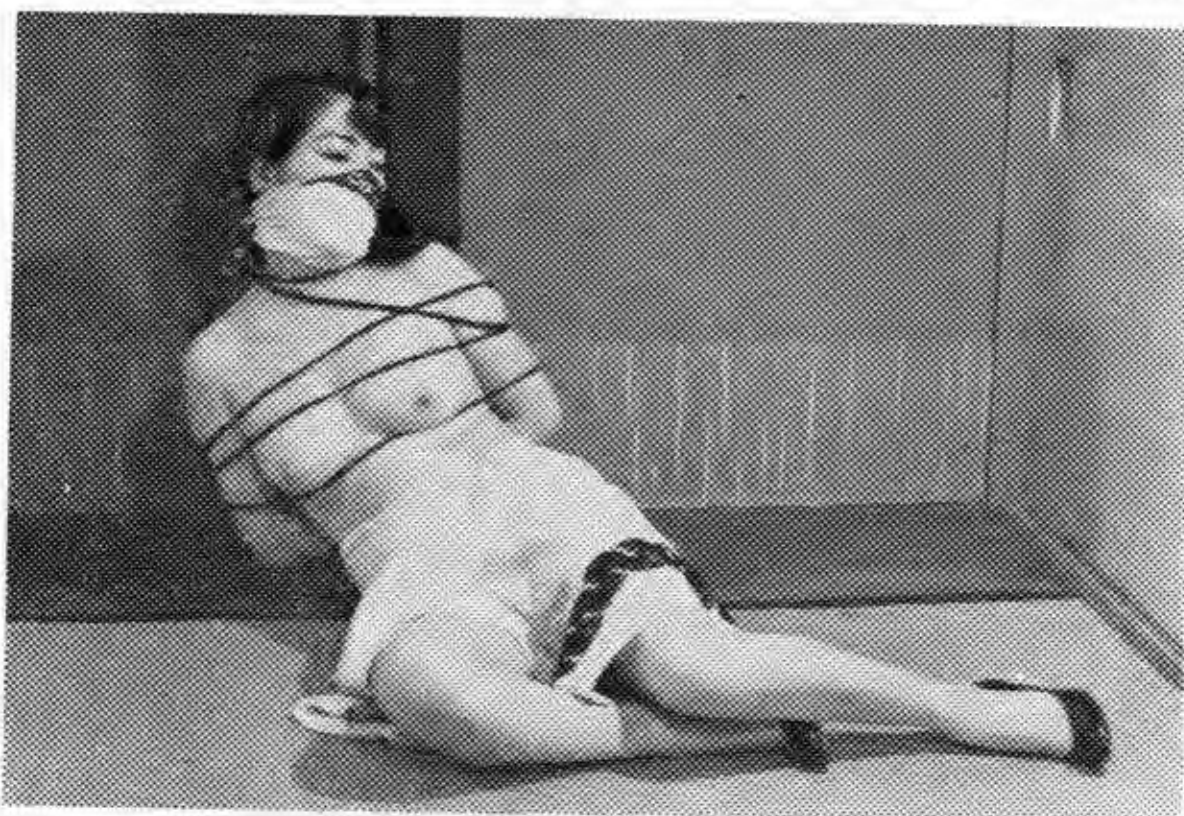
「まだ残っているよ、さあ、もう一度大きく口を開けて！」

ユミは背をそらしながら、足をふんばった。一郎は最後の力をふりしぼって口に納めると、もうぐったりとなり後始末が終った時は肩を床に落し、失神寸前になっていた。ユミはそんな一郎を冷やかに見おろしていた。

奇譚クラブ

昭和42年2月号

(1967年・2月号<第21巻第2号・通刊第224号>)



本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。

鬼六談義

三文羞恥論

団鬼六



私の友人Aの細君が、おめでたになったらしく、最近、私の家の近くの産婦人科に通い始めた。別におかしくも何ともない話だが、それが何となく奇妙に思えるのは、Aは、評判のいい産婦人科の開業医であるという事である。

つまり、A夫人は、亭主が産婦人科の医師であるのに、わざわざ遠方にある産婦人科のもとへ診断を受けに通い出したわけだ。考え

ようによつては、何となくおかしな話で、A夫婦は、結婚して、もう五年、うらやましい位に仲のいい夫婦であるし、何もそうした所の診断を他人にさせる事はないのに、と私は思ったものだが、私の所へ立ち寄ったA夫人にふと、そんな事を聞いてみると、彼女は、そういう質問を發つする私の神経がわからぬといった顔つきで、「羞しくて、主人の診察なんか受けられるのですか」というのであ

った。A自身も、彼女が他の医師のもとへ行き、診察を受ける事に何ら反対はしなかったそうである。

すると、こういう事が考えられる。A夫人は、閨房において、自分のそうした部分を、助平になった亭主の眼で、しみじみ見つめられる事は好むけれど、亭主が、医師として、真面目な眼で、しげしげ見つめる事は好ましくない、という事になるわけだ。

プレイの中にあつては、一切合財を赤裸々に露出させ、肉の褻まで亭主に目撃されていくくせに、それは、互に淫乱な気分、ピンクムードに浸っている故、少しも気にならず、しかし、互に平静な気分となつて、向かい合ひ、見つめ合うという事は羞しくて耐えられぬというのは、何となく、奇妙な話に思えるし、とにかく、夫婦の心理、いや、男と女の關係というものは、おかしいものである。

そのA夫人のように、愛する主人の診察は羞しくて受けられぬ、また、Aのように、愛する妻の診察は、照れくさくて、出来ぬという、こうした産婦人科の夫婦に限った事ではなく、夫婦のエチケットとして、その種の羞恥は当然持つべきものであらう。夫は、新婚時代からの妻の肉体に対するイメージをこわさないように、また妻も、夫にこわされないように努力していくところに、夫婦生活の新鮮さが保たれる事になるわけだ。

Aに何時か、酒場で聞かされた事だが、やはり、女性のあの部分は、処女の時が、初々しく、美的なものとして、眼にうつるが、荒淫したり、何人も子供を生んだそれは、奇妙な色素が浮かんで、げんなりするものだそう。だからこそ、Aも、愛する人のそれは、

何時までも美しいものとして、記憶しておきたかったのであらうし、妻にも、同じような心理が働いたのであらう。自分の羞恥の部分に醜悪なものとして、男の眼にうつる事の羞恥——この羞恥は、「花と蛇」の中に出て来る羞恥とは異質のものである。女性の羞恥には、男性の性欲を昇進させるための羞恥と、性欲減退を恐れるための羞恥とが、あるようだ。勿論、S小説などに出て来る羞恥は、大體、前者のものである。

とりわけ、マニヤは、人一倍、女体に対する探究心は旺盛で、暗がり、ポソポソしたプレイよりも、電気をここうとともした明るい日本間で、その縄にくびられた柔軟な女体をしげしげ眺めつつ、自分が責めを加える事によって、女体が如何に悶え、どのような呻きを洩らすか必死に観察しようとするものであるが、「花と蛇」に登場してくるような美女なればとにかく、なまじ、商売女などを相手にして、旺盛な探求心を発揮し出すと、後味の悪い思いになる事が多いようだ。

私の知人の或るサラリーマンは、街で拾った街娼を、安宿の一室でベッドに縛り、電気の光がうすいので、それへ懐中電灯を当てがいつつ、遮二無二、責めあげたそうだが、そ

の赤ちゃけたような、すり切れたようなものを見ているうちに、何か、しみじみ情なくなり、途中でやめてしまったそう。彼の表現によると、その街娼のそれは、古ぼけたヒビの入ったゴム草履みたいな感触であつたそうである。

まだ、こんなのは、ましな方で、私の所へ時々、顔を見せるシナリオライター志望の学生などは、街娼に対して、浣腸したというのだから恐れ入る。彼はアルバイトで、少し、金が入つたので、今夜は一つ、楽しんでやれと浣腸器に液を入れて、ハンカチに包み、ネオンの街を徘徊していると、眼帯をかけた街娼に声をかけられたそう。予定していた事であつたが、五千円というのを、お前、片眼じゃないか、といって、三千円に値切り、そのかわり、旅館は奮発してバスつきの部屋を借り、嫌がる彼女を縛りあげ、バスの中で、浣腸をしたというのだ。すさまじく彼女は抵抗したそうだが、彼は柔道二段で腕力には自信がある。それで、彼女は、彼の浣腸を受ける事になったのだが、その間、わけのわからぬ東北弁で、彼をのしりつづけたそう。イケスカネエ奴、オラ、頭にキチャッタと小柄な街娼はわめきつづけたというが、全

く、気の毒な話である。ムードも何もあったもんじゃない。と彼もあとで、私に告げるのだが、当り前だ。街娼もとんだ災難にあったものだが彼も、その時、彼女が発散してしまつたものの匂いがまだ鼻から抜け切らず、嫌な気分だそうである。

そんなつまらぬ女——といつては街娼女史に対して失礼であるが、花と蛇的なムードに浸ってみようという大それた考えを抱いて、街娼を買うというのが、間違っている。この学生は、私に「花と蛇」を自分で自分の体を慰める時の素材にしているといっているのであるが、それだけに、とどめておいた方が、どれだけ賢明かわからない。高い金を使って、阿呆な真似をし、そのグロテスクな光景を見て、反吐でも吐きたい位に辟易したなど、つまらない話である。

「花と蛇」に出て来る浣腸場面は、一種の性愛描写であつて、ベッドシーンにおける愛撫刺戟という風に、マニヤの空想によって、よろしく美化してもらつたものである。私も色々、道楽をやつてきたが、SMプレイにおいて、実際に、浣腸をほどこした経験はない。あぐら縛りにした女性の横に、にじり寄り浣腸器をちらつかせて、おい、これからお

前に浣腸するからな、とおどかし、彼女の周章狼狽する様子を楽しんだ事はあつても、薬液を注ぎこむという事だけは、どうしても出来なかつた。口ほどでもなく勇氣がない、とその種のマニヤから笑われそうだが、そうではなく、いわゆる策士、策に倒れるで、そこ

までいけばもうおしまひのような気がするのである。つまり、関係が持続するであろう女性をそこまで、醜悪化する事はあるまいと思ふのだ。女性とて、同じで、かなり強度の責めを要求するM女性であつても、自分が醜悪化する浣腸排泄行為など望む者は、私の経験する所では一人もいなかった。責められるM女性は、責めるS男性の眼に、やはり自分が美しく映ずる事を欲しているのであつて、糞便にまみれるような、そういう汚ない責めは断乎として拒否するのである。拒否するからこゝしてやるのだというのがS心理だが、それは、小説の上だけの話にしておきたいものだ。仲よく、睦まじく、そして、永続性のあるSM関係の男女間にあつては、それ位の境界線をひいておくべきだと思ふのである。

私もいい加減助平だが、エロチックを通り越して、グロテスクに至るまで女性を責めるという事は好みではない。愛する女性が一層

艶かしく、美しくうつるようなプレイは好むが、汚なく、醜くうつるようなプレイは好まないという気持は、先にいった産婦人科の医師が我が妻を診察したがないという気持に相通ずる所があるように思われる。

ところが、私にも、何とか浣腸をほどこしてやりたいと思ふような女性がいる。女優なにかによく見受けられる、美人で、妙に気取り、人と話をする時に、鼻に小じわを寄せるような、何となく腹の立つ女である。美人型にも色々種類があるようで、親しみ易く、それでいて畏敬を感じさせるような美女もいるが、何か腹立たしく、美女としての誇りを傷をつけてやりたくなるようなものもあるのだ。

谷崎潤一郎の王朝時代を背景にした小説にある美しい女性に懸想した男が、何とかしてその女を思い切りたいと思ひ、その美女の一番汚ないものを見たならば、案外、あきらめられるかも知れぬと彼女が脱糞したおまるを盗み出すというのがある。つまり、それに似たもので、手のとどかぬ完成された美女を眺める時、ふとわけのわからぬ復讐心が胸にこみ上つて来る時がある。ドンファン心理というものは、こうした、わけのわからぬ復讐心かも知れぬ。彼等は、いわゆる難攻不落の

淑徳な令嬢や貞淑な人妻を狙い、とりすました仮面を引き剥ぎ、ズタズタにし、やはり、女として俗物であつたという事を認識し、それに気を良くして、追いつがってくる彼女を振り払って逃げるのである。「花と蛇」の中で、ズベ公の銀子や朱美などが、令夫人や令嬢に対し、浣腸責めにかけ、汚辱にのたうたせるというのは、高嶺の花である美女達を自分達のレベル以下にまで引き落とし、笑ってやろうという一種の変質的な復讐心が起るからであつて、それは、私達が、自分には縁もゆかりもない、完成された美に対して、ふと起る、いじめてやりたい、と思う気持と同じものなのだ。

だから、こうした美女に対しては、浣腸という手段は想像出来ても、今後とも、末長く愛し合つていかねばならぬ恋人に対して、浣腸ブレイなど私はどうかと思うのだ。愛し合うなれば、汚ないものは何もない、という理屈も成り立つが、愛し合うなればこそ、汚ないものを無理に見る必要はないともいえる。とまあ、産婦人科医A夫婦の心がけの良さを見て感じたわけだが、もう一つは、先に話した娼婦に浣腸した学生——彼は女体に接触した経験もそうないのに、少し、突き進み過ぎ

たため、一時的なものだとは思つが、あわれにも現在、女体嫌悪症になつてしまつてゐる。

相も変わらず、話は脱線し、何だか浣腸談義みたいになつてしまつたが、最初、話したように女性の羞恥というものは、平静でない時と、平静である時の場合に分離出来るものだから、私は、時折、見かけるKK誌読者通信の女性の呼びかけ、誰か、私をいじめて下さる人はいないものでしょうか、という意味の記載を不思議な気持で読んだものである。

女性は、ブレイに入つた場合に起る羞恥は耐え抜く、というより、耐え抜かねばならぬいや、その羞恥心が、性感を惹起し、感度を高めることに役立つ場合もあるが、こうした自己の性情を告白する事は、平静の場合の羞恥であるから、なかなか耐えられるものではない。だから、閑な男の読者が、いたずら気を起して、女性に成りすまし、女性的に書いて投稿したものであらうと想像した。そしてその通信に返事をしたためてくるブレイ希望者の数の多いのを見て、どこかで、ニヤニヤしているのではないか、それなら、真に、罪ないたずらで、デートを申し込んだ男性は、全く馬鹿を見た事になると何となく、不快な気分であつた。だが、それは、私の感違いで

ある事が最近、ようやくわかつたのである。

ついこの間、私は、友人であるテレビタレントのK君に、KK誌の愛読者であり、通信欄に投稿した事もあるという女性を紹介されたのだ。

丁度、その日、私は、新宿の安宿の一室で明日の朝までに手渡さねばならぬ大蔵映画のシナリオを書き飛ばしていたのであるが、S君から、その女性と一緒にいるという電話を受け、それなら何はさておき逢つてみようと思ふと近くの喫茶店で待合したのである。

K君が連れて来た女性は、年は二十三、四、思ったより美人であつた。どことなく、頹廢的な陰があるが、BGだという。何時頃、どのような記事を投稿したのか、そうした事もありしゃべりたがらず、私が何か質問しても、照れ臭そうにニヤニヤして、隣に坐つてゐるK君の顔色ばかり見、矢鱈に煙草を吸うのであつた。

じれったい位に、はつきりしない女性であつたが、「花と蛇」はかかさず読んでゐるというのである。照れ臭くなるのは、エロ作家の方で、あんなもの女が読むものじゃありませんよ、などといったが、彼女は、麻薬の味を覚えてたともいうのか、毎月読まねばおさまら

なくなってしまったというのだから驚いた。

この女性と逢う一週間ばかり前、KK誌編集長の箕田氏から、続花と蛇特集号についての了解を求める手紙が来て、その中にも、花と蛇には女性の愛読者が何人かいて、彼女達も読まねばおさまらぬようだという意味の事が書かれてあったが、大阪には仲々愉快な女性がいるものだと思っていたところ、こうして、私の前に現れた花と蛇ファンの東京女性を見て、読者通信などに投稿してくるマニヤの女性には実際に存在するものだという事をはっきり知ったわけなのである。考えれば、何とも不思議な事ではなく、彼女達が、こうした雑誌を読もうと、ストリップを見ようと、ピント映画に入ろうと、一向にかまわないわけで、いわゆる男女同権というやつだが、私は元来、女性というものは、羞恥動物であるから、自分のそうした性情やセックスに関した事などを聞いたり、話したりはしたがらないものだと思っていたが、やはり、時代というものであろう、色々、考えさせられるものがあった。三文エロ作家に、堂々と面会を申し込んで来たマニヤ女性を前にして、こっちの方が羞恥にもじもじし始めているのだから、だらしない話である。

K君は、仕事の打合わせがあるので、一人で喫茶店から出て行き、私は、彼女を連れて馴染の酒場へ入り、もうしばらく、おつき合いを願ったが、ハイボールを飲んで、少しは気が楽になってきたのか、彼女は、欲望を感じずる時、脳裡に浮かび上る情景について、次のような物語を聞かせてくれた。これは、彼女が、性に目覚め出した頃から、夜、布団の中で眠りに入る直前、そして、朝、眠りから覚めた時など、ぼんやりと夢うつつに空想してしまう事だそうである。

彼女は、空想の中では、極まって、美しいお姫様に仕える腰元になっているそうで、お忍びで城を抜け出たお姫様のお供をして、どこか見知らぬ所を歩いていると、お城の乗っ取りを計る悪家老の配下の者達に襲撃され、腰元である自分は、懐剣を抜いて、黒装束の曲者達相手に奮戦するのだが、遂に力及ばずお姫様と一緒に捕えられ、曲者達の巢窟へ連れて行かれる。そして、哀れな主従は、着物を剥ぎとられ、ムチ打たれ、数々の羞しめを受ける事になるのだが、主従は、互にかばい合い、何とかして、この屈辱を耐え切ろうと努力する――

「花と蛇」の中で、静子夫人と京子が、相手

をかばい合い、悪漢達の責めを我が身で食い止めようとする所が、彼女が寝床の中で空想する情景と全く一致しているわけなのだ。姫君と腰元、静子夫人と京子、こういう組合わせで、悪者達の責めを受けるといふ所にたまらない興奮を覚えるというのは、つまり、レスビアン・ラブの変形したものであろう。ただ面白いのは、そうした彼女の空想の中で、あわやという時、ハンサムな忠義侍がかけつけて来て、救援してくれる事になっているのであるが、うろたえた悪漢は、逃走する際、腰元に一太刀浴びせて行ったので、腰元は忠義侍に抱かれつつ、つまり、ハンサムな恋人の腕の中で、息を引きとるといふ想定になっている事だ。ここに至って、彼女の情感も最高頂に達してしまうそうである。

別にマニヤでなくても、独身の男性が、自分で自分の体を慰める場合、ある種の情景を想起しつつ行うようだが、女性とて同じ事である。とりわけ、マニヤの女性の空想する場面は、なかなか筋がしっかりしたものだとは変な事に感心したわけだが、参考にもなった。

その日、仕事があれば、彼女を口説き落とし、どこかで、実際に、という誘惑にも正直

がられたが、仕事で二日ばかり徹夜して、こっちは体力的にかなり参っていたし、ひょっとして、彼女は、すでにK君と特殊な間柄になっっているかも知れぬという懸念もあって、連絡場所だけ聞いて別れたが、とにかく、それで、読者通信に悩みを打明け、勇ましいM女性の実在する確証を得た気分になったのである。

旅館に帰って風呂に入り、ふと、気がついたのだが、彼女を連れて来たK君は、Mの方に属する人間なのである。あの二人に、特殊な関係が生じているとしても、MとMだからそのプレイは、ギクシャクしたものではなからうかと、下らない事を心配したりしたが、皮肉なもので、互にKK誌を愛読し合っているような、よりぬきのS男性とよりぬきのM女性というものは、ぶつかり合う事は少ないようである。

ある人の説によると、マニヤの男性は、十人中、七対三の割で、SとMに分かれ、女性はその逆、三対七の割で、SとMに分かれるというのだが、それが、仲々、ピットタンコといかず、MとMがからんだり、SとSがぶつかっているのを私はよく見かける。だが、MとMとでも、お互にいじめっこして

結構、楽しいものだろう。

今、一人、「花と蛇」の熱心な女性愛読者が、私の身近にいる。仕事の関係で、よく顔を合わすピンク映画の女優で「花と蛇」をS的観点に立って読み、ぞくぞくしたものを覚えるという仲間達の間でも、よく知られたS女性なのであるが、私のシナリオによる「蛇性の肌」「肉色」等に出演した女優だといえ、ごらんになった読者なら、ピンとくるだろう。私も彼女の性質をよく知っているの、わざと、ほんのわずかであるが、サジスティックな女として登場させている。彼女は、自分が縛られたり、ムチ打たれたりする事は大嫌いだ、それを逆用する時は、相手が男であれ、女であれ、たまらなく興奮するといふのである。

「肉色」(大蔵映画)で主演女優、新高恵子が強姦されかかっているのを彼女が椅子に坐ってニヤニヤ眺めている場面があるが、実際に彼女は、あるBGがやくざに強姦されかかっているのを目撃した事があり、実に楽しい気分、最後まで見とどけたというのだから、大した女傑である。「花と蛇」に出て来る銀子や朱美を自分の分身だとして、わくわくした思いで読むのだそうだ。とりわけ、美少年や

美少女をいじめるのが好きで、経験も豊富らしく、美少年を泣かせるのに、これまで、ずいぶん、金も使ったそうだ。その上、同性愛に耽溺していた時期があって、それも、相手に対し、銀子流の愛撫方法をとるのであるが、そうした話を彼女より色々聞かされた私は、「花と蛇」の参考に大いにしたものである。女同志の愛情表現は、男性の想像を絶するものもあり、彼女達にしか通用しないベッドシーンの陰語も、何か陰にこもって物凄く感じさせるのだ。

とにかく、このように、「花と蛇」に女性読者がいるという事は、私にとっては驚異であった。女性には元来、M的なものだから、そして、静子夫人や京子を自分の身に置きかえて空想するのであろうから、責められる美女が主人公になっているものを読むのは、何も不思議ではないと理屈では考えられるものの、やはり、ものがものだけにどうも信じられぬ思いになる。しかも、今、話したS派のピンク女優などは、自分が女を責め上げるような脚本を書いてくれと私にせがむのだ。彼女にしてみれば、女よりむしろ男を責めてみたいのであろうが、それでは、ピンク映画として商売にならない。すると、S派の女優に

呼応するかの如く、責められる側を希望して来たM派の女優がいるのだから、いやはや、ピンク女優の間でも、SMは大流行のきざしを帯びて来た感がある。

それで私は、何だか女優にケツをたたかれた思いで「縄と乳房」というものを書き飛ばし、この熱心な二人の女優を主役に指名したところ、脚本を読んだ新高恵子が、この女を責める女の役を何とか自分にさせて欲しい、と私にいつて来た。こんな役を前から一度、どうしてもやってみたかった、というのである。私は新高恵子を最良にしているので（といっても変な関係はないが）やりたがっていたS女優に次の責め映画の主役にする事を約束して、新高恵子を出演させる事にしたが、彼女の顔は、どう見てもM派的なのに、「先生、私、ムチなんかつかって、一度でいいから思い切り人をいじめてみたいと思うわ」などというのだから、全く、女優は見かけによらないものだ。

このM派榊田くに子とS派新高恵子が対決するS映画「縄と乳房」は、早速、クランク・インする事になった。ところが、印刷が出来て会社より私の所へ送られて来た脚本を見ると△小説・花と蛇より▽とまた映画題名の

肩にただし書きがついている。久しぶりの縛り映画故、何時も使っている花巻というペンネームをひっこめて、団鬼六にした所、プロダクションの方で、何か感違いして、とにかく、団鬼六には「花と蛇」をくっつけなくてはならないように思っているらしい。縛り映画、つまり羞恥責め映画とでもいおうか、それに対して何時の間にか、スタッフ達の間で、花と蛇的なものという形容が出来上っているのである。「小説、花と蛇」の内容は、

どんなものか、全く知らない連中が、矢鱈にそんな言葉を使うので、笑止千万な事だが、私は血を見るような残忍な責めは嫌いで「小説、花と蛇」の中で、柱に立縛りにした静子夫人に対し、ただ、それだけのものに対し、延々、百枚に及ぶ羞恥図絵の描写をした如く、いわゆるネチネチムード、サジズム映画とはいえ、生まぬるものであるから、花と蛇的という形容は内容をいい得ていると思われる。脚本を手にして、早速、電話で会社へ忠告はしておいたものの、最近はこちらも忙がしく、撮影が始まっても仲々現場へ顔を出せないのも、また、ポスターなどに△花と蛇より▽が書かれたりするミスが出るかも知れないけれど、いや、商魂たくましい配給会社

に、私の忠告を無視して、記載するかも知れないが、それにまどわされる事なきよう「小説、花と蛇」の愛読者には作者より御忠告申し上げておく。

S派とM派の女優の希望もあって、私もふと遊んでみる気になって丸一日で書き上げたものだから、マニヤに向くかどうか——早速、編集部へ脚本を送る事にするが、もし、誌面にゆとりがあれば、掲載して下さってもかまわない。脚本を一読して、映画を見るのも一興であろう。脚本を見て、つまらないと思えば、高い入場料など払わずともすむわけだ。この種の映画の規定や映倫の規定などがあって、脚本は結局、陳腐なものになってしまったが、私は、新高恵子と榊田くに子がどんな芝居をするか、楽しみにしている。断わっておくが、私は決して、映画の宣伝をしているのではない。ただ、最近、KK誌上にピンク映画情報がよく登場する事になったので、一言、御報告しただけの事である。

思えば、私も、ずいぶんとピンク映画の脚本を書いたものだ。この「鬼六談義」を書き始める前にも、大蔵映画のお正月番組「愛情開眼」（SM関係なし）を脱稿し、使いの人に渡した所で、ばんやり数えてみたら、もう

二十五本になる。「小説、花と蛇」の連載回数とは同じだ。花と蛇同様、よくもこまめで続けられたものだと思ながら感心するのだが、局の仕事をしていた頃の怠惰な私にくらべて、ピンク系の仕事に手を出してからのは実に熱心で、ふとそんな自分に気づいて苦笑してしまう事があるが、それだけ助平なのであろう。

私の賢明な昔の仲間、ピンク映画の仕事に次第に巻きこまれていく私を見て、苦勞のし甲斐のない仕事をしている、とわらうのだが、一体、やり甲斐のある仕事とは、どういうものを指しているのか私は疑問を持つのである。自分だけ潔癖がっている人間のあわれ

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

さを私はこういう三文映画の社会にもぐりこんで来て、つくづく思うのだ。私は、少し、頭がおかしいと思われても、その道を悦ぶ人達にその道の写真を見せるという事が、やり甲斐のある仕事だと思っている。マニヤの作家がマニヤの読者に歓迎される小説を書くのも、やり甲斐のある仕事である。

それで、ふと考えるのだが、一番、やり甲斐のない仕事は何かというと、それは、ピンク映画などを審査する映倫の親父の仕事ではなからうか。助平なくせに、いや、恐らく、助平な方ではないかと想像出来るのに、映画の中のベッドシーンに乳房や臍がのぞくと、忽ち、それを指摘し、カット、カットと叫び

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。
○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。
○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

ピンク映画を段々つまらないものにしていくわけだが、ピンク場面を見て、自分では、ニヤニヤしたり、硬直させたり出来ぬ所に彼等の悲劇がある。私は、あまり、うるさく、ちよっとした個所でも、カットを要求する映倫のおっさんの顔をしげしげと見て、こういう人達は、カットノイローゼが嵩じると、夜、閨房において、ちらりとのぞかせた女房の乳房に対し、カットカットと叫ぶ事になりはせぬかと心配するのだが、こうしたうるさい映画の人達の鋭い眼をかくぐって、たとえば乳首が出てはいけないのだから、乳首の上を縄で縛って隠すような傑作な事をして、何とか映画をパスさせようとする制作者達は、それは、それで、スリルを味わっているのだから、たしかに映画作りは面白い仕事だ。都内ロケや地方ロケの苦勞を経て、期日までに映画を完成させた時のスタッフの喜びは大きいたしかに、やり甲斐のある仕事といえる。

さて、相も変わらず、とりとめのない事ばかり語ったが、続花と蛇が、急に臨時増刊号になると決着した。二十三、四回あたりまでを集録するという編集部の意向である。実は、臨時増刊となるなれば、こちらとしても、前篇の時のように一応適当な所で打ち切り、しば

らく休養し、そのうち、また折を見て、結末に向かつて筆をとる気でいたのだが、このはつきりした知らせを受取った時は、第二十五回送稿した時なので、何か、ゴールを通過してまた一周スタコラ走り出してしまった感である。さて、どうしたものか、と思っていたのが十二月号の町森氏のように鬼六談義の掲載回数まで記憶していて下さる熱烈なファンのお言葉などを考え、たしかに、ここでストップしては尻切れトンボ、瘦馬にムチ打って、五人の美女達の運命を、もう少し追いかけてみる事にしよう。

とにかく「花と蛇」は、KK誌編集長とファンの方々の応援によって、ここまで進行して来たものの、どこまで続くか、ただただ、愛読者の意向に添うばかりだ。これによってKK誌の、いわば視聴率を、いささかなりとも高めているのなれば、作者としても真に幸わせな話、どういうわけか、妙に多忙を極める近頃になったが「花と蛇」執筆に費す時間は、何とかして作っていかうと思う。色々、御指導を乞う次第である。それに身近に花と蛇の女性ファンがいるという事がわかった事は、私に奇妙なくすぐたさと奇妙な発奮を与えたようだ。

さっき、話したM派のBGやS派の女優など、こんなえげつないものを書く男だから、どんなにいやらしい顔した男だろうと、自分が愛読している事は棚に上げて作者を想像したらしいが、私が思ったよりハンサムな紳士で——いや、ほんとである——気ぬけた気分になったらしい。

それで、冒頭に話した分離した羞恥の話に戻るが、プレイの羞恥でない方の羞恥に女がある時、男性は、何時までもその羞恥に女性をこだわらせてはいけないという事に、私は気づいたのである。M派のBGに始めて私が逢った時、SMについて、どんな見解を彼女が持っているのかとか「花の蛇」のどんな所が面白いのかとか質問したりして、彼女をもじもじさせた事は愚の骨頂で、喫茶店なんかで、ああだこうだ喋ってるより、ああいう場合は、すみやかにお手合わせを、お願いするべきであろう。それが礼儀である。助平のくせに紳士的であり過ぎるというのは、感心すべき事ではない。世の中の女性は男性の挑戦を受けるのを待ち望んでいる、といっては、いい過ぎに違いがないが、最近、私は年の故か紳士的になり過ぎて、女性に恥ばかりをかかせ、結果、もてなくなってしまうよう

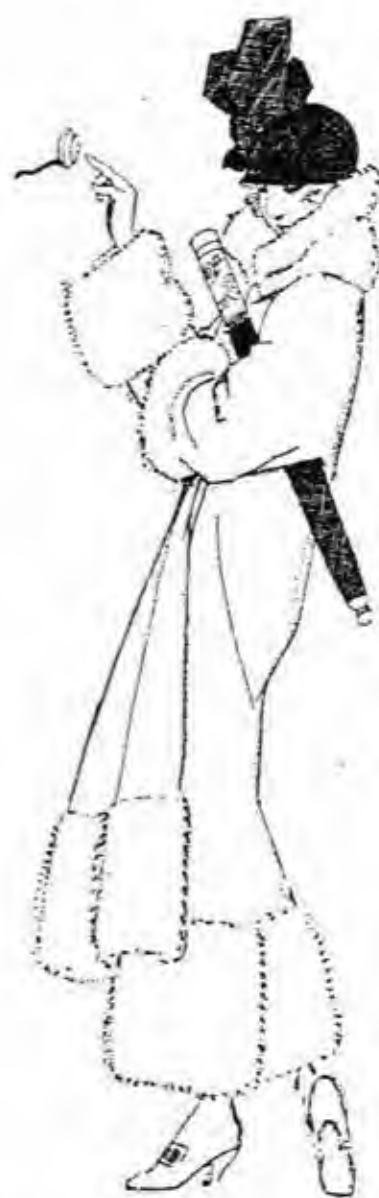
である。若い頃は、何だかんだとうまい事いっては女性をホテルへ引張って行き、それで失敗するという事はまずなかったが、近頃では、紳士的、というよりも、いやらしくなってきた、口説きにも何だかんだ時間をかけるようになり、さっぱり駄目、つまり、失敗率が多くなってきたのである。

読者通信が実を結び、S派の男性とM派の女性が、どこかで落ち合う事になったとすれば、男性はすみやかに、というより、有無をいわず、彼女をタクシーに押しこみ、プレイの場所に直行すべきである。どこかの喫茶店なんかで、デカルトがどういったとかパスカルが何と答えたとか奇妙なSM理論をやったりすれば、必ず彼女に逃走されるであろう。彼女は結局、彼のそれを待っているのであり、一瞬、痴漢と娼婦になり得る絶好の機会であるのに、彼が紳士になったために、彼女も淑女になってしまい、何だか、わけのわからぬ結果になる場合が多いのだ。衣服をまとっている時の砂を噛むようなやり切れない女性の羞恥を男性は、衣服を脱いでからの切なく燃える羞恥に、切り変えてあげるべきであろう。

走り書き作品論

— 奇ク最近号寸評 —

九 鬼 二 郎



最近の奇譚クラブから特に感じた事と云えば掲載作品のタイトルが上手になってきたという事だ。そういう意味では、相当書ける連中（素人ばなれした）が多くなってきた。よろこばしい傾向である。

ころろに一年前位のものと比較してみるとよい。当時は見る雑誌から読む雑誌へ脱皮する過渡期であったという事情もあるが、内

容の充実という点では、今日には遠く及ばない。とはいっても誌面から受ける感じは相も変わらず固い。これは印刷技術の点もあるがまず第一にカットが少いことに原因があらう。カットといっても何もSM誌だから女が縛られるものばかりを使わなくてもいいわけで、アブストラクトの絵で十分に誌面をやわらげることが出来る。これは編集部への注文だ。

さし絵にしても、本文とマッチしてないものがめだつ。また、本文もすべて三段組に統一したことにも疑問がある。

誌面に変化をもたらせるためにも、連載物とかエッセイなどの組方を変えてみたら、どうであろうか。見出し（題名）が殆んど活字に組んであるが、これも硬化している一因である。

さて、最近号で、やはり取り上げなければならぬ作品と云えば「花の蛇」だが、花と蛇を年がら年中、話題にしているという事は、とりもなおさず、他の読物の貧困を意味するばかりで、あまりよろこんでもいられないことなのだ。とはいっても、河津安春、山本章、麒麟児久などの新鋭が力作を寄せている傾向は注目したい。

三木徹郎「女性の羞恥願望を衝く」懸賞入選作品（41・12月号）として、特に取り上げられただけあって文章もいやみなく、なれた筆致で相当よませる。ただし、題名がこけおどかしの、もっとムードのある題名を思い付かなかっただろうか。しかし、こういった告白物、手記の類は、小説とは違った面白味があり、編集部としても、この種の原稿にもっと力を入れてほしい。

芳野眉美「水中花」この作者の才筆は「濡れにぞ濡れし」で周知のことだが、本格的な小説ともなると会話のうまさだけで読ませるわけにはゆかない。水中花は、作者としては相当の意気込みのもとに書きはじめたものと思われるが、ややもすると「濡れにぞ」式の会話によるストーリーの展開という安易な道に逃避しているように見える。これだけの会話をこなせる作者は、他に見当らないし、事実、一幕物のコミカルな戯曲など書かせたら十分によいものを作る作者だと思いが、いささか特技（会話）偏重に過ぎるのではないか。それが描写の不足ともなり迫力とか、ムード作りの欠陥ともなっている。

富士春秋「凄艶お百瀬」41・12月号。奇譚クラブにしては珍しい時代もので花と蛇全盛の現在、多少、場違いな感じがしないでもないが、世話狂言的な語りの上手さはかなりなものだ。これだけの文章には仲々、お眼にかかれないほど年期が入っているが、素材を生かすためには、もう少しレトリックに緻密さがほしかった。総体的な荒っぽさが、この作品の致命傷と云えよう。

山口広「帰路のない旅」12月号・正月号。
この作者のものはずっと以前にもよんだこと

があるが、当時からくくると格段の上達である。若い女の転落の構図を書いているのだが、タクシーの乗り逃げ娘をつかまえるといった発端は意表を突いているし、ともするとSM描写ばかりにとらわれて、小説的展開などを無視している読物が多い中で、ストーリーの必然性といった点からも文句の付けようもない。ただ、導入部にそれだけの必然性と現実性があるのに、第二章に入ると、とたんに継母とお手伝いさんを登場させているが、こんな状況を設定するから、いわゆるSM小説としてのマンネリに陥ってしまうのである。作者としては縛りや鞭打ちなどを好むサジストを登場させなければSM小説にならないなどとチンプな発想をしたものと思うが、この作品の場合、むしろ逆効果ではなかったか。ひとりの娘が転落するプロセスには、ありきたりのサジストなどを、必要としないほど、SM的な材料が多い筈なのである。

麒麟児久「誘拐魔」41・12月号。読ませるという点でこの作者は、おそらく奇クの中で傑出したものを持っている。惜しむらくは構成が粗雑でたっぷり書き込まなければならぬような部分をカケ足ですますというようない妙なくせがある。これはあるいは書きすぎて

編集部あたりでカットしてあるか。もし、そうでなければ作者として一考の要がある。この作品としても、前半の迫真性にくらべて後半の責めの場面になると、とたんに荒けずりな女主人公の感情描写一本にしぼられてしまふ。本来ならば、この後半これがテーマであり、見せ場なのだから、もう少し丹念に書いてほしかった。これは面白いとか、面白くないとかいうより以前の、小説としての構成の問題である。但し、編集部でカットしたというなら、これは別だ。

山本一章「痴人の糧」力作である。「花と蛇」が通俗的な力作なら、これはマニア向の力作である。（この点については「花と蛇」の項でくわしくふれてみたい）そのサジスチックな描写は丹念で、いかにも迫力があり、作者の並々ならぬ力量をしのばせる。

団鬼六「花と蛇」この作品が奇クのパックボーンであることに異論はないし、これが十年でも二十年でも延々と続くことを願う読者も多いだろう。というのは、この作品がいわゆる小説ではないからだ。いわばこれはSMのサワリの集大成であり、好色読物のクライマックスの推積である。この場合、もうすでにストーリーやプロットなどは問題ではない

のだ。年がら年中「花と蛇」のどの頁を見ても、よだれの出そうなクライマックスが描写されていると云うのだから感心もするし、あきれもする。よくこれだけのものを書き続けて体をこわさないものと、そのスタミナに敬服するばかりだ。

さて、前述の「痴人の糧」がマニア向の小説であるのに対して「花と蛇」は通俗的だといったが、これについて付け加えよう。筆者はSM小説とSM的小説とを区別して考える。読者＝大衆が求めているのは、サジズムでもマゾヒズムでもないと思う。大衆が求めているのは、サジスチックなものであり、マゾヒスチックなものだ。だから、サジストの行為などというものは大衆とは別な所に位置している。正直のところ、純粋なサジストやマゾヒストの行為などがピンとくる人間はそれほど多くはない筈だ。「花と蛇」に登場する人物は、すべてサジスチックないしはマゾヒスチックな人間であり、いわば大衆の分身でもあるので、そこから受ける感銘の度合は、かなり身近かなものだ。これに反して「痴人の糧」に登場する人物は、すべて一般的な人物ではない。この作品が力作でありながら、爆発的な評判にならない理由はそこに

ある。といっても、これは作品の価値、面白さ、上手さなどには、いっさい関係がなく、むしろ本質的な「花と蛇」との相違といえるが――。

夜乃探郎「侏儒幻想」41・11月号。昔の探偵小説（いまは推理小説）には本格派と変格派とがあった。（事件があつて、殺人があつて、探偵が出馬して、犯人を捕えるという現在でも推理小説の主流をなすのが本格派。変格派とは当時の江戸川乱歩が代表していたようなファンタジックなアブ的ムードに重点をおいた物）

奇譚クラブが本格派とすれば、夜乃探郎はいわば変格派である。従来、陰湿なものと考えられていたSMの世界に、そこはかとないロマンチズムを導入した功績はみとめねばならない。但し、この作者はちょいちょい、調子付いてアチャカラに堕してしまうことがある。「侏儒幻想」は悪いくせがでなかった佳篇である。

辻村隆の「カメラ・ハント」かつて誌面のどこかで、雑文家を自称していたことを記憶しているが、カメラ・ハントのシリーズは、ちょっと大仰だが、彼のライフ・ワークだろう。多少、お遊びが過ぎる時もあるが、それ

はそれなりに、いわゆる辻村調として憎めない。人徳か、文章の徳か、いや役徳でもあるうか。（――まったく、おうらやましい限りである）

睦月笛一郎「ミモザ館」正月号。異色作である。というより、こういった傾向のものが今まで現われなかったのが不思議なほど、奇譚である。内容のどぎつさを節度ある表現で救っている文章は相当なものだ。

題材、文体ともいささか翻譯臭があるが、それもこの作品に限っては欠点というよりも長所になって、妖しいムードを作っている。完結したわけではないらしいので、総合的な批評は後日にゆずるが、大いに期待できることは確かだ。

――以上、主だった作品に対する感想をまとめてみたが、その他、常に力作をよせている黒田寿、三原寛、西条操、福田久文、牧高志、高野原美、中康弘通、奮斗士好太などなどのものを取上げるよゆうのなかったことを諒とされたい。（もちろん、本稿は、小説もしくは読物を対象としたため、千草忠夫の文章にも触れなかった）筆者としては、現在の執筆陣がより成長し、より充実するのを念じていることを附言する。

「カメラ・ルポ」

「この女と」

(木村洋子の巻)

山本一章

撮影記を書いてみませんかと箕田氏が突然言い出した時には、私は戸惑ってしまった。

「辻村さんが書いておられるでしょう」

「しかし、木村さんのは、まだですよ」

電話を通した箕田氏の声は調子が高くて若々しく、そのくせ独特の押しがあった。編集長には今までにモデルのことで無理を聞いてもらった手前もあって、私は無下に断ることもできずに曖昧な返事をしてしまった。

その日の午後、彼を通じての連絡で木村洋子さんと逢うことになっているのである。電話を切った私はちょっと思案した。既にカメ

ラハントとして好評を博している辻村隆氏の記録と同種のものを書くなんて、おこがましい限りではないか。辻村氏の流れるような文章、巧みな構成——書けば自分がみじめになるだけではないか。私はためらいながら、梅田の地下街へ降りた。昼食を済ませ、行きつけの材料店でフィルムと印画紙を買って時計を見ると、もう正午だった。約束は午後一時に上六だから三十分は見ておかななくてはならない。私は撮影記のことは後で考えることにして、駅前の駐車場に停めて置いた車に乗ってカメラにフィルムを装填した。

○

木村洋子さんとは二回目の撮影行である。最初は九月上旬、偶々箕田氏に電話したところ、今日木村さんと逢う約束をしているが忙しくて行けそうにないから代りに行ってみたらどうです。彼女も以前君の話をした時逢いたがっていたから恐らく承知するでしょう——という話なので、私は直ぐ飛びついて逢うことにした。誌上や分譲写真で彼女が相当厳しい縛りを受けているのを知っていたし、箕田氏の便りの中にも彼女なら強い縛りもできると書かれていたからである。しか

し、彼女は私の名前以外は何も知らないし、その日は箕田氏と逢う約束で来るのだから、どうかなと危ぶみながら指定の場所へ車を走らせた。正一時、木村さんと思われる小柄の女性を見出した時、私の胸は年甲斐もなくときめいた。

「木村さんと違いますか？」

彼女は如何にも不審そうな顔をして頭を横に振った。

「木村洋子さんでは？」

私は念を押して繰返したが、彼女は

「違いますわ。人を待ってるんです」

と言ったきり、私から少し離れて辺りを見廻わしていた。彼女が木村洋子さんに違いなという確信はあったが、それ以上詰問するわけにも行かない。来る筈のない相手を持つ二人——。私はちょっと滑稽な感じがしたが、どうするか見ていてやれと図太く構えた。しかし十分近くの時間が案外長く感じられた私が、もう一度話しかけて見ようと考えた時、彼女がもじもじしながら私に近づき時間を尋ねた。渡りに舟とはこのことである。私は時計を見ながら云った。

「箕田さんを待っておられるんでしょう？」

彼は今日は来ませんよ。僕、山本というもの

ですが——」

彼女はきょとんとした顔で私を見つめた。

私は直ぐポケットから箕田氏からの手紙の封筒を取り出して見せた。

「あのおう、それなら、わたし木村です」

ばつの悪そうな彼女の表情と、妙な返事に私は笑ってしまった。彼女を車に乗せた私は、少し離れた喫茶店へ移動した。

「わたし、雑誌に載っている自分の名前をよく知らないんです」

彼女は弁解したが、私にはもうそんなことはどうでもよかった。ジュースを注文した私は木村さんを前に事務的にモデル料のことなどを尋ねた。こんなことは最初にはっきりさせて置いた方がいい。彼女はもうベテランのモデルなのだから。しかし意外とその返事はつましく、お委かせしますわというのである。委かされるのは困るということ、いつも箕田氏から受取っているという額を聞き出してその話は落着、彼女のためにクッキーを包ませて店を出た。

十分ばかり車を走らせて河畔の一室に落着いた私達は早速緊縛に取りかかったのだが、われながら、あがっていたのか、それとも、その日が特に暑かったのか、私は汗みずくに

なあって喉ばかりが乾き、冴えないこと甚しかった。

（彼女なれば相当強度の緊縛も可能——というより厳しい方が喜ぶようです）

箕田氏からの手紙のこの一節が頭にちらついていたが、縄ばかりごたごた掛けてモデルの苦痛の割に絵になりにくい縛りに終始して疲労だけが残る結果となった。しかし彼女はその間一言も苦情を云わず、私が一度吊りをやってみたいなと云った時も、一人じゃ無理でしょうと答えたただだった。それから二カ月経っての第二回目である。

○

上六に着いたのは十二時四十分、しかし、もう木村洋子さんは来ていた。茶系統の地味なツーピースを着た彼女は、前と同じ場所に立って本を開いていた。私は車を降りて近寄った。

「こんにちは」

彼女は私の姿を見るとにんまりと笑った。

「御無沙汰ね」

二人は車に乗った。恐らく知らない者から見ればありふれたデートか兄妹の待ち合わせぐらいにしか見えないスムーズさであった。

（先日は失礼しました。初めてお逢いした

貴方に恥かしい姿をお見せしてしまつて、つまらない女だと思ひになつたのではないかと心配しています。でも、どんなに軽蔑されてもかまいませんわ。本当のことを申します

と、私、露出にあこがれている女ですの。貴方になら、どんな恥かしい姿にされてもかまわないと思っています。次の時には、もっと奇抜なやり方をして下さつても辛抱できると思います。云々。」

一回目の直後、彼女が私にくれた手紙の内容である。あの時も縛りとしては相当強い縄のかけ方をしたつもりだったのが、彼女には余りこたえていないような書き方である。その手紙を受け取った私は、悍馬の如く彼女との第二回を計画したのだったが、うまく連絡がつかずに今日まで伸び伸びになつてしまつたのである。

車を運転しながら私はその文面を思い出し



「足首に何か柔らかいものを巻いてね。足首が凄く痛いから」

彼女が最初から逆さ吊りを覚悟しているのを知った私は勇気百倍した。幸い控えの間と寝室との間の襖を外せば、その棧が彼女の体重位なら持ちこたえられそうである。しかし急ぐことはない。いきなり逆吊りをやって後が続かなくなつたらつまらない。

「お風呂へ入る？」

私は暗に準備を促した。

「風邪気味だから止すわ。でもちょっと」

木村さんは備えつけの浴衣を手にとると部屋を出て行った。私はカメラと縄をバッグから取り出し、ストロボを装着した。私がいつも縄は白の綿ロープである。私はだんだんの縄は余り好まない。もっとも白いの写真では余程うまくやらないと調子が飛んでしまうのだが――。

白い縄を適当に汚して柔らかくする方法を箕田氏から聞いてはいるが、私は実行してい

ていた。今日は滅茶苦茶に縛つてやろう。露出にあこがれているというんなら手加減はいらない。少し風邪気味だと云つて鼻をすすっている音を背に聞きながら私はファイトを燃やした。

この前、洋室で懲りた私は和室を選んだ。吊りを実行するには洋室は適當ではないからである。

「吊りをやってもいい？」

「一人でやれるかしら？」

「大丈夫だよ」

ない。自然に——つまり女性の汗と脂で馴らせばよい——悪い奴?

トイレから浴室へ、私は木村さんが流している湯の音を聞きながら準備を終えた。

戻ってきた木村さんは浴衣を着て、私の方を向いて坐った。最初が肝腎である。

「さあ始めようか?」

彼は立って浴衣をさっと脱いだ。下には何もつけていない。前回の時は最初着けていたのだが、私の好みを心得たのであろう。こういう点がベテランのモデルの有難さで、余計な手順がいらぬ。またそれだけに私の方も変なためらいを見せては、いけないようである。(猛獣の調教と似ているではないか?)

円筒型の柱があったので、それに縛りつけることにした。化粧椅子をその前に置くと木村さんを柱を背にしてその上に立たせた。

「どうするの?」

彼女はこの前の時もそうだったが、よくこの質問をする。彼女はこの質問に対する返事に強い刺激を受けるようである。言葉に酔うというのであろうか? 私は黙殺する。両手を後に廻わさせて柱の後で手首と肘を縛り、縄尻をウエストから臍下にかけて巻きつけ、更に両太腿のつけ根も縛る。

乳房の上下には特に強く縄を掛けて柱に廻わす。足許の椅子を外すつもりでいるからである。両足は柱を挟むようにさせて、これも強く何重にも縄を掛けた。これでもう彼女は身動きできず、辛うじて爪先を化粧椅子に載せた恰好になった。最後の仕上げは目かくしと猿轡である。私の好みはその二つを省略すること許さない。束縛感、その二つによって倍加されるように感じるのである。ヘアバンドをずり下げて、それで目かくしをし、浴衣の帯を咬ませて二巻きしたが、まだ少し余ったので後ろの柱に巻きつける。腹部の上と下に縛ったせいか、ぷっくりとふくらんだそれはちょっと妊娠している女のようにも見えた。

「えらいおなかが出たね」

彼女は紐を咬んだ口で何か云ったようだったが、よく聞きとれなかった。私は彼女の足の裏を左腕で支えて足下の椅子を外した。

「ウン!」

彼女は一こと呻いた。円い柱のせいで体が少しずり下ったが足先は床まで届かなかった。彼女は柱を挟んだ爪先に力を入れていく。よく見ると体がごく少しずつだが下っている。つるつるした円い柱に縄の止るところ

がないかららしい。私は三回程ストロボを光らせてから足の下に化粧椅子を押し込んだ。彼女がそれに載ると膝が曲った。

「口が痛くて」

解き終ると彼女はつぶやいた。体がずり下るのに口を縛った紐だけが摩擦が大きいのか滑らず柱に止っていたからである。この縛りで彼女の体には一ぺんに縄の跡が刻み込まれた。浴衣を着た彼女がちょっと寒そうな顔をしているのでバスタオルを渡してやる。

「寒い?」

「いいわ」

シャツ一枚になっている私の方は暑くて仕様がなないのだが、縛られる方は余り体を動かさないで寒いようである。部屋には未だ暖房が入っていない。しばらく休憩してからいよいよ逆吊りにかかることにする。その姿勢での傑作を、ものしたいというのが私の悲願だ。

吊るということ、殊に逆吊りとなると、それを甘受する女性というものは、そう簡単に見つかるものではない。数少い私の経験ではあるが、逆吊りにすると云っただけで辟易してしまうのが常である。しかも裸ということになると、承知する女性は九牛の一毛といっ

たところかもしれない。

その一人が今私の前にいるのだ。しかも既に経験済みというのだから、この機会を逃す手はない。

「じゃ吊りをやるよ」

順序としては早過ぎるかもしれないが、逸る気持を押えることができなくなっている私であった。木村さんはいとも悪いとも答えず浴衣を脱ぐ。

立った彼女を後手に縛り余った縄を首に廻わしてから再び後手に戻し、縦に体を割って前面の首縄に引掛け臍上で結び目を作る。まだ縄が余っているので胴と胸を一巻きして止める。縄尻が残ってダランと垂れているのは私の性格に合わない。自分ながら七面倒臭い性格である。棧の真下に座敷机を移動し、その上に座布団を二枚並べる。

仰向けに寝かした木村さんの足を揃えてタオルでぐるぐる巻きつけ、その上から縄を巻いて解けないようにする。彼女は口をもぐもぐ動かして目を閉じている。それも彼女の癖



のようである。机の上に立った私は彼女の揃えた足を抱きかかえて持ち上げる。力には自信がある。頭と背中以外が浮き上がったところで足首の縄を棧に廻わして結ぶ。しかし、このままでは机を外せば頭が床に着きそうである。左腕でもう一度膝のあたりを抱えて持ち上げ、右手で棧に掛った縄を引張る。

頭と肩だけで逆立ちした彼女は、やはり口をもぐもぐさせている。顔が少し充血して赤くなっているので急がなくてはならない。背

中を抱き上げて足で机を外す。手を放すとミシリと柱の音がして彼女の体が下ったが、僅かに頭と床との間に空間があった。月光が部屋の中を鋭く照らし、シャッターの音がいやに大きく聞える。逆吊りの体は殆んど揺れていない。白い体と対照的に顔が赤くうっ血して、その容貌を変えているようである。しかし木村さんは一言も洩らさない。目かくしも猿轡もしていないから苦痛を訴えることが容易であるのに。

降ろすのも一苦労だった。私の顔は汗びっしょりである。縄を解くと彼女はくるぶしの所を痛そうに見た。

「苦しかった？」

「ここに縄がじかに当って痛かったわ」

右足のくるぶしの上が赤く擦れている。私が見てしまった。触ると凄く痛いので、どうも薄皮を剥いだのかもしれない。彼女はその後擦過傷以外はそう苦しくないような表情をし

ていたが、私の方が直ぐには続けられそうにないので休憩することにする。

「吊られたら、どんな気持がする？」

愚問である。

「足さえ痛くなかったら辛抱できるわ」

木村さんは落着いたものである。

しばらく雑談をする。勿論お互いのプライバシーを犯さない程度にである。彼女は結婚の経験はないと云い、誰かいい人ないかしらと淋しく笑う。そして彼女がその体の若々しさ程は若くないということも知った。体だけを見ていると二十代も前半のようなのだが……。女性は性生活の有無によって体が変わるものなのであろうか？

「もう一度やるよ」

「どうするの？」

「足を別々に……」

木村さんは別にいやな顔もせず浴衣を着たまま部屋を出て行った。トイレらしいことは水の音でわかった。後手にして首縄をかけてから縦に一本、体を割ったのは先刻と同じであるが、今度はきっちり両肘まで縛り、その代り胴には縄を巻かない。体の前面は首縄から一本の縄が体を縦に二分するだけである。足首には別々にタオルを巻いて縄をかけ

る。開脚の逆吊りをやるつもりである。先程と同じように机の上に寝かせて体を起こさせる。しかし、今度は足が別々なので一ぺんに持ち上げるわけには行かない。片足の縄を棧に結んでから残った足の縄を棧に巻きつけ、それを交互に少しずつ引張り上げて行った。頭の下を机を外すと文字通りのY字型となった。恐らく、これ程の開脚逆吊りをやった人はいないだろうと思われる程の両足首の間隔である。さすがの木村さんも苦しいらしく、低い呻き声をあげた。

「苦しい？」

「早く撮って！」

伸び切った足の線が美事である。私はファインダーをのぞく眼鏡が直ぐに曇ってくるのをいらだたく感じながらシャッターを切った。これは秘蔵のフォトになるに違いない。一枚でも多くフィルムに刻んで置かななくては。焦る気持は余計眼鏡を曇らした。

吊ってから時間にして五分はかかったと思う。降ろした時、私は彼女が逃げ出すのではないかと思った位である。しかし木村さんは意外と平気な顔をして足首をさすっていた。

「開き過ぎたかな？」

「そうね、つけ根が痛かったわ」

私は彼女のタフさに、ちょっと辟易した。

マゾの女——正しくその形容そのままの木村洋子さんである。疲れ切ったのは私の方で体を横にして息をはずませているのが、ちょっと口惜しかった。降ろす時に触った彼女の足も手も肌も冷たかったから、寒いのに違いなかったが、彼女は口をもぐもぐさせたままで苦情を云わない。

「寒いだろう？」

「ええ少し」

私は浴衣の上から掛け布団をかぶせてやった。

「もう止そうか？」

「……」

「まだ大丈夫？」

「ええ」

元気を回復した私は、このマゾの女性が音をあげるまで責めてみたい気持になった。もう写真の方は二の次でいい。絵にならなくても構わない。露出に憧れているというんなら、その希望通りにしてやろう。

吊りに使った机が、そのままだったので、彼女をその上に仰向けに縛りつける。両手を左右に開かせてしっかりと縄をかけてから下半身を起して二つ折れにする。両足首を両手

の所に引き寄せてから縦縄をかけ、二つ折れになった胴と腿を一つに縛り上げる。尻を上、その胴は垂直に立った。厳しい縛りである。女にとって羞恥の体位である。

「叩いてもいいだろう？」

「……」

「叩くよ」

「余り強くしないで」

私は机の空間にあぐらをかいて坐る。縦縄で二つに分けられた遅い双丘が目の前にある。私は平手のまま両手で挟むように叩いてみた。パーンという音はちょっと気がひける程大きかった。彼女は黙ったままである。

今度は左右交互に力を入れて叩く。腰を伸ばした時の臀部は肉が盛り上って弾力があるものだが、この姿勢では筋肉が引伸ばされているので肉は殆んど震えない。白い肌にみるみる鮮かな朱色が浮び出てくる。しかし、木村さんは痛いとは云わない。私は投げ出されてある縄を束にしてそれで叩いてみる。急所に当たらないよう左右の側面を打ったのだが、平手の時よりも、くっきりと打たれた跡が充血してくる。

縄の尖端が相当痛い筈なのだが、彼女は黙ったまま口をもぐもぐやっている。恐らく、

その時の私の目は血走り呼吸も乱れていたのに違いないのだが、夢中だった私には斑^{がら}になった肌の模様と、ああ私は女を責めているのだ——という実感だけが記憶に残った。そこには撮影者とモデルではなくて、加虐の男と被虐の女とだけが存在したのだ。私は何回打ったか憶えていない。しかし、私のサド性も所詮は本物ではないのかもしれない。折り曲げられたまま苦痛に堪えている木村さんが可哀想になってきたのである。黙ったままの彼女の心境は知るべくもない。

「痛かっただろう？」

私は縛ったままの木村さんの顔を覗き込んで尋ねる。口の中が妙にねばっこい。

「少し……」

彼女は目を開いたまま答える。彼女は目かくしを余り好まないようである。第一回目の後で彼女が箕田氏に話したところによると、私が余り目かくしを強くかけ過ぎるといふこととだったらしい。彼女は縛られた自分を見ている間も、自分で自分の体をよく眺めている。マゾとナルシスムは背中合わせなのかもしれない。

私が尻を打っている間も恐らく彼女は、そ

の痛さの中で惨めな自分の姿を見つめていたのであろう。私は木村さんのマゾ性に圧倒され出した。もっと強くもっと烈しく彼女の体を打っても、彼女は悲鳴を上げることはないように思えた。苦痛を耐えているのではなくて、苦痛の中で快感を味わっているのだとしたら——私は無気味な気持ちになっていた。

私は自分が本物のサジストではないことを認めなければならない。文章の上では気を失うまで鞭打つとか、皮膚が破れて血を見るまで叩くとかいう表現を簡単に使うのだが、実際にはとてもそこまでの鬼心にはなれない。

サジストに段階があるとしたら、恐らく私の程度はその中のノーマルな部類に属するのではないだろうか？ そしてそれは、人道的にも許容される範囲内かもしれない。

——そうした弁解が私のコンプレックスを解消してくれるような気がするのである。しかし、私が本物のサジストでないことは認めなければならぬ。その意味では、木村さんは私の程度を越えたマゾの女であるのかもしれない。私は彼女の限界を見極めることができなかった。勿論彼女はその苦痛を表現に出さないだけなのかもしれないのだが——。

時計が四時を過ぎていた。外はもう暗くな



そくさと洋服を身につけ、鏡に向って
乱れた髪を直した。

「疲れた？」

「そうね」

恐らく陶酔から解放されてみると、
彼女にも疲労が出て来たのであろう。
殆んど休みなく縛り、吊り、叩かれた
肉体が疲れない筈がないからである。
二人の間に、ちょっと白けた空気が流
れた。私は彼女が怒っているようにも
思えた。

「今日は大分ひどいことをしたね。悪
かったなあ」

私は、本物のサジストでないばかり
か、案外なフェミニストであることを
白状しなければならぬ。

「気にすることないわ」

ああ、彼女は私よりも一枚上であっ
た。

彼女の方がかえって私をなぐさめて
くれているのだ。彼女が一時的にもせ
よ、不機嫌な表情をしていたのは、陶酔のひ
とときを過ぎたことに対して、或は自己反省
めいた心の葛藤を味っていたのではないだろ
うか。私はふと、そんなことを考えてみた。

しかし、彼女の心の中のこととは第三者であ
る私にはわからない。ただ憶測の域を出ない
のである。でも、「気にすることないわ」と
いう彼女の簡単な言葉がたしかに私の気持ちを
救ってくれたことは事実である。

若い女性を身動き出来ないくらい、ひしひ
しと厳しく縛り上げ、その悶え苦しむ姿態を
眺めたいという自分でありながら、プレイが
終って後での不機嫌な彼女のことを気遣う案
外フェミニストの気持ちに苦笑めいたものを味
うのだった。こうした自分の矛盾した心情を
明らかに分析解明できないのだから、彼女自
身も自分の気持をはっきり出来ないのも当然
だろうと思った。

外はもう真暗で、色とりどりのネオンが夜
の街の賑わいを照らしていた。車から降りた
木村さんは微笑しながら手を振った。信号で
止められた車に追いついてきた彼女がまた手
を振った。私は彼女の貞操を奪わなかったこ
とに空しい満足を感じていた。撮影者とモデ
ル——それだけでいいのだ。

人の波の中に小柄な木村洋子さんの後姿は
消えて行った。一人の平凡な女として。車の
中の孤独な私に夜の感傷が訪れてきた。彼女
に幸福な家庭が与えられますように。

孕んだヌードの

ヴィナス群像

高野原美



若い初々しい妊婦の健康な妊婦ヌード・フォトは、女性のもつ宿命的な生理を秘めて、その神秘さを誇らし気に男性の前に誇示している。妊娠という現象は、女性のみのもつ生理現象であり、男性はその妖しく肉感的に膨らむ動物的な余りにも生々しい人間性をたたえたお腹の前にひれ伏し、その妖美に讃辞の言葉もなく、ただ感歎の眼を向けて鑑賞するのみである。

この妊婦ヌード・フォトによる膨大な臨月腹の美の鑑賞を、読者のために奇ク誌は精力

的な努力をはらってきた。

強制空気浣腸による東浦ひかるの豊かな腹を、ぱんぱんに膨らませ、蛙腹を叫んでみても、それは妊娠腹の偉大な腹部の膨隆には及びもつかない。いくら下腹部の皮下脂肪が豊かについて、お腹が太鼓の様な膨らみをみせていても、それは決して妊婦ヌード・マニアを満足させる訳にはいかない。やはり子を胎内に宿した妊婦のぱんぱんに張り切った膨大な腹部の丸い小山でなければ満足できるものではない。裸身に現われた妊婦特有の変化と

お腹の妊娠月特有の張り切った膨らみの変化美こそ、妖しく胸をかきたてる女体美鑑賞の対象ではないか。

○

全裸の妊婦像が分譲写真として、私達の前にその姿を見せたのは、先ず児玉昌子さんであった。彼女は、二十二才の初産であり、その豊かな皮下脂肪による量感あふれる曲線美の肉体は、ただ、それだけでも立派であるのに、その美貌とあいまって偉大な豊かな膨らみを見せたお腹の妊婦ヌードは、妖しいまでの肉感をたたえ、その初々しさは素晴らしい効果を見せていた。

それまで誰れも発表しようとしなかった妊婦ヌード・フォトを敢然として発表されたのは、その妊婦裸像に、余程の自信と誇りを持つておられたからではないかと想像されるほど、均整のとれた美しいグラマーの肢態であった。現在でもなお、一般の女性では、妊娠による膨満腹を目立たせるだけでも羞しがり、ましてヌードで異性の前にその腹を見せるなどということは、思いもよらぬほどの羞恥心に、かりたてられるようである。それだけに児玉さんの、生贄としての心はいじらしく、また、その裸身を自ら愛しみ誇った自信

のほどがよく理解されるのである。

私の前には、股間縛りの妊婦裸像が置かれている。後手に縛られて首縄をかけられ、その縄が妊娠のためより豊かに盛り上る右乳房を、乳房の上で二つに割って左乳房の上を通り、ウエストを巻いた縄が臍を通って股間に喰い込んでいる。豊かな弾力に富んだ乳房が縄目に痛めつけられ、胸から股間に走る縄は、皮下脂肪の豊かさをみせつけるように張りきった八カ月のまだ膨らむ余裕をみせた腹部を縦に割って脂肪質の腹に窪みをつくって走っている。豊かなお臀の双丘を割って深く喰い込んだ縄目は、健康に輝くムッチリしたお臀の豊満さをより強調している。見て楽しめる豊満なグラマーの妊婦股間縛りである。

この児玉さんの、ややピントの甘い妊婦ヌードは、そのためにかえって健康に輝く若い初産妊婦の健康な甘い詩情とムードをかもし出していて、結果的には良かったのではなからうか。

引続いて、安原さゆりさんの妊婦ヌードが発表された。

よく引締ったどちらかというと細い体軀の安原さんのお腹は文字通りはち切れんばかりに膨隆して、その臨月腹は側面から見ると丸

味は少く全体がなだらかな弧を描いて盛り上りをみせ、むき出しになったお臍が、臍窩を下に向けてぽっくりと突きだしているのは、仲々の愛きようさを感じさせる。彼女の場合は、前に突出するのでなく、古老の俗にいう「横孕み」とでもいうのであろうか、臨月の割りに丸い隆起が特徴的ではなく、かえって正面よりみた方が膨らみが目立ち実感があつた。

可愛いお腕を伏せたような乳房は、初産らしく固く引緊ってムッチリと盛り上り、乳量も広がりを見せず、やや黒ずんだ乳量がチンマリと乳房のうえに重ねたような盛り上りを見せている。乳房の変化に乏しく、妊婦の期待した側面から見た球状の膨らみにも乏しい妊娠腹ではあるが、児玉さんの時と異なり写真が非常に鮮明になり、腹部の接写大写真では、腹部の輪廓や皮膚のはり裂けんばかりに伸びきった変化がよく見られ、楽しませてくれる。

正面裸像の方に、妊娠の特徴を見せる臨月腹である。

誌上に妊婦ヌードが出現。異夫人の妊婦ヌードは、誌上公開であったが、残念ながら写真が不鮮明で、特徴が判らなかつた。本人は

「伊藤晴雨氏のように妻を臨月で逆吊りのフットをとって見たい」と力んでおられたので期待していたのだが、そのまま発表がない。

田中美佐子さんも、二十二才の初産の妊婦ヌードである。

田中さんも均整のとれた美しい肉体の持ち主で、その腹が実にまんまるく膨れ上った全身像は、妖美そのものの美しさである。予定日十日前の撮影になる臨月腹は、張り切った腹も痛々しいばかりに、まんまるい膨らみをみせて盛り上っている。ゴムマリを含んだような臨月腹というのは、田中さんのお腹の表現のためにあるような錯覚を思わせる丸いお腹を誇らし気に突き出したその白い裸身は、若い弾力を秘めた柔肌に包まれ、甘い初々しい若妻の甘さと妊婦の歎びに輝いている。神秘的な女体の最も美しい姿は、今この臨月腹にあるのだとばかりに、その歎びに耽る最高の美を夫に見せ、それだけでは物足らず多くの男性にも分け与え鑑賞させようとばかりに裸身を示す。

鑑賞用妊婦ヌードの神秘的な妖美を心ゆくまで見せるヌードである。横から見ると半球そのものの美しいカーブを描いて丸味をおびた臨月腹の輪廓は鮮やかな線を刻み、膨らみ

は乳房の下でぐっと盛り上りを見せて突き出し、その丸味の下り目のやや下でむき出しになった臍が可愛い姿を見せている。

その均整のとれた白い肉付きのよい裸身に太鼓のように張りきって膨れ上った妊娠腹は、女体美の極致を思わせ、恐らく自信をもってヌードを発表されたものと思われる。

前の二女性に比べて乳房の変化は最も著しく、乳暈は釣鐘型のやや上向き加減の乳房の中央で黒味を帯びて拡がり、その周辺部には鮮やかに乳輪腺があらわれている。妊娠のために豊かさをまして張り切った乳房は、圧迫すれば白い乳汁が勢いよくとびださんばかりに、ぼつてりと膨らみ、そのため下部に著しい丸味をもって胸に重たげに突きだしている。

田中さんは、出産後、本誌に手記をよせられ「妊娠前から蛙腹に関心をもっており、蛙腹になるまで浣注したとか、高圧空気浣腸をしたりして、お腹がポンポンに膨れることを空想していた。主人の好みに合わせて行くのが妻としての役目だという考え方から臨月の写真を撮らせた」といっておられる。もともと蛙腹に関心をもっておられた様子であり、そのため夫ばかりでなく男性の妊婦ヌード・マニアの気持も判りすぎるほど理解しておら

れたのであろう。それだけに、誇らし気に臨月腹を露出して男性に鑑賞させることによる自己満足を十分に味あわれたことであらう。

その後、綾研二氏をはじめとして妊婦ヌードが誌上に発表されたが、その全てが立派な臨月腹であり、折角の妊婦ヌードでもあることだし、その頁だけでもグラビアであればと惜しまれてならない。

カメラ位置を下げて下方から撮った、大きく膨んだ臨月腹の巨大な腹部は、余りにも見事なものであり、これ程も大きく前に突き出して丸く盛り上ってくるものかと驚歎させられた。これこそ妊娠による女の腹の最大の変化——偉大な半球の膨らみの極致かと思わせるものがあり、特に臨月腹ヌードを撮る場合の撮り方を暗示させるものがあつた。丸い膨らみの下腹から妊娠腹をクローズ・アップさせることにより、より一層腹部の巨大な小山が強調されて、生々しい妊婦の白い腹の動物的肉感がよくでてくるものである。偉大、巨大、とに角半球の膨らみの立派さにどの様な形容詞をあてはめてもピンとこない程、見事な臨月腹ヌードである。

また綾氏の横から撮った乳房縛りの妊婦フォトも妊婦が上体を極端に前屈した時の変化

が見られて面白い。

乳房は、重たく垂れ下り、その頂点の蕾の乳頭が太く長く逞しく突出して、乳房にかけられた縄目は、妊娠による乳房の豊かな脂肪の沈着を暗示するかのように縄も隠れるほど深く喰い込んでいく。前屈のために、普通なら深い窪みをつくる臍の上部が胎内の子のために邪魔されて、ゆるやかな窪みをつくり臍を中心として上下になだらかな盛り上りの線をみせている。妊婦の腹の軀の動きによる微妙な変化が見られて興味深いものを感じさせられた。

今回、まちに待った待望の増田みゆき夫人の妊娠により、妊婦ヌードの極致ともいふべき妊娠腹の膨らみと全身の変化が、余すところなく私達の前に示され、鑑賞し得る機会を得たのである。

誌上に五カ月の妊娠腹が発表され、続いて岩田帯をまいた六カ月の膨れたお腹が発表された。この時、全国の妊婦ヌード・マニアは、次に続くみゆき夫人の妊娠腹を、いろいろと想像して開幕のベルが鳴り、華やかなライトに照らされて輝くぶっくりと膨らみをみせた小山の白い裸身を胸を高鳴らせて待ったことだらう。遂にサンゼンと光を放って妖し

く光り輝くやや尖った丸い膨らみをみせた七カ月の妊娠腹が姿を見せた。

ここで箕田氏が、やおら腰をあげて増田夫妻の好意による「妊婦ヌード・フォト」分譲のため増田宅を訪れる。箕田氏は、白い裸身を見せて八カ月にしては余りにも大きな膨らみを見せて丸く突出しているみゆき夫人をモデルにして、汗を流しての延々一時間余にわたる撮影を始める。大きなお腹は、それだけでも苦しく大変であるのに妊婦マニアのためにおそらく肩で息し喘ぐような姿で箕田氏の注文ポーズをとり続けたことであろう。このみゆき夫人の動物的肉感をたたえて膨らむ妊娠腹は、また妊婦による女体の変化は、みゆき夫人の羞恥をのりこえて、妊婦マニアの生贄になろうという献身的サービスによって、余すところなく鮮明に写しだされて、マニアの前に姿を見せた。

幸いにも私は、箕田氏より送られてきたみゆき夫人の鮮明な妊婦ヌード・フォトを前にしている。このフォトは、箕田氏の努力とみゆき夫人の献身的なサービスのあとを物語り、見事な出来ばえであり、感謝の言葉もないほどである。

八カ月とはいえ、もう臨月を思わせるよう

な偉大な膨らみを見せて、腹の皮は、もうこれ以上伸びないという限度まで伸び切り、固くばんばんに張り、そのため妊婦線がクローズ・アップされた腹に見られる。月が若いために臍から下が大きく急に丸いカーブを描いて膨らみ、月数が進むにつれて膨らみの丸味が上方に移行する楽しみを感じさせ、臨月腹のまん丸い満月を思わせるような妊娠膨満腹への期待を強く抱かせる。

丸く張り切った妊娠腹には、はっきりと正中線に沿って走る黒線（俗に妊娠線といっていう）であるが、正式には色素沈着による黒線という）が見られ、妊娠によって豊かな膨らみを増して、やや垂れ気味になった重たい乳房が小山のお腹の上にのったようにみえる。その中心の乳暈も黒味を帯び、静脈の青い網目が乳房の柔かい皮膚を通してみられる。

八カ月というと、子宮底は、臍と剣状軟骨の下端の中央部にあり、臍はやや伸展する程度が普通であるが、これから見てもむくれ上ったお臍は、月以上の張り切った固い膨らみを見せていることを物語っている。とに角、目を見はる様に見事な卵円形の偉大な膨らみをみせた八カ月妊娠腹である。

日本婦人の臨月腹では、お臍を通る腹囲が平均八七センチ、最大九三センチであるという。また臍高といって、恥骨結合上縁から臍窩中央までの距離は十四―二十四センチである。

みゆき夫人の見事な膨らみを見ながら、小柄なみゆき夫人ではあるが、これだけの立派で偉大な膨らみなら九十センチをこえるのではなからうか等と想像したりする。今後、浣腸、切腹等の臨月腹も撮る計画とのことであり、期待すること大であるが、計測もあわせてお願いしたいものである。

辻村氏の「みゆきのバースデイ」で、夫人の誕生を祝うケーキがのり、机の上に横臥えられて食卓にされていた白い柔肌のお腹が、妊娠という女性の神秘をひめて膨れる変化美を、奇ク誌の読者は、辻村氏の文章を通じてなじみの白い裸身であるだけに親しみを感じつつ大きな期待をよせて見守っている。

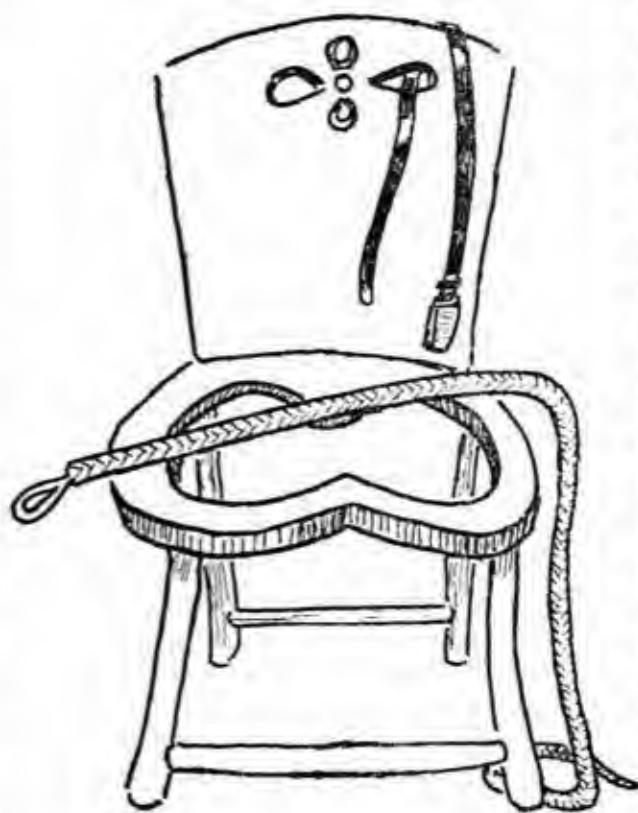
臨月に向って、ますます膨隆し、より偉大な臨月腹を妊婦マニアの前に誇らし気に見せられんことを。

このあとに妊婦ヌードを発表される同好の士が、続々と出現し、妊婦ムードをなお一層盛りあげて欲しいものである。

心^{こころ}傷^いたむ遍^{へん}歴^{れき}

第二十六章 女囚ミシユリーヌ（六）

西 条 操



女囚ミシユリーヌは夢うつつの中で、鉄格子扉の錠の音を聞いた。

翌朝おそく、地下取調室にやって来たマルタ保安課長だったが、ミシユリーヌとミルドレーヌが失神状態にあるのを見て、軽く舌打ちしたのだった。

「二人とも発熱がひどいようね。少し過ぎたかねえ」と、呟やく。過ぎたかもしい所だ。

「スチームは通してあったんだろ？」

「はい。少々——」マーゴットが答えて肩をすくめた。夜はボイラーの火をあらかた落ししてしまうので、通してあったとしても申しわ

けに過ぎない。このスチームのことについては、各監舎からも苦情が出ているし、夜勤の部署はぶつぶついながらも、電熱と石油ストーブで補っている。お役所仕事の常で、ボ

イラー室には夜勤手当の予算がないのだ。

「こら、元ポリの恥知らず。お前はイキがいんだね。もっとも、昨日からだからねえ」

クラリスは鉄格子の中から恨めしげな眸を投げ、股手錠の両脚をよじって弱々しくもだえ、後ろ腰吊る鎖を微かにきませた。

ミシユリーヌは、喰い込む「ベルト」が僅かにゆるむのを感じた。後ろ腰が天井から解

かれたのだ。彼女は呻いて床に崩れ、担架に乗せられるのを感じながら、完全に気を失ったのだった。

気付いて見ると、病監のベッドに横たわっていた。彼女は忽ち思い出し、熱っぽい全身と頭痛を感じた。胸が苦しいし、絶えず悪寒が走る。みじめにも苦しかったあの股手錠とベルトとは、既に股間にはない。ホッと安らいだミシユリーヌだったが、忽ち涙ぐんだ。右足首に固く嵌まる鋼鉄、そして、それから延びる鎖とを感じ取ったからだ。

毛布の下から両手を出して見ると、ずきず

き疼く両手首には繃帯が巻かれていた。腰から背にかけてが鈍く痛む。長時間、丸めたりだったせいだ。股間のあたりから、焼けるような灼痛が突きあげて来る。痛めつけられた柔かい部分に、タツプリと葉を塗られていることだろう。足元の向うの窓は真昼間だ。

頭上にひろがる鉄格子の仕切り——。その鉄格子の向うで白衣姿が行き来して、医薬の匂いが流れて来る。ミシュリーヌは吐息を洩らし、苦しかった地下牢の憂目を思い起しながら、毛布を引きあげて眼を閉じた。身動きすると、背中が一面、火をつけたように痛かった。

（そうだね。革鞭で打たれたんだわ。ああ、なんと恐ろしいこと——でも、こうしてちゃんと手当てして頂けるのね。嬉しいわ。熱を出して気絶したのね、私。どのくらい経ったのかしら？）

鉄格子戸が重々しく開き、ミシュリーヌは薄目を開いた。二人の看護婦、それに年配の婦人看守が付き添って、全裸の女囚を抱きかかえるように入ってきた。若い女囚は見事な金髪女、ミシュリーヌのベッドの左隣りに連れられて、寝台の傍らで裸か身をもがいた。「も、もう勘忍して。それだけは着せないで

下さいまし——」

しかし、看護婦たちは女囚をベッドに押し倒し、手足を押えつけ、おしめをあてがい、ゴム引きのブルマーをピッチリ穿かせて、要所を強く留めた。

「もう、決して暴れませんわ。お医者さまだって、だいぶ快くなったとおっしゃ……」

「まだ駄目よ。おとなしく着なさいッ」

若い女囚は素肌には拘束衣をまとわされた。厚いズック製の拘束衣には、要所々に革具や金具が付属していて、体の前面から当てがって全身を包み、背中で締めあげる。腕を通す部分はベラボウに長く、両脚を包む裾は長い上に一本棒だ。

女囚は嚙りあげながら両腕を通し、そして腹這った。首の後ろから背筋を通って足先まで、何条かの革具が要所々々を締めあげる。女囚は扶けられつつ上体を起し

「苦しいわ。きついわよ」と訴えた。

「なによ、その言葉使いは!!」

女囚は拘束衣の袖で眼を拭い、金髪を後ろへ振り、両腕を胸に交差させた。身を動かすたびに、革具がギシギシ鳴る。

両手の先から二十センチは長い両袖の先端が、それぞれ両肩にかかった。付属している

革バンドが引き絞られて袖口が閉じられ、さらに革バンドはそのままだに回されて尾錠を潜る。女囚はウツと声をあげ、両腕は胸を抱いたまま、きつく固縛された。

両足先も一本棒のまま閉じられ、ベッドの鉄棒に短かく繋がれた。寝台の両側の革ベルトの先端が両肘の尾錠に通され、仰向けに押し倒されて引き絞られた。

これで、この若い金髪女囚は身動き一つ出来ない。見上げて溜息を吐く拘束衣姿に看護婦たちは毛布を掛けてやり、年配の婦人看守が向き直って、ミシュリーヌの寝台に寄ってきた。その制服とバッジを見て、女囚ミシュリーヌは反射的にもがいた。鞭痕の激痛が背に疼く。

「あら、起きなくていいんだよ。そのままいたわりを浮べた温顔を仰いでミシュリーヌはホッと全身をゆるめた。

「気がついたのね。どう？ 工合は」

と額に手を当てる。やさしい仕草だった。

「少し下がったね。三十八度ってとこ」

「——あの、いまは？ どのくらい眠ってましたかしら？ すみません」

「謝まることはないのよ。ひどい目に逢ったのね。ま、保安課ってところはああなのよ。刑

務所なんだから、ああいったところもなくちや。でも、お前は、もう地獄から救い出されたの。ちょうど丸一日、高熱が続いたんだよ。今は、翌る日のおひる前。分った？」

ミシュリーヌは涙ぐんでコックリした。

「肺炎にならなくてよかったね、二人とも」

婦人看守の視線を追って気付いて見ると、右隣りのベッドにはミルドレーヌがいた。

「頭のところに白札が掛けてあるだろ？この札が掛けてある間はね、点呼のときだって起きなくていいんだよ。私はマリアンヌ。用があったら呼ぶといいわ。すぐにいま、飲物を持って来てあげる。食欲はあるかえ？」

看護婦がやって来て、体温計をふくませ、脈を調べた。手首には繃帯を巻いているので肘のところを押える。

薄いスूपを与えられ、なおもいたわられていると、ミシュリーヌの眼に熱いものが溢れるのだった。マリアンヌは去り、鉄格子が閉じられた。いくら静かに閉めたところで、錠の音は重々しく冷たい。でも――。

「天国ね、ミシュリーヌ。シートもあるし、お部屋は暖かいし――」

ミルドレーヌが寝返りを打って、低く話しかけた。彼女の毛布の足許で、やはり鎖の音が鳴った。

「――ええ、ほんとね」

答えながら、ミシュリーヌは指先でまさぐった。どうも、さっきから不審な感じだ。忽ちミシュリーヌは声をあげ、頬赤らめて両腿を合わせる。

「あら、いま頃気がついたのね。剃られてるのよ。押えたって、もうおそいわ」

ミルドレーヌは低く笑ったのだった。

拘束衣の女囚が全身を波打たせ、体中の革具をきしませた。

「あなたたち、いったいどうしたの？ 保安課って、ずい分とひどいのね。でも、あんなに大騒ぎして手当するくらいなら、そんなに痛めなきゃいいのに。ほんと、無駄なことするもんだわ。ああ、窮屈なったら、もう。あなたたちは、いいわねえ。こんな――」

「あなたこそ、どうしてそんな物を――。御病氣なんでしょ？」

「そうよ。こんな物を着せるのも治療のうちなんだって。私、発作が起るの」

拘束衣の金髪女囚は五五〇号のローラ。ミシュリーヌと同じく業務上横領で三年の女囚なのだが、拘禁性ノイローゼが嵩じて発作がひどいので、二週間ほど前から病監に移されている。

ている。

軽度の拘禁性ノイローゼは珍らしくなく、各監舎に数名は常に居るものだが、大抵は監舎内で処置できる程度だ。しかし、この五五〇号のは相当に強度の症状を呈し、全身硬直や痙攣を示すし、発作的に暴れ回って手におえないので、病監で治療を受けさせているのだった。なにしろ、前後不覚で暴れるものだから、うっかりしていると自壊行為になりかねないし、同囚連中だって迷惑だ。

だいたいの話が、拘禁性ノイローゼ患者を出すということは、担当監舎にとって名誉なことではない。六監舎なんかでは、発作の徴候を見破る名人が看守の中に居て、その度に縛りあげて暗房へ叩き込む。勿論、頭を壁に叩きつける自壊行為を防ぐ必要があるから、特製のヘルメットを被らせるといふ話だ。

六監の看守長テレーズ女史に云わせると、拘禁性ノイローゼなどというものは贅沢病なのであって、逆療法に限る、という。

「私、もう治りかけてるのよ。鉄格子見たって平気だし。でもねえ、治りたくないわ。こんな窮屈なものさえ着せられなきゃ、いつまでも、ここに居たいの」

そりゃそうだろう。できることなら仮病を

使ってでも病監入りしたいのが女囚の常だ。

「だけど、手錠だけは苦手のよ。いまだって、見せられるだけで手足が突張っちゃう」

マリアンヌ看守の声が鉄格子の向うから飛んで来た。

「静かにおし。しゃべるのは禁制だよ。ほかの者の邪魔になるじゃないの」

ローラはビクリと口を噤んだ。この上に嵌口具などを噛まされては堪まらない。

ミシュリーヌも眼を閉じ、熱と悪寒に悩みつつ、かりそめの安逸をむさばった。右足首にガッチリ嵌められた鋼鉄環はいつまで経っても冷たいままで、体温がそこから奪われて行くようだった。

——第三監舎では、昼食を終えた女囚たちを全員監房にぶち込み、ジョアンヌ看守長女史は部下たちを詰所に集めた。

「みんな聞いて。ジャンヌのことだけど、なんとかマルになったよ。諭旨免職。退職金だって三分の一は貰えるし、ま、よかったわ」
たった数日のことで、女史のいかつい顔も少しは衰えている。

「ほんとに氣を使ったこと。みんなもそうだったろうけど、でも頑張ってたね。当分、補充は来ないよ。なあに、他の監舎の連中にひけ

目感じるこたないさ。ひとの噂も七十五日、私たち運が悪かっただけよ」

マジョーリやイヴェットあたりが苦笑いした。運のせいにするのは、女囚たちだって大抵はそういう。

「それからね、これは内緒だけど、どうやら課長は飛ばされるらしいよ」

女史は声をひそめながらも口が軽い。御自分の方とは何か無事に済む見通しなのだ。

「赤縞たちにも堂々としてるんだよ。いいふらすこたないけど、ひた隠しすることもないさ。三八五号が戻って来りや知れちまうからね。え？　そうよ。転舎なんかさせないよ。だってそうだろう。うちの子たちには仕方ないとしても、よその家の赤縞たちにまで、詳しく知らせてやるこたないもの」

「あら、じゃ……」イヴェットは歓喜した。
「二人ともここへ戻るんですのね!!　まあ」

「そうとも。みんな、あの二人には今までどおりにしてやるのよ。保安課で相当痛められたようだけど、甘やかすこともないし、当り散らすのもいけないね」

筋の通った言葉を聞いて、イヴェットはさらに安堵した。四晩も床に寝て、風邪をひいている彼女だったが、頭痛も吹き飛んだ心地

だった。ミシュリーヌさまが、やっぱりここへお戻りになるのだ。おお、神さま、ありがとうございます……」

「うん。あの二人だけど、昨日の朝から病監に移されてるよ。うちの無病記録もついに破られたわ。でも、これは保安課が手荒なせいだね。え？　なあに、大したこたないさ。風邪に毛が生えた程度。今週末には戻るよ」

イヴェットはホッと吐息を洩らした。これでもう、保安課のあたりを、こそこそ窺わなくて済む。奥さまにはお許しを願って、今夜からはベッドに寝させて頂く——。

「それからねえ、こんなときだから訊くんだけど、怒らないでね。つまり、うちの子たちのことで娑婆からアブローチを受けたひとはいない？　私もフォンテーヌも、しょっ中なのよ。もちろん突き放してるけど。マジョーリだって毎週のことらしいわ」

「あら、そんなこと、いちいち報告しなきゃいけないの？」ベルディーヌが肩すくめる。
「いえね、そりゃ信用してるわよ。でも、あんなことがあったら」

「そうですね。じゃ、五月だったかしら、プロポーズされましたわ。ハネつけてやったら、それから手を変え品を変えてうるさか

ったこと。腹が立ったもんで、手錠つきつけて逮捕するって脅かしてやったの。あの貴婦人、蒼くなつてそれきりよ。面白かったわ」

「ふむ。誰だえ？ ベルディーヌ」

「三一〇号。ルーシー嬢の御母上ですわ。」

ま、ママの気持はよく分るんだけど」

「ふーん。やっぱりねえ。うちじゃ三一〇号が厄介者だね。ほかには？」

フィリス、ジョーゼット、キャスリーヌ、それにモレシェンヌまでもが誘惑の手を受けていた。ルーシーとミルドレーヌの関係が圧倒的で、三四〇号の元セレスト工業秘書の女囚がそれに次いでいる。

「マリーは？」

「私、残念ながら、言い寄って来てくれませんの。ほんとですわ」

「そうかい。ま、あんたは資産家の娘だものね。イヴェットはどう？」

イヴェットはかぶりを振った。半年そこそこの新参者だということは、誘惑者の方だつて調べていることだろう。

「ま、キッパリとハネつけておくれよ。釈迦に説法だけど。手に余ったら報らせとくれ」
「でも、ほんとに無駄なことするもんだわ。世の中には馬鹿者が多いんだねえ」

ベルディーヌあたりがいきまき

「でも、ジャンヌの例もあるからねえ」

と肩を落とした。ベルディーヌやマジョーリを買収しようとしたって無駄だ。

「おや、イヴェット。顔色が悪いわね。風邪かい。無理しなくてもいいけど、でも頑張つてね。当分、うちは手薄なんだから」

監房の一つで黄色い声が喚き立てた。

「うるさいわね」

女史が眉を寄せ、マジョーリがさつと飛び出した。はや、手には生理用品を掴んでいる気の付き方だ。彼女の頭の中には、女囚たち一人々々の体と生理とが畳み込まれている。

「出ものはれもの所構わず、か——」

ベルディーヌが呟いた。

「じゃ、まあ、そうだね、三一〇号の関係を始末するかね。ママに手紙でも書かせてやるんだね。え、ベルディーヌ。頼むわよ」

ベルディーヌはうなずき、ジョアンヌ女史に片眼をつぶったのだった。

——ミシュリーヌは、ガウン式の病衣の裾を合わせつつ、看護婦をまぶしげに仰いで「すみません——」と、礼を述べた。寝たまままで用を足させて貰ったのだ。脚を動かすたびに鎖が音を立て、剃られた部分は隠すにも

隠せなかったもので、彼女の頬が仄赤いのは発熱のせいだけではなかった。

「あら、まだよ。お薬つけなきゃ」

「いいんです——ほんとですわ」

ミシュリーヌはかばそく呟き、両腿を固く合わせた。

「駄目。さ——。恥かしがることないわよ」

ミシュリーヌは観念して恥らい、ベルトに痛めつけられた傷痕をひろげ、泌みる薬液に腰をよじった。

「たった二日ほどで、こんなになっちゃうのねえ。十字軍の妻たちは可哀想だったこと。あら、駄目だったら。もっとひろげてッ」

看護婦はしげしげと覗き込み、女囚ミシュリーヌは顔を掩った。

「あらま、剃り残しちゃってるわ、あんなところ。私としたことが——。手術だったらことね。婦長さんに大目玉」

ミシュリーヌは指の間から恨めしげに見上げた。剃ったのは、この若い看護婦だったのだ。看護婦は右足首の鋼鉄環を見やり

「ゆるいのね、ずいぶん——」と揺すぶる。

「でも、抜けはしないようね。さ、もういいわよ。お前、経産婦ね。でも、三人とは産んでないわね」と、専門的観察眼を誇り、ミシ

ユリーヌはギョツとした。

左隣りのローラが、立ち去る看護婦に訴えた。

「ねえ、もう我慢できませんの。おねがい」

と、拘束衣の革具をギシギシ鳴らせる。看護婦は黙殺して去り、ローラは鼻を噉って泣いた。然るべき処置を施されている彼女には、そのまま垂れ流すほかないのだ。

「日に一回しか取り替えてくれないのよ、このおシメ——。もう、絶対に暴れないのに」

ローラははじめなことをミシュリーヌに訴えるのだった。ギッチリと締めあげた拘束衣だから、脱がせたり着せたりは面倒ではあるうが、下半身だけで用は済むことだし、そんなにまで悲しい思いをさせなくてもいい。そう思って同情するミシュリーヌだったが、なにしろ、ここは刑務所の病監なのだ。

まどろんでいたミシュリーヌは眼を覚ました。女医ドロレスが鉄格子戸を潜って入り、従がうマリアンヌ看守が「回診ッ」と低く叫んだのだ。

白札を掛けて貰っている女囚は横たわったままでもいいが、そうでないのはベッドに正座してお迎え申しあげねばならない。上半身起したミシュリーヌをマリアンヌが制し、病監

のあちこちで鎖が鳴った。足の鎖は短かいので、正座するには、体を足許へ寄せねばならない。痩せた両腕をベッドに突いて、弱々しく這いずる灰色病衣の女囚たちの姿は哀れなものだ。どんなに細い足首にも、鋼鉄環が銀色に光って喰い入っている。

女医は片端から診察を初めた。医師としての立場もあるし、さりとて、相手は刑を受けている女たちだ。冷たくてもいけないし、甘やかしてはキリがない。なにしろ、一日でも長くここに居たいのが本音の女囚たちなのだ。刑務所の医者の仕事も難かしい。

「もう大丈夫ね。来週は退監よ。よかったわねえ」

宣告された女囚は肩を落とした。様子では肺結核患者らしい。

「——はい。でも、まだなんだか、その」

「大丈夫よ。もう、少くとも、菌を撒き散らかす心配だけはなくなったわ。でも、いいお薬が出来てよかったねえ。一昔前だったら駄目だったわ。元気お出し」

「——はい」

力なく答える女囚にとっては、効き目も著るしい新薬の数々が恨めしい心地だろう。弱々しく咳き込む風情を黙殺して、女医は次に

移った。いくらドロレスがヤブでも、本物の咳かどうかは分かる。

拘束衣のローラが泣いて哀願し、女医はマリアンヌに手を延ばした。受け取った手錠をカチャリと鳴らせ、黙って女囚の顔に突きつける。途端、ローラの全身が拘束衣の中で戦慄し、涙を浮べた双眸が据った。

「駄目ね、まだ。辛抱するしかないわ」

と、女医はじっと観察する。

「でも、なんとか発作は起らないようねえ」

ドロレスは専門語を二、三口走り、聞いたミルドレーヌが鼻を寄せた。ボンクラ産婦人科医のドロレスなんか、どうして精神科のことを処理できようか。治療という名の拷問を受け、脂汗浮べる女囚こそ災難だ。優秀な婦人科医だったミルドレーヌが鼻で笑うのも無理はなかった。ドロレスは振りむいて眸を光らせ、ミシュリーヌを診ながらも、ミルドレーヌを睨みつけていた。

女医を迎えたミルドレーヌは、病衣の裾をいきなり開き、大胆にひろげて眼を閉じた。

ドロレスの双眸に冷たい怒りが燃えた。婦人科医の診るべきところはここだ、と挑戦されたのだ。呆れた看護婦が太腿をピシヤリと叩き、手荒に胸をはだけた。

「起きて。バカねッ」

身を起した女囚ミルドレーヌの眸は、見下ろすドロレスの視線をガッキと受け留める。

二人の女性の間に、身分の断絶を超えた火花が散り、聴診器を当てがうドロレスの手は怒りにふるえた。

「聴診器はドイツ製ですのね、お医者さま」

「お黙りッ」マリアンヌの手が頬に飛ぶ。

「ペニシリンの二十万単位も射ったときや、大丈夫ですわ。いいお薬がありますものねえ。なんなら、いまずぐ監舎へぶち込んで下さる？お医者さま」

ドロレスは権威を保って黙殺した。ミルドレーヌは精一杯に皮肉りつつも、その眸は哀しげに、相手の耳から胸に吊る聴診器をひたと見詰めている。その聴診器を耳からはずしながら、ドロレスは優越をこめて云った。

「リヨン女子医大じゃねえ、ソルボンヌみたいに荒っぽくないの。七度を越えれば平熱とはいわないのよ。ま、ともかく、ヴィールスをまき散らかすのだけは防がなきゃ。そうでしょ？元お医者さま。ホホホ」

ミルドレーヌは唇を固く噛み、身もだえて鎖を右足に鳴らし、その音に耐えかねたか、後れ毛乱れる首を垂れた。

いきなり、ドロレスの手が白札を引き寄せた。見事に、ミシュリーヌまでがビクリとふるえる。ドロレスは鋭く言い渡した。

「ともかく、安静の要はないわ」

マリアンヌ婦人看守は困惑して眺めていたが、職務上、溜息つきながら女囚に命じた。

「三八五号。ちゃんと坐ってッ」

女囚ミルドレーヌは凝然と、マリアンヌの制服を見詰めて身動き一つしなかったが、ややあって唇を固く結び、後ろざまにベッドを這って鎖をチャラつかせ、両脚折っての正座をし、微かに鳴咽して両腕を背に回した。

「なかなか神妙じゃない？せいぜい掃除婦ぐらいかと思ってたけど、その調子だったらまあ、そうねえ、出たらホテルのメイドにはなれるわよ」

女医ドロレスは、眺めて満悦したのであった。そして、ミシュリーヌはミルドレーヌの胸中を思いやって、同情の涙を流した。

——パリ拘置所の午後の一刻、婦人看守のアネットとエメリーヌは、ムッシュウ、だんひる、と一緒に保安課長室を退出した。今日は木曜日、中二日おいての今日あたりから、例の三九〇号と三六六号の脱走未遂事件についての取調べが本格的に初まったのだ。

手柄を立てた婦人看守二人にくらべて、ムッシュウ、だんひるは小さくなっていった。

「お嬢さんたち。例の野郎を見て行くかい？ちくしょう。あの野郎どものお蔭で、こちら形無しだ」だんひる氏は慨嘆した。

「ま、そうショゲなくてもいいじゃない？」

「そうよ。表沙汰になったわけじゃない」

エメリーヌとアネットは「だんひる」氏を慰さめていい気分だ。誘われるままに、二人は男囚区画に足を踏み入れた。

「ま、臭いこと」

「動物的な匂いだわ。足がすくみそう」

二人の女性は鼻を寄せながら、それでもキョロキョロ見回わした。原則として女人禁制の此の一面に対しては、彼女たちも好奇心を押え切れない。

「おんなじようなものね。でも、ずい分と広いこと」

「男は、女とちがって罪人が多いのよ。劣悪な種族なのね。あら——」

二人の女性は床磨きの男囚たちを避けた。赤縞股引に坊主頭の三組が仰天し、忽ち眼を光らせる。視線はガラガラと、スカートの腰あたりに吸いついた。

「こらッ。何を見てやがる。モップを拾って

仕事を続けるんだ。ちえッ、眼をこすってなにかいやがって。この野郎ッ」

堂々たる体軀が近寄り、笞が激しく鳴り、腰連鎖が音立てて揺れた。

「貴様たちなんか指一本触られるお方たちじゃないんだぞ。よそ見るなッてのに!!」

呶声と笞を浴びておののきながら、異性に飢えた男どもの眸は、なおも血走って光る。

三九〇号と三六六号は、広い通路わきの鉄檻の中に、それぞれ叩き込まれていた。

「スカートの旦那がた」

床磨きの赤縞たちから声がかかった。

「そいつらを引くくちまだった御婦人がたと、お見受けいたしやしたが——」

忽ち、靴音とともに笞が降った。

「黙れッ。仕事してりゃいいんだ、仕事を。」

それが貴様たちの生きる道だ。余計なことを考えたりホザいたりすると——」

「旦那。ひとことだけ云わせておくんなせえ。おねげだあ、へえ。い、いてえッ」

「ふん。貴様みたいな豚野郎でも、撲られりゃ、やっぱり痛いに見える」

「ねえ、いいじゃないの」

と、アネットが眺めて口を出した。

「用があるんならいいなさいよ。聞くだけは

聞いたげる」

筋骨逞ましい男囚は四十前の三八〇号、まずは街の与太者で、傷害か脅喝で三年といったところか。

「へえ。おありがたいこって。なにね、その二人の野郎に云ってやって欲しいんでさ。本望を達しやがったんならともかくだが、ぶざまにトチっちゃいやがって——。お蔭で、こちら大迷惑なんで。おとといからこっちというものは、鎖のきついことしたら、もう。どうにもこうにも、ほんとに腰が千切れちまいそうですぜ。これも、あんちきしょうどものお蔭なんだ」

「この野郎ッ」

三八〇号のボディに鉄拳がめり込み、男囚は呻いて身を折った。

「なにをヌカすかと思ってたら、不服かッ。」

こら、鎖のきついのはな、無駄飯喰わねえで済むようにしてあるんだ」

「トホ、ホ。ひでえことを、おっしゃる」

「こら、貴様はサポーター二週間だ。こっちへ来い。すぐ締めてやる」

「か、かんべんしておくんなせえ、旦那」

「泣くな。人間並みの暮しがしたいんなら、悪いことしなきゃいいんだ。三九〇号のサポ

ーターがサイズ合うだろ。汚れたままだっけなあ。ちょうどいいや。綺麗にして貸して貰え。こら、貴様もつき合うんだ」

鎖仲間の五十男が顔を歪めた。

「か、かんべんして下さいまし」

と、三八〇号が両手を合わせる。

「あの三九〇号の野郎の穿き古しサポーターじゃ、悪い病気がうつちいますぜ」

アネットが吹き出し、エメリーヌは頬を染めた。

「スカートの旦那がた。なんとかおっしゃって下せえ。サポーターの切なさ辛さは旦那がたにや分るめえがよオ。ウッ」

ぶちのめされて、三八〇号は床に這った。

「ずいぶんと、ひどいことするのねえ」

「そうね。でも、ヤクザよ、あれ。あのくらいでちょうどいいのよ」

アネットは案外に冷淡だった。二人の男囚は悄然と追われる。錠前つき革サポーターの憂き目を予想してか、その後ろ腰のあたりは早くも切なげだった。

「こら、仕事をするんだッ。いつまで、何を見てやがる」

「だんひる」氏が威丈高に呶鳴ったが、男囚たちは肩をすくめ、なおも婦人看守の脚を盗

み見るのだった。なにしろ、*「だんひる」*氏の威厳は月曜日以來、とみに軽くなっているのだ。

「貴様らはだ、御婦人の居ない世界に生まれたと思え。辛らかろうが、いい修行だ。おいこら、そのノッポ。股引を破るなよ。貴様もサポーターが要るなあ」

ノッポの赤縞は泡喰って眼をそらせ、鼻ふくらませて腰をもだえ、股引を引張りながら後ろを向いた。

三九〇号と三六六号の二人は檻の中で正座していた。一人用の檻は頗る小さくて低く、二人の男はその中で全裸だ。いや、僅かに股間だけは布片で掩っている。きちんと正座しているのによくは見えないが、その布片は網状のもので幅は狭く、古い捕縄で腰に締められているらしい。全裸といったが、股間の網布のほか、胸部にも革チョッキをまとい、締められている。もっとも、だいぶゆるい目だ。

「古風なバタフライね」

覗き込んでアネットが呟いた。フンドシという言葉はフランス語にはない。

「こら、お手数かけた二匹。御挨拶しろ」

「——へい。いつぞやは、どうも、へえ」

三九〇号は上目使いに恨めしげ、情けなさ

そうな声を出した。アネットたち二人が三九〇号の檻の前に立っているの、隣りの檻の三六六号フェラールの奴は膝をモゾモゾさせて向きを変えようとしたが、呻いて上体をグラつかせた。コンクリートに長時間の正座なのだから無理もない。

「こらッ、膝を合わせろ。太股ひろげるな」

三六六号は呻きつつ両膝をそろえた。

「どう、御気分は？ ツルツル坊主さん」

「あら、御覧なさいよ、アネット。どうも変だと思ったら、眉毛を剃られちゃってる」

「へえ。体中の毛という毛を剃られちゃったんで。ほんとに情けねえこつてす。それも、聞いておくんなせえ、スカートの旦那がた」

三九〇号は膝をひろげて顔を歪める。

「若けえピチピチした看護婦に剃られたんですぜ。切なかったことしたら、もう。剃り易いわ、てんでコロコロ笑いながら、クソ丁寧にやりやがったもんでさ。トホ、ホ——」

「こら、膝をそろえろ、膝を。正座だッ」

「——旦那。ちょっと休ませて下せえよ。あんまり長うがすぜ」

正座の苦行は一時間に十分間の休憩を与えて貰えることになっているのだが、崩したとか、背を曲げたとか、なにかと難癖をつけら

れて飛ばされてしまうのだ。

「うるさい。点呼まで休憩なしだ。よく反省するッ。ガタガタしやがると飯抜きだぞ」

檻の男二人は鼻を吸った。三八〇号たち二人が小突かれて戻って来た。締めあげられた革サポーターは見えないが、二人とも切なげに腰を振って、二人の女性を哀しげに見やうた。えらく早かったところを見ると、碌に拭きもせず、前回御愛用者の苦悩の痕跡残るまま装着されたらしい。

「何かといえ、すぐにサポーターと来るんだもんなあ。男に生まれたが因果でもんだ」

三八〇号は下腹を押えて腰をよじった。

「こら、みんな。貴様どもも、その御婦人がたを妙な眼で見たりしやがると……」

床磨き労役の男囚たちは縮みあがった。

「サポーターで、よっぽど苦しいのねえ」

眺めてエメリーヌが首を振った。

「そうらしいわね。ともかく、すごく利き目あるのよね。でも、残酷ムードが見えないだけスマートじゃない？」

「男って、可哀想な仕掛になってること」

「そう。でも、心から悔い改めて恐れ入ってりゃ、いくら締められたって平気な筈——と

いうわけよ。うってつけじゃない？ 心がけ

の悪い者が苦しむわけだもの」

「理屈はそうよね。でも、ともかく面白いわね。『ベルト』よりも完全だわ。妄想すら許さないんだもの——じゃないかしら？ よく分らないけど」

「よく分ってるじゃないの、エメリーヌ」

二人は顔見合せて口を押えた。二人とも男を知らないわけじゃない。

「どうですか、恋人にも締めさせたら」

と、だんひる。ことロバンが口を出す。

「そうね。結婚するときには持って行くわ」

「冗談じゃありませんぜ。大切なのが折れちゃいますア」

「貴様は黙っとれ、三九〇号。背が曲つとろぞッ。シャッキリさせていけねえのは一カ所だけだ」

「ホホホ。折れるなんて、不貞心がある証拠だわ。いい思いつきね」

「一目散に帰って来るわよ」

二人の女性は笑い合った。なにしろ、古道屋を探せば貞操帯ぐらいは売っているし、少年の独自行為防止の器具が新聞広告される国柄だ。錠前付き革サポーターだって買えるだろう。

「あら、だけど、半日と締め放しには出来な

いことよ、考えて見ると——」

「そういうことね。でも、女性用の貞操帯があるんだもの。不公平よ、検討の余地あり」

「ウン、そうだ。貞操帯といや、たしか」

とロバンがパイプをくわえる。

「ちよっと、ちよっと。禁煙じゃなくって」

「なあに、どうせ減俸喰うんだ」

立ち昇る紫煙を、三九〇号が悲しげに見上げた。

「旦那、減俸ですかい？」

「うゝま、決ったわけじゃないがな」

「そうですね。あつしらのために済まねえこつてす」

「フン。たまには殊勝なことヌカすもんだ。

ところで、貞操帯の続きなんだが、たしか、

その野郎は……」

と、三八〇号の鎖仲間をパイプで示す。

「そのとっさん、メカケの三人もこさえやがって飛んだオットセイ野郎だったんだが、助

平の癖にヤキモチ焼きと来やがって、本妻と

も四人の女全部に、特別誂えの貞操帯を締めさせてたんだぜ。なあ、そうだろう？」

五十男は「へえ」と答えてこちらを眺め、

ことのついでにスカートを見詰めた。

「ホント？ まあ。道理で、あのイヤらしい

眼つき、どうお？」

二人の婦人看守はオットセイ男の視線に撫でられた腰のあたりを、気色悪げに押え撫でた。男たちの注視的になるのは悪い気持ではないが、余りにも動物的な眼で撫でられると、肌を虫が這うように感じる。

「あげくの果てが貞操帯でも安心出来ないって始末でな、打つ撲るの痴話騒ぎ。とうとう訴えられちゃった野郎さ。婦女虐待と傷害で四年半。なあおい、三八五号。ちっとは油気が抜けたかや。因果はめぐる水車、貴様にはサポーターがふさわしいってものよ」

三八五号は泣き出しそうだった。精力絶倫の身にサポーターを締めあげられては、しかも鎖仲間のおつき合いとあっては、泣いても泣き足らぬ心地だろう。

「こんちきしょう。なにをモゾモゾしてやがんだ」絶倫男囚の尻に答が鳴った。

「いくら尻振りダンスしたって無駄だ。四、五日前に放出したばかりじゃないか。若い衆ならともかく、五十ヅラさげやがって恥かしと思わないのか。こら、向うへ行くんだ」

絶倫男囚の一组は背を突き飛ばされた。

「苦しけりゃキリキリ働け。労役で精をスリ減らすのが楽になる道だわい」

エメリーヌたちは肩をすくめた。女監でも男監でも、性に悩む囚人に浴びせる罵声は同じようなものだ。

彼女たちは再び三九〇号を見下ろした。

「どう？ 少しは後悔してる？」

「私たち、お前たちが、またぞろ逃げ出すんじゃないかと思ったもんだから、ちょっと様子見に来たの」

「正直な話、残念だったわね。口惜しい？」

「そ、そんな——」

と、フェラールの奴が泣き声だ。

「飛んだことをしてしましまして。後悔しております。だけど、その男が誘ったもんですから、つい——」

「おい、フェラール、じゃねえ、三六六号。

ひとのせいにして泣き言又かすな。ねえ、スカートの旦那がた。あの日の晩は、正直な話が情けなくて口惜しくて、涙がこぼれやしたぜ。御婦人に手錠カマされるなんて夢にも考えたこたねえものな。だけど、もう諦めやしたよ。俺の負けだ。どうしようもねえ」

三九〇号は精悍な顔歪めて云い捨てた。

「そう。立派よ。賞めたげるわ」

「てへッ。いい気なもんだ。でもよオ、そうやって制服着て立っていると、お二人とも何だ

か凜としちゃっておっかねえようだな。こっちがこんなザマだから余計そう思っちゃまう。あつしが手もなく引つ括られちまったのも不思議じゃねえって気がして来ら」

三九〇号はまぶげしに打ち仰いだ。フェラールの奴は最初から恐れ入っている。

「ホホホ。えらく自信喪失なのね。でも、そんなに気落ちしなくてもいいのよ。私は柔道二段。このひとは……」

「そう、私は元婦人部隊の軍曹よ」

「ほ、ほんとですかい？ 道理で。そっちの

旦那のパンチはこたえやしたぜ、ほんとに。

軍隊仕込みのパンチだったんだなあ」

「感じ入っちゃってる、ホホホ。ところでお前の名は？ まだ教えてくれなかったわね」

それは嘘だ。彼女たちはあの日の夕方、保安課で聞いて知っている。しかし、逞ましく精悍なクリクリ坊主の裸か身をからかって、唸りながらしゃべらせてやるのは女性として面白い。

「そう。ミカエルっていうのね。マリアにミカエルか。何だか勿体ないような組合わせだこと。イエスさまも御迷惑よねえ」

「そ、そのマリアなんで」

ミカエルは坊主頭を振り立てた。

「まだ、思慕の情、綿々たるものね」

「だけど、お気の毒にねえ。こうなっちゃったら、逢う瀬はもう無理よ。見込み薄ね。懲罰中は、娑婆の人とも面会出来ないのよ。まして相手が女囚じゃねえ」

「そうよね。ま、そのうちには、どっちかが送り出されちゃうし——。哀れなロマンス」

坊主頭がガクリと垂れ、涙が腿に落ち、言い過ぎたと悔いた二人は口々に、鉄格子に顔寄せて慰さめにかかるのだった。

「へい、俺も男だ。もう、未練なこたア申しやせん」ミカエルは鼻を吸る。

「だけど、お二方。こんな風な回り合わせになったのも何かの縁だ。聞いておくんなせえまし」

「なあに？ 泣き落としは無駄よ。もう、あのままに報告しちまったんだから」

「へえ。そんなこっちゃねえんで。そりゃ懲罰は楽じゃねえけど、その覚悟は出来てますよ。ただ、その懲罰とやらを、早いとこ決めて頂きてえんで、へえ。こ、こんな蛇の生ま殺してみてえなのは願い下げにして……」

「黙れッ。太いことを又かす野郎だ。取調中だぞ。神妙に畏まって待っとれ。馬鹿野郎」
「パイプの旦那。旦那はちょっくら聞かねえ

でおいで下せえよ。折角、スカートの旦那が
たが訪ねて来て下すったんだ。ねえ、お綺麗
な旦那がた。なんとかお口添え願ってさア、
せめてシャツぐれえは着せてやって下せえ。
もう、寒くて寒くて——鼻汁を垂れ流して
ザマですぜ。フェラールなんか熱出してます
よ」ミカエルは哀れっぽく鼻を吸った。

「あら、鼻汁が出るんなら、手鼻でもかんだ
ら？ 自分の鼻でしょ。遠慮は要らないわ」
「トホ、ホ。意地の悪いことを。御存知の癖
に。ホラ、これでさア」

ミカエルは腰の後ろで手錠の音を立て、太
い双腕をもだえた。胸の革具がきしむ。
「手を合わせてお願い申してえんだが——」
「無理しなくていいわよ。でも、立派な革チ
ヨッキ着てるじゃない？」
「おいこら。隙間風が気に入らねえんなら、
一日中ぶっ通して締めといてやろうか？」
「そ、そんな——」

装着してある革窄衣は、朝晩の点呼後、各
一時間ほど締めあげてやり、そのほかは弛め
ておいてやることになっている。
「そうねえ、無理ないわねえ。だって、あんなに立派だった胸毛も剃られちゃったんだもの。ずいぶんと夏向きの体にされたのねえ」

アネットが窄衣の前胸を、しげしげと眺めて同情した。

「あなたは眼のつけどころがちがうのね。この調子だと、この男、腋の下もスベスベなんじゃないかしら？」

「そ、そうなんで——」

男囚は両肘を左右に張って見せたが、忽ち唸って両肩を落とした。

「ああ、もう腕が棒みてえだ。これでもう四日目ですぜ。自分の手を見てえもんだ。ねえ旦那がた。ほんのちよっとでいい、ちよっくらはずして下さいよ。お慈悲だ」

「駄目だ。取調べが済むまでは規則だ」

「そう、規則よ。もっともがいて見たら？」

「ねえ、もう行きましようよ、アネット」

「そうね」

「ちよっとお待ちを。面白いものを御覧に入れますぜ、マドモアゼルがた」

「なあに？ 面白いものって」

「残酷ムードはイヤよ。女は血に弱い」

「御冗談を。それじゃ、旦那がたはもうおアガリになってるんで？ エヘヘ——」

「まあっ!!」

二人の女性は柳眉を逆立てた。

「ホラね。こんな野郎でさ。憫れみなんか無

用ですぜ。こら、繰上げて用便を許可してやる。さっさとヤラかせ」

「へえ——」ミカエルは何故か生返事だ。

「やらねえんなら、明日の朝まで許可しないからな。おや、この野郎ッ。何て奴だ。おいこら、膝を大きくひろげて見せろ」

「へい。実はその、こんなザマなんで」

眺めて、二人の女性は眼のやり場に困り、やむを得ずという思い入れで観察した。

「まあ。寒い、腕がもげるのと泣いてた癖にねえ」

「それとあれと関係あるの？ 寒いと縮こまるものかしら？」

「白ばくれないで。でも、網のサポーターとはねえ。夏場に持って来いね。あれ締めて海水浴場を闊歩したら大センセイション」

「スカートの旦那がた。そんなに見ないで下せえ。恥かしいったら——。だってよオ、なまめかしい匂いと声が鼻先なんでやすからねえ。ずっとサポーターの御厄介になってましたし。トホ、ホ。こればっかしは、自分ではどうにもならねえ代物なんで。ウッ——」

三九〇号は膝を大きくひろげたまま、呻いて腰を引いた。二人の女性が頬染めながらも眼を離さなかったのも道理で、幅狭の布の網

目は粗く、透して丸見えなのだ。

アネットとエメリーヌはなおも盗み見る。

相手が娑婆の殿御だったら、とてもじゃないが、一目見るなり弾かれたように飛んで逃げるところだ。しかし、この男は囚人だし、囚人の体を検査するのは日常の業務だし、それに、この男は長い細胞を除かれているのだ。

そんな男性の分部を見るのは初めてだし、特に興味をそえられるのは、その男がコボしているように、意志どおりにならぬものが布を強く押し上げて、密ならず粗ならず適度の網目の黒い麻糸が、はり切った先端部に深く喰い込んで、網目のそとへふくらみこぼれんばかりの有様を示していることだった。

「こら、ちょっと、ここへ来いッ」

男囚はひろげた両膝でにじり寄り、その腿に答が降った。鉄格子の間から、パイプくわえての答が器用に内腿のあたりをしぼく。

ミカエルは悲鳴をあげて身を揉み、押し上げられていた網目がゆるんだ。両腿の内側には、答の痕が新旧幾条も生々しい。

「ヒリヒリしてるうちに、早いとこやれ」

「親切なのねえ、ムシウ、だんひる」は

「そうとも。仰角かけたままじゃ、発射するものの銘柄が見間違いだもんな」

「あらまあ、なんというワイセツな会話」

檻の中のミカエルは呻き、唸りあげて腰をあげ、よろめいて尻を落とし、またも呻いて腿を踏張った。

「二時間や三時間のお作法で、そんなことじゃあ、これからの永の年月をどうする？」

男囚は漸く膝立ちに腿をひろげ、手錠をガチャつかせて焦れたがる。ままたらぬ手で後ろ腰の捕縄を解くのだ。結び目が解け、腰くびる捕縄はそのままに、縦に回わる古捕縄が後ろから床に落ちた。古捕縄は深く喰い入っているらしく、男囚は腰を振りもがく。古捕縄はこれで完全に股間から離れ、それに連なって前半分を占める三角状網布も体から浮いた。男囚はふと息を吐く。喰い入る捕縄サポーターは股間から除かれたものの、下腹に垂れる網布は、後手錠の身にはハネ除ける術もない。とはいえ、このままでは、片隅の便器にいざり寄ったとて、放水は出来ないのだ。男囚は尻を踵に落とし、三人の制服を檻の外に恨めしく眺めやり、呻いて後ろへ僅かににじり、開いた両膝の間へ顔を突込んだ。

今の今まで我が股間を締めあげていた古捕縄——それを口にくわえ、顔をあげたミカエルは鼻を鳴らした。こうするより仕方がない

のだが、二人の女性を前にこのザマを実演させられては、如何に観念しているとはいえ悲しかろう。胸に革具が音を立て、男囚は小鼻ふくらませて喘いだ。かなり弛められているとはいえ、深く屈めば窄衣は苦しい。

「あァンら、まあ。あんなことさせるのね。ひどいわ」

「女監じゃ、いまの主任さんがいる間は、こんなことさせないわね」

男囚は便器にいざり寄った。

「こら、こっち向いてやるんだ。こぼしやがると……」

男囚は跨いで腿立ちの姿勢、世にもみじめな顔だった。

「この男、露出狂じゃなさそうね。泣いちゃってる」

「え？ あら、ホント」

「どこ見てんの？ アネットったら」

剃られて三日やそこらでは、まだ全然、綺麗サッパリの光景だ。

「なァるほどねえ」

男囚は腰を振り、女性たちは眺めて首を振る。

「殿方の後始末、前から見るのは初めてよ」
「アッターマエ。あら、それじゃ、アネット

は後ろからなら、しょつ中見てるのね」

ミカエルは便器から離れた。檻の中央で尻を落とし、口から捕縄を放す。

「旦那、用便、ありがとうございました」

「うむ。早いとこ身繕いせんかい」

「へえ。だけどよォ、スカートの旦那がたにああ見詰められてちゃ、出るものも碌々出やしねえ」

「アハハ。嬉しかったろが」

「てへっ。あっしはそんな痴漢じゃねえんでさ。でも、スカートがたの御熱心さには驚きやした。ま、情けねえが仕方もあるめえ。こんなのは滅多と見られねえザマですぜ。風通しのいいことったら。てへっ、ミルク飲んでるガキ同然の有様だァ。コッパズカシイヤ」

「だったら、早く隠しやがれ」

男囚は鼻を嚙り、床に捕縄を垂らしたまま膝立ちでいざり、捕縄の先端を背後に残し、ぺたんと尻を落とした。後ろ手をガチャつかせて双腕をもだえ、やっとの思いで捕縄を握り、顔歪ませて一息入れる。

「早くせんか。それとも、また妙なことになるて来たのかッ」

「旦那。そうガミガミおっしやらねえで下せえよ。指が思うようにならねえんで——、あ

あ、切ねえ。旦那、おねげえだから、ちょっくら解いて下せえ。といったって無駄だらなあ。ちきしょう手錠って代物は、もう——」

男囚は大仰に溜息を洩らしつつ両手をもだえ、縦縄を腰縄に後ろ腰で結ぶ。

「こら、もっと締めろ」

「へえ」

腰骨にせかれる腰縄が、さらにめり込む。

「コボれてるぞ。しっかり包め」

「旦那。無理なこといわねえで下せえよ。幅がどのくらいだか御存知でやしょう？ スカーートの旦那がた。なんとかおっしやって下すったら？ 包んだって包まなかったって、こんな網布じゃ同じですよねえ。あーあ、情けねえ恰好をさせられるもんだ」

ミカエルは遅ましい腿を大きくひろげ、膝で踏張って腰をくねらせ、幅狭い網布に何とか包みくるんだ。顎しゃくられてグルリと回り、包み具合やら結び目やらを調べられ、再び正座して膝小僧をそろえた。

「どうだい。面白い眺めだったろ？ え？」

「そうね。いろいろと感ずるところがあったわ。私はよく見てなかったけど、アネットは熱心に研究してたもの」

「あら。じゃ、何故そんなに頬が赤いの？」

「スカートの旦那がた」と男囚が見上げる。

「お粗末でございました。へえ——」

二人の婦人看守は吹き出した。考えて見れば酷いことをさせたわけだが、この男がやらかすと、なんだか陽気でユーモアさある。

「ねえ、スカートの旦那がた。アネットさまとかおっしやいましたっけ。そっちのおかたは、えーと——」

「私？ ジョセフィーヌ・ナポレオンよ」

「へえ？ とにかく聞いておくんなせえ。あっしは旦那がたにフン捕まえられて、もう一歩ってとこで手錠カマされやした。目ン玉が飛び出るほどのパンチも見舞われましたし、いまこうして情けねえ思いをさせられてる次第なんだが、露恨みには思ってますせんぜ」

「そうお。安心したわ」

「だからよォ、早いとこ結着をつけるようにしておくんせえよ。偉い旦那がたにいつといて下せえな。競馬新聞読むひまがあるんなら、ちょっくらサインして貰いてえって。ホントですぜ。その気にさえなりや、こちとら懲役の二匹や三匹の痛め方なんぞ、一杯やりながらだって決められます」

「黙れッ。ナメたこと又カすな。一年でも二年でも、そうやって待ってるのが反則囚の姿

ヨ。ところでマドモアゼルがた。もう一匹にも実演やらせますかい？」

「もう沢山。ヘドが出るわ。同じことよ」

フェラールがホッとした色を浮べた。

「そうですかい。じゃーえーと。こら、二匹とも寒かろう。ちっと暖かくしてやらア」

減俸を思つてムシヤクシヤしているムシユウ・ロバンは、二匹を檻から引き出した。

「こら、並んで。よし。腹這え」

ミカエルとフェラールは、それぞれ背後で、手足を一まとめにされた。後手錠にからませた別の手錠を、両足首にガッチリ嵌められたのだ。

「向うの柱を回って来い。競走だぞ。負けた奴は今夜立ちん坊だ」

革を胸にきしませての芋虫競走が初まり、エメリーヌたちは眉ひそめつつ、頬綻ろばせてしまった。エメリーヌが促がし、アネットも名残り惜しげに去り、芋虫の結果がどうなつたのかは知らない彼女たちだった。

「ずい分とひどいことするのねえ。やっぱり男の世界はきびしいのね」

「ホント。私たち、捕まえなきゃよかった」「そう。この調子じゃ特別賞与も望み薄だしねえ。あの二人、体がもつかしら？ 冬だも

のね。なよなよしてる方なんか危いわ」

「そうね。社会からほうり出された者は哀れよね。人知れず死んで行くかもね、誰一人庇ってくれ手もなしに。そうだわ、あのミシュリーヌ、きつと痛められてるわよ。理屈なんか通らない世界なんだから」

二人は嘆息し合つたのだった。

——そのミシュリーヌは、土曜日の午後、ミルドレーヌと一緒に病監から第三監舎へ戻つて来た。イヴェットは、ちょうどそのときデスク当直だったが、フィリスに連れられて来た二人をいそいそと迎え、ミシュリーヌの顔色が案外に良いのでホッとし、もうどこへもやるものかと、鉄格子扉を念入りに閉じたのだった。

ミシュリーヌはイヴェットを見るや、手錠の両手を僅かにあげて合図し、愛くるしくニコリ笑つた。彼女も、三監へ戻って来ることが出来て嬉しかったのだ。

その背を見送ってイヴェットは涙ぐんだ。

もうこれからは、監舎限りで「使役」に連れ出すことは禁じられている。やむを得ない場合は「表」を通じて許可を得なければならぬのだ。こういうことになってしまった仕儀については三監の責任で、この点では他監舎

から恨まれていることだろう。

（せめて、せめてもう一度だけ、お連れして帰りたいわ。ほんとにイケスカナイ刑事よ。死刑になるといいんだわ。馬鹿、々々）

しかし、イヴェットは混線しているのだ。

個人的「使役」が厳格になったのはジャンヌの汚職のせいなのだ。もっとも、ジャンヌのことが発見していなくとも、事故女囚ミシュリーヌの連れ出しは当分不可能だったろう。

しばらくして、イヴェットは第十一監房の前に立った。

「すみません。私たちのために御迷惑をかけまして——」

二人の女囚は口々に、先刻看守長室で繰返したお詫びの言葉を、またしても哀しげに呟いた。忽ちイヴェットは胸が一杯だ。

「あら、お前たちには責任ないのよ。はっきりしてるじゃない？ 卑屈になることは全然ないわ。それより、体はどう？ 案外元氣そうね。安心したわ」

まっすぐに見上げる綺麗な眸が、最前席で邪心なく笑つた。

「ありがとう存じます。御心配かけました。あの、担当さまこそ、なんだかお声がかすれますわ。お風邪召したんですの？」

「ええ、まあね。でも、もう快いの」

イヴェットもニコリ笑い、公平のためにミルドレーヌへも笑いかけ、靴音も軽く立ち去ったのだった。

身体捜検のとき、保安課帰りの二人は、さすがに全身で恥らった。手で掩うことは許されず、同囚たちが盗み見てニヤニヤする。

「ふむ。ずい分と夏向きにされちゃってる。防風林は草一本残らずね。ま、いいことさ。

汚された女囚は最初の一步から苗を育てなきゃねえ」

ベルディーヌが眺めて大声でいい、二人は唇を噛みしめた。

「大変だったろねえ。ま、忘れることよ。さあ、行きなさい」

マジョーリが深々と呟き、ミシュリーヌの背をやさしく押した。検身担当のイヴェットは、ミシュリーヌを眼前に迎えて狼狽した。

ミシュリーヌ奥様が、どんなに恥かしいことだろうか——そう思うと、眸を凝らすべき部分がかすんでしまう心地だった。

「ホホホ、これから毎日、發育状態を觀察できるじゃない？」

キャスリーヌが覗き込み、心ないことを口走って笑う。

「二人を見較べると面白いわあ。食べる物だって同じなんだし。貴重な実験だわ」

イヴェットは思わずキツとして、四つ這いを見下ろす同僚に鋭くいった。

「どいて頂戴。邪魔だわ」

「はい、はい」そして、キャスリーヌは

「あんた、本気で調べてんの？ マジメ人間ねえ。こういう恰好させるのが目的なのよ」

と、小声でつけ加えた。

「そうか。イヴェットは昔の商売柄、こんなのは見飽きてんのね。自分で刺ったことだってあるだろうし——」

イヴェットはキャスリーヌを睨みつけ、女囚ミシュリーヌは、全身を染めて四つ這っていたのだった。

三一〇号のルーシーは、同囚たちが入房した鉄格子の外で、独り立って待たされた。一日昨日から、入房の号令がかかって、独りだけ取り残されることになっている。

フィリスが手錠をぶらさげて、ツカツカと近寄り、両手をそろえろと顎をしゃくった。

「今、今夜も——今夜もですの？ ああ」

若い女囚は泣声をあげた。

「そうよ。おどろくこたないだろ。お前は懲役囚じゃないの。逮捕状は要らないのよ。さ

あ、早くお出し。腕環、よく冷えてるわ」

「ど、どうしてですの？ どうして私だけがこんな——かんにんして下さいまし」

「うるさいわね。どうしてもこうしてもあるもんか。お前は当分の間、こうされることに決まったのよ。あら、懲罰なんてものじゃないの。その必要があるというだけ。早く」

フィリスは女囚の利き腕に手を延ばし、女囚は身を揉んで僅かにあらがった。

「あーら、抵抗する気？ やってごらん」

女囚は恐怖を浮べ、わななく脚で一、二歩退がり、その右腕が鮮やかに捉えられてねじ

あげられ悲鳴とともに後手錠が喰い込んだ。

「抵抗したから後手錠よ。バカね。おとなしく手を出しやいいのに。さ、入って」

ルーシーはよろめきつつ嗚咽し、一番奥の寝台に辿り着き、悲しげに嚙りあげた。

「ちえっ、いい気なもんだよ、まったく」と、クリスチーヌが呟く。

「足取り軽く行っちゃまいやがった。早いところおウチに帰ろうってんだ。ひとを縛りあげときやがってさ。ねええ」

「ふん。ま、自分がカマされたわけじゃなしさ。なににも、そんなにムキになることはないじゃないか、クリスチーヌ」

「そうよ。おどろくこたないだろ。お前は懲役囚じゃないの。逮捕状は要らないのよ。さ

とエドウィージュが欠伸をした。

「そうだね。ま、お嬢さんにゃ、いい薬だよね。あーあ、あすは日曜か。鉄格子の中の日曜、暗い日曜日——。ジャック、どうしてるかしら。出たいなあ」

「強いカクテルを三、四杯、キューッとひっかけたいねえ」

奥の方では、噁り泣くルーシーを、こどもも慰さめて、ミルドレーヌとシモーヌが声をかけていた。

「へん。後ろ手の四日や五日がなにサ。ヨヨと泣いてるのねえ」

「それに、二人がかりでケタマシク応援しやがって、ちょっと、ちょっと、先頭さん」

クリスチーヌがミシュリーヌの背にいう。

「あんな、うまくやったわね。若い男にそんなにまでして貰うや、保安課でシゴかれたっておツリが来るわ。でもサ、あんたはまあ、憎らしいほど綺麗だもん。口惜しいけど敵わないよ」

「ウン。出たら仕込んでやってよ、クリスチーヌ。あたら名花一輪、一人の男の物にする手はないサ。もったいないからね」

「そうとも。ね、おミシュちゃん。楽に暮せる法を教えなげろわよ。だけどさア、この名

花も名花だけど、うしろのドクターは太いじゃない？」

「ふん。世の中は金サ。地獄の沙汰も金次第ってこと。亭主とシッポリ濡れやがって、ちくしょう。ちょっとお、奥のお嬢さんたら、うるさいわねえ。今夜からドクターがいるのよ。堪能するほど手当して下さるわよ。お前さん、まだカン付かないのかい？ そうして痛められてるのも娯楽のせいだよ。ジャンヌのソバカスのことがあったら。お前のおバアちゃんとか伯母さんだかが空回りしてるの。手紙出してやんな。カンが鈍いねえ。ベルデイーヌが謎かけてたじゃないか」

翌日曜日、ルーシーは考え考えママに手紙を書き、突返されて書き直し、それから二、三日して、手錠の憂き目を漸くにして赦されたのだった。

「寒さはきびしいというのに、お前たちの体は春なんだねえ。若草が萌えて来たよ」

ベルデイーヌあたりがしげしげと眺めてそ

ういい、クリスマスが過ぎて年も明けた。

「さあ、体操しましょう。元気よくね」
酷寒の朝、第三監舎の広間でマジョーリが明るく叫んだ。今朝の体操はマジョーリが監督する。女囚たちは嬉々として裸になった。

マジョーリの体操はベルデイーヌあたりのとは違って、きつからずゆるからず、慈愛がこもっていて、心身ともに暖かくなるのだ。

「これ、なあに？ マジョーリさま」

「ウフン。美容体操よ。テレビで仕込んだの。ハイ、ゆっくりと腰を回す——」

「まあ、うれしい。刑務所で綺麗になるなんて。ねええ、もすこうしバスト大きくして下さらないかしら？」

楽しいに、体操が終り、掃除の前にマジョーリが告げた。

「刑務課長さまが代ったのよ。今日、新しいかたの御訓辞があるわ。よく聞くのよ」

「へええ。やっぱしねえ。考えて見りゃ、マルデイーヌも気の毒だったよ」

「こんどの課長さまはどんな風なんですか？ きついひと？ でしょうね、どうせ——」

「そうねえ」

マジョーリは言葉を濁したのだった。

ジャンヌ事件の責を負ってマルデイーヌ課長は本省の閑職に飛ばされ、代ってやって来たのはコリンヌ・ルノワールだった。本省矯正局の若手チャキチャキで局長に随行しての海外視察から帰国したばかりの女性だ。もと

とみに自信を強めていて、そのヴィジョンを許すかぎり打ち出そうと張り切っている。

部下を集めての着任挨拶を聞いて、マジョーリは溜息を洩らしたことがあった。あの調子だと、マルティーヌに輪をかけて締めあげることだろう。

「——私の方針は、おいおいと具体化して行きますけど、要約して申せば——」

コリンヌ新課長は部下たちに行った。

◎本誌増頁に際し◎ 懸賞 ▲原稿募集▼

▽内 容△

- 一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌の内容にふさわしい作品を期待します。
- 一、S並にMは勿論のこと、フュテッシュ各種、女性切腹、男性切腹、女斗美、女相撲、男女性禪美、生首狂崇、妊婦嗜好、変装、見世物奇態珍聞、文献紹介、同性愛、等はじめ、その他特異風俗に関する件全般に亘り、広範囲に大いに新分野の開拓による力作の御寄稿をお待ちしております。
- 一、本誌に従来余り取り上げていない分野のものを特に大歓迎いたします。
- 一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。更に、論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、最もお得意とするものをお選び下さい。

▽規 定△

- 一、作品はすべて未発表の自作作品に限りま
- す。引用部分の出処は明記願います。
- 一、枚数は特別に制限いたしません。一回の掲載量は五十枚前後として下さい。
- 一、締切日は毎月十五日。入選の分は次号誌上に掲載発表いたします。
- 一、入選作品に対しては一篇につき二千元以上十万円迄の賞金を進呈いたします。
- 一、御投稿の原稿に特別の事情なき限り返戻のお求めには応じかねます。
- 一、御送稿は第一種郵便（密封）にてお願い致します。一〇〇瓦まで35円、一五〇瓦まで45円、二〇〇瓦まで55円、二五〇瓦まで65円、三〇〇瓦まで75円です。
- 一、宛先は阿倍野局私書箱第14号天星社。懸賞と第一頁に添記願います。

「——つまり、社会——私たちをも含んでのことよ。社会と受刑者との間には、断絶した一線を峻厳に画すべきです。一步たりとも、それより踏み出させてはいけませんのです」

コリンヌは昂然といい放ったのだった。ピツタリしたコンタクトレンズに掩われた双眸が、冷たくキラリと輝やいた。

新課長は全女囚を集合させるよう命じ、聞きつけた保安課長が横槍を入れた。

「そんなこと、礼拝のとき以外は例がないわよ。事故起したって知らないからね」

「だから、頼むっていつてるのよ、マルタ。これからは、予算のことなら任しといて」

マルタ女史も渋々同意し、今日、全女囚を集めることになったのだった。

病監で枕があがらない者を除いて、四百名を越える全女囚が、朝の八時に裏庭に集められた。革サンダルは監舎に脱ぎ捨て、全部の手錠が動員されて嵌められている。数が足りないで、温順な者は手錠なしだ。

「ひがませるねえ。なんちゅう差別待遇」

クリスチーヌが重い手錠を両手に、ミシュリーヌを横眼で見てブツクサいった。

その差別こそ、コリンヌ新課長の持論なのだ。彼女は部下たちについて。

「人間の社会では、区別はあるけど、差別はいけないわよ。だけど、受刑者たちはちがうわ。彼等は、峻別された世界の中で、さらに差別を受けるべきよ。そうしてやってこそ、這い昇ろうとする意欲が出るの」——。

さて、全女囚たちは、素足に冷たい土を踏み、凍てつく風に吹き晒されて、前後左右に二米離れ、きっちりと整列させられた。保安課を含む制服たちが取囲み、曲っている列に

はビンタが飛び、女囚たちはおののいて立ちすくむ。

「あなた、どうしてコート着ないの？ イヴェット。着ていいっていったじゃない」

キャスリーヌが問い

「だって——。忘れちゃったのよ」

と、イヴェットが答えた。コートなしは彼女だけで、マジョーリさえコートの襟を立てている。制服たちが足踏みし、女囚たちの唇は既に全員紫色だ。

九時少し前、コリンヌ新課長とマルタ女史とが、肩を並べてやって来た。

「みんな、脚を折って坐れッ」

マルタ女史が開口一番、太い声で嘯鳴りあげた。

「両手を膝の前に突いてッ。動くんじやないよッ。かじかんだ手足に答はこたえるよね」

氷のような地べたが、女囚たちの胫と掌に冷たく硬い。あちこちで嘯りあげる鼻が哀れだった。射していた薄陽が鉛色の雲に隠れて、寒風が一しお突き刺さる。

「新しい刑務課長さまだよッ。コリンヌ・ルノワールさま。お言葉をよく聴くッ」

女囚たちは唇をワナワナ震わせながら上目使いに、台上へ昇った新支配者を眺めた。コ

リンヌの化粧は、ことのほか念入りで、ミンクのコートが寒風に揺れる。

「私が、今度お前たちを、受刑者として面倒見てあげるようになったコリンヌです——」

コリンヌは、よく透る声で訓辞を初めた。

「——石ころと真珠とは差別します。いいこと？ 区別じゃなくて、ハッキリ差別するのよ。真珠になるようにすることね——」

コリンヌは台上から降りて、女囚の群の中を歩き回った。四十米四方の中を、傍若無人に闊歩する。

「——世間や他人さまを逆恨みするなんて、もつてのほかよ。そんな了見の者に対しては容赦しません。徹底的に叩き直してあげる」

女囚たちは凍りついたように身動きもしないで、絶望の涙をにじませた。淡い希望は破れ果てて、予想を越えたきびしさだ。

「——そうやって這いつくばって寒む空に吹きさらしはみじめだろ？ 人権という言葉があるわね。姿だけは、まあ、人間の恰好して

るお前たちだけど、そのお前たちがどうしてこんな目に逢うのか、よく反省しなさい。つらい思いに耐えて行くのが、罪に服するお前たちの生きる道なのよ。改悔の情のない罪人の人権なんか、ここにはないの。分らない

のもいるだろうけど、体で分らせてやるわ」

女囚の一人が悲鳴をあげた。歩き回るハイヒールの踵に、手の甲をしたたか踏まれたのだ。コリンヌは平然と黙殺して続ける。

「——お前たち、自分がどんな迷惑を社会に及ぼしたとか、朝から晩まで、いや、眠っているときだって夢で考えるがいいわ。こうして眺めたところ、そんな感心そうなのは数えるほどしかないわね——」

ミシュリーヌは両膝を固くそろえ、その膝頭の前の地べたに両手をつかえ、背筋をまっすぐに、首を垂れていた。その眼前を、ミンクの裾がゆらめいて過ぎる。

「甘ったれるんじゃないよッ世間のせいでもなけりゃ、男が悪いんでもないの分った？」

気負いこんで振り回す腕が空を切り、手袋に包まれた手がミシュリーヌの横ツラに当たった。

「痛い。邪魔じゃないのッ」

「——すみません——」

ミシュリーヌは歯を喰いしぼり、みじめに詫びた。手を踏みにじられるよりましだ。

「——まさか、仮釈放を権利だなんて思っでやしないだろうねッ。いいこと？ 仮出獄というのは恩典なのよ。お慈悲なのよッ。言い

渡された刑期を終りまでここで神妙に勤めるのが当然のことだわ。仮釈に関して決定済みの者についても、調べて吟味し直します」

個室で仮出獄の日を待ち侘びている連中が悲痛な呻きを声もなく洩らした。しかし、これは脅しだ。いくらなんでも、前任者の責任で処理済みの事項をひっくり返すなどということとは、役人の世界では絶対にあり得ない。「罪を心から悔い改めて、全身全霊で償いをやりとげようとして御覧。私たちはメクラじゃないのよ。救いの手を延ばしたくてうずうずしてるの。縫りつかせるに値する者を探し求めているのよ——」

コリンヌは群の中で直角に曲がった。ちょうど曲がり角にいたルーシーの肩に、ミンクの裾がはたいてまつわりついた。ルーシーは全身で哭き、コリンヌは見下ろして裾を押え、脚を活発にひるがえす。ミンクに掩われた膝頭が女囚ルーシーの肩を小突いた。ルーシーは上体をよろめかせて耐え、涙をこぼして嗚咽した。手錠の鎖が、黒い土に半ば埋もれて銀色に光った。

むろん、そんな女囚の姿をコリンヌは無視する。彼女の魅力的な脚線は、自他ともに認める自慢の一つだ。その脚に女囚の体などが

触れたのだから、コリンヌにとっては汚らしいという気持かも知れない。

「おそらく私たちの手は固いだろう。罪は憎いからね。だけど、お前たちそのものを憎んでるわけじゃないのよ。心は柔らかいのよ。這い昇って来るのを待ってます。いいね」

コリンヌ新課長の訓辞は漸く終わった。ホッとする女囚の群に追い打ちがかけられる。

「では、そのままで一時間、いま聴いたことをよく噛みしめて、これからどうすればいいか、どんな気持で毎日を送るべきかを反省しなさい。お前たちには、反省すべきことはいくらでもある筈よ。反省に没頭してりゃ、風邪なんか寄りつかないわ」

コリンヌとマルタは本館へ立ち去り、女囚の群は地べたに取り残されたのだった——。

コリンヌ新課長の評判は、部下たちの間では日ましに良くなり、女囚たちの間では毎日に恨みが積って行った。なにしろ、彼女のやり方と来たら合理的というか、弱肉強食というか、血も涙もないのだ。部下の間で評判がよいのは、業務の負担を軽減しようとしてくれるからで、そのためには、女囚たちが如何にみじめな涙を流そうが、意に介しない。

ボイラー室の夜勤手当は実現したし、各監

房ごとに監視鏡も設備された。これはバックミラーのようなもので、当直デスクに坐ったまま、各監房の状態を監視出来る仕掛だ。

看守詰所での飲物は官給となり、課長決裁の懲罰は大幅に看守長へ移譲された。

朝の点呼時刻は繰下げられ、夜の点呼は繰上げられ、各女囚が一人々々叫んでいたセリフも省略されて、各房で一人が代表して喚くことにされた。これで、婦人看守たちは出勤がおそくなり、夜は早く帰れるし、点呼時の立ちん坊も短かくて済む。

コリンヌ新課長は、引き続いて、独自の差別処遇案を練っているという話だった。

——二月末の朝、ミシュリーヌはマジョーリに曳かれて獄門を連れ出された。

眼前で重々しく開く冷厳な鉄門——ミシュリーヌは一瞬、釈放されてこの門を出て行く日の輝やかしさを想った。どんなに素晴らしいことだろうか。おそらく、あの黒々とした門も灰色ぐらいには見え、そのそとに展かれる世界はバラ色に染まっていることだろう。

しかし、女囚ミシュリーヌの両手首には、先刻マジョーリに嵌められた手錠が冷たく光っていた。その腰には、黒革の分厚いバンドがスーツの上から締められていた。後ろ腰には

捕縄が結びつけられていたし、門のそこには護送車が待っていたし、寒む空に靴下も手袋もコートもなしだ。

ミシュリーヌは喚問されて、ロジェ・サンシールの公判廷へ証人として連れて行かれるのだった。

「あのね——」

自動車への道すがら、腰縄握るマジョーリが気の毒げにいった。

「車に乗っても、シートに坐っちゃ駄目よ」

「——はい」

女囚はドアの外でハイヒールを脱ぎ、ままならぬ手に拾いあげ、乗り込んだ床で窮屈に脚を打ち、その膝にハイヒールをおいた。

みじめな女囚の眼前に、シートに納まるマジョーリの脚と、黒い制式コートの裾があった。ミシュリーヌは唇噛んで鼻を吸る。

「こういう風にしろっていうのよ。ほんとに気の毒だけど辛抱してね。いいから、寄っかかりなさいよ。こんなことさせるんなら、ロルス・ロイスでなきゃ無理だわ」

「まったくでさア。じゃ、出しますぜ」

「気をつけてやってね。ゆっくり頼むわ」

「へい、へい。あんたに当たった女は運が好いんだよなあ。でも、あんまり気を使うことア

ありませんぜ。それよか、ちったあ俺の方にも気を向けて下さいよ。俺、やめめですぜ」

「分ってるったら。今は公務中よ」

マジョーリはビシリときめつけた。

「汽車の中では腰掛けさせたげる。安心した？　せめて腰バンドだけでもスーツに隠させたいんだけどねえ」

マジョーリは新課長のきびしさを嘆じた。

法院に着くと、証人控え室の隣りの書記室で待たされた。相前後して連れ込まれた二人連れの女囚も、どうやら証人に喚問されたらしい。その二人は直ちに縛しめを解かれ、現われた男にやさしくされて向うの方に陣取る。

私も——と、ミシュリーヌは手錠を示したが、マジョーリは静かにかぶりを振った。

「駄目よ。さ、ここに掛けて」

「だって——」

「あのひとたちは、あのひとたちなのよ。何かわけがあるんでしょ」

マジョーリは見やって溜息を洩らした。彼女には事情が分っている。あの二人連れはアンジェー刑務所からだ。そして、あの男は検察事務官で、検事側の証人として呼ばれたに相違ない。手なずけて、最後の仕上げをすべく、ああやって茶菓すら与えてねぎらってい

るのだ。しかし、ミシュリーヌの方は弁護側の証人だから、規則を曲げるわけには行かない。その不公平さに、職務に忠実なマジョーリは、再び吐息を洩らした。

「ちよっと、あなた。あの二人はなあに？」

「あれ？　あれはね、万引団の一味よ、おくられてパクられた仲間の公判があるの」

タイプスト娘は答えて、忙がしげに立ち去った。

ミシュリーヌは縛しめのまま、固い椅子で頭を垂れ、諦めて待った。この不当な差別待遇に、さなきだにひがみ勝ちの身には疎外感がこみあげる。

「なにも心配しなくていいのよ。お前の裁判じゃないんだもの。ありのままを証言すればいいのよ」

「はい」

ミシュリーヌは鼻を吸る。

「でも、こんな暖かいお部屋で待たせて頂けるなんて——。なんだか勿体ないみたい」

マジョーリは女囚の横顔をいとおしげに眺めやった。裁判の進行は例によっておくれ、十時を指定しておきながら、ミシュリーヌが呼び出されたのは、午後もかなり過ぎた頃だった。

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

略号

(しせ)

△時代物女体切腹図▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、若き姫君の凄艶切腹美態
- 二、介錯を受ける覚悟の美しき娘
- 三、落城の哀史、切腹する美女
- 四、夫の眼前で切腹する若妻
- 五、愛人の手で介錯を受ける娘

浣腸美媚態

略号

(のゆ)

△女体浣腸の極美図▽

大判判印画紙極鮮明焼付

三枚一組 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸場面
- 二、女事務員の浣腸を覗きみる
- 三、女学生に対する浣腸の私刑

浣腸責め図譜

略号

(しき)

△強制浣腸場面五態▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸する
- 二、いちじく浣腸の恐怖に悶える
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女の痴態
- 四、硝子シリンダーが乱舞する
- 五、イルリガートルが責道具

羞恥責め絵巻

略号

(しい)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、濯水による人工妊婦腹製造
- 二、浴槽の全裸の美女を責める
- 三、三角木馬で美女を責める
- 四、全裸のグラマー柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

浣腸責め図譜

略号

(しえ)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、美貌の踊子へのイルリ浣腸
- 二、ヒマシ油による強制下剤
- 三、进出する緑の浣腸液
- 四、女体浣腸用責衣を応用する
- 五、両足吊りイルリにて浣腸

女性切腹風俗

略号

(ゆい)

△時代風俗女体切腹▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、座敷牢の美女切腹を賜わる
- 二、介錯にて果てる切腹の美女
- 三、塗鴉籠の中の姫君切腹す
- 四、男装の美女小姓姿の切腹
- 五、美貌の腰元裸身の切腹

倒錯美緊縛画

略号

(えと)

△美女のいけにえ▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女体解剖台上に晒らす裸身
- 二、嫉妬に狂う夫と美貌の妻
- 三、美女の鼻料理に興ずる男
- 四、女体を真二つにする股間縛
- 五、山小屋の一夜、処女の受難

「花と蛇」画集

略号

(えに)

△傑作S小説の絵画化▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、京子に珍芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人へのあくなき汚辱
- 三、操り責めに泣きぬく美津子
- 四、片足挙げ縛りに悶える桂子
- 五、排泄を強要される京子の窮地

女体吊責画集

略号

(えほ)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、弓吊り女体にローソク責め
- 二、エビ縛りのままの宙吊り
- 三、股間縛りの吊り責め
- 四、美女の舌の先縛り吊り
- 五、股間縛りにて鼻孔吊り

浣腸排泄画集

略号

(えい)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸台で美女の浣腸

- 二、浣腸のあとのお楽しみ
- 三、百CCのグリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで無理に飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女の表情

美貌汚辱鼻責

略号

(えは)

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、女の美しい鼻をいたぶる
- 二、一本一本女の鼻毛を抜く
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた美女の顔
- 五、顔にラーメンを食べさせる

美女の責痴態

略号

(しお)

△責められる美女波津子▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、恐怖の浣腸責め今展開す
- 二、柱抱きアグラ縛りの責め
- 三、庭園のハダカ責めシーン
- 四、全裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チエン・ブロックの女吊り

美少女羞恥責

略号

(しる)

△可憐な美少女加奈子▽

大判判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

- 一、蠟燭の火責めにあう美少女
- 二、ヨチヨチ歩きの美少女責め
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り責め
- 四、股間縛りに絶叫する美少女
- 五、鑑賞用美少女の緊縛美体



切腹研究夜話

烈女切腹

中 康 弘 通

一
△武士道とは死ぬことと見付けたり▽ 葉隠
の精神を象徴する一句である。この言葉が、
武士の主君に対する誠心を現わすとすれば、
純粹な女性にとって、△愛するとは死ぬこと
と見付けたり▽ であろうか。

例えば、△ハラキリ心中▽として、英字紙
アサヒヴィングニュースにより海外にまで
伝えられた清純可憐型のTVタレントK子さ
んの場合を見よう。

妻子ある人と恋愛関係に陥ったK子さん

は、その愛に殉ずる他に愛を全うする途はな
いと思った。林に車をとめて、かねて用意の
ナイフで、二人は互いに腹を刺し違えた。そ
のままジツと苦痛に耐えて瞳を見合わせ、三
十分もの間、死の訪ずれを待った。発見され
たとき、K子さんの傷はやや浅く、相手の男
性Hさんの傷は深く抉られていたという。そ
して、二人の愛情の、何方が強いかが論ぜら
れた。

筆者は思う、二人にとって死生は一如であ
った、と。K子さんの傷が浅かったのは、若

し助けられたら彼女を助けたい、というHさ
んの愛情であろうし、Hさんの傷の深さは、
K子さんが一途に死をしか考えず、力を込め
てHさんと刺し違えたからに他ならない。

後日、△なぜ心臓を突かなかったか▽との
心ない投書が、重傷の苦痛にも泣かなかった
K子さんを、激しい悲しみに泣かせたとか。

投書者は愛情の機微を知らないのであろう
か。こうした情死にとって、手段がどれほど
のウェイトを実行力の上に占めるものか、判
らないのであろう。死への一步一步を互いの

手と瞳で確かめ合おうとする、二人の激しく深い愛の情念を解し得る人のみが、同情にせよ批判にせよ、二人の愛を論ずることが出来るように思う。この愛の結末がより大きい悲劇を招かないよう、いつもK子さんは、かくも悲壮な方法により死を撰ぼうとした心境を忘れないで、強く明るく生き抜いて行くことであらう。

無理心中もチョイチョイある。最近も、不実な男を刺した勝気な女性が、みずから出刃庖丁の血に濡れた切先を左乳下に押しあて、体ごと壁に打ちあてて、心臓深く貫ぬき果てた悲劇がある。

かと思うと、もう十年の余も昔になるが、素行の治まらぬ夫を刺殺したY子さんは、今は是までと、その場に端坐し、用意の真新しい出刃庖丁を逆手に握りしめ、見ごと腹真一文字に掻切った。

発見が早く、手当も行き届いたので一命取りとめ、平常よく舅に仕え夫に尽した情状が汲まれて、執行猶予が付せられたのは、幸わいというべきであった。彼女にしてみれば九死に一生を得たのであって、いわば自ら死を以て罪を償おうとし、たまたま医療により生きたに他ならないからである。

ところが筆者は、Y子さんの事件のホンの少し前に、ある史実を時代小説化した覚えがあった。その小説と余りにもよく似たY子さんには、一と方ならず傷ましい思いに打たれ、新聞記事を見るなり、どうか一命とりとめられるよう祈念したものである。

かく述べれば読者も察せられる如く、身持を誤った夫をお家のために刺殺、みずからは法式どおり切腹して果てた女丈夫の物語である。もっとも、K子さんが素直で明るく温順なお嬢さんであるように、Y子さんも極めて温良貞淑な婦人であったというから、切腹するほどの女人でも、男まさりの勇婦烈女とは限らず、平穏なれば、自然優雅な一生を送る婦人であったかも知れないのである。以下に述べるのも幕末の烈女の悲壮な最期である。

二

慶応四年三月三日、信州下諏訪の町はずれ、友之町矢木崎張付田に、赤報隊（赤心報国の意）一番隊長相楽総三以下、六十余名が縄付きで引き出された。

三日三晩、下諏訪明神の並木に縛り付けられ、霰まじりの雨風に打たれて、寒さと飢えに衰らえた彼らに、きびしい断罪が下った。

相楽総三ら幹部八名に斬罪梟首、部下五十

余名には鬻刑（片鬻、片眉を落す）の宣告であった。申の下刻、一番最後に相楽総三が斬られた。享年三十才。

梟首台の傍わらには高札が立った。曰く

相 楽 総 三

右のものは御一新の時節に乘じ、勅命と偽わり官軍先鋒嚮導隊と唱え、総督府を欺き奉り勝手に進退いたし、諸藩へ応接におよびあるいは良民を動かし莫大の金をむさぼり、種々悪業をあい働き、その罪数うるにいとまあらず、このまますておくならばいよいよもって大憂をかもし、その勢い制すべからざるに至る、よく誅戮梟首にして道路あまねく諸民に知らせるものなり

いわば官軍の名をかたる無頼の徒が、東征軍総督に処断されたことを意味する事件であった。

相楽総三は仮の名、本名を小島四郎将満とて、下総国北相馬の郷土で、父兵馬満茂の代に江戸赤坂三分坂に移った。小島分限は箕ではかるVと歌われるほどの富豪であったという。総三自身、弱冠より平田篤胤の流れを汲む国学兵法を講じ、江戸と京都を往還して薩藩の西郷吉之助らと親交があった。

その結果、慶応三年秋、家から持出した金子で浪人をやとい、三田の薩摩屋敷に入って江戸市中攪乱の御用盗を動かした。この騒動は幕府側の三田屋敷の焼打ちを誘発した。

総三は京に上り、西郷の指示で綾小路俊実・滋野井公寿両卿の下に、赤報隊を組織した。

翌四年正月十日のことで、東征軍の先鋒を承わったわけである。総三は直ちに建案して東国経略の方途に減税案を建白、十一日、天領における年貢半減が許可された。

赤報隊一番隊は雪を冒して十五日進軍を始めた。相楽の指揮で江州番場より関ヶ原を経て桑名に向った。しかし桑名藩は恭順の意を表わしたので、総三は北に偏して東山道に向った。信州より甲府を制圧して江戸に入る目算であった。信州には、平田篤胤の系統を汲む国学の知己が多いからである。

一月二十二日、彼は信州への道、つまり破滅への道を踏み出していた。総三は、早く民心を朝廷に帰せしめることを願った。天領にだけ許されたはずの年貢半減を、沿道各藩の農民にまで触れ歩いた。

そのころ、京では総三にとって黒い雲が拡がりつつあった。年貢半減の太政官布告は撤回され、赤報隊三番隊は、盗み犯すの悪事を

働いた廉で、解散させられた。隊長鈴木三樹三郎は投獄されてしまったのである。

綾小路、滋野井両卿も帰洛を命ぜられもはや赤報隊は官軍先鋒隊ではなくなっていた。

それを知る由もない総三は、二月六日下諏訪に着いた。同志伊牟田尚平の帰洛をすすめる書信は、ここで総三の受取ったものであった。けれども江戸攻略のために椎水峠その他の要害を抑えようとする、総三の志は変わらなかった。本陣に官軍先鋒嚮導隊の旗を掲げ、租税半減の高札を立てて、彼の意気はこのとき最も高揚していた。

同じ日の太政官布告は、岩倉具視を先鋒隊総督東山道鎮撫使に任じた。

八日、東海道総督橋本実梁から呼ばれ、九日総三は大垣に向かった。十日、東山道総督府は、先に赤報隊が鎮撫した諸藩に布告して赤報隊を偽官軍と断じた。諸所で官軍に参加する兵が起ち、一方、赤報隊と名乗って暴行を働く兵があった。

十八日、どう道を迷ったか、やっと総三は大垣についた。軍令違反、年貢半減令濫発で総三は責められ、弁明の末、乾退助（のち板垣退助）のとりなしで、総三は下諏訪へ帰された。二月二十三日のことである。そこで総

三は初めて偽官軍と呼ばれていることを知った。そして二十九日、東山道総督本陣に出頭を命ぜられた相楽総三は、本陣に入るなり捕縛された。三田屋敷以来の薩藩の同志は、一人も顔を出さなかった。総督府に居ながら……総三らは陳弁は許されずに処刑された。

江戸の小島邸では総三こと小島四郎将満の妻照子がいた。照子は松江藩士渡辺家の出、一子河次郎四才と、夫の帰りを待っていた。

そこへ、江戸以来の総三の部下であったらしい一人が、尋ねて来た。総三の刑死を知らせ、小さく紙に包んだ総三の遺髪を渡して、彼は風の如く立去った。それは血にまみれた髪髪の一と握りであった。首切り人が最初打ち損じて撓ね切ったものであった。

照子は、勤王の誠心に燃えて江戸を発ち、国事に奔走しながら、逆賊の汚名のもと、同志に処刑されて非命に果てた夫の胸中を思いやると、口惜しさに腸の千切れる思いであった。

同じ死罪にしても、せめて武士らしく切腹して果てたかったであろう……それを打首とは……あんまり……夫の無念の思いは、照子の無念の思いでもあった。まなじりも裂けんばかりの憤怒に、噛みしめた唇から血が滴っ

郎の寝顔を見てから、文机に向つた。舅兵馬と、義姉のはま子に宛て、冤罪に死んだ夫の

頒価一〇〇〇円(送共)

モデル……美木乃々子……山原清子……

待望のグラビヤ印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る

印刷紙焼付による分譲品として美木乃々
 子嬢出演の「日本拷問刑罰集」並に山原清
 子をキヤビネ判にて企画分譲しましたところ
 熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、い
 ち早く多数のお申込みを頂き迫力ある「刑
 罰写真集」Vとして好評を賜りました。その
 頃よりアート紙に対するグラビヤ印刷の
 「女性拷問刑罰写真集」の刊行を強く要望
 されました。ここにアルバム「美しき縛し
 め」限定版写真集の一卷として、前記印刷
 紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミ
 リカメラにて撮影した写真（従って内容も
 全然違います）を「日本版」「西洋版」と
 二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子
 二嬢による「日本版」を八美しき縛しめV
 （第五集）として刊行いたしました。
 純白の特アート紙に迫力のある写真集を是
 グラビヤ印刷による七十四葉の「女性拷問
 非お残め下さい。七十四葉の「女性拷問
 写真がぎっしりと全紙面を埋めてフアンの
 方々の御一見を得ておられます。売切れに
 なりますと絶対に入手できません。どうか
 未見の方は今すぐお申込み願います。

△アルバム（写真集）の内容▽
 （刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃
 々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬責にあつて苦悶する女囚八葉
 木乃々子○白州の上で非人の罵りものにな
 る女囚八連続四葉(美木乃々子)○牢内にて
 折檻を受ける女囚(美木乃々子)○海老縛りと答打ち
 連続四葉(美木乃々子)○非人に縛り上げ
 られる哀れな女囚八連続十二葉(美木乃々子)○美木乃々子
 子○海老責めに放置され全身蒼白となつた
 女囚八二葉(美木乃々子)○非人に不浄糺
 を掛けられいたぶられる女囚八二葉(美木
 乃々子)○荒庭の上にて荒縄の緊縛に泣き悶
 える女囚八連続八葉(美木乃々子)○算盤
 責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する
 女囚八四葉(美木乃々子)○荒縄で乳房も
 くびれるまで縛られた女囚八三葉(美木乃
 々子)○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚八
 四葉(美木乃々子)○算盤責めと石抱きの
 拷問八四葉(美木乃々子)○囚衣を剥がさ
 れ竹のささらで打たれる女囚八四葉(美木
 乃々子)○刺青を晒して木馬責にあう女囚八
 三葉(美木乃々子)○海老縛りでムチ打ちに
 喘ぐ女囚八四葉(美木乃々子)○海老責に苦
 悶する女囚八四葉(美木乃々子)○竹の棒に
 て折檻される女囚八三葉(美木乃々子)○全
 裸にて白洲に股間縛りあう刺青の女囚八全
 葉(美木乃々子)○磯台に括られた人墨姐御
 吊りにされた女囚八一葉(美木乃々子)○足首を上にして逆さ
 以上合計七十四葉

跡を追う旨を認め、くり返し河次郎の養育を頼む遺書を書きおえると、しずかに正装を身につけた。

おもむろに肌身を寛ろげ、生家から肌はな
さず持つて来た懐剣の鞘を払った。照子は、
袖を巻き付けた刃を左の脇腹にピタリと当て
た。あなた……ご無念でしたらう、せめて妾
が、女なりとも腹かき切ってお身代り……

心に念じ、哀れな夫の最期をこの血が浄めてくれるであらうと、照子は息をとめた。次の瞬間、刃先は非情にも女ざかりの肌を突き破った。呻きをもらすまいと、唇を固く結び照子は、ジリジリと腹をかき切って行った。辛うじて引き抜いた刃に探るようにして、彼女は咽喉を貫ぬいて俯伏した。

なお翌明治元年には、滋野井公寿は佐渡国裁判所総督に任ぜられているし、鈴木三樹三郎は総三刑死の三カ月後には出獄、太政官から従前の如く国事に尽力すべしと告諭され、軍曹に任ぜられている。

何か割り切れないものがあるだけに、夫の
賊名を悲憤し、壮烈な屠腹を遂げた照子の心
情と、その悲愴な最期は、哀れにもまた印象
深いものがある。

水中花

芳野眉美

(四)

噴 水

白砂の州に全裸の女が横たわっている。
離れから庭に出る段に、鬼頭老人が坐っているのに二郎は気がついた。女の顔は老人に向けられて見えない。
女は静止している。白砂に一直線に引かれた筋目はまだ乱れていない。まっ白な女体は浜形の池のほとりに点在する石組の中の一つとして、そこに置かれていた。

長い黒髪だけが、白砂にうねり、妙になまなましい。庭全体がひっそりと静まりかえっているのに、長い黒髪だけが激しい渦をまいて動いている。
老人も動かない。生きた石を見つめている。二郎はただ忙然と立ちつくしていた。ぴんと張った糸が二郎の足をさえぎっている。何か動かなければ、二郎の胸は押し潰されてしまったかもしれない。
次の瞬間、女が老人から顔をそむけた。

二郎は「あっ」と思った。
白砂に横たわる素肌の女は、小面の面をつけていたのである。
深夜、小面の面をつけ、離れの廊下を歩いていく女を二郎は思い出した。長い黒髪だけが、その女のまっ白な裸身をかくすようにまわりついていていた。その小面の女は老人と寝室に消えている。
誰だろう。
物置で増女の面をつけられて宙吊りにされ



ていた女体も、小面の面をつ^{おもて}けて離れの廊下を歩く女体も、またここに、同じ小面の面をつけて白砂に寝る女体も、長い黒髪が能面をおおっている。

老人の身近かに現れた女性を二郎は二人しか知らない。寿美麗夫人と香葉夫人である。

が、香葉夫人は老人と二人して寿美麗夫人を責め遊んでいた。それに人妻だ。

能面をつけられた全裸の女が寿美麗夫人であることのほうが自然であった。寿美麗夫人は、鬼頭老人の妻なのだから当然のことのように思われる。

鴨居から吊るされた寿美麗夫人のシルエットを、ロープで足から胸までぎりぎりに縛られた鏡の中の寿美麗夫人を、二郎は頭に浮かべた。寿美麗夫人は豊かな黒髪をアップにまとめている。老人が寿美麗夫人の美しいうなじを好んで愛撫するのを、ささいな仕草からでも二郎は知っている。

長い黒髪にこだわるわけではないが、二郎はまだ寿美麗夫人が髪を長く垂らしたのを見たことはない。

老人は外に愛人を持っているのかもしれない。初めて老人宅を訪れた日、思いもかけぬ増女の面をつけられた全裸の女を覗き、その

あとで寿美麗夫人に会い、老人に特別な女が居るかもしれないという疑問を持った。その気持は今も変わらない。このような残酷な遊びのために老人は自由になる女を、こしらえてあるのではないだろうか。

しかし、犬の首輪をはめられて、後手に縛られて、香葉夫人から淫靡な責めを受けている寿美麗夫人の強烈な印象は、消そうとしても消えるものではない。

小面の面をつけられて白砂に横たわる全裸の女が、絶対寿美麗夫人であってはならないという二郎の心の動揺が、このような複雑な疑問を生んだことは見逃せない。二郎は老人と香葉夫人が、二人して寿美麗夫人をオモチャにしているのを許せなかったのかもしれない。寿美麗夫人はあくまで神聖でなければならないという、童貞の少年が考える素朴な道徳のせいかわからない。

鬼頭老人が叫んでいる。

可憐な処女の面をつけた全裸の女体が、白砂の州に静かにうねり始めた。

空を仰いで引き緊った肢体をのぼすと思えば、大胆に繊細な下肢を左右に開いて空を切る。腕を頭で組み、ふっくらした豊かな乳房を誇示するかのように胸を張る。なだらかな

曲線が腹部から孤を描いて黒い繁みに霞む。美しい体毛がそよ風になびく。

くるりと一回転してうつ伏せになり。敷砂に頭を埋めて動かなくなる。くびれた腰から肉づきの豊かな盛り上がりが悩ましい。二つの小山が微妙な動きを見せ始める。

弾力ある柔軟な女体が白砂に踊る。生きた石組は様々な紋様を敷砂に描いていく。敷砂の一直線に引かれた罫目が乱れた。

二郎は少しずつ池のほとりに近づいた。植込みを利用して白砂の州に近寄っている。次第に老人の異常な性生活を見ることに慣れてきている。これは二郎のせいではない。

つかつかと老人が女に近寄った。手に荒縄が握られている。

老人は女の手足をまとめて荒縄で縛りあげた。猟師が獲物をひくくって木の枝にぶらさげて帰るような縛り方であった。

女をそのまま放置し、老人は池のほとりにしゃがむとスイレンを手にして立ち上がった。池のスイレンを一本折ったらしい。老人はスイレンの葉をちぎり、茎だけを大切そうに撫でている。何をするつもりなのだろう。

「少し痛いかもしれないが」という老人の声が聞こえた。

「挿入してみよう」

女の返事は無い。もしかしたら、能面の下は、猿ぐつわでもかまされているのかもしれない。

「白砂の州に、生きた噴水とは、わしも面白いことを考えたものだろう」

老人は一人で浮かれている。

小面の面がかすかに横にふられた。いやいやをしている。女はこれから老人が何をするか気づいている。能面は女から表情を奪っている。

「いれるぞ、いいか」

細いゴム管のようなスイレンの茎を持った老人の手が、縛られた女に近づいた。小面の面がのけぞった。痛いらしい。能面の下から、苦痛にたえる女の呻めき声を聞いたように思った。老人はスイレンの茎を何処に装置するつもりなのだろう。

老人がうしろに飛び去った。

老人の嬉々とした笑声が異様に大きく響いた。能面の下に羞恥に満ちた女の顔が見えるようだ。

生きた噴水は白砂に虹の飛沫を散らしている。

老人が噴水の側にうずくまった。わきでる

清涼な液体は老人を濡らした。老人が着物を脱いだ。老人はあたたかい噴水を素肌に浴びている。口であたたかい噴水を受けている。

老人は女の黄金の液体を飲んでいた。

蛇

鬼頭老人は手を差し込み、スイレンの茎を引き抜くと池に投げた。荒縄を解く。だが、責めはまだ終わっていない。

老人は女にあぐらをかかせ、女の両手をうしろに振り荒縄で高手小手に縛りあげた。童貞の少年には、次々に展開されるシーンは刺激が強すぎる。植込みの中の二郎の身体は、かすかに震えている。

老人は女の足首を縛ると、女の背中を素足で踏んづけた。踏んづけて女の上体を前に屈ませ、足首を縛った荒縄を女の肩から背中に回し、むきだしにされた豊満な乳房を上下から挟みあげてから、再び足首にもどしてぎりぎりに締めつけた。それでも、物足りないのか、首と足首を二重に縄を回して上体を屈ませようとする。

女の体は海老のように屈曲した。

老人が女の頭から能面をはずした。

二郎は首を横に振った。

女は、寿美麗夫人だった。

当然のことだと二郎は思った。寿美麗夫人は鬼頭老人の妻なのだから、主人から何をされても自然であった。かえって、老人が愛人を本宅にいられたとしたら、そのほうがむしろ不潔であると思った。妻妾同居など、二郎には考えられないことであった。

しかし、二郎は失望した。当然すぎることに不満であった。二郎の知らない老人の愛人であったほうがよかったと思った。そのほうが救われる。

このような二郎の感情は危険であるといえよう。二郎はひそかに寿美麗夫人を慕っていることに気がついていない。主人の夫人にそのような感情を持つほど、二郎は成人していない。美しい夫人だという少年のあわい憧憬しか感じていない。感じたとしても、それを表現する方法を知らない。

「少しは曲がるようになったな」

と老人はいった。

「そうしているのがお前の日課だ。忘れてはいかん。毎日海老責めを続ければ、お前の肉体に耐久性と柔軟性が増してくる。それがねらいだ。お前を種々と責めることができるようになる」

寿美麗夫人は、一日一回かならず老人に海老責めにされているのだろうか。老人の言葉は意外であった。

能面の下はやはり猿ぐつわがされていた。手拭だったが、口に詰め込まれた布を見て二郎は眉をひそめた。寿美麗夫人の口から唾液に濡れた布を引き出した老人は、寿美麗夫人の顔の前で、その布を広げたのである。

それはレースの刺繍も美しい深紅のパンティだった。

「香葉さんの味はどうだ」

老人は楽しそうにいった。寿美麗夫人はうつむいてあえいでいる。苦しいらしい。

「昼頃、香葉さんの女中が、リボンで結んだ綺麗な箱をとどけてくれた。開けたら、これが入っていた。丁寧にたたまれ、香水がスプレーしてあった。洗濯ものの中から、一枚選んでくれたらしい。そんなに汚れてはいないが、香葉さんの体臭はしみこんでいる。この香水は、香葉さんが愛用しているシャネルの五番だな。すぐわかる」

香葉夫人の深紅のパンティをハンカチで包むと、老人は着物にしまい、

「さて、散歩でもしてくるか」とつぶやいた。

「水石屋の、親父のところにも行って来よう。何か珍品でもあるだろう」

寿美麗夫人は何も答えない。

老人は母屋の廊下から玄関に出、飛石づたいに門に消えていった。

白砂の州に、海老責めにされた寿美麗夫人が取り残された。うっすらと上気した顔が美しい。

二郎は迷った。このまま見ていていいものなのだろうか。近寄って縄をほどくべきなのだろうか。それとも、そっと自分の部屋にもどって知らん顔をしているほうがいいのか。

縄をほどくことは危険なことであった。それは、自分の存在を老人に知らせることになる。二郎が一部始終を見ていたと老人が知ったら、老人が知ったら、老人は二郎を、この屋敷から追放するだろう。追放されたとしても、その理由は誰にも話せない。

二郎は自分の部屋に戻る気はなかった。見ていたい。寿美麗夫人の残酷な裸身を見たい。その欲望のほうが強かった。

寿美麗夫人は能面も猿ぐつわもされていない。声はでる。が、寿美麗夫人は何もいわない。眼を閉じて、海老責めにたえている。

数分たった。二郎にはその数分がとてつも

なく長い時間に思われたのに違いない。

と、思いもいかけぬ出来事が起こった。

どこから出て来たのか、一匹の小蛇が、白砂の州を横切っている。小蛇は、寿美麗夫人を敷砂に置かれた石と誤っているらしい。スルスルと寿美麗夫人に近づいていく。

「あっ」

と寿美麗夫人が叫び声をあげた。蛇に気がついたのだ。寿美麗夫人の顔が、さっと青ざめた。小さな蛇だが、寿美麗夫人は蛇が嫌いらしい。

二郎は植込みから飛び出した。

小蛇の尾をつかんで池に投げた。

そこまでは夢中であつた。

が……蛇がいなくなると、二郎と寿美麗夫人の間に何も無くなった。

二郎は当惑した。寿美麗夫人を見下しているのか、顔をそむけたまま立ち去ればいいのか、わからない。ただ忙然と立ちすくみ、足の白砂を見つめている。

二郎の顔は、いまにも泣きだしそうであつた。

「有難う。二郎さん」

小さな声がした。二郎は返事をしていいのかわからない。二郎は寿美麗夫人の顔が見ら

れない。

沈黙が二人の間に流れた。

「青大将の子供だったわね」

沈黙にたえ切れなくなったのは、寿美麗夫人だったらしい。寿美麗夫人は何も着ていない。荒縄で海老責めにされ、夫にしか見せたことのないところを、二郎の前にむきだしにしている。寿美麗夫人は、二郎が植込みから飛び出したときから、二郎にすべてを見られたことに気がついていいる。無理強いされたとはいえ、あのようなあらわな肢体で、こともあろうに噴水をあげたことさえ二郎は知っている。

「恥ずかしいわ」

消えいりそうな声である。寿美麗夫人も二郎の顔を見ていないのに違いない。

「ほどこきましようか」

二郎はやっといった。

「いいの、このままにしておいて」

「でも」

「そんなことをすると、主人がおこるわ」

「自然にとけたといえはいい」

「ほどこいたら、かえってお仕置されるのよ」

「どうして、こんなことをするのですか」

「そのうちにわかるわ」

「部屋にいます」

二郎はくると背を向けた。

「何かあったら大声をあげて下さい」

そういうと、駆けだした。二郎はとうとう寿美麗夫人の顔を見なかった。

一時間ほどして、老人は帰宅している。腕に水石をかかえていた。二郎の部屋に寄り、「風呂をわかせてくれ」

機嫌の良い声でいった。老人は満足しているようであった。

二郎は夕食のテーブルにつかなかった。老人と顔を合わせるのがいやだったのである。寿美麗夫人が呼びに来たが、窓のほうを向いたまま、頭痛がするから寝ます、とぶっきらぼうに答えた。

「おこっているの」

やさしい声が二郎の耳元でした。寿美麗夫人のふくよかな美しい香りが二郎を包んだ。

二郎はあわてて首を横に振った。

「スネているのね。わたくしが、あんないやらしい恰好をしていたから」

「――」

「ほら、おこっている」

「おこってなんていません」

「そう」

寿美麗夫人は、しばらく二郎のうしろに坐っていた。

「食事は台所に下げておいて下さい」

二郎は困ったようにいった。自分の心の動揺がよくわからない。

「あとでたべます」

「たべるのよ、機嫌を直して」

寿美麗夫人は、二郎の肩に、そっと手を置くとだまって立ち上った。

……

二郎は息苦しくて眼がさめた。いつのまにか掛布団がはがれ、自分の胸に誰かが……いる。消したはずのスタンドに小さな灯がともっている。

「黙って」

二郎の驚きを声にならなかった。二郎の口はやわらかな唇でふさがれた。

「眼をあけちゃだめ」

あたたかい唇は、二郎の上下の唇をやさしく愛撫している。大きく見開かれた二郎の眼はすぐ閉じられた。

寿美麗夫人であった。

寿美麗夫人の腕がやさしく二郎の首の下にすべりこんだ。二郎の頭を抱き、頬がすり寄せられた。

燃えるような緋の長襦袢が部屋の隅に脱ぎ捨てられていた。だて締めが畳に蛇のようにくねっている。

二郎の口は無抵抗に開かれ、寿美麗夫人のぬめやかな舌を受け入れる。

むきだしの肩が触れ、ゆたかな胸が触れ、すべすべした腿が触れた。寿美麗夫人は………
…とっていなかった。

「脱ぐのよ」

寿美麗夫人のしなやかな指が、二郎の寝巻のひもを解いている。

「裸になるの」

肌と肌が激しくぶつかり合った。

「抱いて、強く抱いて」

寿美麗夫人はあえいだ。

二郎は激痛を感じて呻めいた。恐怖と狼狽と亢奮が交錯した。

泡

起床時刻はとうに過ぎていた。台所で朝食の仕度をする寿美麗夫人の足音だけが二郎の耳に響いてくる。二郎は頭から布団をかむった。

今朝の寿美麗夫人は、二郎を起こしに来ない。いつものなら、お寝坊さん、と台所から

声をかけるのだが。それが不満で寝ているわけではない。二郎は寿美麗夫人の顔が見たくなかったのだ。いや、見たくないといったらウソになる。二郎は寿美麗夫人の顔が見られないのに違いない。

二郎からはなれた寿美麗夫人が、素肌に緋襦袢を羽織って老人の寝室にもどったのは明け方近くだった。

寿美麗夫人は、若い二郎の身体を思うままに動かした。二郎の全身に極印をうつように思いがけないさまざまな姿態を見せて二郎を誘惑した。繰り返し繰り返し、あくことなく二郎を求めた。

「二郎さんがほしいの」

二人とも昨夜は殆んど寝ていない。二郎が生まれて始めて知った男と女の妖しい官能の世界であった。

二郎は寿美麗夫人に童貞を奪われた。

二郎と寝たあと、寿美麗夫人は老人のかたわらに、まださめやらぬ余韻を残した裸身をすべりこませたのに違いない。

朝の早い老人を二郎が気にすると、

「ホルモン剤だといって、睡眠薬を飲ませたから大丈夫よ」

といって、クスツと笑った。

「悪妻でしょう」

部屋の唐紙が開いたが、二郎は布団から顔を出さなかった。枕元に寿美麗夫人が坐ったようだ。あたたかい掌が二郎のひたいにさわった。

「熱があるようね」

やさしい声がした。

「顔を見せてくれないの、二郎さん」

「――」

「おこっているのね」

二郎は答えない。昨夜の寿美麗夫人の痴態が眼に灼きついて、どうしていいのかわからないのかもしれない。

「わたくしが、あんなことをしたから、おこっているでしょう」

不意に、二郎はひたいにおかれた寿美麗夫人の手を取った。夜具に引っ張り込むように強く握った。どうしてこんな行動にでたのか自分でもわからない。

「痛いわ」

その声が笑っている。

「お馬鹿さん」

そのとき、台所に荒々しい足音がして、老人が二郎の部屋を覗いた。

「どうかしたのか、二郎」

「熱が少し……」

驚いて二郎が手をはなすと、寿美麗夫人が逆に強く握り返してきた。大丈夫よ。背中に老人の鋭い眼があった。

「それはいけないな」

「風邪でもひいたのでしょうか」

二郎は両手で二人の秘密を知っている指を胸にかかえた。寿美麗夫人のしなやかな指先が、どんなに二郎を苦しめたことか。

「あまり根をつめて勉強するからだろう」

老人は何も知らない。疑ぐつてもいい。

「お薬でも飲んで寝ていらっしゃい。予備校は休むといいわ」

「そうしなさい」

さりげなく二郎の手をほどくと、寿美麗夫人は老人を振り返った。

「茶の間に、朝食の用意が来ていますわ」

「うむ」

老人が茶の間に去ると、

「あとでね」

寿美麗夫人は二郎にささやいた。

二郎は眼をつぶった。裸にされ、びっしょりと汗に濡れ、あちこちいじくりまわされたあとも、汗も拭かずに、ぼんやりしていたから、あるいは風邪をひいてしまったかもしれない。

なかった。熱があったとしても微熱に違いない。

二郎は老人と顔を合わせるのを避けられてほっとした。熱などどうでもいい。

二郎はそのまま眠ってしまったらしい。空腹で眼がさめたのは、昼を過ぎていた。枕元に風邪薬が置いてあった。

台所に、いつたべてもいいように、二郎の食事の仕度がされてあった。二郎は急に風呂に入りたくなった。寿美麗夫人の秘めやかな体臭がまだ二郎の全身にしみこんでいた。老人に気づかれては大変だ。

二郎は浴槽に水をためた。水もぬるく、食事の間に沸くだろう。

熱い湯に入って、全身がひきしまった。やっと自分の身体にもどれたと二郎は思った。自分の身体でありながら、自分のものでないような変な気持ちにとらわれていた。女を知ることが、こんな奇妙なものであるとは想像もしていなかった。

そして、主人の夫人から童貞を奪われるとは考えてもいなかった。それだけに二郎の心の動揺はなかなか消えそうになかった。いずれ誰かにあげるとしても、それが寿美麗夫人とは意外であった。二郎は幸福だと思った。

と、浴室の戸が開いて、寿美麗夫人が入ってきた。いつ脱いだのか、タオルで前をかくしているほか、何も着ていない。

微笑みながら、寿美麗夫人は二郎のそばに丰满な水々しい肉体を沈めた。湯があふれてタイルに散る。雪の肌とは寿美麗夫人の柔肌をいうのだろう。こうも白く美しいとは思わなかった。柔肌に染^{しみ}一つない。

「留守なのよ、今」

「でも」

心配そうな二郎の顔を見て寿美麗夫人はいった。

「大丈夫、早くても一時間は帰らないわ」

老人は出掛けたらしい。それにしても寿美麗夫人の行動は大胆すぎる。老人がいつ帰ってくるかわかったものではない。不意にもどって来て、寿美麗夫人と二郎が一緒に風呂に入っているのを発見されたら、いったいどういふことになるのだろう。

「二郎さんがいけないのよ」

もくもくと頭を洗っている二郎に寿美麗夫人はいった。

「二郎さんが覗いたりするから」

あのとき、白砂に蛇が出て来なかったら、寿美麗夫人は二郎の寝室に忍ぶようなことは

しなかったかもしれない。

「覗いたりなんてしません」

二郎は怒ったようにいった。

「偶然見てしまったのです」

「そうね」

寿美麗夫人は浴槽から上がると、タイルに

腰をおろして二郎の背中に石けんを手でぬっ

た。二郎の肌を愛撫しているといったほうが

いいかもしれない。

「見られるほうが、いけないのかもしれない

わね」

午後のやわらかい日射しが、浴室の窓から

流れるお湯に反射している。

「洗ってあげる、前も」

「——」

「こっちを向いて」

限定版グラビア写真集 △美しき縛しめ▽第八集

山原清子 大塚啓子
鈴木晃子

女斗緊縛競艶写真特集

一部一〇〇〇円
略号(美8)

「女性対女性」の激しい女斗場面と女斗美の躍動！ 女性が女性を縛る緊縛プレイの見事なフォト化

長い間の皆様マニアの御要望にこたえて、女性対女性の女斗美、女斗場面、並に女同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって、ここに集大成いたしました。六尺禪或はパンティを着用した美女の裸身が組んずほぐれつ縦横に画面狭ましと展開し筋肉を躍動させておられます。いずれも動きのある連続動作によって三女の裸身の美しさが、いきいきと目の中に飛び込んできます。数十枚の女斗美、女斗写真女性相互の緊縛写真が、この一冊にて、皆様のものとなるのです。この新しい企画はまことに画期的なもので、この機会を逸すると絶対に入手できません。今すぐ、お申込み下さるよう、お待ちいたします。

△内容▽ 啓子の裸身を厳しく括くる清子、あえぐ啓子。緊縛して押さえ込まれる啓子の連続被虐姿態。清子に縛られてゆく過程の連続写真。縛られて身動きできない裸身を清子にいたぶられる啓子。縛られた刺青の裸身をいじめる晃子。晃子が清子に対して猿ぐつわを噛ます連続写真。馬乗りになって清子をいじめる晃子。清子を逆エビに責める晃子。清子白を縛り上げて逆エビに責める啓子。黒禪と禪の清子と晃子の女斗美、女斗シーン。晃子を寝業で押さえ込む清子、晃子の逆転劇。晃子を縛り責める清子。後手縛りの清子が啓子に翻弄される。その他女性と女性の緊縛プレイシーンの数々。

「自分で洗います」

「まだおこっているの」

「おこってなんていません」

「こわい顔」

寿美麗夫人は、二郎の全身を石けんの泡だらけにすると、

「洗って下さる」

二郎に石けんをわたして甘えた。小さな乳首が、上を向いて二郎の眼の前にあった。その乳首は突起していた。

泡だらけの二人が抱き合ったのは、どちらがさそったというわけではない。昨夜の激情が再び燃えあがった。

「二郎さんは、わたくしのもの」

寿美麗夫人はあえいだ。

「このことは、二人だけの秘密」

泡が二人の夜具であった。

昼日の光の中で、タイルに横たわった寿美麗夫人が二郎を戯れるのは、夜といわず昼といわず、夫の名において老人から強要される、羞恥に満ちた赤裸々な痴態に対する復讐かもしれない。

寿美麗夫人は姦通の悦楽に酔っているようであった。

(続く)

妖^{よう}靈^{れい}城^{じょう}

(第二回)

黒淵^{くろぶち}智^か集^ず子^こ

三、昭和四十年四月二十九日

祝日・木曜日・早朝の事

上將昴を擁して西に出で征き
平明笛を吹いて大軍行く

今見る功名の古人に勝れるを

輪台城頭夜角を吹き

輪台城北昴頭落つ

嬰一は私が眠っている間に起き出し、山門

長い詩が終った時、私は嬰一の後近寄っ
ていました。

私は聞きなれた詩吟で眼をさしました。

窓の外は明かるくなっています。五時半を

少し廻っていました。明方近くなってから眠

ったようです。私はいそいで着替えました。

のあたりで詩吟を始めたようです。睡眠時間
の短い事を自慢にし、どんな所でも眠れる彼
はそれでいいでしょうが私は七時間眠らない
と体がもちません。でも今朝は起きました。嬰一は山門から赤萩町の方を眺めていまし
た。私達の立っている錦繡山と、お城のある
浩月山の間は谷になって赤萩町の方へ下りて
います。町は見えませんが。何も見えないと言
った方がよいでしょう。すべて白一色。山頂
だけを除いて眼の下全部が霧の海の底に沈ん
でいるのです。

古来青史誰か見ざらん



「朝が来たわね。何事もなく」

私は嬰一に呼びかけました。

「いや、変わった事が少くとも三つある。本堂にあった写真八枚の内一枚が夜の間になくなった。お布施は置いたままだ。盗まれたはずの自動車はもどっている。そして霧の中からこの寺を観察している者が二人いる」

嬰一は朝の内にこれだけ調べたようです。それにしても驚きました。自動車はたしかに乗り逃げされたのに。

調べてみると――。

ガソリンは途りへってはいません。走行距離はおぼえていませんが大して走っていないようです。車内にあった物品は何一つなくなっています。それどころか運転席の上に封筒が一つ置いてありました。見ると『借用料』と達筆に書いてあり、中には千円札が入っていました。不思議な話ですが自動車を一度盗まれたのは、錯覚でなかった事になります。

「誰かが見ているような気がした。バックミラーで観察すると人影が二つ林の中に動いてすぐ消えた。その一人は確に女だった」

「女って。きのうの？」

「顔はわからなかった」

「和尚さんは悪い人なのかしら」

「とんでもない。底抜けの善人だよ。見せない写真をしてまい忘れたり、夜になって、あわててかくしたり、困る事を言われて顔色を変えたり。悪人というものは、もっと頭がよくて冷静で、ツラの皮が厚いものだよ」

四、午前七時から八時までの事

「狐にだまされなされたのじゃよ。この山には古狐がおりましてな。ヘッドライトが動いたように見えたのは狐火で、自動車は昨晚からずっと、そこにあったのじゃ」

朝食の席で和尚さんが言いました。

「でも……」

私は、借用料が置いてあった事を言おうとしましたが嬰一が止めました。

「たしかに悪い狐がいるようです。本堂にかけてあった記念写真が、夜のうちに一枚なくなりましたよ」

「あれは今朝、お掃除の時に誤ってこわしたのです」

ひとみ

仁視さんが説明しました。けれど何と下手

なうそでしょう。今朝一番早く起きたのは嬰一で、写真が消えたのはお掃除より前です。

見せたく写真を夜のうちにかたづけただけに違いありません。

「それは惜しい事をしました。和尚さんが西部戦線で功名を立てられた記念だったのでしように」

嬰一は暗い本堂で短い時間に八枚の写真をすべて観察していたようです。

「ほう。どうして西部戦線とわかります？」

「一九一八年と書いてありました。隣に並んでいた軍人は第一次大戦のフランス軍将校の服装でした。それから和尚さんの勲章」

「………を御存知か」

「コンマンドウール・レジョン・ドヌール。外国人であれをもらえるのは、よほど大した事をなさったからでしょう」

和尚さんは幾らか動揺しているように見えました。

「別に自慢になるような事はしていません。

世界大戦が始った時、ちょうどフランスで医学部を卒業したので若気の冒険心から軍医を志願して五年間従軍しましたのじゃ。それから戦後にクレマンソーが勲章をくれました。

年金を今でも千円ほど送って来ます。フランスというのは面白い国ですな」

「隣の方はどなたでしょう。和尚さんと同じ年ぐらいに見えましたか」

「同じ大学をいっしょに出て、同じ部隊にい

たフランス人の軍医です」

「たしかエミール・ド・ロジェ軍医中尉と読みましたが、今も御存命ですか」

仁視さんの顔色が変わったようでした。

「今度の戦争が終ってからには会っていないので知りません」

和尚さんの答はなぜか苦しそうでした。

「浩月山との間の谷に出る化物も狐ですか」

嬰一は話題を変えながら、新聞を取り出しました。昭和三十九年八月、日付の古いもので、『赤萩新聞』の題がついています。地方で政治の悪口や人物の噂を掲載する赤新聞です。

「キャンプしていた女性二人が二人とも妙な目にあわされたと書いてありますよ。もっとも余り品のよくない新聞だから、大きく書いたのでしょうか」

新聞には「猪峠に妖怪現る」の大見出しで、例に「女性ハイカー二人をしぼる」と書いてありました。

嬰一は奇譚が好きです。出張の度に地方の三流新聞を手に入れ、怪談や珍事件を集めて来ます。誇張された記事ばかりでしょうが、何か作品を書く資料にする気だと思っています。赤萩新聞もその一つでした。長い間古新聞綴

の中に埋れていたのを、天籟寺訪問が決った時、急に思い出して探したものです。猪峠がどこにあるのか知りませんでした。五万分の一の地型図で調べるとわかりました。何と、天籟寺のある綿繡山と、弦月城のある浩月山の間の谷を越える峠でした。この妖怪も天籟寺と関係があるのでしょうか。

「昭和三十九年八月十五日深夜。猪峠にテントを張って眠っていた二人連れの女性を幽霊が襲って気絶させ、二人別々に墓穴のような所へ監禁してしまひあげ……」

嬰一は途中まで読んで新聞を和尚さんに渡しました。

「幽霊は、よろいを着て、かぶとをかぶり、鉄製の仮面で顔をかくしていた、と書いてありますね。多分面頬めんぼうでしょう。狐にしては、念が入り過ぎていますが」

和尚さんは新聞を、ちよつと見ただけで返しました。

「この記事を書いた記者を返っています。一と頃、町中のうわさになったが夏に怪談はつきものでしょう。書いた男はうどん屋を奥さんにやらせながら新聞を出していますが、いつもは町長の悪口などを書いたり、葬式の広告料を強要したりで信用できません。紙面

の穴埋めか面白半分のにせたのでしょう」

けれど嬰一はさがりません。

「でも二人の女性は後ろ手に縛られ、足も縛られた上、サルグツワを噛まれた姿で救出されたと書いてありますよ。縄を解いたのが二人以外の者なら証人がいるわけですが」

「赤萩氏の亡霊です」

仁視さんが真剣な顔で言いました。

「六百年前に死んだ赤萩氏の城主は現代の女性ハイカーに恨みを持っているのですか」

嬰一は皮肉たっぷり。

「赤萩氏は弦月城から天籟寺に逃げる途中の猪峠で亡びました。夜更けて猪峠に登る者は誰でもたたりを受けるのです」

仁視さんは本気のように見えます。

「疑問が二つ残ります。面頬めんぼうは鎌倉期以前のものです。戦国時代に亡びた赤萩氏なら、その時代の装束で現れるでしょう。次に、幽霊が人を縛ったという話は怪談の中に例がありません。それから六百年間に亡霊が出たようなうわさは他にないようですね」

「私は時折見ます。赤いよろいが夜道を動いて行くのを」

五、午後八時から正午までの事

嬰一と和尚さんが問答しています。

「犬に仏性がありますか」

「あると答えましょう」

「猫は仏性がありませんか」

「ないと答えたら、何となさる」

「ないかと聞けば、ないと答える？」

「有無を対立させては、なりませんのじゃ」

「弁証法ですね、これは面白い」

そばで聞いている私は少しも面白くありません。多分読者の皆様も同様でしょう。そこで、もっと面白い所へ御案内致します。

仁視さんがお食事の後かたづけを終わって、どって見えたから、私達女二人は禅問答を残して仁視さんの個室に移りました。

床の間に山水画の掛軸、香炉

水盤に自然の花木

窓には金魚鉢と鳥籠

壁には琴、そして本棚には文学書

そんなお部屋を想像していたのですが、美事に外れました。意外な事に八畳ぐらいの洋間でした。

灰色の壁と小さな窓、

四隅に寄せて机、椅子、ソファア、本棚、

床の中央が広く開けられ、何もない空間いっぱいに、正三角形を二つ逆に組み合わせた六角の星形が書いてありました。

「ソロモンの護符？」

私は思わず声を出しました。

「ええ」

机の上には練鉢、るつぽ、葉びんなど。

たしか仁視さんは理科系でなかったはずですが。

それとも中学校で教えるには、このような独習が必要なのでしょうか。

本棚を見て又驚きました。

モンターグ・サマーズの『吸血鬼』

エリオット・オドネルの『狼男』

マキャベリの『ベルフェゴール』

エメリック・ド・ジロンドの『宗教裁判』

アンリ・ボゲの『妖術師論』

ピエール・ド・ランクルの『魔女』

ピコ・デ・ミランドラ。ノストラダムス。

トリテミウス。パラケルス。インダギネ。

占星術。人相学。呪法。錬金術の解説書。

ゴーストハンター達の著作類。

心霊学や催眠術の本など。

「恐しい本ばかりだわ」

私はすっかり圧倒されてしまいました。

「西洋の魔法にとっても興味がありますのよ」

仁視さんは微笑しています。

私は古びた本を一冊開いてみました。

ニコラ・レミの『魔神崇拜論』でした。ラ

テン語の原書です。私はラテン語が幾らか読めます。各ページには余り上手でない日本語がギッシリ書きこんでありました。

ニコラ・レミ。一五三〇—一六一二。十五年間に九百人の魔女に死刑を宣告した大審院判事、宗教裁判官。

肩書きに先ず驚かされました。

魔法や呪文の説明。宗教裁判。針で刺して調べる『魔女刺し』と呼ばれる魔女発見法。

それから、気も遠くなるような火刑や絞刑の記録。その名簿。魔女と断定された人達。

女料理人。評議員の妻。唱歌隊の美少女。

副司教の娘、乞食の少女とその母親。盲目の少女。身元不明の女。等々。

紙帽子をかぶせられ、鎖で縛られた女の人

が三人いっしょに焼かれている絵。

後ろ手に縛られた魔女が首を斬られる図。

四人の婦人が絞首されているところ。向う

には四人づつ縛られて引き出されています。

中世とは何と恐しい時代なのでしょう。

それにしても仁視さんが、こんな本を読んでいたなんて。とても信じられません。

本の最後のページに数字が書いてありました。一九〇九・一〇・二五。これが本を買っ

た日付だとすると。

本を読むようなふりをして幾冊か調べてみました。大部分は一九二〇年頃までの入手らしく見えます。とても古い本で簡単に買えるものではありません。このコレクションは、仁視さんが誰かに譲られたのでしょうか。

私は本から眼を離しました。壁に一枚の絵があります。美しい婦人が三人描かれていました。人物が美しい割に暗い背景です。下の方にハンス・バルドゥング。一五一三年と書いてありました。古い絵です。

「魔女の集会という題ですの」

仁視さんに言われるまで、わかりませんでした。杖、皿に盛ったガマガエルなどがあります。けど同じ中世に、魔女をこれぐらい美しく描いた人も居たとは思議な事です。

「魔法って、見せものの奇術の事ではないのかしら。魔なんて本当に居たのか？」

私は仁視さんの趣味に、少しばかり呆れていました。

「魔法は昔にあったのではなくて、今でもありますよ。人が呪術を信じている限り」

「現代にも呪術があるんですって？、未開人の間だけでしょ」

「いいえ、文明人ほど自分のわからない事を信じるものです。原子力や人工衛星。共産主義。ワクチンなど」

仁視さんが、こんな激しい事を言うとは今まで知りませんでした。

「ワクチンと魔法をいっしょにするなんて、無茶よ」

「古代から魔法使いは科学者だったのです。天文学は占星術から、化学は錬金術から生れました。現代では心霊現象の研究が新しい学問になりかけています」

「心霊現象？」

「ええ、催眠術や透視。霊聴や念力など」

「それで、何かお出来になるの」

「いいえ。面白いから読んでいるだけ」

x x x

なぜ、こうなったのか。

いつの間になったのか。

全然記憶がありません。が、よく考えてみると私が坐っていた椅子は、床に大きく描かれたソロモンの星のまん中。六角形の中にあつたような気がします。

昨夜の睡眠不足でひどく疲れていました。

この変な部屋の雰囲気と、仁視さんの発散する妖気とでも言いたいようなものの為に頭

がおかしくなっていたようにも思います。

それでも決して眠ってはいませんでした。

私は同じ部屋の、同じ場所にいました。本棚も机も壁の絵も元の通り見えていましたし、仁視さんも眼の前にいました。

それなのに。

突然、意識がはっきりした時、私は椅子に縛られていました。錯覚ではありません。本当に縛られていたのです。

いつの間に縛られたのでしょうか。

私の両手は椅子の背に廻って動きません。

私の背中は椅子の背板に押しつけられていました。胸がひどく圧迫されています。呼吸が苦しいぐらいです。

胸を締めている縄目を見ようとしましたが首を下に向ける事ができません。咽喉も縛られているらしいのです。

足も動きません。足首を椅子の脚に縛りつけられているようです。

私は嬰一より他の人から縛られた事はありませんが、縛られる事を余り恐しいとは思っていませんでした。両手を後ろに縛られても自分の指先で解ける。そう信じていました。解こうと決心して解けなかった事は一度もありませんでした。二時間かかって腹がたった

事はありました。

けれど、今は違っていました。どうしても解けそうにありません。

固い縄目という感じは少しもありません。

単に両手が後ろに廻っているだけの様な軽い感じ。

それなのに、手首も指先も動きません。

腕も肩も思う通りにならないのです。

からだの上を締めている紐の感触。眼を閉じていても、わかるそれが感じられない。

それなのに全身の自由がありません。

眼の前に仁視さんがいました。

いつの間に着替えたのでしよう。

地味な和服だったはずなのに。

首から足まで包むような真赤なドレス。

背に黒のマント。

——なぜ、こんな事をなさるの——

私は呼びかけようと思いました。併し声が出ません。呼吸が苦しいのは、胸を締めつける縄のせいだけではないようです。

——解いてちようだいよ——

口の中に何かいっぱい詰められています。

でも不思議。

サルグックなら、うなり声ぐらいは出せるはずなのに。

突然、仁視さんが両手をひろげました。

マントが大きなコウモリみたいに動きまわった。その後から赤いよろいとかぶとが。

右に一つ。左にも一つ。

面頬の中で赤い眼が光っています。

その一つが音もなく近寄りました。

私は動けません。背筋も凍る一時。

部屋全体がクルクル廻るような感じ。

「賀集子、どうしたの」

よろい武者と思ったのは、ダブルの背広を着た嬰一でした。

となり和尚さん。

眼の前に和服姿の仁視さんがいます。

「手が……」

と言いかけて止めました。動くのです。

あわてて見廻しましたが、私を縛っていた

はずの縄は、どこにも見当りません。

「いねむりしてたの」

夢を見たとは思えないのですが、

「いいえ、今までお話ししてました」

仁視さんが言いました。時計を見ると三分もたっています。

三分間に夢を見たのでしょうか。

それとも仁視さんに、何か妖しい能力があるのでしょうか。

六、正午頃の事

私は、お昼の仕度を手伝っていました。

「賀集子お姉様」

「なあに」

「さっき、手を後ろに組んで、変でしたわ」

「ほんと？」

「縛られた事、おありですの」

仁視さんは少しも表情を変えずに聞きました。私は顔が真赤になりました。

七、正午少し過ぎの事

「このお寺、化物屋敷みたい」

「何があったのだ」

「仁視さんて、まるで魔女よ」

「かわいい魔女」

「ほんとなのよ、気味が悪いわ」

「和尚さんは学者みたいだ。立派な実験室があった。元は医者なのだから不思議ないが」

「何をしている人達かしら」

「ただ者ではないね」

「何者？」

「賀集子の血を吸いたいんだよ。きっと」

「吸血鬼？、どうして私のだけ吸うの」

「女性の血はアルカリ性だからうまいんだ」

「それで、精進料理を？」

「アルカリ食品だ」

「口実を作って帰りましたよ」
 「それを言わせたかったのではないかな。急に我々が邪魔になりだした……」
 「あなたが余り聞くからよ。何も気がつかないふりをしてればいいのに」
 「そうだったな。もうおそいが」
 「このお寺へ静養に来たんでしょ」
 「すっかり元気だ。頭もさえてる」
 「勝手な人」

「ここまで来たら、もっと調べてみたいな」
 「もういやよ」
 「賀集子、先に帰れ」
 「あなた、残るの？」
 「五月五日の朝に車で迎えに来てくれよ」
 「だめよ。あなただけ残して、私一人で行けないわ」
 「危険かもしれないぞ」
 「いいの、いっしょなら」

八、午後の事
 和尚さは畠へ出て行きました。仁視さんは鶏の世話や一週間分の雑用。
 私達二人は天籟寺の建物や石垣を見て廻りました。
 そして又、恐しい夜。
 でも嬰一は平気です。
 そして私も嬰一といっしょなら、少しもこわくありません。
 (未完)

映画「拷問」

のこと

おもだか・しの

△写真提供・春風春太郎△

映画「拷問」は、題名からして、私の専攻部門ですし、早速見聞記を書かなければならないところですが、夏以来少々多用の身となってしまうため、ついつい一日のぼしにしている中に、本誌は新年号が出て、今年もあと僅かになってしまいました。

また「拷問」についても、毎号皆様が、見聞やら御意見やらを、色々な角度から発表さ

れましたので、いま更私が重箱の隅をほじくするようなことを申すまでもないようなものですけれども、一応書いて置かないと、気になつて仕方がないので、私の感想をいわせていただきます。

全巻を通じて先ず感じることは、予算が贅沢になったということで、前回は、装置類は間に合わせで、出演者は三流どころばかりと

いった有様でしたが、「拷問」では男優諸氏も、一応それらしくなり、中には汽船も見えず、陸に自動車の影もなく、見せ場のシーンにパンティもちらつかず、大変楽しく拝見出来ました。

しかし表題の「拷問」は、前回に一通り出ておりますので、題名は拷問でも内容は、伊藤晴雨好みの責や、私刑、心理的な問題を別にすれば拷問でも刑罰でもない人柱の話、などになってしまいました。

第一話の人柱は、余り評判がよくないようですが殉死など義理で切腹させられる人と、同じような立場に立たせられるわけで、突然死すべきことを申し渡され、しかも表面はあ



くまで欣然と死の座に着かねばならぬというマゾとしては最高の境地だと思っています。

この話の中の女問者の拷問は、大変なサービスで、処刑の釜煎りも見事です。ただモッコが入手できなかったのは、残念でしたが、釜に投げ込まれた後にも、釜の中から足りないものが見えておりました。

前回は女の素肌縛りと、映倫とのカネ合いに大分苦心されたそうですが、拷問ではどうやら小森流映倫用乳かくし縄とでもいうべき形が、出来上がったようです。

第二話は、拷問刑罰史で私が、悪口を書いたところを全て訂正したような話で、前回にも出た切支丹女の逮捕から処刑までを、非常に丁寧に見せて下さいました。牢内生活は、歌舞伎の『四千両』にも出ますが、小森・名和のコンビともなると、流石に結構なもので、特に気になったのは、外鞘の戸を開放したまま牢の戸を開けていたことぐらいで、引廻しもゆっくり見物出来ました。

引廻しの後、刑場に着いて馬から囚人を引下すところを見せたのは、珍しい見所でした。またこれは、映画としての演出上もとてもなことで、苦情をいう方が無理だとは思いますが、女囚の御腰が、裾除仕立なのは、腰巻を常用している者から見ると変です。肌着としての御腰は、木綿、絹、麻のどれで作るにしても、丈は二巾が普通で、立って腰に巻くと、胫が出るものです。最近では長襦袢を着る時にも、

裾除をする人が、多いようですが、昔は御腰と肌襦袢の上に、半襦袢と裾除をするかまたは、肌着の上に長襦袢を着るか、どちらかだったもので、時代や地方によって違うところもあると思います。素肌に裾まで届く御腰をするのは、長ゆもじといって、吉原の女郎でさえ使わぬといった位、だらしの無い風俗と、されておりました。

しかし、明治時代になって、広巾のネル等が、安価に出廻るようになったために、御腰と裾除けを兼用にした、いわゆる都腰巻が発明されたので、肌着としての腰巻と、着物の裾がすれて、いたむのを防ぐために着ける裾除との区別が、はっきりしなくなってしまったわけです。ですから、女囚が着物を脱がされた後、腰巻一つの上に囚衣を着せられているとすると、肌に着けているのは、二布の腰巻でなければおかしいと思います。

第三話は、私には余り興味の無い話です。しかし濡れ場のシーンは、元禄頃の枕絵を再現したようなきめの細かい画面は大変美しく綺麗に結った髷の、かつらが外れないように注意し乍ら、ベッドシーンを演ずるのは、さぞ気骨の折れることだろうと思いました。

(写真は「日本拷問刑罰史」より)

きもの奇譚

牧 高志

文庫



近世日本史上の……などと滑り出して空威張りする訳じゃないが、仮りに時代を明治、大正、昭和の三代に限定して持論？ である女性の服装をいろいろな角度から検討してみると、論理の立つ立たぬは別として構成上なかなか面白いと思われる要素が含まれている。

中でも、幸か不幸か徳川三百年の泰平の夢が破られ文明開化の烽火をあげた明治の世代は文字通りご維新の名と共に、頭の天っぺんから足の先まで、むさぼるように欧米の風俗を取り入れ、いわゆる西洋カブレをやったにも拘らず、実際は江戸幕府時代の伝統が、どっこい根強く物をいって、その割には一般庶

民の女の服装は変りばえもせず、また思い切った改革も行なわれなかったようである。

だから、江戸時代に専ら庶民階級の吹溜りでもあり憩いの場所でもあった町内の髪床屋や湯屋の中で取り沙汰されたもろもろの噂話は世の中が一転して明治の御代と変ろうとも、チョン髷時代をそのままに、女性のきものにまつわるエロばなしは一向に絶えなかったものと見える。

今宵も鹿鳴館の大ホールのシャンデリヤの下でいとも裾長な洋装の淑女達が華やかに踊り狂っている同じ東京の都大路には、これまた無防備極まる？ 下半身明けっ放しの赤い湯文字が相変らず氾濫していたのである。

断って置きたいことは筆者は世にいう歴史学者でもなければ考古学者でもないので、これからの記述には随分と間違いだらけの独りよがりの字句も多いことと思われるが、ご寛容を願うと共に挿絵制限の本誌の趣旨に従って最少限の参考資料を添え置きたいと思う。

さて、一九二二年つまり大正の初期ドイツで発行された **DIE FRAUENKLEIDUNG** という本をくってみると著者の **C. H. STRATZ** 博士は、日本婦人の着物を **Chinesische Gruppe** の中に一括して簡単に紹介してい



Japanerinnen in
Unterkleidern

(DIE FRAUENKLEIDUNG) より

る。いくつかの挿絵代りの写真が載せてあるが、撮られている女はどういう訳か、いずれも幕末か明治の初め頃と思われるもので、いわゆる胴長で脚太の日本婦人であるため一寸頂けない代物である。

そのうちの一枚は *Japanerinnen in Unterkleidern* と題し三人一組の裸女が紹介されているのを見ると三人とも上半身はよく張った乳房を出したままで、お互いに手を握り合ひ下半身は伝統の腰巻を締めている。そのうち左右の二人は真赤な腰巻であって中央の一人

は白地に網目模様小菊を散らした柄の腰巻であるが、これらの腰巻は申し合わせたように全部上部に巾広ろの白地の腰布をつけている。ところで、三人の女の結っている髪形をみると、およそ現代とは程遠い古典物と思われ、仮りにこれが幕末の頃のものだとすれば、その時代には白の腰布は少なくともつけていなかった筈である。歌麿の絵画を探してもこの姿は見当らない。してみると写真の撮影年次は判っきりしないが、この頃があるいは現代につながる白の腰布出現の境目であっ

たのかも知れない。

この白の多分木綿のさらし物と思われる腰布はいうまでもなく、ご本体である巾広赤色地の腰巻を上から吊る役目を持っているだけで、いわば、サポーターであり、どうしてもいものかも知れないが、この白の腰布の有る無しとでは色気の発散上大いに関係があるものなのである。

若尾文子の映画「刺青」は幸か不幸かこの腰布が無かった例であるが、色彩学的にみると女の肌色である肌を一足飛びに濃妖な赤で包もうとするところを白色でくっきりつないで橋渡ししている感じである。昔、満洲（今の中共の東北地方）で見た山東苦力の紺一色の下半身には必らずといってよい位白の腰布がつけてあるので余計連想した訳でもあるが、筆者が今でも一番印象深く残っているのは、この白い腰布をめぐった想い出なのである。いずれも子供の頃の話で万事少々ボケタ描写になりそうだが二つ程紹介してみよう。

その一つはある夏の漁村で見かけた心中事件にからむものである。その日は陽ざしが強く、山川草木すべてが原色でギラギラ反映し、身体のおせが一挙に吹き出るような暑さであったが、不思議に波の静かな舟着場は藍

一色に静まりかえっていた。一しきり泳いだあとで空腹だったから多分ひる前であったのだらう。急に岸壁の一角が、時ならず騒々しくなった。

鉢巻をした年配のおっさん連中が次から次へと慌ただしく馳けて行くので、こちらもつられてその方向へ走っていったら、珍しく心中者が上ったという。人の股をくぐって、かい間見たところ、男は番頭風の縞の着物を着て角帯を締め齡の頃はよく判らないが一方抱き合った方の女は一見良家の娘さんらしくあるいは新婚早々の若妻だったかも知れないが、その頃流行の薄衣のジョウゼツ錦紗に、せめて死出の晴着にと緋縮緬の単衣の長襦袢を着ており、紫がかったお太鼓の帯を胸高に締め、帯枕を包んだ筈の鹿の子の帯揚げは解かれて彼等の脚をともしっかりと縛り合わせるのに使われていた。

何しろヌルヌルした藻を頭から冠ったまま浮び上ったところを引き揚げた直後だけに、駐在所の巡査と町医者が馳けつけて例の二人をくくり合わせた脚の帯揚げを解いてコモの上へ仰向けにならべた時には、着物が寸分あまさずべつとりと身体にまといついて特に女の方は実に悩ましい恰好を呈していた。

血の気のない顔色に乱れた黒髪もさることながら中肉中背の胸には二つの乳房の山がこもりと盛上っており、なだらかな腹部から両肢にかけての下腹部の凹凸は何んともいえず曲線美を漂わせていた。

その内に、取敢えず身許の調査と検死が開始されたが何しろ突然降って湧いたような事件であるだけに、子供を含めてぐるりと囲んで立見している連中に聴込みをするというあわて方。だから、どうも臭い、他国者だ、しかも男の方は腕に刺青のあるお尋ね者らしいと判る前には事もあるうに岸壁の上で両方とも帯を解いて裸にしてしまったのだから事は大変なことになって了った。勿論裸といってもいわゆる下帯を全部取った訳ではない。女の長襦袢の伊達締めを解いた時には、どっと野次馬がそばに集まってきた。

二巻き程巻きつけてある花模様の伊達締めを解いて緋色の長襦袢を左右にめくると……まだ肌の色が褪せていない下腹部から脚にかけては目も鮮やかなこれまた緋色のメリンスの腰巻が巻きつけられてあった。その燃えるような赤い腰巻はしみ渡るような白地の腰布付のもので、いささか水を含んでふくれた腹部を左右の白地の細紐でぎゅうっと肉まで喰い

込むように締めつけてあった、しかもどうみても着古した物でない証拠に白い縫糸がくっきりと見えたことからでも判る。いうまでもなく当時のこと故、お腰の下にはも早やそれ切り何一つつけてない（それから先の身体の検死はその場所では行なわれなかったたのでその点確めようがないけれど）と見るべきであらう。

さて、問題はその時多少好奇心があったから一層そうさせたのかも知れないが、いよいよ女の方を裸にしようと検死の係員が海水でべつとりと身体に吸いつくようにまといついたしほのこまかい長襦袢を合せ目から剥ぎ取るように左右に拡ろげて行った時に嫌が応でも真先に目の中に飛び込んできたのが真白い腰布なのであった。

変なことをいうが今でも赤いお腰が何回も水をくぐると染料の色が流れてサポーターである白い筈の腰布がややピンクがかり全般的に薄汚れてくるものなのである。従ってこの時程、汚れてない白の腰布の魅力に取りつかれたことは無かった。もう一序でに余計なことだが、一応上方者と思える二人の身体は目下身許照会中としてその後茶毘に附されたと聴いた。ただ証拠物件である衣類は恐らく

一つ残らず最寄りの警察署に保管されてその都度説明の材料に開陳されたものと思う。知る由もない悲話の一つである。

さてもう一つは華やかなお目出度になつて腰布編の想い出話で、いわゆる隣の美代ちゃんがお嫁入りした日の出来事（というようにな大げさなものではないが）なのである。勿論筆者が子供で美代ちゃんは、同じちゃん呼ばわりでも既に二十才を越えた適齢期の娘さんであった。季節はしなびたトウモロコシの

花が垣根越しに見えていた頃だったから、もう九月に入った頃だったかも知れぬ。

その日は何から何まではずんだ声が手に取るように聞えてくる。婚禮ってひる間からこんな大騒ぎするものかと半ばいぶかしげに隣の動静を何げなく眺めているうちに興入れは宵に入る前に一つ山坂を越えて行かなければならないというので早目に当の美代ちゃんの化粧が始まった。もともと生来テレビドラマ『おはなはん』に優るとも劣らぬおてんば

現在発売中／限定版グラビア写真集V在庫案内

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 女体緊縛グラフ集「豊満と清楚」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」 |
| 緊縛美女八十態「美しき縛しめ 第四集 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美4」 |
| 凄惨「女性刑罰拷問持集」日本版 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美5」 |
| 山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」 |
| 二女緊縛「女斗緊縛競艶写真持集」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」 |
| 「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」 |
| 緊縛写真集「責められる美女百態」 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美10」 |
| M写真集「女王様に飼育される日々」 | 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」 |
| 緊縛美態代表作品一二〇葉写真集 | 一部一〇〇〇円（送共）略号「美11」 |

◎一般書店にては一切販売いたしておりませんから、直接発行所へお申込み下さい。

娘であった美代坊にしてみれば、常日頃母や祖母の勧告も聞かばこそであったのが一世一代の花嫁さまともなれば、流石に本来の娘らしさにかえって、いともしおらしく神妙に鏡台の前に坐らされていたのが何故かおかしかった。

白の肌襦袢に手拭いを首に巻き腰にはネル地みたいなピンクのお腰らしいものをしめていたが高島田が地頭にもかかわらずふっくらとしてよく似合っていた。勿論今のように型で嵌めたような出来合いのカツラではなかったから余計魅惑的だったのだろう。ただ、ここで非常に羨しく思ったことは美代ちゃんの実兄が一介の写真師であり丹念に赤黒の布を頭から冠りぶかっこうな三脚付の写真機をかついで逐一洩らさず、録画？ していたことである。つまりメモ代りに実妹の花嫁姿を撮影していたのをはからずもかいま見たという訳で、ただカメラが今のような進歩した機械ではなかったから一場面撮るのでもひま大変な労力を要したものらしい。

何しろ隣とは背の低い四ツ目垣を距てての距離だから美代ちゃんのポーズの何処を撮影しているかもよく判る。そのうち何やら急に手伝いに来た親類の女連中の立居振舞が活発

になつてきたので障子のすき間から凝視するとあらましのお化粧が終つたところで、いよいよこれから花嫁の着付を始めようとするのであろうか部屋一面が急に華やかに赤や金色めいて来た。

美代ちゃん鏡台の前から既に十畳の間の中
央に立たされて身体的一切を四、五人の介添
者にまかせた恰好となつた。立つたまま勇敢
に一對の白足袋がはかされた。それが終ると
丸髷を結つた年輩風の女が美代ちゃんの前に
回つて例のタオルまがいのお腰の紐を解く：
「あッというひまも無くそばの女から手渡さ
れた真新しい真赤なお腰をひぎをついたま
ま素裸で何もつけてない美代ちゃんの下腹部
を大巾に覆うようにしっかりと巻きつけ前結び
に白紐をきゆうつと結んだが：別のお手伝い
さんがその上に着せる新調の肌襦袢を探して
いる間中、ほんの三十秒たらずが正直なところ、
これが見おさめとなるであろう美代ちゃん
の上半身の肌をとくと拝見したという訳で
ある。

漆黒な高島田、ゴム製のお腕を伏せたよう
な両乳房そしてすなりと均整のとれた肉体
そしてそれらを総しめくりするかのようにな
きりりと巻かれた真紅の腰巻は目も鮮やかな

だけに例の白地の腰布は宛ら浮かび出たかの
ようにくつきりと一線を劃していた。正に青
空にひるがえる国旗日の丸以上に白の魅惑さ
を發揮したものと思われたのである。

この絶好の被写体を写真師である実兄はど
ういう風の吹き廻りしか、じっと見ているだ
けで、何かを指さして当の花嫁や手伝いの女
連中をせかせているようには見えなかったが、この
鮮やかなお腰一枚姿がこちらで、それこそ
どから手が出る程の垂涎物であろうともそち
ら様は一向にご執心のように見ええず、そう
こうしているうちに「いくら歩かなくてもお
蹴出位はしなくっちゃね」：とばかり肌襦袢
にかけてて今一枚の少しペラペラした蹴出
裾除を巻き終ると、典型的な燃立つような
花嫁用の緋の長襦袢が肩から懸けられた。
果たせるかな、くだんの写真師はそれから
ピッチをあげ出したのである。今と違ってカ
ラーなどというフィルムが無い時代だから、
さだめし折角の長襦袢姿もカラスの行水見た
いに写つたことであろうが、花嫁のポーズに
ついては流石に専門家らしく、ああだ、こう
だ：と駄目を押しつつ飛びあがっていた。自
他共に幸福な一頁だったかも知れない。
やがて日はとっぷりと暮れた。荘重な花嫁

衣裳をまとつた美代坊は、あとに咳払い一つ
も無いシーンとしたためけ殻を残して山の彼
方に興入れしたという幼な心に少々未練の残
つた物語をご披露した次第である。

この腰布をめぐるてはまだ色々面白い想
い出話がある。筆者の友人某は一杯飲んだ余
勢をかって心中豪傑気取りでカラコロ下駄ば
きで登楼したまではよかったが大門のたたき
の上ですってんころり：切れない筈の鼻緒が
ぷつぷつ切れて了つた。

「ヘッヘッヘッ：これだから僕の彼女は可愛
いくって離せないや」

「それは何んだ？」と訊くと咄嗟に湯文字の
何処かの布地をひきちぎつてたてて呉れたと
いう。恵まれた果報者というべきか。

きもの奇譚も、ここまで来ると少々物臭く
偏寄つた感がないでもないが、何もこれでハ
イさようならと乙に澄ます気持はさらさら無
くて、蒐集した類型物を号を追って披露した
いところだが、仏の顔も三度ということがあ
るので、以降万事小出しにしかも自他共に楽
しみつつ私のコレクションの宝庫の扉を開き
たいと思っている。

同好の士のご愛顧を得れば幸いである。

〔体験・告白〕

事実は小説より奇なり



葛山英二

「事実は小説より奇なり」という。今、私は嘘のような本当の体験を、今迄空想でしか存在しないか、いやあっても窺い識るべくもないと思っていた事実を、この眼でみて、驚歎すると共に戦慄と悪感を感じて逃げ出した体験を報告したいと思う。

小生はよく名古屋に出張する。定宿は勿論東新町にあるのだが、友人の経営するアパートが、新興の盛り場として最近めきめきと発展してきた今池の近くであり、出張旅費かせぎというとみみっちくはなるが、正直に言っ

て、空室がある時は殆どただ同様に泊めてもらうのが常である。

今日もそうだ。顧客を納屋橋のキャバレーから送り返えすと、もう十一時をまわっていた。珍らしく四つも部屋が空いているのとこのとでいい酔心地で今池へ車を走らせる。

明日の仕事もある事故、一風呂浴びると、早々にベッドにもぐり込んだ。昼間の疲れと、したたかホステスにたかられたビールの酔いで忽ち眠りについた頃、ひそやかに而も力強くドアをノックする音に気がついた。

「眠いのは何だ、面倒くさい」

うるさいとは思いつつも、何か変事でも起ったかと、私は寝ぼけ眼をこすりつつドアを開けた。

「どうもお休みの所すみません。私、となりに泊っている者ですが、一寸面白いものをお目にかけたいと思って、お邪魔致しました。お差し支えなかったら、そのまま結構ですから、お越し願えませんか」

年の頃三十前後だろうか。一見サラリーマン風の、どこにでもいる平凡な顔立ちの男だった。でも、こんな真夜中に、チャコールグレーのよくプレスのかかった背広をきちんと着ているのが、何か異様に感じ、寝巻き姿の私が気はすかしかった。

「とおっしゃいますと、何が何だか分かりかねますが、何かあったんですか」

「いえ、そうじゃないんです。これから一寸した遊びがありますんで、一緒に、いや、見ていて下さればいいんです。え、まあ、ただそれだけなんです。如何でしょう」

「遊びといったって、分りませんね。急に。手が後へ廻るようなことはいやですよ」

「いえ絶対そんなことは。でも、びっくりしちゃいけませんよ。一寸すごいですから、驚いちゃいけませんよ。それに、他人に言わないで下さいね。行きずりの方でないと困るんです」

彼はしつこく驚いてはいけなさを繰り返した。

「で、いくら位です」

私はてっきり秘密ショーだと合点した。まあいいわ、旅の恥はかき捨てとばかり、どうせ大したこともないブルーフィルムでも見せて二、三千円をたかるのだらうと考えた。

「とんでもない、お金なんて、ただ見えて下さればいいんです。よろしかったら、さ、どうぞ」

「何だか分りませんが、構わなかったら伺いましょう」

アバンチュール精神がむくむくと頭をもちあげてきた。男に続いて隣室のドアをあけた途端、私は我が眼を疑った。中央のベッドに全裸の男が縛りつけられているではないか。声が洩れないようにとの配慮からだろう。嚴重に猿轡をされているので、年の頃ははっきり分らないが、まだ若そうだ。色の白い、腹から腰、足のあたり、ポッチャリと肉がついて、一見女性めいた感じがする。瞬間、私は、ああ、これが女だったらしいのと思ったのも、無理からぬ事だと思う。いかに色白の肉付きのよい若者といっても男は男、がっかりすると共に、何か不快な嫌悪感が背すじを貫いた。ままよ、何が起るかどうせたただ。見えてやろうとばかり、

「一体こりや、どうしたことす」

「お分りになりませんか、びっくりしちやいけませんよ」

この男は又しても驚くを繰り返した。

「一寸いじめてやりますから」

「分ったよ、君、所謂SMプレイっていうやつか」

「あ、ご存知で。SMなんて言葉知ってらっしゃる。奇譚クラブや風奇、裏窓なんか知ってますか。そうですか、そりやよかった。じやいいですね、思い切ってやって。そりやよかった。よかった」

俄かに快活となったその男は、誠に親しげな視線を私に送ると、人のよさそうな微笑をして、

「おいケン坊、よかったな。ファンの方が見えて下さるよ。はじめからな」

上衣をぬいだ男は、ネクタイをとると、側のトランクから用意の道具をとり出すのだった。縄、鞭、手錠、針、等々の責道具が乱雑につめ込まれているのが眼につく。

「まずはじめに浣腸をかけますよ。見て下さいね。ケン坊、お前の一番きらいな浣腸をかけるぞ。旦那、最初に便をとつとかなないと途中でたれ流すことがあるんで。気持が悪いでしょうけど、我慢して下さいよ」

手馴れた手つきで、五〇CCのグリセリン浣腸器に薬ビンからグリセリンと思われるねっとりした液体をすい上げると、薄めもせ

ず、まだ縛っていない両足を持ち上げると、一気に肛門にそそぎ込んだ。その描写は避けざるを得ないが、男の浣腸風景程味気ないものはないとだけ申しておこう。これが女だったらと空想することによって、僅かに私は不快感をまぎらわしたのである。

一しきり便意を我慢させると、彼は差込便器をとり出し、ビニール布を便器の底にしき排便させると、うまく包みこんで用意のビニール袋にそのまま入れ、ゴム輪で固く縛ってしまう。そのままトイレに捨ててしまうという寸法、その手廻しのよさに、余程手馴れているものの、聊か驚きいった次第だった。尿はといえば、例のゴム製品をあてがって処理してしまう。一滴たりともベッドをよこさぬ方法に、数多くの場数を踏んでいることが想像される。

「うまいもんだね」

胸の悪くなるような臭気に、夜風をカーテン越しに入れながら私は驚きの声を発したが驚きはこんなものではなかったのである。

浣腸のために自由にしていた足を用意の細紐でベッドにしっかりと縛りつけると、

「いいか、ケン坊いくぞ、いいか」

叫びざま男は、馬の調教用の鞭をしごいて胸、腹、太股めがけて打ち下した。勿論力一杯ではない。馴れているだけに、力の加減は弁えているのだらう。軽くふり下

すだけでも、しなやかな鞭の先はヒューッと空を切って、生身の体に、はつきりと赤い条が一条、二条、三条と交差してゆく。ベッドに縛りつけた縄が、適当な緩衝地帯となつて痛みを幾分和らげているのだろうが、打ち下されるたびに、縛られた男の顔が苦悶にゆがむのが、猿轡の下からも、はっきりと読みとれる。

「旦那、窓をしっかり閉めて下さいよ。ケン坊、どうだ、痛いかな、苦しいかな。もっともっと、もっとか、ほしいかな」

ベッドの男が、微かにコックリした様だ。

「そんなにほしいか。よし、いくぞ」

幾分鞭に力が入ったようだ。心なしか、ピシッという音が高い。かすかな呻き声が洩れる。それが次第に強くなる。声にはならずとも、猿轡の下からの呻きは相当大きなものであることを私ははじめて知った。猿轡で音を消し得ないことを知ったのは、大きな勉強ではあった。

愈々激しくなる鞭の音、それに調和するような呻き声に、私は外部へ聞えはせぬかと心配になる頃、恐らく、ベッドの男は痛さに絶叫したのだろう。一きわ強い、何か悲痛さを感じするような呻きをあげた。それが合図なのか、男は鞭の手を収めた。打つ方も喘いでいた。見守る私は、拳を握りしめていた。それよりも困惑したのは、男の急所だった。眼の

やり場もなく、いやベッドの男のそれだけでなく、私のも何かを感じとって、我ながら氣恥づかしくなるのであった。

「だんだん、凄くなりますよ、驚かないで下さいよ。大丈夫ですか」

私には丁寧な口をききながら、男はトランクから虫ピンを取り出すと、ベッドの男の鼻をつまんで、何と鼻に突きさした。鼻責めの事は奇くでよく識っていたものの、現実となると、聊か私はあわてた。こわいもの見たさで、近寄ってみたものの、電気の方角の関係もあって鼻腔は暗く、鼻壁に既に穴があいていたのかどうか判然としなかった。男があまり顔をしかめなかった所を見ると、何度かのプレイに、既に穴は穿たれていたのだろう。ピンの両先に器用に紐を結びつけ、セロテープを取り出して、ピンの先から紐がすべり落ちないように止めると、男は、二本の紐をベッドの頭にくくりつけた。これで鼻は丁度豚の鼻のように広がり、同時に、頭は左右に動かす術もなくなった訳である。にもかかわらずベッドの男の満足そうな顔、マゾヒストとは、こんなものなのだろうか。そして第三者に見られているということが、いやが上はもエクスタシーを感じしめるものだろう。

男は続いて針をとり出すと、医者が注射をする時の恰好よろしく、あちこちを針の先で突きはじめたのである。勿論、あまり深くは

差していないのは当然である。針の先にも可成り丸みをもたせてあるのか、痛点を刺戟するのが目的らしい。でも、指の先とか、唇、乳首、腋等、一寸想像も出来ない部位ばかりを突つく、その手ぎわに、私は驚歎してしまつた。

勿論血が出る程ではない。しかし、特に神経が過敏な所ばかりを責められて、男は、ひたすら呻き声をあげるのであった。額にじつとりと汗が滲んでいるのを見ても、その痛さと苦しさは想像され、流石の私も一寸胸が悪くなってきた。責めている男に氣取られぬよう、そつと後ずさりすると、私は後手でそつとドアを押して、廊下に出た。

「旦那、ちょっと旦那、まって下さいよ」

声は私をひきとめたが、敢えて追ってくる様子もない。私は急いで部屋に戻ると、今度はしっかりとドアに鍵を下した。

もう三時をまわっているであろうか。自動車の音もとだえ、犬の遠ぼえがたまに聞えるばかり、頭がやけに冴えてとても眠れない。旅行カバンから、トリスの小びんを取り出して、おおってみるが、頭は冴えるばかり。いや頭のみではない、聊か私の全身も熱をおびているようだった。

今の時間では詮方ない事なのだが、はつきりと女を意識し、眠れない一夜ではあった。

〔奇譚雑談〕

夜の徒然草

＜中 宮 栄＞



【感想として】

十年来の愛読者でK誌の「発展を祈ることにやぶさかでないつもり」の方の読者通信を読む。判ってないなあ、この人……というの

が第一の印象。どうか『右』側の意見としてもう一度、文節の隅々まで御返読願いたい。私は随想を書いているのでもピンク・コーナのコミカルなジョークでも散文でもない。

「雑談」として奇クの一分野にあって、よかりそうだと考えた一種のコラムとして投稿しているし、取捨選択は「おまかせ」である。奇クになじんだ以来のキャリアは、ほぼ氏と同時期になるだろう。長年の読者でありながら黙して語らなかつた氏より、少しは前向きであると思っている。三人寄ればおのずと意見が分れるのは世のならい。グラビアがなくなつて可とするのもいわばその見解の相違なのである。が、読者交歓を要望しながら次項では否定している……という指摘は納得ゆかない。「文書斡旋はしない」と編集部は断り書を掲載しているのだが、その気になれば編集者に迷惑かけずとも交歓出来る。指定局を明記したら、熱心に通う事だ。それさえ氏はなさらないであろう。「……読者通信は恐しい」というのは、その中にも混っている心根の良くない人の例でしかない。文章の出来不出来は才能の問題ばかりでなく、その意図にも左右される。例えばまずい文章でも、先方の態度が明確にされた時、私は返信を欠した事がない。毎月十数冊の雑誌を読む、といわれる貴方、さぞかし知識豊かな才人だろうと思う。疑念がおりなら今直ぐにでもペンを執られると良いだろう。沈思より実践であ

る。人生を灰色にするかカラフルな醍醐味に変えるかは、要は当人次第の事。私がスマートさを減じて雑文を書くのもレポート型式であって文飾にカモフラージュして虚構を真実に置き換えたくないからである。筆のたつ人は兎角「遊び」をしたがるものであるが、お気に召さないとしても私としては「自慰行為に墮ず充足するため」に日常茶飯の事柄の中から、先に述べた一分野的な投稿を続けている。常道をはみだした——常軌を逸した？

——意見をおく面なくという批判であるが、敢て……と言う語法も知らない氏を取るに足らぬ一野人とは思いますが、敢て反論を試みた。最低日時として二ヶ月かかる読者欄の交歓では性急な私は緩慢に感じられてならぬから、貴重な誌面をさいて下さったのを幸いに連絡方法を書いて頂いた。一人いい子になって……という羨望もあるかと思われるが正直な程よい事はない。お蔭で話合える知己を得られたし、親書を寄せて下さった方の誰方にも疎略に扱った覚えはない。

【今月の放言】

標題は雑誌「宝石」に在る一頁ものの社会戯評欄の見出しである。十一月号のそれに、「難解な『悪書』を出版せよ」という石川喬

司氏の御意見がある。面白い好読物。

読書週間をひかえての「三ない運動」——

悪書追放キャンペーン——の標語を見るたびに、「……ばくは、時の流れが止まってしまったような錯覚に陥る」と、氏は書き出して「悪書を読むと不良になる、という論理は、推理小説を読むと人殺しになる、と考えるにひとしい」と述べておられる。壇ノ浦夜戦記とか四畳半襖の下張などから任意の箇所を引き出して、分かる者には分かるんだから、それが分からんような裏なりの連中を対象とせずに「難解な『悪書』を出版せよ」——さもなくば星新一氏のショート・ショート「テレビ・ショー」に扱われたような（以下引用）「……人類が性欲を失いはじめ、あわてた政府が躍起になって、豪華なエロ番組を提供、子供たちになんとか性欲をよみがえらせてもらおうとむなしくあがく」お話のような事態が生ずるのではないだろうか、という穿った論評なのである。

不良図書という偏狭な見方を奇クがなされている事は悲しい。と同時に、スーハー読物と同一視して買う読者の多い事も淋しい現実である。奇クをテキストとして夫婦間に愛情の新風を吹き込む事の出来た果報な人もいる

事だし、紅衛兵の落書じゃあるまいし、社会がくつ返る訳ではない。特異な存在価値のある奇クを人生のカタルシスとして座右に置いて恥じぬ生活が出来て然るべきである。

【三行広告的】

新年号の編集部だよりで「読者通信では三行広告的なものは極力掲載しないように……」の記事を読んで、先月投稿した「奇譚雑談」の事が憂慮されたが、削除なく全文掲載されていたのを見て逆に戸惑った。大変な厚遇、尊重な配慮である。問題とした「十月号記載『奇譚雑談』」で、大塚、東浦両嬢の後援会設置の提案もしたのだが、読者間での反応はなかった。勿論、両嬢からも可否の感想もない。然し、私としては希望を放棄したのではない。編集者が打診して下さり、その返事如何でその運営を図ってみたいと思っている。分譲フォトの項目を見ると、仲々活躍されていて、職業的モデルとして重宝されてるようであるし、モデル難を託っているカメラ・マニアや画家が意欲を発散出来るように協力して頂けたら嬉しいだろう。モデルを職業としておられるなら特に収入保証を条件に組み込んで検討してみたいと思う。

【夜霧に消えたチヨコ】

大阪は、中央集権的な治安統治の行き届き過ぎた東京と違って何処か大らかで面白い。チヨコは「相手にうまく順応するのが私達の仕事のコツよ」と割り切るガイドガールだったそうだが、キタやミナミにあるガイドは出張のたびに適当に利用させて貰う。だから、辻村隆氏とチヨコの話（一月号カメラ・ハント八山田チヨコの巻）は楽しく読ませて頂いて、アハハと笑ってしまった。経験？ま、そういう思い出が、私にもあるからでしょうなア。

だが「可愛い悪女」は本当に憎めない。顔はSKD出身の苗笛光子の表情そっくり、消えずに残っていてくれたら、愛されるモデルの一人になったに違いないと惜しまれる。仕事の関係でよく考証が問題になるが、当時としては最高の美しい和服であり、上等の着附けであつたにせよ、昭和初期までの着物は姿はどうも野暮ったく見える。その伝で言うと残念ながら伊藤晴雨氏の遺産として見ることの出来る写真は、美的感覚からずれて映つて来て仕様がな。これから先、毛皮の襟巻をした正装の娘さんを見かける機会が多くなる事だし、007のポンド君じゃないがラッコの毛皮で愛撫しているような「現代の和装

美」を残す奇特な人はいないであろうか。

【女性の美学】

四十年の四月に刊行された布村東三著「女性の美学——乳房のすべて」（河出書房）は私の愛蔵書の一つである。この一冊で、女性のチャーム・ポイントといわれる乳房についての一切が生理的にも愛情面からも性愛（エロス）の面からも説明されている。私は女性を語る時、「君は女性の乳房をどう感じますか？」と質問を發し、それに対する答が曖昧陳腐である時は、自分の性癖について、一切語らない事にしてゐる。「あんなもの……」と否定的言辭を弄する人は、私なりの判断で「不健全」な男性である。こればかりは断定してもいい。そういう人が、いくら「紳士的に振舞うから」とプレイを申し込んでも目的はそれで行くから注意を要する。

乳房が女性の二次性徴であるところから、セックスについて語る事がタブーとされた長い歴史のうちに、あれ程成長にお世話かけた大事なもののまでも忌み嫌って殊更関心なさを装う風習さえ作り、未だに乳房に関する言葉を口にすると「変な人」と言われたり、言われやしないだろうかと懸念する場合が多いのは遺憾の極みである。世俗のオッサンが作っ

た映倫のコードは、遂に乳首なき乳房という片輪な日本の女を創ってしまった。馬鹿な事である。乳房を見て劣情を覚え、痴漢的行為に走る男は、既にそれだけで生存価値のない者だ。

切腹マニアといわれる三島由紀夫氏、病膏盲に入つて「憂国」というプライベート・フィルムまで作った人でさえ、「あなたの胸は、どうしてそんなに、打てばびびくようないい恰好をしているのでしょうか。私も商売柄ニセモノの胸には絶対だまされないだけの習練は積んでいます。（中略）あなたの胸は、ふくれて、口をとんがらして、「何よ」と言つてみたいな形で、かわいいこと、この上なしだ。胸が謙虚にうなだれていては困るのです」（三島レター教室「手紙の輪舞④」肉体的な愛の申し込み）「女性自身十月十七日号」と書いている。大いに乳房を讃美しようではないか。

女性が自分の發育の度合を知りたいと乳房を重点的に考えている事は、ざらに見かける悩める相談事であり、いかに女性側としても大切な箇所だと思つてゐる事が、豊隆術、器具販売の対象にされている事でも判る。K氏が奥さんに試みているのは吸引カップ式の

もの。最近の女性週刊誌に載ったプロポーション・アップの最新兵器は電池式の治癒美容器で、宣伝写真を見てアッと驚いた。俗に言う「乳枷」式なものであったから。

大きなバストは原始的だと言われたり、バストが大きい女性は脳が小さいなどという意見も出て喧噪したのは、一年前の事である。米国人が特に好むような巨大乳房崇拜熱（フ

イテシズム・オブ・ボザムズ）は美しさを観賞する気持から分離して考えるが、胸の線の綺麗な人は性格円満、明朗、健康な雰囲気をもっていて、女友達にするには最適である。学生結婚したというI夫人は、セーターを着る時はブラジャーをしな

い……という程自信のある美しい乳房だった。間もなく臨月を迎える増田夫人の授乳前後の「母親の乳房」が待たれる。母子の麗しき連帯象徴であるからだ。どうか健康に留意して素晴らしい瞬間をと祈りたい。99/100……「消えゆく胎児との対話」を味わった者として、愛の結晶が手許にない哀感を今しみじみと味わっている。

こほろぎの声は冷えてやみなし

北原 白秋

【鞭を持て】

交通規則に違反したタクシーの運転手を白バイの警官が本庁連絡を取る間、手錠をかけ

て表通りにある歩道上の建築現場の柱を支える鉄筋につないで晒しものにしたという事件が過日新聞を賑わした。行き過ぎだ、横暴だと当の警官を野次る言葉や非難が多かったが「パッキヤロウ」と怒鳴りたく私は、その処置を歓迎したものであった。犯罪のつぐないに罰があり、囚人として刑務所へ送られるが高い壁塀の中に閉じ込められても歪んだ性根が改まるものとは限らない。粗暴運転手の例とこれには論理に飛躍がありすぎるが、走る凶器で人身事故を惹き起した運転者は被害者に落度のない限り、盛り場に晒し場を特設して拘束しておけばいい。文明の発展、進化という御利益で、人権尊重が謳い文句の今日だが、軽薄・制禦のきかない者には直接的な処罰方法が一番効く。今まで主に女性に憐れる立場から項目別にいろいろ書いてはみたが、本当は「女ってどうしようもない馬鹿が多いからねえ」と喋りたい気持ちもあるのだ。二、三カ月続けて女性のための週刊誌を読めば、知性も教養も磨きがかかる筈なのに、一体何処を眺めているのだろう。エチケットについて懇切丁寧に写真やイラストで図解まで載っているのに、教化され日常の生活にいかしている人なんか、まるでいない様だ。街を人混みに





まざって歩いてみて、滑稽だとか、みっともないなあと思わないで済ませる人がいたら、これまた同じセンスの人間だと言っていいたろう。

ガムを口を開けながら噛む娘、しかも「噛んだ後のガムは紙に包んで捨てて下さい」と包装紙に印刷してあるのも頓着なくプイと吐き捨てる都市生活者としての資格なき軽輩。注意しても「何んだようオ」とくって掛けて来る連中は、言い聞かせても判らないのだから「鞭で打って」非を認めさせた方がいい。

単純な神経と嘖われるかもしれないが、意を汲んで下さる方もおられるだろう。社会を明るく楽しく感じよくして行く為には、外での生活は自分も厳しくマイ・プライバシーは思い通りに振舞うという規律が一般化し浸透すればよいのである。文盲がほとんどいないと言われる程度まで進んでいる文教政策であ

りながら一番低い教養でしか普及してないのが日本の教育である。今更の如く占領政策の謀略の怖しさを感じる。年寄りが分別くさい事ばかり言うのではなくて、ぐっと若い世代が分別を持たぬようにされて育って来た呪いの影なのである。イカスと思ったらその衝動で何事もやりかねない世代、「花と蛇」が好評でも得意になってはいけない。既に「誘拐して飼育を考えた」と抜け抜けと言う模倣族が現われて来ている。一現象と看過しに出来ない事ではないだろうか。読み物は「面白そ

うだから一丁やらかしてみようか」と思わせたいけないのである。

【糸島博氏】

久しぶりのなつかしい名前を見た。貴方は二年前もの事を御記憶だろうか。市電日本橋電停裏の喫茶店で落合ってから物珍しさもあって「個室喫茶」へ移ってお話合いをした東京からの風来坊の事を。四十一年の春、大阪に一ト月滞在した時、名刺にあった電話番号で御連絡申し上げたが呼び出し音を聞くばかりで遂にお会い出来なかった。でも御健在の御様子、安堵した次第。あれ以来私も貴方に負けず劣らず、かなりフォトを作製した。お目にかかる機会があったら御覧に入りたい。

【牢獄の寄席】

故北村喜八氏（新劇女優村瀬幸子氏の夫君——劇作・演劇評論家）の「ヨーロッパ演劇巡礼」（昭和二十六年、日本教文社刊）にパリの観光記で、こんな項目がある。

三十人位しか入れないシャンソン喫茶の記述だが、「もしこの建物の中を見る気があるなら案内しよう」という給仕人の言葉に惹かれて蠟燭の光をたよりに奥へ進む。石造りの建物は紀元四世紀の建築になり、牢獄と刑場に使われていた所。セーヌの河水を引込んだ

水責め用の古井戸、罪人を吊した天井からの太い鎖が次ぎ次ぎと照し出され、パリの歴史を残すカルナバル博物館にさえ本物のギロチンはないのに、そこには刃も錆びず本物のギロチンが置いてあり、本物の貞操帯も残っていた……という見聞記なのである。何ともはや興味のあるお話。「パリというのは底知れない深さをもった都である」と著者は感謝する。案内記にも載っていないその建物は「ウプリエット」と言うそうだが、近々パリへ行

く人があつたら訪れて貰って、報告を聞いたものである。

早稲田大学祭に「絞首台出現」のニュースを御覧になった方がおありだろう。十三段と階段の数も本式に白塗りの絞首台——忽然と現われた為に、大学当局も撤去させられずに顔を赤く曇らせて眺めていた、という事である。もう一つ、明治大学の地下室に、ヨーロッパの拷問処刑具「鉄の処女」があるという事である。

△華々しき女体緊縛の組写真集▽

限定版写真集
グラビア印刷

美しき縛しめ

第四集

一〇〇〇円(送共)
略号 △美4▽

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

◎縛られた美女ばかりのフオート八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)
ブロック石抱き責め (木村洋子)
箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)
両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
古墳後手吊り組写真 (木村洋子)
両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)
猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)

革拘束具による組写真 (大塚啓子)
柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)
セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)
野外に於ける晒責写真 (玉田・木村)
刺青女体の柱縛り責め (山原清子)
捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)
入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
両足吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真 八十葉▽

ミステリーがかった犯罪映画(ドイツ・題名失念)が公開された時、朝日新聞に扱われた記事だが、犯罪博物館が常時公開され(映画「ショック」)るのが日本の何処かにあっても良いと思われる。「拷問」という映画のシナリオと監修に当たった名和氏は日本の捕物研究家で有数なコレクターでおられるそうだし、まだ他にも世にかくれた蒐集家がいるだろう。人間の歴史を記録する意味からも「醜」の面を展示する施設があればいい。

田村茂氏の写真と文による「中世」から脱出するチベット(宝石、十一月号グラビア)に革命展覧館に展示されている拷問用具その他が見られるが、罪なき者を苦しめた器具として憎むと同時に犯罪の意識なき者に脅威となる物として展示供覧は割と役立つものになるかも知れない。

【シャネル五番】

故マリリン・モンローの言葉で一躍有名になったこの表現は、女性の「下着一切身に纏わず」という意味で今日の通り言葉である。

「モンロー自殺直前の電話はRケネディ?」(日本版、プレイボーイ創刊号)で扱われているモンローの写真、記事では一九五四年デイズと新婚旅行で来日した時と説明され

記者団のインタビューに答えている時のものとなっているが、写真説明も間違いなら扱いもおかしい代物である。同写真は映画雑誌スクリーンの三十九年五月、別冊春のグラマー特別号には「女房は生きていた」(未完成)

のプールシーンで全裸撮影を終えた直後のM・Mとなっている。しかし、その説明は後者が正しいのであって、それを問題にしているのではない。正しく「シャネル五番」という証拠写真であるからだ。M・Mが引出される時に載る他の誌面を探し出して頂き、比較して頂ければお判りになるだろう。修正と無修正との差が——アメリカでは好事家の間で珍重されプリントが大分流布したフォトであり、わざわざ留学中の人から特記づきで送られて来た一枚を著名な人に見せて貰ったのは、M・Mが自殺した直後の事であった。

同じモノにまつわるお話。梶山季之連載対談(漫画読本十二月号)ピンク女優の巻で、新高恵子さんの public hair が「来春、税金で困る時期になったら、三本だけは競売する積りであるから、この後記を信じる方は入札価格を当編集部に申し入れられたし」(梶山後記)となっている。バクチのまじないを欲しい方はどうぞ、である。

【ひらけゆく視野】

中途にちよこんと顔を覗かせたが、99\100消えゆく胎児との対話……とはドキュメンタリー・フォトグラフィアの剣持加津夫氏の著書名であった事は読者は御存知であったに違いない。

アウス(中絶)を真正面から採り上げた問題作だが、いろいろな点で注目している。大宅壮一氏との対談(週刊文春)で、女性は自分の持っている一番綺麗な所をもっと大事に考えるべきだという意味の発言もあったが、事実試験管に置き換える事の出来ない Cunt は両性の側に於て尊重したいものである。辻村氏のカメラハントに現われるビル壘の扱い方はどうも良くない。表現としても不適格箇所である。

表現という文字を使ったついでに面白い本を紹介してみよう。日本人はえてして外来語をよく使いたがるし、差支えのある記述をアチラ語で表わすと、伏字同様に取締りの目を避ける事が出来る。竹村健一氏の「禁じられた英語」(桃源社)は我々に教室で習わなかったコトバについて教えてくれる。Cunt もそこから使わせて頂いた。

愛の世界文学「キッド・ナップ」「浪速書

房」は「ピストルの弾も通りそうもない厚い肩をした」新聞記者ニックがアッチラという悪に挑戦するハードボイルド的なエロ・サデイズムの小説である。英国、仏国の陰のベストセラールといわれているそうだが、婦人記者に対する淫蕩な処刑は、想像で肉付けしなければならぬにしても、ボンド君生みの親かもしれない著名作家の匿名作品として読むのは興味がある。現実と非現実の問題点(保藤久人氏)……このあたりが「内容」と言う面で一番難点である事は確か……として「花と蛇」と併せ読まれる事を、不特定多数の読者におすすめた。無秩序、無警察(無保安という意味で)の事件の展開は危険なのである。

× × ×

夜が明けてしまった。深夜外出はしないことにしていると仰る貴女——藤村さん。白昼にならお会い出来ますか。私が毎日行きつけの喫茶店があります。しかし、其処が私のネグラだなどと書く誤解を招くかも知れませんが、洋菓子の店アマンド系の芸能人が多く憩いの場になっているガード下の店といえは見当がつかれるでしょう。帝国ホテル脇のT茶房です。訪ねて下さるのは貴女だけに限る

などと野暮な事はいけません。一月号の私の雑誌を読んだ方で、九十九の会に関心を持たれた方がおいでなら、気軽に足を運んで批判なり感想を述べて下さい。時間の許す限りお話し合いの機会を持ちましょう。但し時間は決まっていますから、会えなかったからと言って苦情は言わないで下さい。伝言板がありますから用件を記しておいて下さい。

【K夫妻のこと】

仙台へ栄転したK氏からお便りがあった。プレイのフォトを町のDPE屋に現像だけ依頼したら、返って来たネガにやたらと指紋が附着していたとの事で憂鬱がっぺおられる。外に出したのも間違いのかもしれないがやたら他人のネガに興味を持つ写真店もケシカラヌ。変態趣味とは、「旅館に御注意」の

限定版 写真集 △美しき縛しめ▽第七集 愈々好評!!

山原清子 妖艶緊縛 刺青の魅力を探ぐる 写真集 一部一〇〇〇円 略号 △美7▽

全部最近撮影の力作! 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版 (思わず息をのむ凄いポーズばかり満載)

このグラビア写真集の写真を撮影するために、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフォトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フォトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げてました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしておりませんから直接発行所へお申込み願います。
△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうるたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

栗瀬氏の指摘じゃないが、自分がないものを他所で利用してかかるこのような事を言えはいいであろう。私鉄の近郊開発に女ばかりの見世物を考え出した小林翁(故人)——日本人は判らないと欧米人は頭をひねるそうだが、我々にも解せない珍無頼な事が、それこそ一杯ある。批判精神がないのか怠情なのか、生きる事に自覚なき烏合の衆が多いのではないだろうか。現像液を二十度Cに保つのが面倒くささについて臍をかねだK氏だが豊の下は桃源境であるそうで、まず目出度い。

【ベツト御紹介】

提供のフォトは最新のもの。どの位緊縛したら痺れて来るとか、苦痛、限界のデーターを教えてくれる。有難い協力者だ。

ちゃっかり屋の静岡・真鍋慎吾兄——他人の輝で相撲とるみたいな事を言わず、御自分が率先してパートナーを作り、フォトの発表をなさったら如何。そうしたら「競作集」も夢でなくなるでしょう。

赤裸な告白を短文に纏めて発表された長野の吉沢頼子姉、貴女に注目しては失礼でしょうか? 親書賜れば幸甚。同様に兵庫の石崎夫婦にも、お目にとまって……となれば新しい年もまた、希望ある年となりましょう。

め、朱美の行為を甘受している。

これで、自分は、ここに集まるズベ公の前にも、淫情に敗北したみじめな姿を露出させてしまったという思いに、小夜子は、身も心も粉々に粉碎されてしまった感、このまま、心臓が裂りさけ、一そ一思いに死んでしまいたい気持であった。

朱美は、ようやく、小夜子の縄でしめ上げられて、乳房の、薄紅色の可憐な乳頭から……を離すと、いたずらっぽい笑顔を作りながら「ねえ、小夜子。も一度、貴女を愛させて。ね、いいでしょ」

と、柔かい部分を、そっと下から上へ、さすりあげる。

「——嫌、おねえ様、もう、もう許して、お願いです」

小夜子は、弱々しい視線を朱美に向け、なよなよと首を左右へ振るのだった。

朱美は、含み笑いしながら、銀子や悦子達の方へ眼くばせをする。

悦子は、テープレコーダのマイクを引き寄せてくる。マイクの冷たい金属が、小夜子の柔かい肌にと触れたので、小夜子は、得体の知れない恐怖感に、綿のように疲れた体をビクと硬直させるのだった。

「何を、何をなさる気なの、ねえ」

小夜子は、精一杯の哀願を、その濡れた瞳に浮かべて、ニヤニヤして立っている朱美の方を見る。

「フフフ、さあ、どう説明したら、いいのかな。あたい、羞かしくて口じゃいえないね。ねえ、銀子姐さん、説明してやってよ」

朱美は、クスクス笑いながら、銀子の顔を見るのであった。

「何でもない事なのよ。朱美のリードで、お嬢さんが、羞かしい音楽を奏でる。それを、あたい達が、テープにキャッチするだけの事なのさ」

そんな事を銀子がいうと、悦子が横から「大家の御令嬢が奏でたテープ音楽を聞きながら、その道の好きな男連中が、酒を飲むわけさ。わかるかい、お嬢さん」

小夜子に、その意味は、もとより、わかる筈はないが、ズベ公達は、おろおろした小夜子の表情を楽しみながら、小夜子の周囲をびったりと取り囲む。

悦子は、小夜子の足下に身をかがめて、優美な小夜子の太腿を指ではじくのだった。

「さ、お嬢さん、遠慮せず、片足をあたいの首にひっかけてみな」

「嫌、嫌」

小夜子は、赤らんだ顔を左右に振り、両腿をびったり閉ざすのだったが、悦子は、小夜子の片肢を抱きかかえ、肩に担ごうとするのだ。小夜子は、半身を悶えさせ、抗らったものの、つい今しがたまで朱美の邪惡な責めを受け、完敗した体は、思うように力が入らなかった。

遂に小夜子は、片肢を悦子に抱き取られ、悦子は、それをまるでモッコでも担ぐように素早く、自分の首に巻きつかせてしまおうのだった。

「あっ、ああ——」

小夜子は片足を奪われ、片足立ちになって紅潮した美しい顔を羞恥の極に曇らせる。

「何んだか、犬がおしっこするみたいね、お嬢さん」

銀子が、片足立ちをしている小夜子のあられもない肢態を眺め、そうだったので、ズベ公達は、どっと笑い出した。

朱美が、再び、小夜子の正面に立って、「一寸、羞かしいだろうけど、小夜子がどれほど、あたいに愛されて悦んだのか、その記録をとるわけだからね。さ、始めようか」

朱美が腰をかがめると、義子が、先程と同

じように、柱のうしろから手を廻わし、小夜子の柔かい二つの隆起を押さえるのだった。

小夜子の乳房は、特に敏感だと先程の攻撃で感じとった義子は、掌で包むように握った二つのふくらみを下から上へ押し上げるようにして、ゆるやかに……し始めるのである。

朱美は、両手の指先を使うのだった。左手は、かいくぐって、小夜子……の……に……を与えつつ、右手は、明らかに小夜子の……をつまみ上げ……そして、前にもまして、執拗に、また、甘美に――。

小夜子は、唇を震わせ。嫌嫌をするように首を左右に振りながら、

「お願い、私、死、死んでしまいわ。御生です。もう、か、かんにんして――」

と、繊細なすすり泣きを織りまぜつつ、細かい声で哀願するのだったが、情用捨なく、朱美の指は喰いこんでいく。

その二つを朱美の巧妙な……で、強く、または浅く、……されていくうちに、小夜子は再び、先程の情感が、一廻わりの強い切なさを持って、肉体の内部より盛り上って来たのである。

小夜子の美しい瞳は、幻でも見るような、うつろな色を帯び始め、悦子の肩の上へ、か

らめ取られている片肢の関節のあたりが、汗ばんでくる。

片肢立ちの下半身が、さも、もどかしげにくねり出し、それがあらわに、激しくなってきた小夜子に気づいた銀子は、マリの方を向いて、

「ねえ、マリ、義雄さんと社長を呼んどいでよ。そろそろ、川のせせらぎが聞けるからってね」

「あいよ」



マリが小走りに部屋を出て行く。

小夜子は、ただ白い頬を充血させて、毛穴から吹き出る血を必死にこらえようとしている状態にあった。義雄と田代が、間もなく、ここへ来て、ズベ公達にいたぶられ抜く自分を見て、声を立てて笑う気なのだろう。しかし、今の小夜子は、もうそうした屈辱に、泣いたり、わめいたりする気力はなく、火のよくな一心さで責めつつける朱美と義子に対し火のような一心さで、それを耐えているだけであった。

先程のズベ公達の巧みな誘発と素早い攻撃で、あっという間に……を極めてしまった小夜子であったが、今度は、それから、少し、落下したばかりのところ、七八合目ぐらいから、小夜子に対する攻撃が始まったわけで、くたくたの小夜子は、再び、ズベ公達に、引きずり上げられるようにして、よろよろ山頂へ登り始めたのである。

口惜しい、羞かしいという感覚は、今や、小夜子の神経からは遠のき、城を飛出し、矢玉の降る中へ突進していく自分を、ぼんやりと小夜子は感じ出していた。火のようなもので全身をかき廻わされる甘美な、そして、激烈な快さに、小夜子は、生臭い声を発して、

悦子の首にからませた片足を、ぶるぶる震わせる。

「フッフ、どう、小夜子、聞こえる？」

朱美は、一気に頂上へ追い上げず、ふと、行為を休止して、ただ、尻の……の方だけを……したりし、九合目あたりに、小夜子を徘徊させるのだった。

朱美は、銀子に眼くばせをする。

銀子が、ぴったりとマイクを当てがい、朱美のゆるやかな攻撃が再開した。

義雄と田代が、この部屋に入って来る頃には、朱美の巧みなリードで、臓物まであらわにしてしまっている小夜子が、朱美のいう、せせらぎを響かせ、テープにとられていた。「どう、社長、朱美のいう通りでしょう」

マイクを当てがっている銀子は、田代の方を振り返って、歯を出して笑う。そして、ふと立ち上り、今度は、マイクを小夜子の口の傍に近づけ、悦楽が高まるたびに段々とはげしくなる小夜子の甘美な、か細い、すすり泣きを録音するのである。

田代と義雄は、ただ呆然として、突っ立ち小夜子の今は一個の官能の火と燃えさかった姿をじっと凝視している。それは、そのまま男性の肉体に燃えうつる肉欲図絵であった。



「大家の令嬢も、これじゃ全く型なしだね」と、田代が義雄の顔を見て笑う。

義雄もニヤリとして、うなずき朱美に責めつつけられる小夜子の傍に近づくのだった。

小夜子は、何か遠い夢でも見るように濡れた瞳を、ぼんやり、義雄に向ける。その、ねっとりした小夜子の瞳には、義雄に対する憎しみや恨みなどは微塵もなく、ただ、切ないばかりの肉のうずきを義雄に訴えているような眼差しであった。

義雄は、どうだね、小夜子、と唇を突き出すようにして、熱い吐息を切なげに吐きつける小夜子の顔をのぞくように見て、眼を移向させた。朱美の指に翻弄され、何もかも露出させ、ねっとりした……を眺めた義雄は、何か、全身が宙に浮き上っていくような高ぶりを覚え出した。

「それ位でいいだろう。あんまり、続けると気が狂っちゃうよ」

と、義雄は、わざと小夜子に……寸前を徘徊させている朱美の肩をたたいた。

「そうね。じゃ、仕上げちまうわ」

充分、小夜子の……を録音した朱美は、急にピッチを上げ出し、小夜子を一気に頂上へ追い上げ出したのである。

「うっ、うう——」

小夜子は、狂おしげに眉を寄せ、ぐっと後方に首をねじ曲げ、名状の出来ない動物的なうめきをあげる。

小夜子が、絶息するような声をあげ、絶え入ってしまうと、悦子は、やれやれとようやく肩にかけさせていた小夜子の肢を外して、揃えてやる。

小夜子は、失神したのか、がっくりと首を深く垂れてしまふのだったが、縄に、きびし

く緊め上げられた裸身は、濃厚な体臭を発しながら、ひくひくと波打ち、後をひく深い陶酔の余韻に浸っているものであった。

「はい小夜子、遂に二度目のノックアウト」

ズベ公達は、大口を開けて笑い合う。

放心忘我の状態になってしまった小夜子の周りを取り囲んだズベ公達は、脂汗にまみれた小夜子の肉体をしげしげ見つめながら、勝ち誇ったように、はしゃぎ出す。

「すばらしい——してるわよ、このお嬢さん。だってさ。……ついてくるんだもの」

と、朱美がいい、再び、ズベ公達は、どつと笑い出すのであった。

「それに、おっぱいが、すごく敏感なのね、このお嬢さん」

と、次に、小夜子の乳房を責め上げた義子が語り、ズベ公達は、小夜子の肉体についての感想を、わいわいしゃべり合うのである。

「よし、あとは、津村氏の仕事だ。お前達はこちらから引揚げろ」

と、田代は苦笑しながら、女達にいう。

「ハイハイ、それじゃ、ごゆっくり。約束通り、録音したテープは、ここへ置きますからね」

と、銀子は、義雄に、テープレコーダを渡

し、朱美の肩に手をかけるようにして、出て行くのだった。

「じゃ、楽しい一刻を送られるように祈って僕も退散しよう」

と、田代も、口元をくずし、義子や悦子達と一緒に部屋を出て行くのである。

ほっとして、義雄は、無残に打ちひしがれている小夜子の前に立つ。

「おい、どうしたい。しっかりしろよ、小夜子」

小夜子は、義雄に激しく肩を揺すられて、ぼんやり眼を開いた。

焦点の定まらぬ空虚な眼を、ぼんやり義雄に注いだ小夜子は、悲しげな表情になって、視線をそらせ、

「——もう、小夜子、駄目なのね」

と、ぼつたり一言いい、閉じ合わせた瞳から、涙を一筋二筋、白い頬に流すのであった。

ズベ公達にまで、浅ましい姿を見せてしまった自分のみじめさを義雄に訴えているのである。

「フフフ、とか何とかいったって、万更でもなかったようじゃないか。それが何よりの証拠だよ」

義雄に指さされ、小夜子は、はっと顔をそらせるようにして、羞恥に染まった横顔を見せる。

そんな小夜子が、いじらしく、義雄は、小夜子の光輝のある肩に手をかけ、そっと小夜子の唇を吸った。

小夜子は、義雄の頬に、熱い自分の頬をすり合わせるようにして、小さく、すすり泣きながら

「小夜子は、もう、あなただけが頼りですわ。お願い、早く、小夜子をここから——」
「わかったよ」

義雄は、小夜子の切ないばかりの哀願をうるさそうにしながら、ハンカチを取り出して腰をかがめる。

うっと小夜子は、眉を寄せ、歯を噛みしめるようにして、その行為を甘受し、そして、あえぐようにして、いうのである。

「ね、あなた、さっき、おっしゃった事は本当に約束して下さいね。内村さん達に、あの写真を送るような事は絶体になさらないで」「そんな事より、小夜子、君、本当に感じ方がすごいんだね。いい所のお嬢様にしちゃ、一寸、どうかと思うな」

義雄は、小夜子のいう事には耳をかさず、

小夜子のそれにじつと眼を注ぎながら、そんな事をいうのだった。

「小夜子は、小夜子は、あなたの、おっしゃる事なら、何でも聞きます。ですから、お願い、私のお友達に、あんな恐ろしい写真を送る事だけは——」

「さ、小夜子、何時までも同じ事、ブツブツいわず、少し、肢を開いて」

義雄は、冷淡な表情になって、小夜子の……だけをするのだった。

狼の酒宴

岩崎の一行がやって来たのは、その夜、十時を少し廻わってからであった。

森田、川田、それに義雄達が玄関に出迎えるに出ると、タクシーから降りた、やや猫背の岩崎は、幹部やくざの谷村と江原をボディガードにするようにして、玄関の敷石の上に立ち、開口一番、

「酒と女の用意は出来てるやろな」

と、膝を折って、上り框に坐っている義雄に向かい、ギョロリと眼を向くのである。

「はあ、その点は、万端、手ぬかりなく」

と、義雄は、手をつくようにしている。

岩崎は、満足げにうなずいて、上へあがった。

岩崎は年の頃は、四十五六、皮膚も筋肉も、赫黒く緊って、やはり、何百人ものやくざの親分だけあり、その眼には、普通人には見る事の出来ない一種の殺気を含んだ鋭さがあった。

二階の大広間には、すでに酒肴の用意がされて、岩崎と二人の乾分が着座すると、襖が開いて、黒紋付の姿に変えた田代が顔を出した。

「よくおいで下さいました」

と、田代は、関西の大親分、岩崎大五郎に對して、型通りの挨拶をかわし、明日よりの岩崎親分歓迎賭博会についての段取りを説明し始める。

明朝、何々組や何々一家に廻状を廻わし、夕方、七時より、この大広間で盛大な賭場を開くという、その手筈の説明に田代は入ったが、岩崎は全部まで聞かず、

「よし、わかった。それより田代はん。あなたの手紙にあったすごい美人というのが、さっきから気になるんや。一寸、顔だけでも見せてくれ」

と、義雄に注がれた酒をぐいと一息に飲ん

で、田代の顔を睨みすえるようにしている。

すばらしい美女を揃えたという田代の手紙につられて、わざわざ大阪くんだりから出て来て、賭場を開いて、莫大な場代を田代に儲けさせてやる気になったのだから、もし、女を見て気に入らなければ、岩崎は、今すぐにも、ここを出て行こうという気持だったのである。

だが、その点、田代には自信があった。

「それでは、早速、お眼にかけましょう」

田代は、森田の方を向いて、眼くばせをする。岩崎に催促されなくとも、酒席の余興として、この場で静子夫人に日本舞踊を披露させる事になっていたのである。

森田が静子夫人を迎えるために部屋を出て行くと、田代は、恐縮した足どりで、岩崎の所へ近づき、膝を折って、

「ま、親分、お一つ」

と、酒の酌をし、そのお流れを、かしこまっ

て受ける。

「これから、ここへ登場する女は、元、或る大金持の令夫人でしてね。年は二十六、むっちりと白い脂の乗った女盛り、映画女優そのけの美人ときてますから、親分のお気に入ること、まず間違いはないと思いますよ」

「ほほう。そんなに人を嬉しがらせるもんやないぜ。田代はん」

岩崎は、白眼勝ちの剛い眼をほころばせて田代の返杯を受けるのだった。

「そんな別嬪が何んで、あんたの持物になったんや」

「ま、色々と事情がありましたね。これは鬼源という女の調教を仕事にしている男から聞いたんですが、女には、マゾヒズムという血を、生来身体の中に持っているらしいのですな。大家の令夫人として贅沢三昧に暮しているうち、その反動のようなものが起こって、人間以下の仕打を受ける世界に飛びこんでみたくなったんですよ。今は、その女、以前の事は一切、忘れて、私共に奴隷として奉仕しているんです」

「ほほう。何やはっきりと事情はわからんがその女がマゾという事になりや、こっちは都合がええ。わしは、一寸したサドの方やさかいな」

それを聞くと、田代は、満面に笑みを浮かべて、膝を乗り出した。

「親分、それなら、こっちとしても願ったり叶ったりですよ。今夜、親分と枕をかわす静子、つまり、これから、ここで一さし、踊っ

て見せる事になっている元財閥の令夫人なんですが、これは、どのような責めにも耐えられるよう充分、仕込んであるんです」

と、田代がいった時、襖が開いて、森田と鬼源に前後をはさまれるような形で、静子夫人が入って来たのである。

それは、久しぶりに着衣を許された静子夫人の、まるで博多人形でも見るような美しい姿であった。

着物は、落ちついた色の濃淡をはっきりさせた渋いもの、色変りの織縮緬に唐織お召の丸帯をしめ、華奢な首筋をくっきり浮き立たせた鹿の子絞りの半襟の艶めかしさなど、全く滴るばかりの色気をたたえた美しさだが、それに、あでやかな日本髪のかつらが見事に調和して、岩崎は、思わず、居住いを正したほどであった。

「どうです、岩崎親分、日本舞踊にせよ、小唄、生花、すべて名取りの域に達している天下の美女です。お気に入りしましたか」

田代は、息を吞んで、静子夫人を凝視している岩崎の横顔を楽しそうに見ながらいうのだった。

「うむ」

岩崎は、ただ唸るだけ、完全に日本調の美

女に魂を奪われてしまったようだ。

そこへ、今朝方、一旦、遠山家へ戻っていた代が、障子を開けて入って来、岩崎の前へ来て、両手をつく。関西の大物が田代の所へ来ると聞き、何か手伝う事がある気になって、かけつけて来たのだろう。

「手前、千代と申し、遠山隆義の……」
と、自己紹介を始めるのだったが、静子夫人のあで姿に心奪われてしまっている岩崎には、ただ、わずらわしいだけだ。

「話は後で聞く。あっちへ行っとれ」
と、腹立たしげにどなったので、千代は、おかめがベソをかいたような顔つきになり、おろおろとして、義雄の横へ着座するのであった。

「生憎、三味太鼓のお囃子が間に合いませんので、悪声ながら、手前が端唄の伴奏をさせて頂きます」

と、田代は幾度も咳払いをするのだった。
静子夫人は、森田と鬼源が用意した金屏風の前に立ち、岩崎の方を向いて、膝を折ると静かに一礼する。

へ心して、我より捨てし恋なれど――

田代が、痰のからまったような奇妙な声をはり上げ出したので、岩崎は、眉をしかめ、



酸っぱい顔つきになったが、金屏風の前で、静かに踊り始めた静子夫人の錦絵から抜け出たような美しさに、気もそぞろになり、身を乗り出すようにして眺め出したのであった。水もしたたる日本髪姿の艶麗な美女が、手や上体をゆるやかに折り曲げて、優美な曲線を作り、しずしずと踊り出すと、岩崎だけではなく、岩崎のお供をして来た幹部やくざま

で、陶然とした面持で見とれているのであった。

田代は、ようやく一節を唄いおわり、岩崎に向け、銚子を差し出したが、岩崎は、顔中の神経が麻痺してしまったよう、トロンとした眼つきを、踊り終え、畳の上へ手を落としている静子夫人に向けている。

「さ、岩崎親分、これから面白いのですよ」

と、田代は口元を歪め、静子夫人の方へ顔を向けていった。

「さ、次は、裸踊りだ。

景気よく衣裳を脱いでもらおうか」

その声を合図にしたように、屏風のうしろに隠れていた鬼源と森田が、舞台の黒ん坊よろしく登場して、静子夫人を引き立たせ、帯の結び目に手をかけるのだった。ほんやりそれに視線を向けていた岩崎は、はっと我に返ったように

「裸踊り？」

「そうです。今度は、あの美人を生まれたまんまの素っ裸にむき上げて、奴さんを踊らせようという趣向です」

田代は、どんなもんです、といったげな顔つきで岩崎を見たが、岩崎は手をあげて、それを止めるのだった。

「わしにサービスしてくれようという気は有難いが、その別嬪は、今夜のわしの妻やないか。皆んなの見ている前で丸裸にするとはけしからん」

と、むつかしい顔をするのである。

今、ここで、あの美女を全裸にして、酒席の余興を務めさせるという事は、今夜、これから二人だけで行う楽しみをそぐ事になる、つまり、出し惜しみというやつだと、田代は岩崎の気持がわかり、もっともらしくうなずいて

「成程、それは、気のつかぬ事で、失礼申しあげました」

と、岩崎に頭を下げ、早速鬼源の方を見て「それじゃ鬼源、静子を親分の寝室の方へ運んでくれ」

と命じるのである。

満坐の中での裸踊りを許された静子夫人は岩崎の方に、ちらと淋しげな感謝の眼差しを

送り、鬼源達に解かれた帯を結び直すのである。

静子夫人が心持ち顔を伏せるようにして、再び、森田と鬼源に前後をはさまれて部屋を出て行くと、岩崎は、手酌で一杯、酒をあほり、

「田代はん、大いに今の女、気に入ったぜ。

よし、明日の賭場の段どりは一切、あんたに任す。よろしゅうやってくれ」

「どうも有難うございます」

「そのかわり、わいは、ああいう別嬪を見ると、色々な方法で、さめざめ泣かせたい趣味があんどのや、あんたもその道の理解者やったら、わいのいう事わかるやろ。明日の昼頃まで楽しませてもらうけど、かまへんやろな」すると、義雄の隣で、かなりいい気持に酔っぱらってしまった千代が、再び、ふらふらと出て来て、岩崎の前に、べたりと坐る。

「ええ、親分、煮て食おうと焼いて食おうと親分の御自由。あの女の抱え主は、私と思つて何でも御相談して下さいましな」

千代は、銚子をとって、岩崎にすすめながらいうのだった。

あの美しい静子の容貌にくらべて、世の中には何とまあまずい面の女もいるものだ、と、

岩崎は、千代を見て、何か酒のまずくなる気分だったが、田代に、これは、遠山財閥の令夫人であると聞かされて、岩崎も、おどろき「これは失礼、しかし、あんたとあの美人とは、一体、どういう関係が——」

「ホホホ、それはいわぬが花。とにかく、深い因縁がありますの。さ、まだお開きにするのは早過ぎますわ。もう一杯、ぐっとあけてお流れを下さいな、親分」

人見御供

岩崎の寝室にあてられた部屋は、二階の表座敷、一間の床の間に違い棚のついた八畳と寝所の六畳の二間つづきである。寝所の六畳には、一重ねの夜具、二つ枕、春慶塗りの艶めかしいスタンド、チリ紙、水さし等が型通りにちゃんと置かれ、襖や屏風には、極彩色の浮世絵が描かれてある。

静子夫人は、八畳の間の鏡台の前に坐り、日本髪のかつらを外し、若奥様風のシックな髪型に悦子とマリの手でセットされていた。

そうした静子夫人の横に腰をおろし、煙草を吸っているのは、森田と鬼源である。

「わかったな。今いった通り、この座敷のあ

ちこちには、隠しマイクが仕掛けてあって、おめえと岩崎親分のやらかす事は一切、社長の部屋に通じる事になってるんだ。鬼源に教えられたよう岩崎親分に、こつてりしたサービスを盛り上げねえと、あとで折檻を受ける事になるんだぜ。こちとらは、じっと聞き耳を立てているんだからな」

と森田はいい、ボンと静子夫人の肩をたたくのだった。

森田や鬼源は、静子夫人が、例えば、岩崎に対し、救いを求めたりするような事態を恐れ、田代と相談して、この部屋のおちこちに盗聴マイクをとりつけたのだが、そのもう一つの意味は、鬼源の徹底した教育を受けた静子夫人が、岩崎に対し、どのように振舞い、官能を高ぶらせるか、それを調べるという事もあったわけである。

「だがよ、奥さん。お前も今夜は久しぶりにきれいな着物を着せてもらって、御満悦だろう。さっきの踊りは全く見事だったぜ。ただ社長の小唄がどうもパツとしなかったがね」

そういつて、森田は、ケツケケと笑う。

鏡の前に坐り、悦子の美容を受けている静子夫人は、ただ、じっと鏡の中の自分に見入っていた。

「はい、出来上り、今日は一段とお美しくなつたようよ、奥様」

悦子は、ようやく仕事を終え、静子夫人の横顔を見つめる。

その憂いを含んだ静子夫人の美しい容貌には、如何にも疲れ果てたような弱々しい翳を帯びていたが、それが憂愁の美を持った静子夫人の容貌に一種の輝きを添えた感、ふと、人間的な美しささえ感じさせるのである。

襖が開いて、銀子と朱美、義子の三人が、盆に盛った酒や料理を運んで来る。

岩崎の寝室に一応、酒と料理の支度をしておくようにと田代に命令されて運んで来たもののらしく、義子は不満顔でいう。

「ちょっと、手伝ってよ。あたい達、女中じやないんだからね。こんな仕事、苦手だよ」

銀子は、鏡台の前に坐っている静子夫人に声をかけるのだ。

「ね、そこのお美しい若奥様。これを召し上げるのは、あんたのお客なのよ。乙にすまじこんでいず、手伝いなよ」

そういつて、銀子は盆を投げ出すように畳の上へ置き、朱美も義子も、それにならうのだった。

静子夫人は、それを眼にすると、静かに立

ち上り、盆を取って卓の傍へ運んで行く。

しつとりとした和服姿の静子夫人は、彼女の裸身ばかり見つけづけていたズベ公の眼には何かまぶしく、新鮮な美しさに映じたのであろう。

「まあ、今夜の奥様って、見間違えちゃったわ。すごくきれい。いかしちゃうな、全く」などと、銀子達は、うっとりした眼を夫人に向けるのだ。

運び膳や盆の上の料理類を卓上へ配置していく静子夫人の手つきや動作には、上流社会で磨き上げられた艶麗なものが感じられ、これが、誘拐されて以来、浣腸その他、数々の地獄の責め苦に脂汗を流して、のたうった女性とは、どうしても思えない。そして、今、静子夫人は、自分を引き裂き、田楽刺しにするであろう狼のために、酒肴を卓上に並べる仕事をしているのだが、久しぶりで着衣が許され、両手の自由がきく事の悦びを噛みしめるようにして、そうした夫人の仕事ぶり、身のこなし方には、ふと、生彩さえ感じられるのであった。

静子夫人が、働き始める間、ズベ公達は、部屋の中をキョキョロ眺め廻わり、六畳の寢所の方を見て、

「フフフ、ここで、あの若奥様、岩崎親分と………するのね」

と、卑猥な単語を使い、仲間同志顔を見合わせて、キヤッキヤッと笑い合う。

だが、静子夫人は、わざと冷淡な顔を装い食卓の用意を終えて、

「あの、これで、よろしゅうございますでしょうか」

と、森田の顔を見上げるのである。

いいだろう、と森田はうなずき、今度は、ズベ公達の方を向いてどなる。

「さ、手前達、邪魔だ。出て行きな。間もなく、ここへ岩崎親分がおいでになるんだぜ」

それを聞くと、ズベ公達は、あわてて部屋の外へ退散し、廊下の方から、口々に黄色い

声を出して、静子夫人を弥次るのであった。

「いいかい、奥さん。しっかり腰を使うのよ」

「うんという声を出して、お泣き遊ばせ」

ズベ公達のそんな哄笑が遠のくと、ほとんど入れ違いに岩崎が千代と肩を組み合うようにして、酒臭い息を吐き合いながら、入って来たのだ。

「おやおや、そんなに酔いになって、いいんですか、親分」

森田と鬼源は、苦笑しながら、岩崎と千代を卓の前に坐らせる。

「大丈夫、心配するな。これ位の酒、酔うよ
うな俺じゃないわ」

岩崎は、咆哮するよようにいい、卓の上の酒に更に手を出そうとしたが、それを千代は止めて、

「駄目、親分、これ以上、飲んだら、本当に役に立たなくなるわよ」

と、銚子を取上げ、自分の盃に満たして、ぐいと飲むと、すわった眼つきで四囲を見廻わした。

「静子はどこにいるの、静子は」

静子夫人は、部屋の隅に小さく正座し、この泥酔した二人を、おろおろして見つめているのだった。

森田と鬼源は、処置なしといった顔つきで静子夫人の傍へ寄り、

「じゃ、岩崎親分のお守りは頼んだぜ。俺達は酔っぱらいは苦手だ」

と、後は一切、静子夫人に任した形で逃げるように立ち上る。

「待って下さい」

静子夫人は、泣き出しそうな顔つきになって、二人を呼び止めた。

「お願いです。千代さんを何んとか、ここから連れ出して下さい。あの方がいる前では、私、とても——」

同性の千代の見ている前では、とうてい、

鬼源に教示された仕草を演じられないという静子夫人のいう事は、森田も鬼源も、もっともだと思うのだが、酒ぐせの悪い千代は、一旦、荒れ出したら、仲々、手がつけられないという事を二人は川田に聞いて知っている。

「馬鹿いうな。千代夫人だって、俺達にとっちゃ大事なお客だ。相手が男であれ、女であれ、サービスこれ務めるのが、おめえの仕事だぜ」

などと鬼源はいい、森田をうながして、外へ出て行くのであった。

「何してんのよ、静子、早く、こっちへ来て私達にお酌しないか」

千代は、声を張りあげた。

唇を噛みしめ、硬ばった顔つきになって、静子夫人は立ち上り、静かに二人の前に進み寄る。

「ほんまに別嬪や。この齢になるまで、わたしはこれだけの美人に出逢うた事がない」

岩崎は、静子夫人の一举一動に眼を細め、感じ入ったように矢鱈にうなずくのである。

静子夫人は、岩崎と千代の前に坐ると、卓の上の銚子を手にし、

「お一つ、如何が」

左手で、軽く袂を押さえ、艶然と頬笑みかけて、岩崎に酒をすすめるのであった。

踊りの名手で、どこからどこまでも、柔軟な線で取囲まれた美しい静子夫人に真向うから盃をさされた岩崎は、ただ、うっとりし、顔中しわだらけにしている。静子夫人を芸者とするなれば、これ程、美しく洗煉された芸者らしい芸者もないであろう。岩崎は、盃の酒をぐいと口にふくみ、そわそわとして、静子夫人に返杯する。

そんな岩崎と静子夫人との間に、何か腹立たしい嫉妬めいたものを感じた千代は、

「ね、静子、そんなお酌の仕方なら、三流地の芸者だってやるよ。私達はね、丸裸になった静子に、お酌がして欲しいのよ」

と、眼に陰を浮かべていうのである。

えっと静子夫人は、千代のけわしい顔を見ると、すぐに岩崎の方へ救いを求める視線を向ける。もとより、これからは、千代に強制されるまでもなく、鬼源に調教された通り、岩崎に対しては、羞かしい色々な方法で媚びを売らなければならないが、やはり、以前の

自分の使用人であった千代の前では、体がすくんでしまふ静子夫人であった。

しかし、岩崎は、先程のように、静子夫人に対して同意は示さなかった。

「男の連中が見ていると、あんたも羞かしいやろが、女やったらかまへんやろ。さ、ここはわし等三人だけや。何もかも見せてんか」などと岩崎はいうのである。

田代達に、静子という女は、どのような要求でも喜んできくよう完全に飼育されていると岩崎は聞いていたのである。

臨時増刊号

小説・絵画「花と蛇」 特集
絶賛！注文殺倒！

売切れぬ中にお早く

目下発売中！ 乞お申込み

定価一部 五〇〇円

(送料三〇円但し当分の間当社負担)

団鬼六作の名作、長篇小説「花と蛇」千数百枚一挙登載、三三〇頁。四馬孝描く「花と蛇」テーマ画集『十六葉』口絵収録。今すぐ天星社へお申込み下さい。

「モタモタせず、早く素っ裸におなりよ」

酒ぐせの悪い千代は、手にしていた盃を静子夫人の膝のあたりに投げつけていう。
「わかりましたわ」

静子夫人は、ほっと投げやりな溜息をついて、千代の投げた盃を拾い上げ、卓の上へ置くと、ゆっくりと立ち上るのである。

「一寸、失礼致します」

部屋の隅へ歩いて行った静子夫人は、悲しそうな瞳の焦点を、どこへともなく慄わせながら、静かに帯を解き始めるのだった。

岩崎と千代は、ふと、顔を見合わせて、ニヤリと笑う。

千代は、岩崎に対し、女幫間の役を買っているつもりであろう。盛んに卑猥な話を連発して、岩崎を面白がらせ、岩崎も、遠山財閥の令夫人と名乗るこの不思議な女に対して、警戒心はなくなり、酒席の良き話し相手にしてしまった感である。

静子夫人の手の動きにつれて、幾つもの腰紐が、キュキュと音を鳴らして解けていき、長い帯が、とぐろを巻くように畳の上に落下する。

「早くしてよ、静子。親分が、貴女の……を見たくて、うずうずなさっているのよ」

そんな事をいって、持前のカン高い笑い声を張り上げる千代。

静子夫人は、黙ったまま、着物を肩から脱いで行く。

眼もさめるような緋の長襦袢一枚の姿になった静子夫人を眼にした岩崎は、涎でも流しそうな顔つきになり、フラフラ立ち上るのであった。

「あら、親分、どこへ行くんですよ」

という千代の声を背後にしながら、岩崎は何かにとり憑かれたように、静子夫人に近寄り、たまらなくなつたのか、夫人の肩をうしろから抱きしめるのであった。

不意をつかれて、静子夫人は驚き、はっと体を硬化させるのだったが、予期していた事でもあるので、

「すみません、今、すぐ裸になりますわ」

と、片頬に微笑を作り、たしなめるように岩崎にいう。

「ええ匂いや。全く、たまらんわ」

岩崎は、艶めかしい長襦袢に覆われた静子夫人の柔軟な肩を力一杯抱きしめ、その甘ずっぱい香料に酔ったかのよう、しきりに鼻をすりつけるのであった。

(未完)

△女相撲物語▽

△カット・雪崎 京人提供▽

花の女斗美たち

(11)

奮 斗 士 好 太

夏休みが終わり、二学期の始まりです。

いつものことながら、終わってしまいますと、アッという間の短い期間です。

でも、ことしの夏休みは、合宿などというできごとあつて、中学校の頃のように何となくまとまった思い出のないような休みではなく、ずっと内容の豊富な夏だったと思うことができたのでした。

ひさしぶりで見る教室のお友だちの顔は、さまざまです。見ちがえるくらいに日やけして、ほんのひと夏のうちに別の人のようにはつらつとした表情で登校してきた人や。

その反対に、相変らず生ッ白い顔色で、まるでついきのう別れたばかりみたいな気持の

する顔など、いろいろなのです。

だいたい別けますと、私たちのように、スポーツのクラブに入っているグループは、みな前の方で、とくに、私たちー私やヒロちゃんなど相撲部員は、文字どおり素ッ裸で猛練習をしていたのですから、日やけの方もいちばん目立つのでした。あの方ーさっぱり変らないグループは、文芸のクラブに属しているひとたちで、例の「ふんどしかつき事件」の田村さんなども、もちろん、その中に入るのでした。

「アーラ、タクマシクコゲちゃったわネエ」と、声をかけられてふり向きますと、水泳部の中村明子さんでした。

ちょっと小柄で、かわいい顔をしているひとなのですが、その肌の黒さと言ったら、ほんとうにみごとなものなのでした。

こがした上にさらにイブシをかけたと言いたいくらいのコゲ茶色で、その顔の中で歯ばかりがイヤに白く光っていて、何だか黒人でも見るみたいでした。

「ヤケたわネエ」

と、思わず感嘆の声をあげてツクツク見直します。

「そうジロジロ見つめないでヨ、だって、室内プールがないから仕方ないのよ」

中村さんはそう言いわけをして「ハダカになると水着のあとがクッキリよ、

ていさいが悪くてお風呂屋さんへも行けやしない」

と、明かるく笑うのです。
「いい記録つくれた？」

足とり
きまり



彼女が水泳部のホープなのを思い出してそ
う尋ねますと

「まだまだよ、でも、もうすこしで去年の県
下ベストテンに入るってとこまで行ったの
よ」

「へえ、すごいじゃないの、じゃ来年は大
会に出られるわね」

「まだわからないわ、この調子が続けばい
いんだけど、でもわたしたちの方は、もう
シーズンオフでしょ、だから……」

中村さんは首をかしげて

「来年のシーズンになって泳ぐときにまた
逆もどりでさっぱりダメだったなんてこと
になるかも知れない」

「だいじょうぶよ。一度つけた自信なん
て、めったに忘れることなんかないんだっ
て」

と、私が力づけるのへ中村さんは、

「だいぶ自信つけちゃったようね、テルち
ゃんこそすっかりタクマシクなったようだ
わ、どうだった？ 相撲部って合宿なんか
やるんでしょ」

「ウン、楽しかったわ」

私は、そう答えながら、合宿の日のこと
をちよっと想い浮かべました。

「どこへ行ったの？ ことしは」

と、尋ねられて、私がそれに答えようとし
た時、うしろで大きな声がしました。

「ヒャア、誰かと思ったら」

と、大げさに驚きながらやって来たのはヒ
ロちゃんでした。

「黒人の留学生が入ってきたのかと思っちゃ
ったわ」

「オーバーだわね、あなたこそ、そんな生っ
白い顔して何してたの、日かげでひる寝ばっ
かりしてたんでしょ」

中村さんがやり返します。

「こっちは太平洋を横断するくらい泳いでる
のよ、これくらいやけるのは当たり前まえなの
よ、ナニサ、そんなおトーフみたいなの」

中村さんの言うとおり、ヒロちゃんの顔色
は、夏休みに入る前と同じように色白な肌の
ままに見えるのでした。

もちろん、ぜんぜん日やけしていないわけ
ではなくて、ヒロちゃん自身としてはかなり
黒くなっているのですけれど、それでも、私
や中村さんなんかにくらべたら問題にはなら
ないのでした。

けれども、ヒロちゃんは、中村さんの言う
ようにサボッてばかりいたわけではありませ

ん。

サボるどころか、合宿の時なんかは、毎日ひといちばい早く起きて、マワシひとつの素ッ裸になって新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んで張り切る有様で、おかげで私もねむい目をこすりながら、おつき合いをさせられたのでした。

上級生の胸をかりて汗を流すのも、最初に飛び出すのはたいていヒロちゃん、それになかなかへばらないのでした。

おしまいには、起き上がって、またぶつかりうとするそのマワシのお尻を待ちくたびれた津野さんに引き戻されたりするくらいで、サボっていたなんて、とんでもないことなのです。

そして、私たちも、ヒロちゃんのファイトにひきずられて、力いっぱい上級生の胸をめがけてぶつかって行ったものでした。

からだがフヤけるくらいに汗をかいて、肩や背中や、そして、おとめの命の胸もとから乳房の谷間を流れ落ちるしずくをこそばゆく感じ、降り注ぐ真夏の太陽が、開き切った毛穴のひとつひとつから黄金色の息吹きを送り込んでくれる時、青春のよろこびにからだは、ふくれあがって行く思いでした。

こうして、私たちの肌は一日一日ときたえられて、たくましく日やけして行きました。

練習を終えて、マワシをはずしている時だって、そんなキチンとした服装をしているわけではなく、せいぜいショートパンツスタイルなので、いやでもやけるわけです。それでも、ほかのひとたちが、皆肌をこがしているなかに、ヒロちゃんだけはいっこう日やけしないように見えるのでした。

津野さんなども最初のうちは

「日やけしないなんてうらやましいわア」

と言っていたのでしたが、みんながだんだん黒くなってきますと、色の白いヒロちゃんは何だか特別な存在みたいに見えるのでした。

「アタシはね」

と、ヒロちゃんはスマシた顔で

「育ちがちがうから、そんなにキタナラシクならないの」

「そういう生っ白いのにはハヤらないのよ、最近のレディは日やけするのが夏の最高のお化粧なのよ」

「でもねエ」

とヒロちゃんは、わざとらしく深刻な顔をつくって

「ちょっと過ぎたんじゃないかしら」

と言ってから、横目で私の方を見ながら、片目をつぶって見せ、そしてニヤリと笑いました。

たしかにヒロちゃんの言うようにお化粧と言うには中村さんの肌色はかなりやけ過ぎているのです。

私はふき出しそうになりながら

「でも、水着のあとをハッキリつけるってのが流行らしいわよ」

と、助け舟を出しますと

「アラ、水着のあとがハッキリわかるほど、このひとは白かったかしら？」

と、ヒロちゃんはそんなニクマレ口をたたくのです。そして

「そんなにハッキリわかるんなら水着なんか要らないんじゃない？ ヌードで泳げばきつといい記録が出るわよ。水の抵抗がないから……」

「まあ、ニクラシイッ」

中村さんはとうとう半分くらい本気で怒ってドンとヒロちゃんの背中をたたきました。

「キャア、いたいワア、わたし肌が弱いんだよ」

ヒロちゃんは、また大げさに悲鳴をあげま



したが、ふと思いついたように

「ねエ、テルちゃん」

と私に向かって

「あたしたちも日やけのあとがついちやった

かしら？」

「なにが？」

「なにがって、つまり……マワシのあとよ、

おシリにマワシのあとなんかがついてたりし

たんじゃみっともなくてお風呂屋さんへも

行けないわ」と、ヒロちゃんはすっかりし

よげて

「ね、テルちゃん、あんた調べてきてよ」

「調べるって、どうやるの？」

「おシリを鏡にうつして見るのよ」

「いやだわ、そんなの、ヒロちゃんがやれ

ば良いでしょ」

「あたしはダメなの」

「どうして？」

「妹といっしょの部屋でしょ、まさか妹の

前でおシリを眺めてるわけにいかないわ」

私は、おシリをむき出しにして、それを

鏡にうつして見ている形を想像して思わず

ふき出してしまいました。

「いいじゃないの」

と中村さんがさっそく元気づいて

「あとがついてたら便利だって、さっきあ

なたが言ったばかりでしょ、ふんどし締め

る必要がなくていちばん簡単じゃないの」

これにはさすがのヒロちゃんも、みごと

に一本とられて、三人は顔を見合わせながら
ゲラゲラ笑い出したのでした。

ところで私たち相撲部の新人には、この二
学期になると、重要な試練が待っているの
でした。

それは、F高相撲部との新人対抗定期戦な
のでした。

F高校は、県下女子スポーツ界の名門校で
女子相撲をとり入れたのも、県下でもっとも
早い方なのでした。

それで、私たちの高校に相撲部が生まれた
時にも、近いせいもあって、いろいろと指導
や助言をしてくれましたし、最初のうちは、
F高校へ出かけて行っていっしょに練習をし
たこともあったのだそうです。

そんなことやなんかで、両校の間に定期戦
のプランが生まれ、それが新人対抗戦とい
うかたちになったのでした。

このことは、私たちが相撲部へ入った時に
マネジャーの笠原さんからも、ひととおり説
明を受けていたのですが、相撲をとるとい
うことだけで、頭の中がいっぱいで、すっか
り忘れていたのですが、夏の合宿の時になっ
て、またこのことを言われ、そして合宿の目
的のひとつが、この新人対抗戦への準備なの

だと聞かされて、にわかに身近かなものに感じられてきたのでした。

ですから、二学期に入ってから練習は、はっきりと私たちの実戦訓練になったのです。

四股ふみや攻めの型の練習も、ひとりひとり上級生がつききりでシゴキますし、そのあとのぶつかり合いは申し合いに変わりました。

申し合いと言っても、私たち一年生同志なのではなくて、二年生が相手なのです。

中川さんの猛烈な突っぱりにはね飛ばされ、小林さんの大きなお乳の下に押しつぶされ、そして金子さんの強力な吊りに持ち上げられておシリにくい込んでくるタテミツの痛さにベソをかいて、おしまいには目の前が黄色になって完全にダウンしてしまうまでシボられるのでした。

時々三年生の方が指導してくれます。

「テルちゃん、おいで」

と、野川さんが呼びました。

私は、どちらかと言うと長身の中川さんと金子さんなんかですと、取りやすいと思うのですけれど、野川さんのように、機敏に動きまわる型のひとは苦が手なのです。

けれども、勝手に相手のひとをえらぶわけ

にはいきませんし、苦が手ならなおのこと練習しなければなりません。

立ち上がると、野川さんが頭を下げてパッと飛び込んできました。

ほんのちょっと立ちおくれた私の突っぱりは、わずかに野川さんの肩をかすめたただけで野川さんは、すばやく私の前ミツをとると頭を私のアゴの下あたりにつけてくい下がりました。

野川さんのとくいの体勢です。

野川さんの呼吸をお乳の谷間のあたりに感じて、「しまった」と思いながら、何とかその両腕を抱えこもうとしましたが、前ミツを引きつけられ、体を密着されているために、かえって、こちらの体勢が棒立ちになるばかりです。

肩越しにマワシをさぐりに行ってもテンデ手がとどきません。

そのまま、グイグイと寄せられ、何にもできないうちに土俵の外です。

二番目もほとんど同じ有様。

飛び込んでくる野川さんの顔さえ見ることができないのです。

三番目―何とか突っぱろうと、思い切り早目に両手を突き出しましたが、みごとな空突

きで、野川さんの肩をかすめただけ、はずみでよろけたところへ野川さんも勝手がちがって私の腰へ抱きついたようになり、そのまま折り重なって転がりました。

笑い出した野川さんの息が私のお乳に生ま温かく流れ、彼女の形の良い乳房が私のおなかのあたりにやわらかくキスをしています。

野川さんは、私を引き起こすと

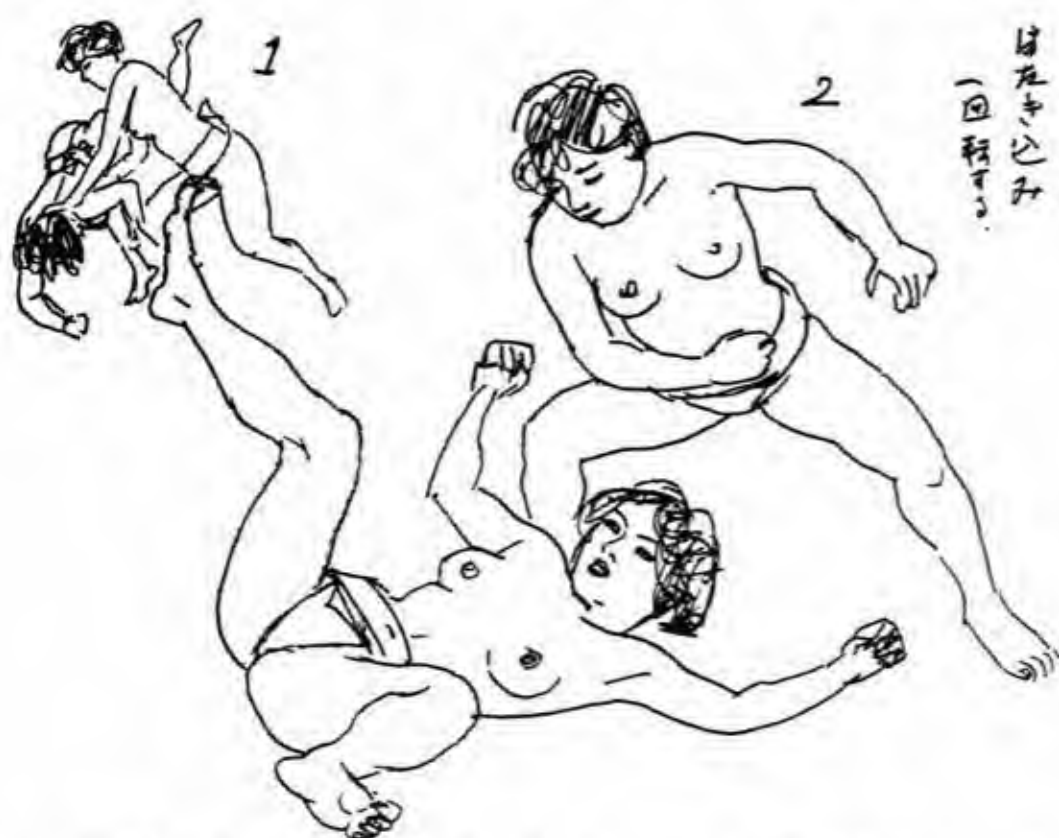
「突いてやろう、突いてやろうと気張るから腰が浮いちゃうのよ。だから肩にばかり力が入って、突くタイミングがおそくなるし、命中しても腕が伸びないから相手を止めることができないのよ」

野川さんの注意に、私はうなずくばかりです。

「無理に突き飛ばそうとしないでいいのよ、からだごと前へ出て相手を止めればいいの、あんたのはまるで下へ突き下ろしてるようだよ、自分と同じくらい背のひとならそれでも命中するでしょうけど、あたしくらいならちようどもぐってちようだって言ってるみたいに見えるわ」

野川さんは私の両腕をつかまえると、それをグッと外側からおさえて

「ヒジを上げちゃダメよ、ヒジでお乳をもち



上げるくらいの気持でやるのよ」
 と言いながら両ヒジでお乳をはさませるようにするのでした。

グッとしほり上げるように締めた両方のヒジの内側に、お乳のふくらみが触れます。
 以前小林さんに、同じように教った頃にく

らべますと、私のうすい胸も、わずかながらボリュームを増してきたように思うのでした。

「さあ、もういちど」

立ち上がると、また野川さんは、頭を下げて突っこんできます。

しかし今度は注意されたように、腰を落として、その突っこみを止める気持で「パッ」と下から突き上げ気味に腕を出します。

うまく野川さんの肩中に命中、てのひらにしなやかな野川さんのからだの弾みを感じずると、野川さんは、ちょっとのけぞって、出足も一瞬止まりました。

「ウマイッ！ その調子ッ！」

ヒロちゃんらしい甲高い声が耳に入りましたが、もちろんそんなことに気をとられるゆとりなどぜんぜんなく、構えを立て直して、また低く前ミツを狙って突っ込んでくる野川さんの鋭い攻撃を防ぐのにせいっぱいなのです。

野川さんの指先が、前ミツにかかろうものなら、もうおしまい、たちまち引きつけられて体を起され、棒立ちにされてあとは何もできません。

突っ張りで勝負をつけないまでも、何と

か野川さんの低い構えを起こして、喰い下がり許さない体勢にもっていかねければならないのです。

一発、二発必死の突っ張りが命中して、野川さんがタジタジと後退。

「シメター！」

と、追いかけて突っ張りをかける、その手をパッとはじかれて、

「アッ」

と、目標を失った体が横むきによるめましました。

「シマッタ」

と、思いましたが、野川さんは、このスキにつけこんできます。

手かげんをしてくれたのかも知れませんが私の突張りが利いていたので、そのゆとりがなかったのかも知れません。

しかし、辛うじて立ち直った私も、それ以上突っ張る体勢が続かず、とうとう四つに組み止められてしまいました。

でも、最初から飛び込まれたのちがって一応突っ張って野川さんの出足を止めたあとなので、私の方も今度は組み負けません。

おたがいにマワシを引き合って十分の体勢です。

「しっかりいッ」

またヒロちゃんの声援が聞こえます。

こうガップリ四つになってしまったのではさすがに動きの機敏な野川さんも攻撃に出られないらしく、マワシをひいた指先でさぐるように握り直しながらスキをうかがっているようでした。

ピッタリ密着した胸の圧力を加えたりゆるめたりしながら私の攻めを誘いかけます。

私としても組み止めたのがせいっぱいなので、これからどうやったらいいのかわからないのでした。

けれどもやはり一年生と三年生の差です。

前ミツを引きつけている野川さんの右手の力がだんだんと強さを増してくるにつれ、私の体がだんだん起こされて、反り身にされて行くのでした。

左で引かれた横マワシも、ガッチリと握られていて身うごきもできない有様です。

私も負けずに、両マワシを引きつけて対抗しようとするのですが、野川さんの腰の構えはくずれません。

まるで両方の足が土俵に吸いついているみたいに重いのでした。

こうなると、私にできることは、何とか野

川さんの攻撃を防ぐことだけです。

でも、すっかり両マワシを引きつけられて腰の動きを封じられ、上体を起こされてしまった私には足のふんばりも利かず、もう一度「グッ」

と腰を構え直した野川さんの吊り身に、あっけなく足が土俵を離れました。

股に喰い込んでくるマワシを、それでもけんめいに我慢しながら、足をバタつかせては何とかピンチをのがれようとしたが、野川さんはそのくらいの抵抗など問題にせず、軽々と吊り出してしまいました。

「惜しかったワ。かなりいいところまで行ったのに」

ズリ上がったマワシを直している私の傍へやってきたヒロちゃんが言いました。

野川さんも

「いまの突っ張りで良いのヨ、あれくらいなら一年生同士だったらちよっと持ちこたえられないワ」

「アラ、失礼しちゃうワ、わたしだって、あのくらいの突っ張りだったら負けなと思うわ」

ヒロちゃんが口をとがらせて抗議を申し入れます。

そんなヒロちゃんを松田さんがニヤニヤと意味ありげな笑いをしながら見ています。

なぜと言って、ヒロちゃんのいちばんの苦手が突っ張りのある人なのです。

マワシを取ってくだりがつてしまいますとヒロちゃんのネバリは相当なもので、三年生たちでさえもてあまし気味なのですけれど、マワシに手がかからないうちに突っ張られますと、あっけないくらいに弱いのでした。

私たちのうちで突っ張りに対していちばん強いのは松田さんで、あの猛烈な中川さんの突っ張りに対して、何とかいちばん長く持ちこたえていられるのは彼女ひとりなのです。

ヒロちゃんなどはせいせい三発か四発が良いところで、いつかの練習の時などは、たった一発ではねとばされ、土俵の外まで行って仰向けにひっくり返って、見ていた私たちにさんざんひやかされたこともあったくらいです。

野川さんは、そのことを知っているのです

「そんなこと言って、モトちゃんに（中川さんのこと）にきかせても良いの？」

と、からかいますと、ヒロちゃんはさすがに赤くなって首をすくめました。

こんな練習が続いているある日のこと、私

がお掃除のあと、すこし遅くなって部屋へ行きますと、手紙を手にした中川さんを中心に、津野さんや、榎本さんや金子さんたちが顔を集めて何かを話していました。

私がドアを開けて入って行ったのを見て、中川さんが、ハッとした表情になりました。

そして、

「ワカッター！」

と、大きな声を出しました。

みんなが、いっせいに私の顔を見ます。

私がびっくりして、あっけにとられて立っていますと、中川さんが、

「ねエ、テルちゃん、あなた誰かからたのまれていたこと忘れてない？」

私が首をかしげていると、中川さんは、手にしていた手紙を渡して

「これ読んでごらん、あなたのことじゃないのかしらと思うんだけど」

「ホラホラ、合宿の時のあの女の子よ」

傍から津野さんも口を出します。

頼まれていたこと……女の子？

ちょっと思い出せないまま、私はその手紙を読みました。

「皆さんお元気ですか」

という書き出しで、あまり上手ではないの

ですけれど、ていねいに書いたらしい、気持ちのいい字が並んでいるのでした。

「……おねえさんたちから教えてもらった相撲が、すっかり大好きになってしまいました。毎朝おねえさんたちといっしょに練習をした時のことは一生忘れません……」

「へえ、ちょっとオーバーだわ、この子」

と思いました。それでも、悪い気はしません。

「……毎日練習をしていて、友だちのミッチャンという子が相手です。ミッチャンは、背は私よりちょっと低いのですが、体格がよくて、力があるのです。けれども、私はおねえさんたちから相撲の技を教えてもらったので負けません。ミッチャンはくやしがつて、相撲の本がないかしらと言っています。自分も技を覚えて、私に負けられないようになりたいというのです」

私は、あの子のときいそうな顔を想像してひとりでに笑いがこみ上げてきました。

あの子が、どんな技を使って負かしたというのかしら？ たったあれだけの短かい間でどんな技を覚えたというのかしら？ と、おかしくなるのですが、一方ではまた、そんな子供らしい無邪気な気持がうらやましくも

なるのでした。

けれども、次を読みすすんでハッとしたのです。

「……そのうちにミッチャンは、裸になって取り組みたいと言いました。その方がほんとうのお相撲の気分がでるし、着ているものも汚れないでいいからというのです……」

私は、最初からそうしたかったのですが、ミッチャンが恥かしがっていたので服を着たまま取り組んでいたのです。けれどもミッチャンにそう言われてすっかり嬉しくなりました。やっぱり相撲は裸のほうがファイトが出ますものね……」

「何をニヤニヤしてるの？」

わきから津野さんがのぞきこみます。

「……けれども、裸になって相撲をとることにきめるとマワシがないので困ってしまいました。ミッチャンはパンツでもいいって言うのですが、私はマワシを締めないとほんとうの力が出せないってことを知っているのです。どうしてもマワシがほしいのです。それでミッチャンとふたりで相談して、お小遣いをためてそれでマワシを買うことにしたのです」

私はようやく、「忘れていたこと」に気がつきかけました。

「……あの時、せいの高いおねえさんに、マワシが欲しいって言ってたのですが、どうなりましたか、お返事を待っていたのですが、なかなか来ませんので待ち切れなくなつて、とうとうこんな手紙を書いてしまいました……」

ここまで読んだ私はやっと思い出したのでした。

そんなことすっかり忘れていたのです。だいいち、あんな山の中で、相手もないのに相撲のマワシが欲しいなんて本気で言つてとは思わなかったからです。

「ねエ、その背の高いおねえさんってのはあなたでしょ？」

中川さんが言いました。

「すっかり忘れてたわ、だいいち本気で言ってるなんて思わなかったもの」

私が手紙を返しながらそう言う

「その子、お金も送ってきたんですって、マワシを買って欲しいって……」

松田さんもびっくりしたような顔をしています。

「へエ……いくら？」

「五百円よ、きつと、おこづかいをためたんですよ」

「アラ、そんなくらいで買えるかしら？」
津野さんがびっくりしたように言いました。

「もちろん、そんなくらいじゃ買えないわ」
中川さんはちょっと笑いましたが、

「だけど、かわいいじゃないの、足りない分はまた直きに送りますって書いてあるのよ、ほんとに感心だわ」

「ほんと、おこづかいをもらうと、すぐおだんど屋なんかへ出かけるヒトにちょっと聞かしたい話だわねエ」

ヒロちゃんが津野さんをからかいます。

「アラ、わたし、おだんど屋なんかへ行かないわ、だいいち、おだんどってあんたじゃないの」

津野さんがやり返して、ドッと笑いが湧きます。

「おだんど」はヒロちゃんのおだ名のひとつなのですから、このやりとりはヒロちゃんのヤブヘビでした。

笑いがおさまったところで、中川さんが提案しました。

「どうかしら、わたしたちで出し合つてこの子のマワシを買ってあげたら？」

「サンセイ！」

まっさきに手を上げたのは津野さんでした。

「OK」

「マカシといッ」

と、誰も反対などする人はいません。

「あたし、いくら出そうかしら？」

ヒロちゃんが気の早い心配をしています。

「そのミツちゃんって子のも、いるわけでしょう？」

松田さんが言いました。

「もちろんよ、二本買わなきゃならないとすると、ひとりあたりいくらになるかしら？」

中川さんが首をひねります。

こうして、私たちのカンパで買った真新しい真白いマワシが揃ったのはそれから間もなくのことでした。

そして、相撲のとり方を書いた本といっしょに、あのピチピチしたかわいい女の子のところへ送られて行ったのです。

いまごろはきつと、あの子は大とくになつて、ミツちゃんという相手の子にマワシを締めてやつたり、ふたりのピチピチした裸をぶっつけ合つて練習していることでしょう。

来年またあそこへ合宿に行く時は、どんなになつてるかしら？ ミツちゃんて子はどん

な子かしら?など考えると、今からもうその時が楽しみになるのです。

ところで私たちの方も、だんだん当日が近づいてつれ、猛練習も一そう緊張を加えて行くのでした。

ふだんはあまり顔を出さなくなっている三年生の池田さんや笠原さんなども、マワシをつけて練習場に姿を見せて、私たちの相手になってくれるのです。

私たちのホープ松田さんなどは、もう上級生と取り組んでも、ちょっと見わけのつかない

挿絵画家を募る

○本誌発表の作品にふさわしい幻想的で優雅な異色画を求めます。

○用紙は必ず白い画用紙に墨汁又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆や青インクはお避け下さい。大きさは御自由ですがなるべく二倍乃至三倍位が適当です。

○優秀作品は本誌の最近号に発表の上、読者の反響の如何によつては、本誌専属挿絵画家として毎月執筆願います。

○従来、S画(主として女体緊縛)或はM画、女体切腹などについて多くの方々から御応募頂きましたが、残念ながら特に傑出した作品には接しませんでした。どうか奮て力作をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御送稿は第一種便にてお願いします。

いくらいに強くなりましたし、ふだんはおとなしい西田さんも、土俵の上では、別の人のようにファイトを燃やしてぶつかって行くのでした。

そして、試合まであと一週間ばかりになった日、私たちの締めるマワシは、あの青い色の選手用のマワシになりました。

「ヘエ、みんな、なかなかイカすじゃない」
小林さんがヒヤかします。

「堂々たるものよ、そのスタイルだけで相手は逃げ出しちゃうかも知れないわよ」

笠原さんまでが、めったにないじょうだんを言うのです。

選手用の青いマワシは、いつもの使いなれた練習の時のより厚いので、よほど力を入れないとキツチリ締まらず、股を通すところなどもスレたりして肌ざわりはあまりいい感じじゃないのでしたが、そのかわりズッシリと力強く腰に締まってくるのが、私たちのファイトを一層かき立ててくれるのでした。

相撲部へ入った時からのあこがれだったこの青いマワシを肌につけて試合に出る日が、こんなに早くこようとは考えても見なかっただけに、うれしいのと同時に、この青いマワシに恥かしくないような相撲をとりたいたいの

だと気持ちが引き締まるのを感じるのでした。ほかの松田さんやヒロちゃんや西田さん、津野さんも同じ気持ちらしく顔つきまでが変わってしまったように見えるのでした。

こうして、いよいよ新人対抗戦の当日がやってきました。

「勝とうと思わないで、いつもの練習の時のように思い切って行けば良いのよ」

前の日の注意で笠原さんが言いました。

「相手がどんなひとかわからないし、……それはむこうだって同じなんだから、あんまりよいいなことを考えないのね」

「つまり……こわいのはどっちもおんなじってわけよ」

笠原さんといっしょに私たちを引率する役の中川さんも言います。

いつもなら、ここで笑いが起こるのですがこの時ばかりは、笑い上戸の津野さんまでが神妙な顔でうなずいています。

「コワイわア」

私もヒザのあたりがガクガクしてくるのですが、それと同時に、おなかの底の方から熱いものがグッと湧き上がってきて、それがまだ見えない相手の人への斗志をかり立てるのでした。

(未完)

「若き夫婦プレイヤーの告白」

——華麗なるシューーズへの憧憬——

辻 村 隆

須磨松男氏の緊縛フォトにお目にかかったのは、私も諸兄御同様に、一九六六年の九月号を手にとった時が始めてである。

この処暫らく、夫婦プレイヤーの出現もなかったもので、私は奇クサロンの『新妻の緊縛フォト』なる短文を興味深く読み終った。

……拙作ですが、ここに数枚同封致します。編集長か辻村様のコレクションの一部にでも加えて頂ければ幸いです……云云

の文中で、須磨氏が私にでもと言っておられるのが、忽ち心に引っ掛った。

へこいつはひとつ、箕田氏に掛け合って、わ

がコレクションの一部に是非加えざるまい

い

そう思うと、もう矢も楯も耐らない。早速箕田氏に電話する。

「奇クサロンのプレイ通信の須磨松男という人のとったフォト、私にもいってやるが、廻してくれないの？」

挨拶ぬきの単刀直入である。

「そうくるだろうと思って、今朝の一番で送ったところだよ」

「カラーもとってるそうだが、送って来たの？」

「ああ、二枚許り。彼自身がプリントしたというんだが、仲々大した腕前で、いい色が出ているよ。カラーも一緒に送ったよ」

「どうもどうも。早速礼状と挨拶出したいんだけど」

「じゃあ住所をいうよ」

箕田氏はメモをとりに行き、すぐ電話に声があって、彼の住所を知らせてくれた。神戸市の須磨区に住んでいる。それでペンネームが須磨か。松林を連想して松男とつけたに違いない。私は改めて礼をいって電話をきるとすぐさま、連絡の手紙を書きかけたが、待て



よ。フォトがついてからでも、遅くはあるまい、明日にしよう。それから急にソワソワし出した。箕田氏の送ったフォト待ちの時間が、もう待遠しくて仕方がないのだ。

× × ×

彼が私宅を訪問してきたのは、三度許り手

紙のやりとりが続いて、お互いの事情がはつきりしてからのことであった。その時までによ美夫人の華麗なる緊縛フォトが、既に五十枚近くも、私の手許に送られて来た。そのうち十枚近くはカラーフォトである。

由美夫人とは逢わぬ先から、私はそれらのフォトによって、彼女の全貌を殆んど知り得ていた。

その表情からは理智と聡明と忍従がにじみ出ていたし、女体の面からは豊かなボリューム、素晴らしい脚線美、しなやかな柔肌をフォトからはうふっとさせていた。すぐさま撮りたい欲望にかられたものの、結婚して二年足らずの若き御夫婦にそうそうおいそれと御無理もいえない。何れ時の熟するのを、今やおそしと待つのみであった。

十一月の第一日曜日。天気もよし、幾らかの小閑もあって、裏庭の百日草の二度咲きを固めて植えなおしていたりしていると、かねて電話で打合せのあった時間通り、須磨松男氏は、午前十一時に五分許りおくれて、私の玄関の扉を開いた。彼の乗り廻している車はフォルクスワーゲンの新車であるが、私の家の前に長い間駐車しておいて、万一傷をつけられてもと、その辺りをぐるぐる廻ってモー

タープールへ一時預けして来たそうである。私にとって時間の約束のかたい点が、先ず何よりも第一印象がよい。

テレビスターの小山田宗徳によく似た容貌の、一七〇センチ以上はありそうな堂々たる体躯の美丈夫である。濃い黒味がかった縞の背広をキチンときこなして、身だしなみにも一分の隙もない。パーバリズムの私にとって、一寸苦手な身だしなみのよさである。裏庭で土いじりしていた俣の私の恰好は、普段着のカッターの上にセーター、それに折目のとれたくたびれたズボンといういでたちなので、どうも見劣りがして仕方がない。

彼は私の顔を見るや、丁寧に深々と頭をさげて、

「お招きにあずかりました須磨です」

と折目正しい物腰で挨拶した。MS同好の知人同志なら、大抵は挨拶ぬきでやあやあいってすます私だが、一寸勝手が違うので、ついつられて、

「辻村です。どうぞどうぞ」

と、いつになくかしこまってしまふ。お口に合いますかどうかといって差出された、神戸名物のかわら煎餅の、とんでもない大きな箱にすっかり恐縮。電話では由美夫人も是非



で読み耽りましたよ」

（という、学生時代からということになるんじゃないですか？）

「そうなんです。大学の一回生の時に、参考書を漁りに、元町の古本屋を覗いたら、ふと店頭で奇クを見つ、何の気なしに買ったんですが、それが病みつ、毎月待ち兼ねるようになり、ふえてくると、本を隠すのに随分頭を悩ませました」

ところすな）

「株式会社といっても、殆んど父のワンマン経営です。会社の運営は殆んど任されておりますが、父がにらみをきかせておりますので今のところ、余り自由もききません」

（それで家の方が須磨ですか？）

「ええ、昔別荘にしていたところです。空襲で焼かれるまでは山の手の方に住んでいたのですが、。やと数年前、須磨の自宅から数百米離れた処の空地を百坪許り買ひまして、そこへ私達夫婦の家を建てたのです」

（お子さまは？）

「未だありません。別段コントロールしているわけでもありませんが」

（お羨やましいような御身分ですネ。ところで奥様とは恋愛結婚？）

「まあ、そんなところです。華やかなラブ・ロマンスもありませんが……」

（お差支えなければ、お聞かせ下さいよ）

「判っきり申し上げて恐縮ですが、アレが私のSの本能をみたしてくれたことが、結婚に踏みきった原因です。私の会社に勤めていたタイピストなんです。世間でよくある上司と部下との恋愛といえましようか。最初は両親も反対しましたが、妻の潜在したM性と、私

御一緒にと誘ったのであったが、夫人がどうしても羞かしいと仰有るので、初対面は彼一人の訪問になったのであった。

以下は彼との対談である。

「……………」須磨松男

（……………」辻村 隆

（奇クの読者になられて、もうかなりなるのですか？）

「ええ、実は八年許り前からなんです。未だあの頃は白表紙時代でしたよ。世の中にこんな面白い雑誌もあったのかと、それこそ夢中

に對する絶對的な服從の氣持に魅かれ、敢えて反對を押切つて結婚に踏みきりました。今では両親も妻のよさを充分認めて、大切に扱ってくれます」

(話の模様では、既に結婚前にプレイをなさっていた様ですネ)

「ええ、妻とは結婚する一年足らず前から、既に關係をもっていました。最初は單なる遊び程度ぐらいのつもりでしたが、私が或る時少し酔つて、彼女をホテルにつれ込み、有り合せの紐か何かで縛つたのです。酔つた勢いで、俺はこんな性格だぞ。女を縛つて、責めたり虐めたりするのが好きだ。こんな性格の俺でも好きか」と聞いたのです。妻は蚊のなくような声で「ジュンちゃんへこれは私の愛称ですVになら、どんなことをされても構わない。それで死んでも本望だ。」なんてことを口走つたのです。「虐め殺すかも知れないぞ」と言うと、「どんなことでもジュンちゃんの好きなようにして」と……、いやどうもおのろけになつて恐縮です」

(恐れ入りました。貴方のような美男子でふんだんにお金があったら、どんな女の子もイチコロで参つてしまいますよ。結婚前既にSMプレイの下地が出来ていたなんて貴方は幸

わせなんですね)

「厭といえは結婚しないまでです。プレイの出来る女性を探す氣でいましたから」

(すると奥さん以外にも交渉はあった?)

「ないといえませんが。金にあかして、よくアルサロやバーで小当りに当たたりもしましたが、女達は真底からのMではなく、金が目当てで、私の意に添っていることが、ありありと分りますからいやでした。妻はその点M性を既に内蔵していたようです。カメラはもっていました、D・P・Eまでは面倒くさくて、その当時はやっていますでしたから、撮つても処置に困るので、婚前の交際時代は撮りませんでした。判っきり結婚する意志を固めて、すぐ一式買い整えましたけど」

(モノクロのD・P・Eは、一寸やるとすぐ馴れますが、カラーまではシロウトは余りやっていないようです。大したものですね)

「いやいや。しかし、大分金をそのため捨てましたよ。いずれ近く、モノクロの八ミリ現像を研究し、出来れば将来、カラー八ミリも自分で現像したいと思っています」

(自家現像の八ミリなら、どんなものでも安心して撮れますものネ。私もその節はお願いしますよ)

「ああ、是非させて頂きます。願つてもないことです」

(Sへの興味は大分以前から?)

「ええ、高校時代に既に胚胎していたようです。家に三人許りお手伝さんがいた頃、一番若い十六才ぐらいの女の子に、縛る真似事をしたことがあります。早熟だったんですね」

(じゃあ、相当戦歴が古い)

「何人か縛つてプレイのようなことをしてみました、矢張り本当の緊縛は、妻以外には求められませんね。妻に對しては心の垣根をとり除いて、どんな強烈なことも可能です。今一つは、私も一寸した地位もある手前、誰彼なしにプレイをして、若しそれをタネに変な言いがかりをつけてこれないかと、そんな事を心配するものですから、余り派手にはやれないんですよ」

(そういった点の氣遣いは、確かにありますネ。私もだから、余りホステスやクラブの女性には相手にしないことにしていますよ。あとを恐れますからね)

「でも辻村さんは、よくあの様に次々ハントが出来るものだと、つくづく感心します。我々にとっては羨やましき限りです。私は奇クを買つと、先ず一番にカメラハント。それ

からサロン、読者通信、ついで『花と蛇』や私の性向に合ったものを拾い読みする程度です。カメラ・ハントのために三五〇円払っているといっても過言じゃないんですよ」

（どうも恐れ入ります。余り褒めていただくとあとが怖い）

「いや、本当ですよ」

（ところで、あなたのペンネーム、やはり住居の地名からとったの？）

「須磨にすんでいて、すぐ傍に松林が見えるでしょう。それで思いついたのですが、これをローマ字で書くとSUMA・MATUO、つまりイニシャルをとると、S・Mということになるのです」

（考えましたネ。成程S・Mだ。外国風ならM・Sになるが気の効いたペンネームです。しかし貴方のフォトは、そのすべてに一種の類型的な貴方独特のムードがありますネ）

「と云うと？」

「猿轡、柄パンティ、ストッキング、シューズ。この四つのアクセサリが、必ず使っていますネ。貴方にいただいたフォトは、すべてこの四つが必須条件になっていますよ」

「仰有る通りです。白状しますが、私はSである反面、その実、靴フェチなんです。妻の

M性にひかれたと言いましたが、も一つ結婚に踏み切った原因は、妻の足の美しさと、靴をはいた妻の足の魅力に惹かれたのです。シューズは、今の処二十四足ありますが、いずれも別にあつらえたものの許りです。お見せしないフォトには勿論妻の全裸のもの、猿轡しないもの、ノーストッキングもありますが、靴のみは、全裸の場合でも履かせます。素足にピッタリと一分の隙もないシューズをはかせた姿が、今の私の心境からいって、最も好ましいものなのです。私はゆくゆくは、今の家の一室を改造して、二人の秘密のプレーの部屋にしたいと思っています。例えば書架の奥のボタンを押すと本棚がくると回転して、その奥に十平方メートルの隠し部屋をつくり、海外の種々の責め具を陳列し、靴ケースには凡ゆる型のシューズがぎっしりとつまっているといったような——」

（プレーする者の、それは誰しも抱く夢ですが、須磨さんの場合、可能かも知れません。私も財力があれば作ってみたいですね）

「妻に奇クを読ませていただきますから、辻村さんのお人柄は充分承知していますよ。本当は一度あって見たいらしいのですがネ」

（そこを見込んで、一度須磨さん宅にお邪魔

したいんですよ。よければ御夫婦のプレイも撮らしていただければ最高ですが……）

「今日帰って、早速口説いて見ます。私の言うことなら、恐らく、いや絶対といっていい程、反対しない妻のことですから……唯、やはり女ですから羞恥心が先に立つのですネ。何しろ私以外の男性を交えてのプレイなんて妻にとっては生れて始めてのことでしょうからネ」

（ごもっともです。まあ、そこは貴方の御説得にお任せしますよ）

「私の緊縛が類型的ですから、辻村さんに妻を縛っていただいて、その模範的なものを見せていただきたいんですよ」

（いや、どうも——）

同病相憐れむ、いや違った。同好相愉しむで、忽ち私と彼とは意気投合した。かねての手紙での約束通り、私は彼好みのものを選んで、彼の嗜好にエンジョイしようと努めた。私の撮ったものに、靴の履いたものは、殆んどない。唯、長田実氏と一緒にとった「黒の幻想」の女性の緊縛が、彼の性癖に迎合しているかに見えた。

彼が辞去する時、由美夫人を撮る約束は殆んど確実なものになっていた。彼は形式的に

一応夫人の意向をただし、訪問の日時さえ知らせてもらえればよいことになっていた。秋の末とはいえ、一日千秋の思いとはこの事である。その夜、私は不埒にも、由美夫人の豊満な女体をプレイの部屋で、さまざまに縛りつづける夢魔に襲われていたのである。

× × ×

三の宮駅まで乗って来て、会社の方へ電話下されば、すぐ車で駅まで迎えに行くという彼の言葉に従って、漸やく、小閑を得た一日、私は阪急で神戸に走った。日曜日より普通の日の方が都合よいという彼の言葉だった。所用にかこつけていつでも会社をぬけ出せまうという。一兩日前から急に冬めいて来て、もう合オーバーなしでは肌寒い昨日今日である。

三の宮駅を出てすぐ電話をかける。正午を少し過ぎていた。受付の女の子の音がすぐ須磨氏に変わった。省線三の宮駅の広場まですぐ出迎えに行きますという返事に、それだけで電話を切った。ガード下の横断歩道を渡り、ぶらぶら歩いても二、三分とかからない。私の手荷物、黒いバッグ一個きりだった。すべてのプレイに必要なものは、須磨氏宅に備わっているの、カメラ二台とストロボがバ

ッグに入っているのみだった。一台は愛用のオリンパス・ペンと、もう一台はカラーフィルムを装填のペンタックス一眼レフ。

十分も待ったであろうか、フォルクスワーゲンが広場に滑り込んで来た。車に身覚えはなくとも、運転する人はまさしく須磨氏である。私は手を振る。眼の前でピタリと車が止り助手席が開く、私をさそい込むようにして忽ち滑り出す。

神戸市内は年々変化してゆく。心覚えのある路もあり、知らない道もある。車の波を巧みに縫い乍ら、彼は須磨の自宅に勝手知ったる通り馴れた道路を急がせていた。

須磨水族館が左手に見え、海岸沿いの初冬の風景は佗しく寒々しかった。かつてこの辺りの旅館の一室で、始めて出逢った志村善子とプレイのひとつきの時間を持ったことを、私はゆくりなくもフト懐かしく憶い出した。その追憶にグサリとメスをさすように須磨氏がハンドルを握り乍ら声を掛けた。

「大分以前のカメラ・ハントに、この須磨で志村善子さんを撮られたとありましたが、どの辺りですか」

「ええ、ほんの今通過したようです。何の変哲もない海水浴客目当ての旅館でしたよ」

「彼女、その後どうしているんでしょう？」
「結婚するとか言って来ましてネ。それまでもう一度お目にかかりたいとか書いてありましたが、遂にその俚で逢えず終いでした」
「それは残念でしたネ。私、もう少し以前に辻村さんを存じていたら、御無理を言って是非共紹介していただく処でしたが……、もう今からでは多分無理でしょうネ」

「そいっは一寸——」

私は口を濁した。事実、志村善子のその後については知らない。結婚したか、現在も未婚の俚か、それも知らない。いつも乍らの私の気質で、そのうちにいつか一度と思いつつ光陰は忽ちに去って行って、いつしか過去の去りゆく者は日々疎しといった状態になっってしまったのであった。小原真澄だって、一宮百合子だって、その外出逢ったかずかずの女性も、やがてはみな過去の追憶の淵へ流れ去って行くことだろう。

車は国道を右折して、大きな石垣や高塀、植込みのつづく邸宅続きの閑静な高級住宅地へ這入っていた。車が停った。

「ここですよ。辺りの家がスゴく大きいので、私の家などチッポケに見えますが、これでも一五〇坪はあるんですが、さあ、どうぞ」

彼は手を伸ばしてドアを開いてくれた。外気の冷めたい空気がヒリリと降り立った私の頬を撫でた。

彼はガレージのシャッターをガラガラ引上げると、巧みにバックで車を格納した。

人造石のあしらった塀の作り屋根瓦は、秋の陽を浴びて青磁に光っている。両開きの黒ずんだ扉はチェック模様で、その左手に小さい潜り戸がある。彼は先に立って潜り戸を入り、扉を内側より開こうとしたので、私はあわてて引止め、つづいて潜り戸より屋内に入



写真〈A〉

る。家の玄関まで瀟洒な石だたみが続き、塀に沿って常盤樹が恰好よく植込まれて、芝生のあちこちに奇岩が数個配置されてあった。

何とも羨やましい様な前庭であった。夏もなればこの芝生に水銀灯が映えるのだろう。

玄関に立ってドアホンを押すと、声が流れて来た。(どなた?) (ボクだよ) (ハイ)

扉が開く。フォトで馴染みの由美夫人のはにかんだような若い笑顔が覗いた。

「辻村さんをお連れしたよ。さあどうぞ」
一風変わった室内の構造だった。アメリカ風

に、入ってすぐ広い

応接間兼用の居間に

なっていて、真中に

大きな応接セットが

どっしりとおいてあ

り、天井から豪華な

シャンデリア風の照

明具が垂れ下ってい

た。グランドピアノ

がデンと部屋の片隅

を占めている。

羨望ともつかぬ溜

息が流れ、金にあか

せた成金趣味をそこ

に感じて、フト場違いの理由なき反抗を覚えた。私の家を訪問した時、彼は私宅の応接間をチラチラ見廻していたのを突嗟に思い出したからである。この広いフロアの奥のドアで遮ぎられた向うにキッチンがあらしく、食物の匂いが漂よって来た。数寄を凝らした手すりつきの階段が二階へ消えている。三方をサッシドアの大きくとった窓で囲まれているのでフロアはすごく明るい。窓には色模様の厚地のカーテンが、夜の構図を暗示するように垂れ下っている。

すっかり圧倒されてポカンと突っ立っている私の傍らへ、軽快なチェックのセーターに着換えた須磨氏が近づいて来た。

「さあ、どうぞ。何もありませんが、只今、

軽い中食の準備をさせておりますから」

「いや、本当にお構いなく。しかし驚いたな

あ、あんまりデラックスなので見とれていま

したよ」

「とんでもない。私はもっと地味な極く在りきたりの住宅を望んでいたのに、おやじが勝手に設計師を呼んで来て、こんなもの作ってくれたのですが、どうも有難迷惑でして。何だか落付かなくて——。おやじは貿易の商談をかねて、二年前アメリカへ数カ月行って来



写真

ましたが、それ以来すっかりバタ臭くなりました。弱っているんですよ」

奥の戸が開いて美しい娘が大きな盆に多くの皿や鉢をのせて運んで来た。由美夫人ではなかった。

「家内の妹なんです。家が広いので三カ月許り前から同居しているんですが、短大へいらっしゃいます」

娘は会釈して料理を机に並べ始めた。須磨氏の先刻の言葉を裏書きするように、それはこの部屋に似つかわしくない、日本料理だっ

た。鯛の刺身、明石の鯛の酢のもの、白身の魚の照り焼、したしなど、チョットとした割烹なみの料理が並ぶ。私のために、あらかじめ準備しておいてくれたに違いない。

「おやじがくると絶対に洋風料理なんです。

それで私、わざと反撥して日本料理を妻に作らせているんですが、もともと肉類など好きな私なんです。でも近頃、すっかり淡泊なこんな料理が気に入って来ましてネ」

別段街うでもなく彼は独り言の様に呟やくようにいって、娘のおいていった銚子をとり上げた。

「どうぞ——。プレイの前に軽く一杯いかがです」

引っ込んだ娘が大きな皿のにぎり寿司を運んで来た。

「貴美ちゃん、もういいよ。お客さんとお話あるので、今日は神戸の方まで遊びに行つてこない？ ホラこれで旨いものでもくってこいよ」

彼はズボンのポケットから、無難作に二つに折りたたんだ分厚い札束をとり出すと、千円札を三枚四つにたたんで娘に差し出した。

「あら、いただいていいの——」

娘の頬がパツと輝やく。

「余りおそくなるんじゃないよ。ああ、ひよっとすると、このかたを送って神戸へ出るかも知れないから、五時頃電話かけてご覧。連絡するから」

「そうね、有難う。じゃあ、いつてくるわ」娘はいそいそとして、私に一札すると小走りに出ていった。その後姿へ彼は叫んで、

「おい、ついでに由美をここへ呼んでくれ」

「たびたび貴方から送っていただいたプレイのフォトは、ここで撮られたのですネ。カーテンの柄に見覚えがありますよ」

「ええ、その通りです。プレイするにはもってこいでしょう。妻の妹が同居してからは、プレイもこの処お休みですが、当初は興にのって、毎夜といつていくらい撮りまくったものです。時には昼日中からカーテンを閉じてやったこともあります。それだけに同じような構図が多くて、殆んど類型的ですが、例えよく似たようなもの許りでも、撮らずには

おられなかった時期がありました」

食後のひとときテーブルを囲んでのプレイ談義であった。控えめに由美夫人はうつむいて、夫のかなり露骨な表現にも黙って軽い羞恥の笑みをたたえて、指先のダイヤを撫でていた。

「須磨さんと云う名前で呼ぶと思い出しましたが、もう一昔前、奇クの画家に須磨利之という方がいらっちゃって、私も数度お目にかかったことがあるんですよ。御存知？」

「須磨利之？」

彼は一寸考える顔付になった。そうだ、彼は白表紙時代からの愛読者だから知らぬも無理はなかった。余計なことに違いなかった。

「そう、御存知ない筈です。白表紙以前の、大判時代から白表紙になる頃迄活躍した人でしたからね。別名の今幾久造とか喜多玲子の女流画家名で随分活躍したものです。私の小説もかなり彼のお世話になりましたよ」

「ああ、喜多玲子さんが、その須磨利之さんなんですか。それならよく知っていますよ。四馬孝画伯以前の挿画に相当見受けましたから……。私もバックナンバーを買い漁って知っているのですが。そうですか、彼も須磨氏ですか」

「貴方のペンネームの由来を、この窓から海辺の方を見て感じましたよ。ここは少し高台なんですね、海岸の松の木がよく見える。S・Mと洒落たところが面白い」

「私のプレイフット、辻村さんが御覧になってどう思われますか」

「とってもいいですよ。強いて難をいうなら少し同巧異曲って感はまぬがれませんが……」

「私の場合、妻へ希望する服装なりアクセサリがいつも同じだから、自然そうなるのでしょいかネ」

「先日、靴フェチのように仰有いました……」

「そうなんです。私の一方の心にはSの血が、潜んでいくせ、シューズをつけた妻の足には、這いつくばって、私の体を踏ませたり、顔をシューズでギュウギュウ踏みつけてもらったりしたくなるのです。数多くのシュ



写真<C>

ーズをロッカーから引出し、靴に囲まれて、この銀色のシューズが私の鼻をひしゃげ、ペー・ジュの靴の先端が私の口中に侵入し、ハイヒールの踵がギリギリと私のひたいに穴のあくほどふみつける——、赤い短靴が仰臥した私の裸体を処構わず容赦なく踏みつける。

私は随喜の涙を流して、口中に押し込まれて来た短靴の尖端に、よだれを垂してむさばるように吸いしゃぶっている。そんなシューズへの憧憬が自分にどうして宿ったのか、自分でも判っきり明言出来ないのです。女性へ



写真＜D＞

の足、とりわけ足首以下のそれに陶酔的なフエチを覚えたのが靴へと移行していったのかも知れません。私は靴の中の、プーンとむれた革の匂いと、女の足の醜えたような脂の匂いの入り交った香りが何よりも好きなのです。一分のすきもなく女の足にぴったり嵌ったハイシューズのあの足首の逞ましき、シューズに押されて盛り上った足のむっちりしたふくらみ。すべてが私の憧がれの的であったわけです。由美の足は美しかった。人一倍靴をうまく履きこなしました。新婚旅行の初

夜、私は妻の体を抱く前に、膝下にひれ伏して、妻の素足の指に歯を立て、しゃぶって吸いつくしていました。仄かな靴のむれた足臭が、たまらなく妻をいとおしいものに感じたのです」

シューズと足の事になると、須磨氏は俄然能弁になった。彼をしびれさせた由美夫人の素晴らしい、双曲線は、形よく弯曲して、ソファに傾斜して、今私の眼前にあった。成程素晴らしい足に違いなかった。しかも夫の趣味をとり入れてか、フロアについた彼女の足

には、ワインカラーの玉虫にも似たつややかな尖端のシューズがちゃんと履かれていたのである。

「靴さえ履かせて頂けるのなら、今日は辻村さんのお好みの、どんな強烈な緊縛のプレイでもさせるつもりです。嵌口具や、革具、それに吊り用の滑車、又はりつけ用のポールト

止めの材木も大抵準備してあります。うんと虐めてやって下さい。妻も辻村さんのファンなのです。辻村さんにうんと責められたら、妻もきっと本望ですよ。な、そうだろう」

須磨松男は誘導的な口ぶり、妻に同意を求めた。由美夫人は微かにうなずいた様だったが、それは恐らく真底からではなく、Sの我儉な夫に対する服従のうなずきではなかったであろうか。私が訪問する以前に、かなり因果を含められていたに違いない。楚々としたうなじが微かに震えているのは、心の激しい動揺を、懸命に押えようとしている肉体の相剋ではなからうか。最愛の夫に奉仕しようとする妻のいじらしい気持から、プレイに最高の協力はしても、第三者の眼前でのプレイとなれば、又自から話は別である。おそらく第三者を交えてのプレイなど、由美夫人にとっては、それこそ生れて始めての経験に違いなかったであろう。

「ああ、それから辻村さん、私のプレイの場合、お宅でも申し上げましたように、パンティとストッキング若くはタイツ着用の上、猿轡をはめ、シューズは必須条件の様に申し上げましたが、正直に言って全裸もしばしば撮っているのです。ただ全裸の場合でもシュー



写真 <E>

ズだけは私のプレイに対する必須条件なので

す。このことは先程お話しした事で分っていた
だけると存じますが、初対面もあって、辻村
さんには着用のフोट許り送りましたが、全
裸もよければお見せしますよ。ここに今持っ
てきましたか」

「拝見していいですか——」
「ええ、どうぞ」

傍らの由美夫人の頬が、真赤に染まってい
た。夫の一方的な話し振りに、妻は全然抵抗
せず柔順にその場の夫のなすが俤に振舞わせ

オトの中にはカラーは混っていないかった。

階段のてすりへの爪先立ちの開股縛り。グ
ランドピアノを背にした首縄の緊縛は、由美
夫人の肌が白いだけに、黒と白とのコントラ
ストが絶妙だった。淑やかに深くうつむいた
由美夫人の、黒いアンサンブルの下に隠され
ている赤裸々な白い肉体が、私の手にしたア
ルバムの中で、妖しく苦悶し、絶叫して躍動
していた。私は眼前の由美夫人の体を、黒の
アンサンブルを透視して眺める思いで、急激
に心が波立ってくるのを覚えた。

「じゃあ、フोटはそれくらいにして、そろ
そろ実行とまいりましょうか。由美、支度は
いい？」

彼女はそっとうなずき、蚊のなくような声
で夫にきいた。

「あのう、場所は何処でなさいます？」

「訪ねてくる人もない筈だが、ここでは少し
落着かない。よしっ二階の寝室へ行こう。い
いでしょう、辻村さん——」

× × ×

ガス・ストーブの熱気は六帖程の寝室に充
満して上層は蒸せるように暑い。二十五度は
優に超えているかも知れない。喋べっている
うちに忽ち時間は経ち、既に二時半になっ
ている。

私は須磨松男の要望に応じて、彼の眼前で
由美夫人の纏ったネグリジェに手をかけて引
きはがし、ブラジャー、パンティも私の手で
除去していた。

「私に遠慮しないで、存分にやって下さい。
すべて承諾しておりますから、裸がよかった
ら、全部ぬがしてやって下さい。私は今日は
ゆっくりと撮る方に廻りますから」

彼のやや上ずった声につられて、私も熱気
にうかされた様に、思わず由美夫人の肩に手



写真 △F▽

をかけていたのだ。ピクリと体にケイレンが走ったのを覚えているが、私も今更あとへ引けない。そして気がつけば全裸の由美夫人が胸を両手で抱えて、全身に羞恥をただよわせ

て、私の膝下にうずくまっていたのだが――。

彼女は私に顔を背けていた。考えて見れば訪問して以来、殆んど彼女とは言葉らしい言葉も交してはいなかった。

「さあ、遠慮しないで縛ってやって下さい」

須磨松男にせき立てられる様にして、私はベッドにうず高く投げ出されてある、ロープの一本を握った。

「じゃあ奥さん、縛りますよ、御免なさいネ」

あやまるわけでもないが、ピョコリ一礼して、私は由美夫人の背後に廻ると、胸を抱えていた柔かい両手を後手に握り上げた。

もう待て暫しなく、彼は先刻よりしきりに閃光を光らせてパチパチやっている。私の一眼カメラも、彼に借りた三脚の上で鎮座している。カラーの入っている方だ。小型のハーフカメラは床においてある。

ごく定石通り形よい乳房を挟んで、胸に縄をかけ、後手に縛る。所謂後手縛りの典型的なスタイルである。彼女の足には、部屋用のサンダルシューズが、彼の好みによって銀色に光っている。全裸にシューズとといった異様なフォトは、恐らく私も始めてであった。しかし由美夫人には、それが又

とてもふさわしく似つかわしかった。縛り終って床に坐ってもらって、カメラ位置に戻ると、彼女はカメラアイを避けて、壁際の方を向いてしまう。どうしても顔をとらせないのだ。

「こらッ、由美。こちら向かんか――」

「でもう……」

泣きそうな声で、由美夫人は精一杯の抗議をした。

「いやどうも、何しろ、辻村さんのカメラ・ハントを知っているものですから、顔を見せるのを嫌がるんでしょう。猿轡をして、充分顔を蔽うことで我慢していただけますか。何しろ私と二人っきりでとる時でも、判っきり顔を曝すのを嫌がるので、心なくも猿轡で何とかお茶を濁しているんですが――」

「ああ、いいですよ。お好きな様にして上げて下さい」

私もやむなく応諾する。彼は白い布を三つ折にして、かなり幅広く口辺を蔽った。猿轡を通り越して、これは一種の覆面に違いなかった。ようやく彼女は渋々ながらも、顔をこちらに向けるようになった。微笑みは消えて、諦観の念と、うら悲しい愁いが、その覗かれた眼のほとりに、そこはかとなく漂って

写真 〈G〉



いた。背後から、側面から数枚。(A)姿勢を直すふりをしてツト近づき、覆面に近い猿轡をずり下げ唇の間に強くかまして、うなじで縛り直した。ハツとした様だったが諦らめ

て眼を閉じる。(B)しかしカメラ・ハントを慮んばかりか須磨氏が黙って又猿轡を直しに行った。もうそれ以上触れない。

彼の意図も分ったからだ。彼女の唇に漂う生々しい新妻の色気を、無粋な白布で蔽っているのは、何としても残念だが、須磨松男の愛妻であれば如何とも致し方ない。

彼は壁際へビニールのソフトな安楽椅子を置いた。無言で妻をそこへいざない横坐りにさせた。

「どうです。私も入って、ひとつ妻の鞭打ちのシーンを、とられては如何ですか」

「結構ですな、お願いしますよ」

欣喜して彼はクルクルと衣服をぬぎ、パンティー一枚になって、妻の背に、ズボンのバンドを手に巻いて位置した。

「じゃあ、鞭打ちしますからネ」

私は急いでカラーの一眼レフに長尺レリーズをとりつけてピントを合わせ、更にハーフカメラを片手に、右足許にレリーズの握りを転がせ、この鞭打ちシーンを、カラー、モノクロの両方でモノにしようと試みた。

彼の右手が上った。ピシリと太腿にバンドが渦を巻くと刹那、覆面の奥から、キーツと

苦悶を押し殺した高い悲鳴が走った。(C)

パツ、パツと二つのカメラが交互に光る。ハーフカメラはモーターの自動巻だが、一眼のペンタックスはレバーを巻き上げに行かねばならない。

二度三度、痛みに耐えかねて、彼女の体はチェアをミシミシいわせて彎曲し屈折しからんだ。その妻の背後から、髪を握って引き起し、つづいて三度許りバンドの鞭がなった。

フームーと耐えようもなく、苦悶の呻きが洩れ、由美夫人は胸を弾ませて体を左右に振っていた。(D)バタツとバンドを投げ出しこらえ性もなく、須磨松男は妻の両足を、我が胸の内に抱き込むように掻い込んだ。サンダルシューズの先からのぞけた、小さな爪先を口にくわえ、彼はビチャビチャいわせて指を口中に吸い込んでいた。横向きの体を足首を握ってくるりと腰元から廻転させ、チェアに正対させ、両足をチェアをまたがせるようにして開かせた。奇妙なよじれ方をして、彼女の全裸は、ずり落ちそうになり乍らチェアに背をもたせかけていた。数ポーズとったが下半身カットせざるを得ない構図である。

(E、F)

「次は辻村さん、やって下さい」

彼は噎れた渴いた声で、呟やくようにいった。場に馴れて来て、いつしか私も大胆になりつつあった。由美夫人の体を両手で抱きかえるようにして床に降し、壁際に背をもたせかけて、もう一度猿轡をし直して見た。もう彼女はあがろう色もない。私のなすが俤に、白布を大きく口にくわえた。

もたせかけ、両足立ちで開かせて、正面から。これは女にとって最も羞恥のシーンかも知れない。しかし撮る側になって見れば、一応撮って見たいポーズでもあった。(G)

もたせかけた俤、別の太縄で両足首を組み合せて縛り、首にかけて高々と吊ると、両足が床から浮き上り、辛うじて背で倒立をこらえている坐位の海老責めのポーズになった。

(H)

須磨松男も最早一言もいわない。パントマイムの十数分の作業。三者三様の思いで、プレイの時間はジリジリと経過していった。由美夫人のつむった睨尻に、フト歓喜に似たケイレンが走り、束の間に消えたが、緊縛を甘受しているMの性向がチラリと覗いた。味噌もくそもなく、只管に私をカメラアイに挿入して、パチパチとりまくる彼は、最早SMのプレイの境地に埋没しているかに見えた。

「辻村さん、吊りプレイとゆきましょか。普段余りやりませんが、私の吊り方も一度御参考までに見ていて下さい」

プレイに陶醉した様相で私に告げると、妻の首縄を外し、足を解いた須磨松男は、かなり荒々しく彼女の体をかき抱き、ドサリとベッドに放り込むように投げ落した。大きくクッションが弾み、数度跳躍して、由美夫人の体は純白のシーツの上で躍った。クルリと体をうつむかせ、由美夫人はハートと大きく息を吐いた。

彼はかけよって、矢庭に妻の背の上にドサリと馬乗りになった。その重味に圧迫されて彼女は二度三度、ウーンと大きくうめいた。

彼はかたわらの短い縄をとり上げると、妻の両足を揃えて縛り、背に向けてぐいと折り曲げ、縄尻を、後手を縛った縄の結びめに連結させた。引きしぼられた両足から、始めてサンダルシューズが彼女の足より離れてシーツの上に落ちた。私は遠慮勝ちにベッドに上り足許を通って、両手をウーンと挙げて、俯瞰して数枚とり終えた。

(I)

ベッドの中央の真上の天井に、ボールト

止めの吊鉤がつくりつけにしてあった。彼はロッカーを開いて中から二個の滑車をとり出した。背を伸ばしてそのひとつを手軽く吊鉤に下げ、ついで広幅の黒革のベルトをとり出

写真 A H V



写真Ⅰ



してくると、由美夫人の太腿の辺りで一カ所と乳房の下あたりで一カ所と、それぞれ幅五センチ以上はある革ベルトを、しっかりと尾錠でしめつけた。胸のベルトと太腿のベルトのそれぞれに、丸い鉄環がはめ込んであつ

て、その丸環を一本のロープで結び合わすと、ロープにしっかりと残りの滑車を括りつけたのであった。天井の滑車の横に一本のロープを結びつけ、由美夫人の体にとりつけた滑車を通し更にその縄を天井の滑車に通す。所謂、テコの応用だ。

「私が妻の体を宙吊りに引揚げて行きますから、どうぞカメラに納めて下さい」

須磨氏は、かなり息を弾ませて私にいった。

彼はベッドを降り、フロアの端に立って縄をぐいぐい引っ張り始めた。忽ちにして軽々と由美夫人の体は背の方から宙に浮き、高々とベッドの上に吊り上った。両手足にじかに力がかかっているから、彼女は比較的ラクな姿勢で、広幅の二本のベルトによって、空間に体を支えられていた。

私はフロアからそれに閃光を走らせ、ベッドに仰臥しては、転がった私の体の真上にマザマザと吊り下った女体を、下からふり仰いでとった。

若し須磨松男が、うっかり引っ張っている縄を放そうものなら、由美夫人の柔肌は、まぎれもなく私の体の上にドサリと落下するに違いなかった。ふり仰ぐ由美夫人の、あど

けない顔の眉間に縦じわが走り、苦痛をこらえてかたく眼をつぶっているのが、私の視野に強烈な印象を残した。黒いベルトは乳房の下で深々と喰い込んで、そこに深いみぞをつくっている。何枚とっても同じポーズとは知りつつも、思わず知らず、私は十枚近くもシャッターを転がった倦きっていた。やっと体を起してベッドから下りると、殆んど同時に力をゆるめたのか、スルスルと由美夫人の体が、今、私の転がっていた位置に降下して来た。急ぐでもなく彼は妻の拘束具を外してやり、縄をといっていた。

「どう、苦しかったかい？」

由美夫人は微かに首を振った。

「辻村さんが側におられても、どうやら雰囲気になれて来たようだね。もう恥かしくないだろう？」

「でも、やっぱり……」

小さく呟やいて、彼女はそっとシーツの上で身をくねらせていた。目立たぬようにして二の腕を静かに揉んでいる。白い肌はいつか、うっすらと赤味を帯びて、上昇した室内の気温のせいか、軽く汗ばんでいるようにさえ見受けられた。

「中休みに、一杯いかがです」

彼は室内の隅の吊り棚の洋酒を一本とグラ

ス二個をさげると、私にすすめた。余り見たこともない外国製の、ブランドーの芳香が、軽くなめた私の舌を快くしめらせた。

「何だか今日は、凄くハッスルして来ましたよ。私にとっても始めての経験ですからネ。」

辻村さんの眼前で、赤裸々な夫婦プレイやっ

て見たい気持ちしきりですよ。構いませんか」

「ああ、構いませんとも。カメラは遠慮しましょうか」

「出来れば、そう願いたいですが、辻村さんのお気持ちに任せますよ」

小さいグラスだが、三杯許り立て続けにあ

あった彼は、ほんのりと臉の上を染めて悍馬の如く逸り立っているかに見えた。

私も煙草に一服火をつける。

「日頃妻にやらない事を、辻村さんの前でや

って見たくてウズウズしています。これがプレイに於ける衝動の心理なんでしょうかネ。」

二人きりだと、どうしても、いつかマンネリズムになっ

てい

るからなんでしょうね」

さながら、プレイに憑かれた意馬心猿の彼の心情は、騎虎の勢いで、自分でも抑制しかねて

いるようであった。せかれていた堰がきれてど

っと一時にあふれたとでもいおうか。

「いいだろう由美——」

須磨松男は夫人の肩を後からゆすぶるよう

にした。前後に体を揺らめかせ乍ら、彼女は

いいともいけないとも口には出さず、黙って

ゆすぶられるが俚に、身を放心したように任

せていた。

彼女の心境として、この場合、たとえ否とい

っても、やり遂げる夫であることを、熟知

していたに違いなかった。唯、自から進んで

プレイしようとする勇気が、若い妻にはなかつたのであ

ろう。

「じゃあ、そろそろ始めようか」

夫の声に妻はピクリと身を堅くしたようだ

った。プレイハントの傍観者は、手を拱ねい

て、若い夫婦の心の葛藤を冷静に観察してい

るに過ぎなかった。

夫の要請で、妻はロッカーから真紅のシュー

ーズをとり出して来た。若い妻の全裸の白い

肌に、真紅一点、その赤い靴は、ドキリとす

る程の絶妙のコントラストを鮮やかに浮き上

らせて、私は靴への須磨氏の憧憬の一端を、

自分自身の心の中で適確に捉えることが出来

た。

純白のシーツの上に、真紅のシューズをは

いた妻を長々と仰向けに寝そべらせ、彼は足

許に廻って、妻の両脚を抱えて高々とあげ

た。綺麗に伸びた双つの脚線は屹立して、美

容体操しながらに、L字を描く。両脚を立て

させ、彼女の両手をとって立てた脚部の太腿

をかかえさせるようにして、脚部の背後で両

手を深々と合わせて縛り上げる。彼女の二本

の脚は、恰度腕の中へかかえ込まれた恰好に

なる。屹立した脚の足首を揃え、足首ベルト

で締めつける。黒い革の、皮膚に当る裏は、

柔軟なエバースソフトを貼りつけてある。尾錠

の下の丸環に滑車をとりつけ、縄を這すと、

足吊りの態勢が整った。彼は吊り上げるベッ

トからの寸法を目測している様であった。フ

ロアに降り立ってロープを引くと、徐々に脚

線が伸び、体を支えていた臀部が浮き、肩が

シーツを離れて行く。のどを一杯にのけぞら

せて、首から頭は下に重たげに垂れた。

壁際の丈夫な鉤にロープをかけ、ぐるぐる

巻いて縄を通し、しっかりと固定すると、縄は

ビーンと直線になって、豊かな夫人の体は、

ベットより一米ぐらいの高さで揺れていた。

私は息をのむ思いで凝視していた。いつしか

のどが渴いて、生唾をのむのに、ゴクリと音

のする程に口中は粘っていている。

「辻村さん、どうぞ——」

彼はそれだけ言って、革のバンドを私に手

渡した。これで打てというのか。掌に二巻き

して、眼顔でバンドを振ると、彼はうなずいた。紅味がかっていた顔は、いつしか蒼白に変っている。腹を据えて私は由美夫人に近附いた。夫が打てというのだからいいだろう。この際、へんと躊躇しては、反ってプレイの味が白けるというものだ。

私は矢庭に由美夫人の腰の辺りを強く押しした。振子のように弧を描いて、彼女の体は大きく空間に揺れ動く。一度二度、強く押して弾みのついた処で、私の握りしめたバンドは、したたかに彼女の丸く盛り上ったおしりを叩きのめしていた。つんざくような悲鳴が耳を打った。つづけてもう一つ、今度は打つところを弁まえず、彼女の伸びた二の腕辺りにビシリと流れた。苦悶の絶叫が走る。私は憑かれたように、揺れて返って来た体をねらい打ちした。五度、六度。そしてついではり上げた手をうしろから須磨氏がぐっと握って押えた。彼はもういいというように、慌ただしく首を振った。その眼は激烈な情熱のほとばしりに血走ってさえた。のどがカラカラになっているのか、エヘンエヘンと苦しげに咳払いをしていた。私は無言で引退った。代りに身を乗り出した彼はいつの間にか裸になっていた。ベッドにかけ上ると、吊り下っ

た彼女の体は、彼の腰の辺りで揺れていた。髪の毛をむしる様に引き掴んで、顔を持ち上げると、彼は、その顔に自分の裸をおしつけていったのである。

十数分後、吊られた妻に、夫は赤裸々をマザマザと見せて、傍観者の私も早や眼に入らぬのか、野獣の呻きに似た声を立てて挑んでいた。眼を伏せた私の網膜に、真紅の靴が、空間でのけぞり、妖しくうごめくのが、ありありと灼けついていた。

× × ×

既に暮色は国道にヒタヒタと迫っている。見遙かす淡路の島の黒い彼方も、やがて闇にとざされようとしている。松籟は汐風にざわめいて、物寂しい秋の日暮れに、国道の灯は濁って赤く、にぶい光を投げかけていた。

神戸の都心に向って、フォルクスワーゲンは、かなりのスピードで驀進している。

私も無言、須磨松男も無言——。プレイを終えたあとの気懶るいものうさが、私達二人の心をやるせなく包んでいた。

狂おしい宴果てて、正気に還ったとき、身悶えしていた若き妻は、身も世もあらず、縄を解かれると、白い肌をひるがえして、脱兎の如くプレイの部屋から消えていった。

ノロノロと跡片附して、広間に降りる。折しも五時少し前。義妹の電話が鳴り響き、それをシオに私は辞去する腹をきめた。

妻も一緒に、神戸の街で中華の夕食でもと彼は誘ってくれた。好意は有難く、私もその気になったが、肝心の由美夫人はそれを拒否した。醒めたあとの女心——。私は過去の数多い経験から、今の由美夫人の屈辱めいた羞恥と、非公開の夫婦のみのものを第三者に公開した悔痕の心境が痛い程に分った。

気の毒がる須磨氏を反対になだめ、私は勿々にこの邸宅を立出たのであった。

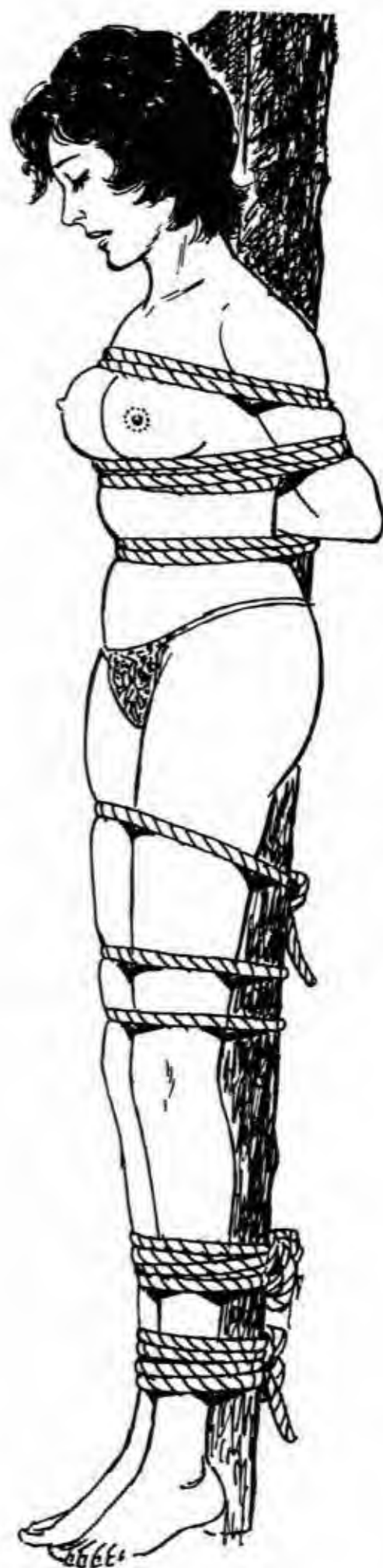
時が経ち、日をふるにつれて、今日の出来事が、いつかは甘い追憶と変わり、奇妙に懐かしい人生のエピソードとして幻影のように、二人の心に残るであろうことを私は確信していた。

所詮は女性モデル独りを、緊縛のフォトプレイとして撮る場合とは異なり、夫婦プレイの場合、行きつく処まで行くのは等しく同じ測であるに違いなかった。謂わば須磨松男、由美夫妻も、その異例ではなかったというだけである。

しかし私は知っている。この若き一組の夫婦が、プレイという二人のみの秘密によって

(筆者註) 広間での由美夫人のプレイフオ
ト三葉は、須磨氏の御好意により拝借して
掲載許可をいただいたものです。

東浦ひかる
略号△はん▽



「痴^ち 人^{じん} の 糧^{かて}」

△汚辱▽

山 本 一 幸

アケミは助手席に腰を降ろして青い海が車窓にゆっくりと流れて行くのを眺めていた。行き交う自動車の数は多く、都会の喧噪がこの淡路島にまで持ち込まれてはいたが、静かな海は群青色に沈んで人の心を郷愁に誘っているようだった。アケミは外を見たまま、運転している大山の膝の上にそっと手を載せて

みた。暖い体温が冷い掌に這い上って来るような気がした。

「外は寒そうだな」

ぽつんと大山は云うと、アケミの手を左手で押えた。その手も温かった。

「仕合せだわ」

「うん」

「まだ好き？」

「うん」

大山は何か優しい言葉をかけてやりたかったが、言葉が見つからなかった。彼の前にその若い肉体と青春のすべてを投げかけ、彼のなすがまま何一つ苦情や要求がましいことを洩らさないアケミ——大山はそんな彼女を愛

しく思った。

「今夜は泊るの？」

「ああ」

「鄭さんは？」

「明日まで留守や」

「じゃ、二人っきりなのね」

「いやかい？」

「いじわる！」

アケミは大山の掌を軽く抓った。その仕草には初々しい娘の媚態があった。桜色に染った柔らかなような耳たぶ、生えぎわのキラキラ光ったうぶ毛、そして白い首筋——ふと目をやった大山は、女のその部分が、こんなにセクシーで美しいことを今まで気がつかなかったように思った。国道から脇道へ車を突っ込んで停めた大山は、アミを引き寄せた。頭髮の短い少年のようなアケミの頭を抱いた大山は、彼女の閉じた眼瞼に唇を寄せた。

「アアッ」

彼女は小さな叫びを上げたが、直ぐ大山の胸に体を預けてきた。甘酸っぱい女の体臭が快く鼻をくすぐった。

「好きだよ」

彼は小さな声で囁いたが、自分ながら、ぎこちない感じがして照れていた。

「今夜は二人だけなのね。うれしいわ」

アケミは目を閉じたまま、同じ言葉を繰返した。

「体の調子は、どう？」

「いいわ。やっぱり……………」

「いやかい？ いやなら、止してもいいんだが……………」

「そうじゃないの。わたしって、変な女ね。

あなたに責められている時が、一番仕合わせなの。軽蔑する？」

「わかってるだろう？」

「でも、この頃少しも……………」

「馬鹿だなあ」

大山は、いじらしくなって抱いた腕に力を入れた。

鄭から一度パーティをやりたいた協力してくれないかと相談を受けた時、大山は百合子の事件のこともあって、くさくさしていたので直ぐ引受けた。一度ばあっと渋滞した気分を発散したい気持があったからだ。

パーティのなり行き次第では、貞操への危険もあり、鄭も暗に無条件の提供にして欲しいような口ぶりであったのだが、大山は敢てアケミを選んだ。

汚辱と虐待——それが彼女への愛情の表現

とするなら余りに異常である。アケミを選んだ理由は、大山自身にもよく説明できないものだったが、彼女を無制限の責めの場に追いやることに、ぞくぞくするような刺激を感じたことも否めなかった。それは或いはマゾ的快感に通じるものであるのかもしれない。

留守になるが前日から来て貰ってもいいという鄭の申出に、大山はアケミ一人を連れて明石フェリーを渡ってきたのだったが、彼女の媚態を眺めているうちに、彼女を徹底的な苦悶と屈辱の中に投じる意欲がより強く湧き上ってくるのを感じた。犯されたい、泣きわめけたい、汚され血まみれになってみたらいい——それでも、なお俺を愛せるか。「ひどいのを、やってみようか？」

アケミは黙ったまま彼の胸に顔を寄せていた。彼女はパーティのことは知らない。

○

アケミは坐っていた。いや、坐らされていた。後手に上半身を、がっしりと縛り上げられ、肘と腕を押えた縄は乳房を挟み腹部に食い込んでいた。勿論、体に纏うものは縄だけで、くびられた柔肌ははち切れんばかりに肉を盛り上らせ皮膚を緊張させていた。しかも首縄から続く縄は、体の前後で横縄の下をく

ぐって縦に割っていた。その上、体がかがまされ、両膝に巻かれた縄が、それを左右に開かせて両腕に引きつけ、合わせた両足首を縛った縄は首に繋がれていた。

口を割った縄は頬に食い入って顔を歪め、白い布は両眼を押えて視力を奪っていた。体を二つ折れにしたその姿は完全な海老縛りではなかったが、何か祈りの姿に似ているようであった。彼女の裸身に残されている自由はなかった。殊にたった一本の縦縄が、女の肌をしつかりと押えて、食い込んでいたのである。

大山は畳の上に体を横にし、肘枕をしてアケミの縄の食い込んだ白い肌を眺めていた。五分、十分——この姿勢のまま、どれだけ辛抱できるか試してみたい気もした。女の肌がしっとり汗ばんで電気の光にキラキラ輝いた。呼吸が苦しげに大きくなった。大山は横になったまま手を伸ばして、紫色に変っている彼女の後手を握ってみた。冷たかったが、その指は探るように動いて彼の指にからんできた。大山は冷淡にその指を振りほどくと、肩を押して女の体を横倒しにした。

「ウウウウッ、ウウ」

下になった腕に食い込んだ縄が物凄く痛い

らしく、珍らしくアケミに縄の下で呻いた。大山は直ぐ彼女の曲げられた腰と腿を抱えるようにして体を仰向けにさせた。後手と背中と頭が畳につき、腰から下が空間に浮いた。赤子におむつを当てがう時のような姿、いや膝が両腕に密着させられているだけに、もっと恥かしい姿になった。更に大山は尻を押し上げて後手首が楽になるようにしてやった。両足の間から顔がのぞき、中央に縄を食い込ませた双球が頂点となった。

「いい恰好になったな。痛いかな？」

アケミは僅かに顔を横に振ったが、赤褐色染った顔の色は、相当な苦しさを表現していた。腿の裏から半球へ、一つの半球から他の半球へ、大山の手がその滑らかな感触を味わうように動いた。白と朱の二匹の蠟さそりの刺青は半ば以上縄の下に隠れていた。一条の縄が急所をうまくカバーしているのを面白く思った。そして縦縄はその苦痛を別として、案外女の羞恥心を緩和しているのかもしれないとも考えてみた。この姿勢で縦縄がなければ、その女体は男の欲望に対して全く無防備であるばかりでなく、外形的にも全く解放的なものになるからである。

「ウン、ウン、ウン……」

アケミの呼吸が断続的になって喉から声を伴って吐き出された。

「苦しい？」

彼女は顔を動かさなかったが、その頃には汗が玉を作っていた。

「叩いてやろうか？」

「ムムムムッ」

「お尻を叩くよ」

彼女の顔が、かすかに肯くように思った。

大山は、アケミの体をまたいで胸と太腿の上に腰を降ろした。

素手でその頂点を叩くと、ボン！と鈍い音がして骨の固さが手に伝った。大山はその経験から少し頂上を外して横を叩いた。パンパン！と肉の音がした。

「ウン、ウン、ムムムッ、ウウウウ」

縄の下で呻きが烈しくなった。その呻きは打たれる尻の痛さからか不自然な姿勢の苦しさからかわからなかったが、大山は狂ったように目の前の肉塊を叩き続けた。白い肌が赤く色づき、掌の型が痛々しい模様を作った。

彼女の顔が少し蒼みを帯びてきたように思った大山は、急いで彼女の縄を解いた。

「大丈夫？」

彼の問いに、アケミはかすかに肯いた。全

身から縄がすっかり取り去られ、横向きになったアケミは、それでも直ぐには腰を伸ばせられないのか足を曲げたままだった。

「苦しかった？」

「ちょっと胸が苦しくて——」

アケミは目を開いて大山の目を、じっと見つめていた。

「明日があるから、もう止して寝ようか？」

「明日があるって？」

大山は苦笑した。そしてパーティのことをもう話して置いた方がいいように思った。

「明日、鄭さんがパーティをやるんだよ」

「じゃ、やっぱり、わたしを縛るの？」

「まあ、そういうことになるな。いや？」

「……………」

「大山は横たわった彼女の乳房を、ちょっと突ついてみた。」

「いやかい？」

「何人程来るの？」

「さあ、どうかな。そう多くはないだろう。」

まあ二、三人か四、五人といったところだろうな。言わずに連れてきて悪かったね」

アケミはちょっと微笑して、おどけたように唇を突き出した。

「遠慮するなんて、大山さんらしくないわ。」

わたしのことならいいの。煮て食おうと焼いて食おうと」

彼女はククッと含み笑いをした。自分の言った言葉に自分で照れていたのだった。

「じゃ休もうか」

ほっとした表情をした大山は、大きく伸びをした。

「今夜、一緒に寝させて！」

甘えたようなアケミの表情を見た大山は、今夜は彼女の要求を容れてやらねばならんなと思った。

一つの寝床で二人は一夜を過ごした。抱き合って眠っただけだったが、アケミにとってそれは仕合わせな眠りだった。しかし、大山にとっては眠りは浅くて息苦しい以外の何ものでもなかった。

○

客は鄭を含めて四人だった。男三人に女一人、もう四十は過ぎたと思われる痩せた女で、目のまわりに黒い隈があるのは彼女の異常な性経験を想像させるようだった。

パーティの準備は大山と鄭の二人でしたのだったが、酒以外のものは近くの食堂から取り寄せた簡単なものだった。パーティの場所にはかつてアケミとセツコが責めを受けた倉庫

の中で、タイル貼りの床に置かれたぶ厚い板の拷問台の上に、アケミの体が大の字になって載っていた。両手首、両足首だけを縛った四本の縄が、彼女の四肢を仰向けにしっかりと台上に押し拡げていた。口には縄が咬まされず、目かくしもなかった。

大山を含めて五人の男女が、その絢爛なテーブルを囲み、女体の空間に置かれたグラスに酒を注ぎ、鄭の音頭で乾杯した。

「今夜はゆっくり堪能して下さい。料理は皆さんにまかしますから、どうぞ御遠慮なく。道具も大抵のものは揃えてあるつもりです。大山さん、どうしてもいいんでしょう？」

挨拶の途中で鄭が大山の方を向いて言った時、皆の視線が一斉に彼の方を向いた。ちょっと顔を赤らめた大山は、思い切ったように言った。

「どうぞ、御自由に」

皆が、ちょっと笑った。

「綺麗に剃っちゃったのね。いい心掛だわ。観賞用にはいらないもんね」

女の客が顔色一つ変えずにいった。それはこのパーティが始まる少し前、大山の手によって除かれたのだった。

「いいじゃないか。普通の女なら、いやに大

きく見えてグロテスクなもんだがね。なかなかいい娘だよ、彼女は」

「マゾの気はあるの？」

「ええ、少々のことなら大丈夫ですよ」

鄭は自分の女のように答えた。

「最初は主催者にやって貰おうかね。いきなりじゃ、ちょっと手を出しにくいもんね」

一人の客の言葉に残りの客は同調した。

「大山さん、やってみたら」

鄭の言葉に大山は顔を横に振った。

「どうぞ、あんたから」

「じゃあ皮切りに、一つ凄いのを、やってみますか」

鄭はにんまりすると、ポキッと音をさせて指を折った。

台の上で手足の縄を解かれたアケミは、更めて手首を後にして縛り合わされ、その縄尻が胴を絞るように巻きつけられた。

「何をやるの？」

女の客が尋ねた。

「逆さ吊りですよ。皆さん、実際に見た人はいないでしょう？」

鄭はアケミの両足首に別々に手拭のような布を巻きながらいった。

「足首が一番痛むんですよ。長もちさせるに

は直接縄を掛けない方がいいんですね」

巻かれた布の上から縄がしっかりと巻きつけられた。彼は滑車をわざと使わず、客にアケミの体を担がせると、自分は台の上に立ってアケミの足首の縄を天井の鉤に、しっかりと結びつけた。勿論一メートル以上の間隔で別々にである。

「さあ、そつと降ろして下さい」

客の手がアケミの体から離れると、女体はピンと腿を張ってY字型にぶら下った。しかしアケミは呻かなかった。鄭は逆さになった彼女に目かくしの布だけを巻いた。

若くて白い女体は客達を圧倒するに充分だった。胸のふくらみ、胴のくびれ、締った腹部、円く肉づきの良い臀部、そしてすんなりと伸びた脚線——無残な感じよりも、女体の持つ美しさが優先していた。

「いいなあ」

誰かが溜息をつくようにいったが、他の者は黙りこくっていた。下手な言葉を出すと、この美事な雰囲気壊れるような気がしたからかもしれない。

逆吊りの女体は少し揺れていた。パツ、パツとカメラの閃光が光った。その再び見がたい実像を、フィルムの上に刻んで置こうとする

客の欲望だった。カメラを持たない客は、その女体の前に廻わり、後に廻わりして、その目の中に映像をはっきり残そうとした。

「あら、これ刺青いれづみなの？」

女の客がアケミの体に小さく刻み込まれている蠟を見つけて叫んだ。

「どうした？」

それを知らない鄭も、アケミの傍からのぞき込んだ。

「うーん、大山さんいつ入れたの？ この前の時にはなかっただろ？」

「ええ、少し前に——」

女の客は無遠慮に、その蠟がよく見えるように肌を押し上げた。

「二匹なのね。精巧なもんだわね」

「白の方は見にくいな」

「それは酒を吞ませたらはっきりしますよ。白粉彫りっていう奴でしょう」

客達は頭を寄せ合って、のぞき込みながら喋った。

「誰か叩きをやりませんか？ 鞭でも棒でもありますよ」

鄭が片手に乗馬用のそう長くない革鞭を持ち、片手に釣竿の穂先のようなものを持って客の後に立っていた。

「わたしがやってみるわ。手加減いるのかしら？」

女の客の開けっぴろげの質問に、鄭はちょっと苦笑した。

「どうぞ手加減なく。しかし顔や急所だけは勘忍してやって下さいよ」

「そりゃ分ってるわよ。じゃ、その細い竹の方を貸してもらおうわ」

ビューン！ビューン！

女の客が二三度振ると、空を切って不気味な音がした。

「お尻から行くわ。力を抜いてた方が、痛くないわよ」

ビシッ！ ビシッ！

逆さ吊りのまま女体が胸を反った。

ビシッ！ ビシッ！

円い半球に鞭が当たると、瞬間その肉が小刻みに震え、忽ち細くて赤い筋が浮び上った。

「ウウウッ、アアッ！、アアッ！」

こらえ切れず唇をついて出た悲鳴は短く切なかつた。大山はその彼女の発声に強い興奮を感じた。今までの縄を咬ましたままの呻きとは異った、悲惨で色っぽい響きを耳にしたのであった。

「アアアーン、アアッ！アアッ！」

鞭は丹念に、そして容赦なく逆さの臀部を打ち据えた。男の客達は、女が女を責める激しい光景に固唾をのんで見とれていた。

「もう降ろしてやったら？ 苦しそうだよ」

客の一人がアケミの顔を、のぞき込んでいった。事実もう限界に近かつた。うつ血した顔は赤黒く、その呼吸は短く早かつた。

「逆さ吊りって男にはとても辛抱できるもんじゃないよ。女だってそう変らんとするな」

客達は急に喋り出しながら、この惨じめな女体を降ろしにかかつた。さすがのアケミも逆吊りのままの十分近くに、辛抱し切れない苦しみを感じ始めていた。もう二、三分吊られていたら、恐らく彼女は氣を失っていたに違いなかった。冷たいタイルの床の上に横たえられたアケミは、大きな呼吸を繰返すばかりだった。

「ええ体しとるなあ。こたえられんよ。独身なら女房に欲しいナ」

一人の男がおどけた口調でいうと皆が笑つた。しかし、女の客は笑いもせず横を向いていた。

○

それから彼女は幾度か縛り直された。それぞれの客の好みに従って、各自が縄を手にし

て行ったものだった。苦痛と屈辱の連続で、縛り直されるに従って、その姿勢は露骨なものになって行った。そこには玩具というよりは、モルモットのように扱われる一個の白い女体だけがあつた。その肌には無数の縄の跡が無残に刻み込まれ、室内とはいえ初冬の寒気はその手足を冷却して行った。

折り曲げられ開かれた女体は客達の目の前に全くの無防備で、客達はもしそれができるなら彼女のほらわたまでも覗き込もうとしたいに違いなかった。若いアケミの肌はみずみずしく色素の沈澱も少なかった。

客の中の男達は口の中がからからに乾くのを感じ、ねばっこくなつた唾液を飲み込んでいた。

鄭は一通り客達の縛りが終るのを見て、更めて二メートル足らずの棒をアケミに背負わせて縛り直した。広げた両腕がその棒にそって伸ばされ、両手首をその棒の上に載せた恰好で手首、肘、腕のつけ根がしっかりと棒に縛りつけられた。羽搔締めに合つたように胸を突き出したまま仰向けに倒され、右の膝に縄が巻きつけられると、その縄尻が背負った棒に巻かれて引き寄せられた。次いで左膝も同じように反対側の棒に引き寄せられると、

彼女の腰から下が浮き上った。

「ちょっと、えげつないな」

客の一人が見かねたようにいった。

「いいわよ。女の足は開き易いようにできてるんだから。それより、この女を、これからどうするの？」

痩せた女の客が鄭に尋ねたが、彼はにやりと笑って大山を振返えただけだった。

「皆さんでいただいちゃったら？ 面白いじゃないの。よかったら、わたしに見物させてよ」

女の眼は血走って濁っていた。彼女はアケミの傍へかがむと浮き上った尻を撫でながらいった。

「どう、みんなに可愛がってもらったら？ どうせ処女じゃないんでしょから。ほうれ、こんなに……」

アケミは顔を彼女の反対側にそらせた。目かくしも猿轡もされていない素顔を同性に見られるのが辛かった。

「いいでしょう？ あんたが承知すれば、後のいざこざがなくて済むんだから」

「いやです。いや、いや」

アケミは激しく顔を振った。

「いやがる女の方が男に魅力があるってこと

わかるわ。どう、わたしに、この女を任してくれない？ 承知させてみるから」

女は再び顔を鄭の方に向けた。鄭は笑いながら小さく肯づいた。

「この娘のように若い女のかん所は下じゃないのよ。勿論経験にもよるんだけど。余り使ってはいないようだから、まだわからないと思うわ。だからね、そうそちらのお二人で」

女は手真似をした。二人の男の客はちょっと、ばつの悪いような顔で縛られた女の傍に寄って膝をついた。大人が二人、頭を並べている姿は滑稽だった。

「ウウウウ、やめて！ やめて！」

アケミは全身にピリピリと電気のようなものが走るのを感じた。体を動かして、その刺戟から逃がれようとしたが、拡げられた四肢は、二人の男の手で押えられているため、どうしようもなかった。

「ウウウウウ、もうやめてえ、ウウン」

「口も塞いだ方がいいようね。そこのお二人でどう？」

大山と鄭は顔を見合わせて、ちょっと作り笑いをした。それは二人が考えていたことでもあったからだ。

「大山君は上の方がいいだろう。舌でも噛ま

れたら、ことだからな」

大山は頭の上の方から逆に唇と唇を合わせた。そして鄭は……。アケミの唇がすりつくように大山の舌を吸った。

○

嵐は去った。そしてアケミをむさぼった客達の姿はなかった。彼女は独りだった。柱を背にして立っている彼女に勿論自由はなかった。柱の後で合わされた両手首、肘を引き絞られているため突き出した胸。縄は彼女の爪先立った足首から膝上、下腹部、臍上、乳房の上下、口、額と強くかけられて、一分の動きも許さないように柱に縛りつけていた。

白い布が目かくしに巻きつけられている。そして暗闇のその部屋の中で灼熱した赤い電気ストープの火だけが、縄を纏った女体をぼんやりと浮び出しているのだった。静かだった。ここで演じられた女体の苦悶と呻吟のメロディが、嘘のように消えていた。

（ああ、わたしの体も、もう大山さんだけのものではなくなくなってしまった。体の奥底まで汚れた女になってしまった）

大山の見える前での屈辱に、幾度か「大山さん見ないで！」と叫んでいた彼女だったのだが――。

アケミはセツコや百合子のことを思い出していた。彼女達が既に経験し、アケミの心の奥底で羨望のようなものが蠢動していた辱しめを、今、彼女は、その身で味わったのだ。その残酷なひとときの中であって、彼女の心は哭きはしなかった。

四人の男と一人の女、そこには能動の生理と受動の生理の相異があったに過ぎず、一方の欲望は他方の欲望を誘導して行ったのである。それは女の哀しみというよりは、果敢な

人間の哀しい営みであるのかもしれない。四人の唇による接触は、彼女を陶醉の中に導き、その後の行動は疼痛の中に甘い痺れを呼んだ。花はおののきながらも、蜜蜂の飛来を拒むことができず、また拒みはしなかったのである。

アケミは何故か罪の意識のようなものが、のしかかっているのを感じていた。疲れと疼きの中であって、後悔をしていない心を憎く思った。それで彼女はセツコや百合子のこと

ばかりを考えているのだった。わたしは自ら

体を汚したのではない。彼女等と同じように無理に……そう考えることが今のアケミには唯一の救いだったのである。

縛られた腕が痺れ、腹部と胸に食い込んだ縄が呼吸を少し妨げていた。部屋の中は電気ストーブのため暖く、それが反って鞭打たれた跡をヒリヒリと痛ませてくるのだったが、彼女は正面向いたまま、どうしようもなく立っていた。

十分、二十分——長い時間が経って行くような気がした。彼女の膀胱が飽和状態になってきてからは尚更だった。

誰かがドアを開けて入ってくる音がした。「いい恰好ね。そのまま処刑してもらったらもっといいのにね」

女の客だった。彼女はアケミを承服させて男達の自由にさせたことに満足しているようだった。近づいた女は縄にくびれた肌を点検するように撫でながらいった。

「どんな気持だった？ 悪くはなかっただろうね。その証拠に……出ていたわよ」

アケミは聞きたくなかったが、頬を歪めて口に食い込んでいる縄と、額にかかった三重の縄が、柱に彼女の頭を完全に固定していて

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

そらすこともできなかった。女はわざとアケミの耳の傍に口を寄せて喋った。

「綺麗だったから余計ハッスルしたのよ。見て、嗅いで、味って——。男って犬と同じ

ね。みんな酔いと疲れで眠ってしまったわ。

でも、わたしは、まだちょっと眠れそうにな
いし、あんたもゆっくり遊んであげる。女同
志だから誰も気にしないからね」

女は指でアケミの鼻を押し上げ、その上か
ら絆創膏を貼って額の縄に挟んだ。急に強く
押し上げられたので、その痛さにアケミは目
かくしを濡らした。楕円型になった二つの鼻
孔が正面に向いて、アケミの容貌は一変して
しまった。

「おやおや、随分鼻毛が多いじゃない。みつ
ともないから取ってあげる」

毛抜きを手にした女は顔を横にしながらア
ケミの鼻孔をさぐった。

「ウウアッ！」

毛抜きに毛が二本挟まれて抜けていた。

「ウウッ！ ウッ！ ムムッ！」

呻きの度に毛抜きがアケミの鼻毛を一本、
二本と抜き取って行った。その痛さはさすが
のアケミにもこらえ切れず、目かくしの下を
涙でぐしゃぐしゃにしていた。そして限界に

来ていた尿意は、忽ち堰が切られて柱と足の
間を流れ落ちたのだった。

「いやだね。粗相をする時には、いってくれ
なくっちゃ」

女は指で下腹部を突つきながらも、その顔
をほころばせていた。

「まだまだなんだけどね。痛い？ 抜くのは
止めて剃ってあげようかねえ」

アケミは必死で顔を縦に振ろうとしたが駄
目だった。しかし女はアケミの気持を充分読
み取っていた。円筒の鼻毛剃りをアケミの鼻
孔へ突っ込むとぐるぐる廻わした。ジョリジ
ヨリという音が頭にまで響いた。鼻毛を取り
去られた二つの孔は、押し上げられているた
め奥の赤い粘膜までも覗くことができた。真
赤なそれは、しっとり濡れて痛々しい色だっ
た。

「さあ綺麗になった。栓を詰めなくっちゃ」

女はアケミの鼻孔に、綿を円めて押し入れ
た。余り深くまで押し込まれたので、アケミ
は激しくくしゃみをした。そのくしゃみが恐
ろしい効果を現わした。全身に食い込む縄
が、くしゃみの度にももの凄力で体を締めを
つけたからである。瞬間的に動こうとする体
と、それを冷酷に拒む縄との間に力の衝突が

生じて、それが締めつけるような結果となる
のだった。

「苦しいかい？ 早く、くしゃみを止めるこ
とね」

鼻を塞がれたアケミは縄を咬まされた口で
呼吸するしかなかった。シューシューと悲し
い音がした。

「濡れてしまっていやだね。ビチャビチャじ
やないの」

女は二本にした縄を腰の後の柱に巻きつけ
ると、アケミの閉じた尻から前へ通した。そ
してその縄尻を持ってぐいと引き上げたの
で、縄は縦縛りのようにアケミの柔肌を割っ
た。女は縄尻を手にしたまま離れた所に置い
てある高い台の上に腰を掛けていった。

「さあ出発！」

二条の縄は手綱たづなのように引張られた。

縄は動かされ、開かれ閉じられ、持ち上げ
られた。その非情の縄はアケミの柔肌を摩擦
し続けた。

「ウウウム、ムムムッ」

柱を背に身動きのできない女体は、喉から
切ない呻きを洩らすだけだった。

「いい気持でしょう。ほうれこれどう？」
その甘美な責めに肉体的苦痛は少なかった

が、ともすれば崩れかかる気持との闘いが苦痛ともいえた。縄が外れると元に戻され、再び二条の開閉運動が繰返えされた。

「ムムムッ、ウウ……」

「だんだん……なるだろ？ もっと早くしようかね？」

アケミは口の中を横に通る縄を噛みしめていた。気の遠くなるような——どうしようもない——狂おしい陶酔。彼女は縄を噛んだ口で切ない呼吸を繰返えしながら、涎を流して

山原清子嬢の仕置図

入墨女賊拷問刑罰集

キャビネ版印画紙焼付

各組 三枚一組 五〇〇円
八組 全部にて 三五〇〇円

女賊仰向け木馬責	略号 (よひ)
全裸の入墨女賊折檻	略号 (よせ)
入墨女賊笞打ち糾問	略号 (よゆ)
女賊ハリツケ拷問	略号 (よめ)
凄絶海老責め拷問	略号 (よす)
全裸四つ這い木馬責	略号 (よも)
逆さ吊りのお仕置	略号 (よき)
大の字磔女賊処刑	略号 (よさ)

呻き続けた。

「ウン、ウン、アン、アン、アン……」

呻きは短い断片となり、悶えは細かい痺れんとなった。

「ウウウーン、ウウーン」

縛りつけられたままの、惨じめな独演だった。

「一巻の終りね。もう一回どう？」

縄から手を放した女はアケミに近づき、そのじつとりと汗ばんだ肌に触れた。

「おやおや、擦りむけちゃったわね。ちよっときつ過ぎたようね。痛い？ 大したことないわよ。今度は丈夫な皮になることよ」

女はアケミ肌を調べながら、ククッと低く笑った。

「さあてと、今度はどこを可愛がってあげようかねえ」

縄で挟まれて飛び出した乳房が驚づかみにされた。女の眼はその優しそうな口調とは正反対に残忍な輝きを持っていた。女はアケミの口を割っている縄だけを解くと、自分のポケットを探った。へしゃげた鼻に詰め込まれた白い綿は依然としてアケミの呼吸を妨げ、開いた口からの喘ぐような息吹だけがスウスウと音を立てていた。

「さあ、これを飲んでもらうわ。毒じゃないから心配しないでいいのよ」

冷くて重い球体がアケミの舌に載った。

「さあ早く飲み込んで！」

女の手がぐりぐりと乳房を揉んだ。アケミは思い切って、それを喉に落した。小さな球は冷たさを舌に残しただけで、簡単に滑り落ちた。味はなかった。

「何だと思う？ パチンコの玉よ。明日位には下から出てくるわ。あんたの体の中を通ってね。それを確めたいんだけど駄目かねえ。明日の昼にはパーティは解散だといってたからね」

女はアケミの胸を軽く撫でた。

「出て来る時は錆びているかしら？」

パチンコの玉と聞かされてからアケミは何か胃の中が重苦しくなったような気がして気が悪かった。体の中までオモチャにするなんて——。アケミは、この女の悪どさを憎んだ。しかし、それとでも、もし大山が試みたことなら、恐らくアケミは体の奥底までも彼に支配されたという満足感で受け容れたに違いなかった。

「綺麗な体ね。若いつてことはいいわ。年をとっちゃもう駄目。あんだ、いくつなの？」

「……………」

「いくつなのさ？」

女の言葉が少し鋭くなった。しかし、アケミが答えそうにないのを見た女は、いきなり平手でアケミの頬を打った。

パーン、パーン、パーン！

「アッ！アッ！アッ！」

耳がジーンと鳴り、顔が火照った。

「もう少し叩こうかね？」

「ハタチ……………」

「早くいったらいいのに。まだ若いわねえ。

今のうちが花よ」

女はアケミの目かくしを外した。目かくしは涙と汗でぐっしりと濡れていた。

「泣いてるのね。いいわよ。わたしは、涙なんかで、ごまかされないから」

女は先刻アケミが背負って縛られた棒を持つと、それをアケミの体に当てがったが、うまく行かないので、アケミの足首と膝の縄を解いていった。

「開いて！」

棒は柱に斜めにアケミの正面から立てかけられた。

「ほら三脚よ」

惨じめな三本足の姿だった。そして体に押

しつけられた棒の先が擦り傷に触って痛かった。女の手は更に両の乳首を洗濯挟みで挟んだ。口にも再び縄が咬まされた。

「いい恰好ね。そのまま温順しく待っているのよ。ああ眠い」

女は最後にアケミの眼瞼をくるりとめくり上げて裏返えした。赤い粘膜が空気に触れて涙を呼んだ。

「アア、ウルシ……………ウウウ」

女はアケミの哀願を無視して部屋を出て行った。

眼瞼をめくり上げられ、綿を詰めた鼻を仰向け、二つの勲章を胸に三本足で柱に縛りつけられている姿は、女の美しさを喪って、むごたらしさだけを残していた。しかもその拘束は、アケミの体を静かに責め続けているのだった。後手の両腕は紫色に痺れ切り感覚はなかった。

（ああ、もう駄目！ もう死んでしまふ。大山さん助けて！）

アケミは心の中で叫んでいた。

苦痛と疲労が彼女からマゾ的快感を完全に奪い去っていた。

深夜、大山が戻ってアケミの姿を見た時、

彼は珍しく驚いた。

「無茶なことをしよるなあ」

柱から彼女の縄を解いた時、その汗に濡れた女体は棒のように彼に倒れかかった。彼女の意識は半ば以上失われていたし、縛られて痺れた体は彼女の意志の外にあったからだ。抱き止めた大山は叫んだ。

「おい、しっかりするんだ！ 大丈夫か？」

応えはなかった。縄と鞭の跡を刻み込んだ体を抱き上げた大山は、アケミをストープの傍の台の上に横たえた。そしてその手は彼女の全身をマッサージした。

「おい、大丈夫？」

かすかな肯づきを見た大山は、彼女の上体を胸に引き寄せて抱き締めた。

「可哀想なアケミ！」

彼の唇がアケミの唇に押しつけられた。

「許してくれよ」

アケミは腕をだらんと垂れたまま大山の抱擁の中にあつた。

（ひどい人！ ひどい人！）

しかし彼女の心は、この一瞬に大山への強い愛情を盛り返えしていた。

夜は深く、どこかで枯葉の落ちるしめやかな音がした。

（つづく）

みゆきの妊婦シリーズ

「妊娠九カ月」

辻 村 隆



土曜日の夜十時半——遅い電話のベルがなる。誰だろう今頃？

「ボク増田です。夜分おそく済みません。あのう、みゆきのフォトですがネ。どうも体の方が大変なんです。それで近々により母を呼ぼうと思っているんですが、例の妊娠九カ月のフォト撮るのなら、もう明日の日曜日しか機会ないんです。ボクは構いませんが、辻村さんに約束した手前、お知らせしとかなくちゃ悪いと思って……」

「明日？」

「ええ、ボクも忙しくて、日曜日しか都合がつかないんです。こられますか？」

「ああ、兎も角それじゃ寸暇を避いて、少しの時間、お邪魔させて頂きますよ」

「じゃあ、待っています。みゆきも承知していますから」

唐突な電話であった。私の仕事も生憎と最忙時であったが、妊婦フォト撮影のチャンスは、そうそうあるものではない。目まぐるしく明日の仕事の段取りを考えて、兎も角午後のひとときを空けることにした。

「車でゆくのなら、私もお邪魔しちゃいけないかしら」

「えっ、お前が——」

妻のこの突飛な申し出に私は吃驚する。温順な妻の言葉にしては意外だったからだ。

「増田さんの奥さん、ふたごのお産で大変なんでしょう。私はお産の経験者だから、何か産前の心得や注意でもしてあげられたらよいと思って」

「そりゃ若い夫婦二人っきりだから喜ぶだろうけれど」

「カメラの時は、邪魔にならないよう隅の方で眼をつぶっていますわよ」

私は苦笑してうなずいた。何もかも承知の妻である。みゆき夫人の妊婦フォトを撮ったとて、それを見ていて滅多に今更驚く妻でもない。増田氏宅への往復の車の運転の、一人っきりの無聊を考えると、私は妻の同行が反っていいとさえ思えた。

私が応諾すると、妻はまるでうれしいドライブにでも出掛ける様な気持で、心なしかウキウキしていた。

×

×

×

日曜日の市中はヒッソリと静まっている。人々は郊外へ、山へ、行楽地へとレジャーを

求めて出払っているのだろう。スムーズに私達は彼等のアパートに到着する。所要時間一時間少し。

折から増田夫妻は昼食中だった。みゆき夫人は重い腰をあげてはにかんだ。彼女の腹部に眼を落した時、一見してそれは妊娠七カ月の時にお目にかかったものより格段の膨張を示していることが歴々とみてとれた。

「こんな体ですから、マーケットへの買物もみなボクがやるんです。おひるの何の支度も出来ていませんが、まあ、こんなもので我慢して下さい」

箸を置いて増田氏は寿司の皿を両手に二つもって、私達の坐ったチャブ台の前に運んでくる。彼等の心尽しに感謝して遠慮なく頂戴する。

「本当にせかして済まないネ。実は今日午後の三時頃から、又ひとつ用件をかねているのでネ。早速だけ始めましょうか」

「ええ、いいですとも。じゃあ準備の方は」
「何もこれといって要らないよ。奥さんのあのおなかを見ちゃ、とても無理をしてもらう気にならないもの。それに、若しものことがあっても大変だからネ」

私は匆々に支度にかかる。支度といっても

カメラにストロボを装填し、窓際に黒いバツクの幕をはるだけの作業だ。

その間、既にみゆき夫人と旧知の妻は、しきりに何かと細々した産前の注意を彼女にしていた。近くなら手伝いに来てあげるのだから、真剣な顔でいっている。妻にとっても、みゆき夫人の余りにも偉大なるふくらみには圧倒され、と共に、女同志の同情を禁じ得ない様子であった。増田氏にせかされて、彼女は妻に会釈すると、私達の待つ部屋にのろのろと体を弓なりに反らせて這入って来た。

「私、どうしてでしょう？」

妻はそっと私の耳許で囁いた。

「よかったら、そこに一緒にいるさ。別段と立って変ったこともしないからさ」

妻は座布団を持って、部屋の片隅の、最も邪魔にならぬ場所に神妙に位置を構えて、うつむいて坐っている。

着物の前は既にはだけて、到底合いそうもない。私は細い帯をとかせ、徐々に着物をぬがせてゆく。立姿、横倒、膝立て、腰掛けととりあえず、妊婦モードに次々とストロボの閃光をひらめかせていた。

「遠慮なく縛って下さいよ」

「じゃあ」

私は増田氏の差出した縄を握って首から胸にかけ、後手縛りにして、かなり腕をつよくしめ上げる。偉大なるオッパイの乳量のまわりは、さながら乳房に黒い腕を伏せたように見事に黒ずんで張り切ってる。

「私、おへそがなくなったんです」

みゆき夫人は私に縛られ乍ら呟やいた。

「えっ、おへそがないって、本当に。どれどれ——」

満々たる腹部に眼をやって、私はあっと思った。なる程、ふくらみ切った腹部の中心の臍窩は、無残にも膨張しきったため、のっぺりとてらてら光って、凹みもない。私はおへその凹みが事実上、この様になくなってしまった女性を生れて始めて見た。私の家内だった、臨月の出産間際まで、臍の凹みは完全に保たれていたのに、これは又何という膨満ぶりだろう。羽村京子がいみじくも言った蛙腹とは、名実共にこのような腹をいうのであるうか。

私は縛ったみゆき夫人の体を、それこそ腫れものにもさわるように、そろそろと大切に扱った。座っていても腰が痛み、立ってはいは足がしびれ、仰臥すれば胸苦しく、事実彼女は彼女、どんなポーズも心なしか苦しげだっ

た。しかし決して厭な顔をせず、易々諾々とこの身重の体を、私のための被写体として曝してくれた。長々と撮るには忍びなかった。

最後に全裸になり、両脚開股の竹縛りにして、両手を後手に縛った仰臥を撮って、恰度フィルム一本というところで私は終わった。

「もうよすんですか——」

増田氏はやや不満げに私に訊ねた。

「奥さんが大分疲れている様子だよ。もうこれ位で止そう、どうもこれ以上やるのは悪くてね」

「じゃあ、最後にボクのカメラで、辻村さんの奥さんも入って貰って記念写真をとりましょう。いいでしょう。奥さん？」

妻は私の顔を見る。私は眼顔で呼ぶと、着物姿の妻は、全裸のみゆき夫人のそばに寄りそう。全裸の彼女の手前、自分が着衣しているのが申し訳ない様な顔だった。女二人の間に私は顔をうしろより覗かせる。

増田氏はこの種の写真を数枚とったあと、折角奥さんが来られたのだから、ポートレイトをとらしてもらいましょうと二眼レフを持出して来た。時間がせくのだが、むげにも断われず私は承知する。今更若くもない妻のポートレイトを撮ったところで仕方がないと思

うのだが、増田氏にとっては、精一杯のサービスのつもりかも知れない。ポートレイトはストロボではよくないと、ライトをつける。

ライトの持ち役は私と、全裸のままのみゆき夫人で、増田氏はすっかりカメラマン気取りで、レフを覗き込んでいる。妻は照れて、頬がこわばり、煌々たるライトを浴びて柄にもなくはにかんでいる。

「そう、奥さん。心持ち顔を上げて——」

妻は破顔一笑した。下げて上げてと、カメラを撮る私にもその角度の気持は分るが、どうも無理な注文である。十二枚とり終えてホツと一息。

「早速四ツ切りにして送りますよ」

「あらっ、そんなに大きくすると、シワが見えますわ」

妻はそれでも気嫌がよかった。このポートレイトで、すっかり時間をとられる。

「辻村さん、出来てくる子供の名前考えて下さいネ。任しますよ」

「ああいいとも。氣にいかどうか——」

「ひとりの時は女の子なら小夜とつけようと思っただんですが二人となるとネ。男なら進にしようと思っただんです」

「小夜に進か。いいネ」

「イニシャルが、どちら廻ってもS・Mですからネ」

「こらっ、不謹慎だぞ。ハハハ」

手土産に持参した果物の缶詰の返しのもりか、帰りがけ増田氏はコウジを一袋突き出した。

「くにより送って来たんです。甘酒をつくって下さい。これだけのコウジで、お米二合五勺に水三千CCでたいておかゆにして、コウジを入れて、毛布でくるんでおいて、温かいところにおくんです。旨いですよ」

とても出来そうにないと押し返す私の手を払うようにして、彼はコウジ袋を妻の手に握らせた。折角の好意だ、いずれ正月にでもゆっくり作るとしよう。

「くれぐれも、お体お大切になさいネ」

妻は小柄なみゆき夫人の肩を抱くようにして、沁々と身内の者をいたわるようにしていた。

滞在二時間半。私達の車に四階の窓からみゆき夫人が、体をのり出すようにして、千切れるように手を振っていた。

風は強いが、陽は暖かい。六甲の連山を背に、私は一散に都心目掛けてスピードをあげていった。

パートカラー

「縄と乳房」

製作ヤマベ・プロダクション

「縄と乳房」

企画 岸信太郎
製作 寿御代子
脚本 山辺信雄
監督 岸信太郎

登場人物

絹子 榊田くに子
弓子 斎藤道子
百合子 山吹ゆかり
節子 新高恵子
市太郎 伊海田弘
清次 種村正

西村 北幸二
刑事 警官
バーテン
学生

1 弓子のアパート

ベッドの上、激しく抱擁し合う弓子と市太郎。やがて——弓子、市太郎の背に頬を当て深く息をついたが、ふと、枕元の時計に眼をやる。

弓子 まあ、もうこんな時間。

市太郎 店へ出る時間だろ。

弓子 ええ。でも、何だか、こんな気分じ

や——今日は休んじやおうかしら。

市太郎 マダムが心配するといけないよ。元

気をお出しよ。

弓子 そうね。

弓子、起き上り、化粧台の前に坐る。

市太郎、腹這いになり、煙草を引き寄せる。

市太郎 僕も家へ帰るのが辛いよ。お前を連れて、どこか遠くへ逃げてしまいたい。

弓子、髪を櫛きながら、市太郎の憂うつそうな横顔を見る。

弓子 いけませんわ、若旦那。私は、これで充分幸せ、若旦那の家庭までこわしたくありませんわ。

市太郎 (自嘲的に) ありや家庭といったも

んじゃない。まるで地獄さ。

弓子 まあ、若旦那、おっしゃる事が、ず

いぶん、オーバね、フフフ……。

市太郎 オーバじゃない。僕の女房は気が狂
ってるんだよ、弓子。

弓子 ええ？

2 走るタクシーの中

市太郎と弓子、ぴったり寄り添うようにし
て、シートに坐っている。

弓子 何だか私、信じられないわ。奥様が

そんな恐しい人だなんて。

市太郎 いや、本当なんだ。最近持病の心

臓病が再発したから、少しはおとな
しくなったが、女房は一種の変質者

なんだよ。

弓子 (啞然として) 変質者――。

市太郎 その上、僕は養子ときてるからな。

その変質者の女房に、ずっといじめ
られて暮してきたんだよ。時々、カ
ッとして女房を殺したい事がある。

弓子 (運転手の方に気を使いつつ) 若旦那。

3 酒場黒猫 その表

表の看板に灯がつく。

4 同酒場 内部

扉が開いて、弓子が入って来る。

弓子 おそくなって、すみません。

マダムの百合子と女給の絹子、スタンドで
ダイスをしている。

百合子 いいのよ、弓ちゃん。近頃は閑なん

だから。それよりどう。近頃、お見

えにならないけど、若旦那お元気？

弓子 まあ、マダムたら、

百合子 隠さなくていいじゃない。フフフ

弓子、絹子の方をちらと睨むように見て、

絹子 お姉さんがいったのね、マダムに。

あら、失礼ね。私、そんなおしゃべ

りじゃないわ。それに姉妹でも私生

活は干渉し合わない約束でしょ。

弓子 だって

百合子 ちよいと、姉妹喧嘩は困るわよ。弓

ちゃんと若旦那がいい仲だって事は

私のカンよ。こういう商売を長いや

つてるとね、そんな事を嗅ぎつける

鼻が発達しちゃうのよ。困ったもん

だわ。

弓子 マダムにかかっちゃかなわれないわ。

胃をぬぎます。

弓子、スタンドに坐って、化粧し始める。

百合子 妹の彼氏はわかったけど、姉の方が

わかんない。山東園の田島さん、そ
れとも、絵かきの森田さんかな。

絹子 さあ、どうでしょうかね、フフフ

絹子、マダムが口にした煙草に火をつけな
がら、面白そうに笑う。

その時、ドアが開いて、初めての客が入っ
て来る。私服刑事の西村だ。

百合子 いらっしやいませ。

絹子も弓子も立上って配置につく。

西村 いや、僕は客じゃないんだ。

西村、スタンドに腰を降すと、警察手帳を

出す。

絹子、ふと硬化した表情。

西村、上衣のポケットから写真を一枚取り

出し、三人の女に見せる。

西村 こういう男、見かけないかね。

絹子 見た事ありませんわ。

弓子 (首を振る)

百合子 見かけない顔ね。一体、何ですの。

この男。

西村 うん。(写真をしまつて) ま、一寸

した、したたか者さ。名は、津村幹

雄。勿論、変名しとるだろうが、こ

の温泉町に潜伏した情報が入ったん
だ。見かけたら、すぐ、署へ連絡し

てくれ。

百合子、ビールの栓を抜く。

西村 おい、いいんだよ、俺は。

百合子 ま、そうおっしゃらずに。お寒いのに御苦労様。これは、私達のおごりよ。

絹子 さ、どうぞ。(と、コップを渡す)

西村 困るな。

百合子 刑事さんが口開けして下さると縁起がいいんですよ。だって、泥棒を捕まえるのが商売でしょ。つまり、この店のお客を捕まえる。ね。(ウインクする)

西崎 そう。(奇妙な顔つきでビールを飲む)

5 旅館立花荘 その玄関

市太郎、憂うつな表情で入って来る。

下足番をしているハッピー姿の清次、ニヤニヤして、

清次 お帰んなさい、若旦那。へへへ、昨夜はおたのしみで――

女中も、隅の方から、じっと、冷たい眼で市太郎を見つめている。

市太郎 よけいな口をきくな。

市太郎、清次を睨むようにして、玄関に上

り、憤然と歩き出す。

清次、その後を面白そうに見ながら、鼻唄まじりで市太郎の草履を片づける。

6 節子の部屋

節子、布団の上に上体を起し、新聞を読んでいる。

市太郎、入って来る。

市太郎 どうだい、気分は。

節子、ふと市太郎を睨むように見て、すぐ視線を新聞に戻す。

市太郎 昨夜は、組合の連中に麻雀を誘われてね、とうとう徹夜になっちまった。

市太郎、節子の枕元に坐り、煙草を取り出す。すぐ近くにあった紙包みを不思議そうに見た市太郎、開いてみる。

バッタや油虫などの死骸が入っていたので、ぞっとし、

市太郎 な、なんだ、これは

節子 触らないで。クモの餌なんだから。

市太郎 クモの餌？

節子 そう、庭のクモの巣にそれをかけてやるの。クモは糸を吐いて、獲物をキリキリ巻きにして血を吸い始めるそれを見るのが私のたのしみよ。

市太郎 (不快な顔つきをして立上る)

節子 貴方。

市太郎――

節子 昨夜から今まで、一体、どこにいらったの。

市太郎 だから、いってるじゃないか。組合の連中と――

節子 貴方もえらくおなりね。

市太郎 何んだって。

節子 養子のくせに夜遊びを覚えるなんて生意気よ。

市太郎 (硬化した表情)

節子 死んだ私の父や母は、ずいぶんと貴方を可愛がった。その恩を貴方は仇で返しているようなものじゃありませんか。妻が心臓病で寝こんでいるというのに、家をあけるなんて、貴方、そんな事の出来る御身分だと思ってるんじゃないの。

市太郎 (怒りに体を震わせ) 僕はね、節子、お前の父親の恩に報いるため、

お前のような人間の血の通わぬ女と一緒にになったんだ。

節子 (けわしい顔つきになって) じゃ、私は人間じゃないと、おっしゃるの

ね。

市太郎 大体、お前は俺を主人と思っているのか。この商売にしたって、お前は俺に指一本触れさせようとはしない。これじゃ俺は、飼い殺しにされてる犬のようなもんだ。

節子 だから、結構な身分だといってますのよ。

市太郎 な、なんだと。

節子 とにかく、この立花荘の経営は、家つきの娘である私が、采配をとります。貴方の指示は受けたくないわ。

年太郎 わかったよ。要するに、俺が、この家から出て行きゃいいんだ。

市太郎、荒々しく襖を開けて出て行く。

節子 (独り言) 私から離れて、どうやっていく気なの。大きな事はいわないでよ。貴方は、私のおもちゃになっ
ていけば、それでいいのよ。

7 縁先のある部屋

部屋の中へ入って来た市太郎、縁先の金魚鉢が空になっているのに気づく。

清次、庭の方へ来て、鈍重な動作で、草むしりを始めている。

市太郎 おい、清次、この金魚はどうしたん

だ。

清次 ああ、それですかい。

清次、のっそり、縁先に近づいて来て、

清次 今朝、奥さんが庭へ捨てちゃったのですよ。

市太郎 何だって。

清次 昨夜、若旦那が帰らないんで、ヒステリーを起しちゃったんですよ。

市太郎 (啞然とする)

清次 わしが今朝、ここへ来た時、三匹の蘭虫が可哀そうに、この石の上で死んでましてね。

市太郎 くそっ

市太郎、金魚鉢を持ち上げ、庭石の上へたたきつける。

清次 若旦那、どこへ行くんです。

市太郎 当分、ここへは戻らない。節子にそういつてくれ。

市太郎、憤然として飛び出して行く。

8 浴室

清次、鼻唄を唄いながら、浴槽に入っている。

清次、ふと、鼻唄を止め、脱衣場のガラスに眼をやる。

ガラス戸の向こうで、着物を脱いでいる

女、その白い裸身が、清次の眼に映ずる。

清次、万更でもない顔つきになり、口笛を吹く。

ガラス戸が開いて、裸になった節子が入ってくる。

清次、ギョツとする。

清次 奥さん――

節子 あんたに、ちょっと背中を流してもらおうと思ってるね。

清次 人に見られちゃ、まずいじゃないですか。

節子 大丈夫、もう皆んな寝ちゃってるわよ。

9 節子の部屋

艶めかしい夜具の上で、激しく抱擁し合う節子と清次。節子、突然、胸のあたりを押さえて苦悶し始める。

清次 どうしたんです、奥さん。

節子 何だか、心臓が――

清次、あわてて節子の背中をさすり出す。

清次 こういう事は、まだ、無理なんですよ、奥さん。医者にかかって、ゆっくり養生しなくちゃ。

節子 有難う、もういいわ、おさまったから。

節子、清次の首に両手を巻きつかせて、艶然と微笑する。

節子 だって、清次があんまり激しく責めるんだもの。

清次 奥さんが、あんまりいい体をしてるもんですからね、へへへ……

節子 ねえ、清次、あんた、この旅館へ勤めて、もう半年になるわね。

清次 へえ、もうそんなになりますかね。

節子 私、あんたの口から、くわしい素性は聞いてないんだけど、この土地の者じゃないんでしょ。

清次 そんな事、どうだっていいじゃありませんか。こうして、奥さんを悦ばせる事の出来る重宝な人間なんですから。

清次、節子を抱きしめ、接吻の雨を降らせつつ、

清次 でも奥さん、家出した旦那をうちやらかしといていいんですか。

節子 フッフ、子供がすねているようなものよ。二三日もすりゃ、しょんぼりして帰って来るわ。——私ね、市太郎をいじめていると、とても、気分がいいの。気持がスーとするのよ。

清次 へえ、変わった趣味だな。

節子 そう、たしかに変わってるかも知れないわね。市太郎が悩んだり、苦しんだりしている顔を見ると、ぞくぞくするんだから。

清次 じゃ、俺とこうして、いちゃついてんの、旦那を苦しめる一つの手段でわけですね。

節子 ま、そうとも、いえるわね。

節子、狂ったように声をあげて笑い出す。
清次、奇妙な眼つきで、そんな節子を眺めている。

10 弓子のアパート 朝

ベッドの上。自棄になったように弓子を抱きつづける市太郎。

やがて、がっくりして、弓子の胸に顔を埋めてしまう市太郎。

弓子、市太郎をあやすようにしながら上体を起す。

弓子 今日の若旦那って、何か別人みたい。私、完全にグロッキーよ。

弓子、寝巻の襟元をかき合わせて、化粧台の所へ行き、気だるそうに髪の毛をとき始める。

市太郎、ぼんやりと天井を見上げながら、

市太郎 弓子、実は俺、家を飛び出して来たんだ。

弓子 え？

市太郎 もうあんな地獄屋敷にや帰りたくない。な、弓子、俺は、ボーイでも、サンドイッチマンでもやる。俺をこへ置いちゃくれないか。

弓子 そ、そんな……

市太郎 弓子、どうなんだ。嫌なら嫌でもいい。はっきり返事をしてくれ。

弓子 嫌だなんて、そんな。嬉しいのよ。

若旦那。でも、立花荘の御主人ともあろう方が、私のような酒場の女と。

市太郎 弓子。俺はもうお前より信じるものがないんだよ。

市太郎、必死な思いになって弓子を見る。

11 アパートの前

絹子、手に菓子が入った風呂敷包みを持ち、ち、入って来る。

12 同・アパートの廊下

絹子、弓子の部屋をノックしようとして、中から聞えてくる弓子と市太郎の声に気づき、ふと、聞き耳を立てる。

13 弓子の部屋

市太郎と弓子、火鉢を前にして坐っている。

市太郎 節子って女は、一種のサジストなんだよ。俺を精神的に虐待して、楽しい気分浸っている空恐しい女なんだ。俺はもうこれ以上、屈辱の生活にがまん出来ない。

弓子 可哀そうな若旦那。

弓子 市太郎の手の上に手を乗せる。

市太郎 もう若旦那なんて呼び方はやめてくれ。俺は、もともと養子だし、あんな家には何の未練もない。土方をしたって、人間らしい暮しが出来ると思うんだよ。

弓子 わかったわ。私、若旦那、いえ、市太郎さんがそういう決心をしてくれたのなら、どこまでもついていく。

市太郎 弓子っ

市太郎、思わず、弓子を抱きしめる。

弓子 一つ、お願いがあるの、市太郎さん。今の私の身寄りには、たった一人の姉さんだけ。姉さんだけには、こうしたことを包まず話しておきたいの。

市太郎 そりゃ当然だよ。俺からお前の姉

さんに話して、二人の事を許してもらおうと思うんだ。

14 同・アパートの廊下

じっと、中の会話を聞いていた絹子、ふと、表情をつくろって、ノックする。

15 同・弓子の部屋

市太郎と弓子、ハッと抱擁をとく。

弓子 はい、どうぞ。

ドアが開いて、絹子が入って来る。

弓子 あら、姉さん。

絹子 今朝、マダムの家で、おはぎを作ったのね。おすそ分けに来たのよ。
(市太郎の方へ眼をやり) お久しぶりですわね、若旦那。たまには、お店の方へも、遊びにいらして下さい。

市太郎 (そわそわして) は、どうも。

弓子 ま、上ってよ、姉さん。

絹子 そうはしてられないのよ。私、ママに頼まれた買物があるの。

市太郎、立上って、絹子の傍へ寄る。

市太郎 実は、折入って、姉さんに話があるんだけど――

弓子 姉さん、私達の話、一寸聞いて下さらない。

絹子 いいのよ、わかってるわ。悪いけど私、表で立聞きしちゃったの。

弓子 それで、姉さん、私達――

絹子 (じっと弓子の眼を見て) あんた、市太郎さんを愛しているんでしょ。それなら、むつかしい理屈は抜きよ。どこまでも思いをつらぬくべきだと思っわ。

弓子 (感激して) 姉さん。

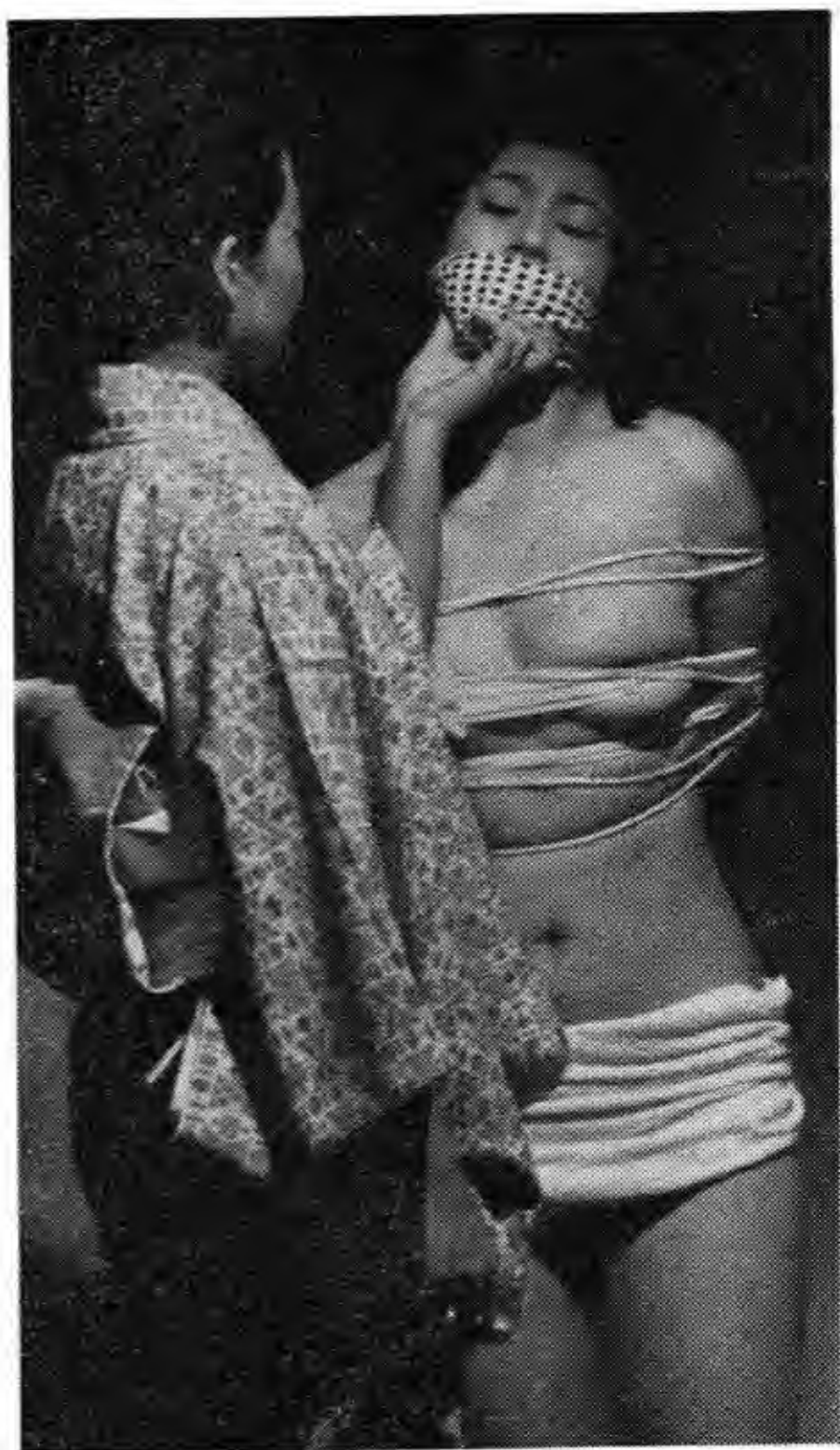
絹子 でも、話が複雑だけに、かなりの波風が立つ事は、覚悟しなきゃあね。大丈夫よ。私達、障碍を乗り越えて、きっと幸せになってみせるわ。

弓子 まあ、大した自信ね。うらやましい位。――ね、市太郎さん、妹の事で私からもお願いしたい事があるのですけど、一寸、そこまでおつき合ひして下さいません。たまには、姉の方と一緒に歩いて下さってもいいでしょ。

市太郎 はあ、丁度、僕も、煙草を買おうと思っていたんで――

市太郎、草履をはき始める。

絹子 (笑いながら)一寸、彼氏を借りるわね。



弓子 でも、姉さん、早く、うちの人、解放してくれなきゃ嫌よ。

絹子 あら、もううちの人だなんていって
るわ。

三人、笑い合う。

16 商店街 A

肩を並べて歩く市太郎と絹子。

絹子 市太郎さん。水商売の垢に染まった
私が、こんな事いうのはおかしいけ

市太郎 どの、妹の事はくれぐれもお願いま
すわ。私達、子供の頃に両親に死別
して、たった二人きりの姉妹ですの。
はあ、よくわかってます。とにかく
生れ変わった気持で、一生懸命やって
みます。

絹子 その言葉を聞いて、私も安心です
わ。こういう稼業をしてるんですか
ら、お互に私生活には触れないって

約束なんですけど、やっぱり姉妹で
すものね。気になるんですよ。それ
に、私がもともと結婚に失敗して、
ぐれちゃった女でしよ。せめて、妹
だけは、幸せな道を歩かせてやりた
いんです。

17 商店街 B

洋服屋のウィンドウを見つめている節子と
清次。サングラスをかけた清次は、しきり
に周囲に気をくばっている。

節子は、狐の襟巻きなどを巻いているとい
った盛装で、

節子 ね、清次、このネクタイ、なかなか
渋くていいじゃないの。これにきめ
ようか。

清次 俺にですか。いいですよ、奥さん。
俺はおしゃれはきらいなんだ。

節子 駄目よ。せめて外出する時ぐらい、
いいもの身につけなきゃ。ここで洋
服も揃えましょうよ。ね。

節子、清次の手をとるようにして、店の中
へ入ろうとする。

清次、ふと、表通りに眼を向けて

清次 おや、ありゃ、若旦那じゃありませ
んか。

節子、清次の視線を眼で追って、ハッとす
る。

18 清次と節子の見た商店街

市太郎と絹子が仲良く買物している。

19 洋服屋の前

節子、ひきつったような顔になる。

節子 女がいたのね、市太郎に。

清次 そりゃ女も出来ますよ。家じゃ毎日
女房にいびられ通しなんだからな、
ハハハ

節子 そんな勝手な事、誰が許すもんか。

節子、狂暴な顔つきになり、ふらふら、市
太郎のいる方へ歩いて行こうとする。

あわてて、それを止める清次。

清次 およしなさいよ。往来で痴話喧嘩は
みっともねえ。

節子 (狂ったように) 離してよ。女なん

か、女なんか作るなんて、畜生!

20 立花荘・節子の部屋 夜

夜具の上で、のたうつ節子。

節子を燃え上らせているのは清次である。

節子 やめて、もう駄目よ。苦しい、苦し
いわ、心臓が――

節子、激しく息づきながら、枕の上へ顔を
押し当てる。

清次、ほっとしたように手を離し、腹這い
になって煙草を吸う。

発作のおさまった節子、清次の方に背を向
けたまま、思いつめた表情になって、

節子 ね、清次、さっき、あんたに話した

事だけど、今夜、実行してよ。

清次 旦那の女を誘拐しろというんですか
い。誘拐してどうするんです。

節子 なぶりものにして、一寸、表を歩け
ないような体にしてやる。

清次 女の考える事にしちゃ、あんまり、
いい趣味じゃねえな。

節子 女を泣かせるだけが目的じゃない

わ。女を奪われた市太郎が、どんな
風にペソをかくか、それを見てやり
たいのよ。

清次 奥さん、あんたの考えている事は、

まるで気狂いだぜ。俺は変態の手伝
いなんかまっぴらだね。

節子、
直り、
フンとした表情で、清次の方へ向き

節子 清次、あんた、私にそんな事いえない
筈よ。

清次 ええ?

節子 フッフ、私に尻尾を握られてるって

事に、まだ気がつかないの。

節子、手をのばして、ハンドバックを取
り、一枚のピラを清次の鼻先へつき出す。

清次、それを手にとり、チュツと舌打ちす
る。

節子 一週間ばかり前に、交番の近くに張
りつけてあったのよ。あんた、仲間
を刺し殺して逃走したやくざなの
ね。

清次 (手配書を見ながら) この写真は、
あまりよく撮れちゃいねえな。実物
の方がもっといい男だ。

節子 フッフ、何いってるのよ。

清次、手配書を丸めて、投げ出し、
身元がバレちゃ仕方がねえな。だが

よ、あんた、こんな俺と、こんな事
になっちまって、怖くはねえのかい。

節子 正直いうとね、私だって、この立花
荘の本当の娘じゃないんだよ。三つ
の時、貰われて来たらしいの。話せ
ば長い事だけど――

清次 (起き上って、服を着ながら) なる

ほどな。あんたの実際の親てえのは、
俺みてえな悪党だったんだろ。

節子 そうかもねえ、フッフ。――ねえ、

清次、あんたが私の命令通り動いてくれるなら、このまま、ずっとかくまったげるし、小遣いも充分あげるわ。どう。

清次 (ニヤリとして) 悪くはねえな。

酒場黒猫 その表

21 同酒場・内部

カウンターをはさんで、マダムの百合子と絹子、話し合っている。

百合子 そうなの。だけど、いいじゃない。

弓ちゃんも、好きな人と一緒に苦勞が出来るんだから——それで、明日引越しするわけ。

絹子 ええ、私のアパートは、案外、人眼につかない所ですから、その方がいいだろうと思って。

百合子 姉と妹の住所交換でわけね。あんたも色々大変ね。

絹子 そういうわけで、色々支度があるものですから、今日は一日、妹、休ませて頂きます。

百合子 いいわよ、そんな事。でも、あの若旦那の奥さんってのはひどい女ね。まるで、氣じるしじゃない。そんなもの氣狂い病院へぶちこんじまえば

いいんだわ。

酒場のドアが開いて、西村が入って来る。

絹子 いらっしゃいませ。

百合子 ああ、刑事さん。いかが、この前の指名犯人、つかまってる。

西村 つかまらんね。何かいい、聞きこみはないかね。

西村、スタンドに坐る。
百合子、ビールを出す。

西村 おっと、今夜は客で来たんだからな。おごりはごめんだぜ。

百合子 それは、それは、どうも有難うございます。

西村 おや、今日は女の子、一人、かけてるんじゃないか。どうかしたの。

絹子、西村の傍に寄り添うように坐ってビールを注ぎながら、

絹子 あら、私のお酌じゃお氣に召さないの。刑事さんだけあって、もう眼をつけたのね。

西村 いや、そういうわけじゃないよ。

西村、絹子の横顔をじっと見ながらビールを飲む。

22 酒場の近く

自家用車が止っている。

運転席にサングラスをかけた清次が坐って

いる。

うしろのシートには、同じく、サングラスをかけた節子が、煙草をくゆらせている。

節子 (ふと表を見て) 清次、あれよ。あの女よ。

23 酒場 黒猫の前

西村を送って、ハンドバッグを抱えた絹子が出ている。

絹子 どうも、有難うございました。またいらして下さいましね。

西村 (フラフラしながら) 君も、帰るなら送ろうか。

絹子 ええ、でも、一寸、寄りたい所があるので、この次にお願いますわ。

西村 ものの見事に振りやがったな、この野郎、ハハハ

西村、氣嫌よく、都々逸を唄いながら歩いて行く。絹子、ほっとして、店内に声をかける。

絹子 それじゃマダム。悪いけど、今夜は先に帰らせて頂きます。

百合子の声 ああ、氣をつけてね。

24 暗い道

絹子、急ぎ足で歩いている。

自家用車、絹子の横まで来て、止る。ドア

が開いて、清次飛び出し、強引に絹子の体を車の中に引きずりこむ。

25 車の中

絹子 な、なにをするんです。

絹子、清次と節子の間で暴れる。

清次、麻葉を渗込ませたハンカチを絹子の鼻に当てる。力が抜け、がっくりとシートに体を落す絹子。

節子 うまくいったわ。さ、早く。

清次、運転席に乗りうつり、エンジンをかける。

26 夜の海岸線

疾走する自家用車。

27 立花荘 地下室

物置になっている陰気な地下室。

絹子、床の上に横臥したまま、身動きもせず、眠りつづけている。

それを、じっと見下している節子と清次。

清次 これから、どうするんだよ。この女を。

節子 私から、可愛い亭主を奪った女じゃないの。うんと生恥をかかしてやるのよ。

節子、眼の底に残忍な色を浮かべて、じっと絹子の顔を見つめているのだ。

やがて、絹子、うっすらと眼を開け、二人に気づいて、ハッとすると。

節子 気がついた？ ずいぶんと骨を折らせてくれたわね。

絹子 誰、誰なの、貴女は。

節子 あら、御存知ないの。(つんとした顔で) 私、市太郎の妻、節子と申します。どうぞよろしく。

絹子の顔から血がひく。

節子 貴女、絹子さんとおっしゃるのね。

ハンドバッグの中にお店の名刺が入っていたわ。

絹子 私をどうしようっていうの。

節子 主人の市太郎を、貴女は可愛がって下さってるようね。そのおかげに、私が貴女を可愛がってあげようというのよ。

絹子、事情が呑みこめて、急に度胸をすえ、節子を見上げる。

絹子 そう、貴女が市太郎の奥さんなのね。悪いけど、私の大事な市太郎は、あんたのような気狂女には返さないわよ。

節子 な、なんだって。

絹子 (葉すっぱな口調になり) 市太郎は

地獄屋敷からようやく抜け出して、これから幸を掴もうとしているのさ。あんたも自分にふさわしい男を探したらどうなの。少し頭のおかしい男をね。

絹子、笑い出す。

それにつられたように、清次も笑い出す。

節子、怒に体を震わせて。

節子 この売女^{ばいた}！

節子、絹子につかみかかる。

女同士の掴み合い、和服の裾が乱れて二人の太腿まであらわになる。

清次、ニヤニヤして見つめている。

鬼女のような形相で、絹子の上に乗しかかる節子。絹子、下から節子の腕に噛みつく。

節子、悲鳴をあげて。

節子 清次、清次、何とかしてよ！

清次、相変らず、ニヤニヤしながら、煙草を捨て、のっそり近づいて来る。

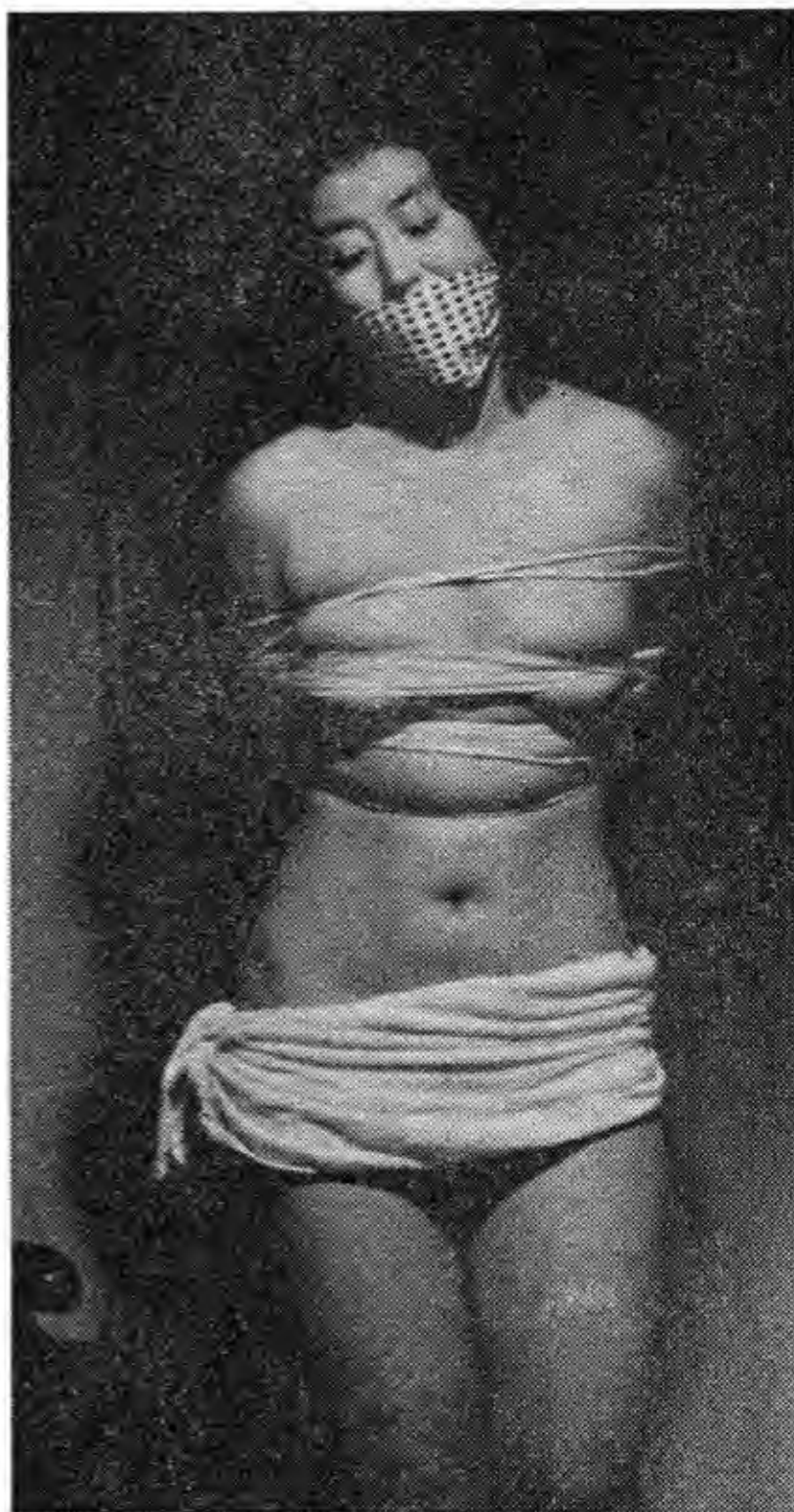
28 弓子のアパート

弓子と市太郎、火鉢をはさんで考えている。

弓子 おそいわね、姉さん。

市太郎 うん。

弓子 引越し荷物をまとめるから、今夜は、早く帰るといったのよ。



市太郎 何か急用が出来たんじゃないか。
弓子 私、一寸、お店へ行ってみるわ。

弓子、立上って、オーバーを着始める。

市太郎、火箸で灰をかき混ぜていたが。

市太郎 よし、俺も行こう。(と、立上る)

29 地下室

長襦袢姿にされ、後手に縛られて、柱を背に立っている絹子。

節子 フン、ざまを見る。

節子、絹子の頬を平手打ちする。

絹子、憎悪に燃える瞳を節子に注いで、

絹子 どうでも、好きなようにするがいいわ。だけどね、市太郎だけは、たと

え殺されたって、あんたには返さない。よく覚えておくがいいわ。

節子 フン、今にそんな生意気な口がきけないようになるさ。嫌というほど吠

え面をかかせてやるから

絹子 吠え面をかくのは、あんたの方じゃないの。

節子、絹子の語気に出鼻をくじかれた感じ。

節子 こんなアバズレに、市太郎が惚れる

なんて——信じられないわ。
椅子に坐って、揚子で歯をせせっていた清次が立上り、近寄ってくる。

清次(節子に)これだけ威勢のいいお姐ちゃんなら、泣かせ甲斐があるじゃねえか、え。さ、遠慮せず、どんどん責めなよ。どうだい、何なら俺が丸裸にひんむいてやろうか。

絹子、痛い所をつかれたように、ハッとする。それを見てとって、節子、北叟笑む。

節子 そうね。だけど一度に裸にしちゃ面白くないわ。三十分毎に一枚ずつ剥ぎ取ってやるというのはどう。

清次 成程、一寸試し、五分試し、じわじわと責めるってわけか。いいだろう。夜明けまでにや素っ裸ってわけだ。

絹子、歯を喰いしばった表情で、清次を見る。

30 酒場・黒猫 その内

深夜のがらんとした酒場の中。

マダムの百合子、弓子、市太郎の三人。

不安な表情で話し合っている。

百合子 絹ちゃんは今十時頃、店を出たのよ。

明日の引越しの準備があるから

て。

弓子、腕時計に眼をやって

弓子 でも、もう十二時をとくに過ぎて
いるわ。

百合子 心配しなくてもいいわよ。姉さんは
しっかり者だから、間違いないで起
りっこないわ。どこか友達の所へで
も寄ってるのよ。

弓子 そんならいいんだけど。

市太郎 俺、一寸、その辺を探してみる。

弓子 私も行くわ。

市太郎 いや、お前はここにいた方がいい。
姉さんから電話があるかも知れない
からな。

市太郎、スタンドの上の懐中電燈を取って
出て行くとする。

百合子 ああ、若旦那、いいおくれましたけ
ど、今度は、おめでとうございま
す。弓ちゃんと一緒に暮らす事にな
ったんですね。

市太郎 はあ（照れる）

百合子 弓ちゃんもしっかりやってね。絹ち
ゃんもいってたわよ。あんないい人
と苦労が出来るなんて妹は幸せな奴
だってさ。

31 地下に通じる階段

節子と清次、何か笑い合いながら降りて来
る。

清次、肩にカメラをかついでいる。

32 同、地下室

腰巻一枚を残しただけの半裸で、柱に縛り
つけられている絹子。

清次と節子が近づいて来たのに気づいて全
身を硬直させる。

節子 どう、大分、涼しくなったようね。

皮をむかれる筈の心境は如何が。ホ
ホホ（腕時計を見て）さて、お時間
のようだから、そいつも脱いで頂く
わ。

絹子 あんたは蛇よ。気の狂った毒蛇だ
わ。

節子 ま、何とでもいうがいいわ。（清次
に）カメラの用意をしておいてね。

清次 わかったよ。

清次、三脚を立て、カメラを配置してい
る。

節子（絹子に）あんたのヌード写真をと
るのよ、焼増しが出来たら、この温
泉町のあっちこっちにバラまいてあ
げるからね。となると、一寸、大き

な顔して、町は歩けないわね。どう
面白いアイデアでしょ。

清次（カメラをいじりながら）若旦那が
眼にしたら、たまげるだろうな。

節子（狂ったように笑い出す）そう、そ
うよ。市太郎が見たらどんな顔をす
るか知ら、ホホホホ。

絹子（屈辱に唇を噛みしめる）

節子 さ、覚悟して頂戴ね、

節子、腰をかがめて、結び目をとき始める。

絹子 待って、待って頂戴。

節子 今更何よ。敵に後を見せる気なの。
大きな啖呵を切ったくせに。

屈辱と、恥に歪んだ顔を必死になって横へ
そむける絹子。

ハラリと落下する最後の一枚。

節子の狂気じみた笑い声。

33 立花荘、近くの道

市太郎懐中電燈をかざしながら、青白い表
情で歩いている。

34 地下室

天井から下がっている縄に両手を縛られつ
まさき立ちをしている絹子。腰のまわりに
手拭を巻きつけただけの裸身である。
絹子の尻に、ぴしりと音がして、皮バンド

が走る。

うっとうめいて、のけぞる絹子。

ムチをふるってるのは節子だ。

節子は、責められる絹子よりも苦しそうに息をつきムチを使っている。

清次、ウイスキーを飲みながら、そんな節子にじっと視線を向けている。

節子 清次、代ってよ。息が切れたわ。

節子、苦しうにあえぎつつ、フラフラ清次の所へ来る。

清次 なんだ。責められる方より責める方が参ったのかい。仕様がねえな。

節子 早くぶつのよ。あの女が泣きわめいて、許しを乞うまでね。

清次 この女、ちょっとやそっとじゃ音をあげそうじゃねえぜ。

清次、皮バンドを取りあげる。

清次 俺は手加減しねえからな。

清次、いきなり絹子の尻をぶつ。

うっとうめいて、キリキリ歯を噛み鳴らす絹子。

それを見つめる節子。狂人めいた笑いをし

て。
節子 どうだい。少しはこたえたらう。いい気味だ。

35 地下の階段

後手に縛った絹子を押し上げるようにして階段を上る節子と清次。

絹子 ど、どこへ連れて行くのよ。

節子 だまって、ついてくりゃいいのさ。

清次、ポケットから手拭を出して絹子の口に猿轡をはめる。

清次 さ、来るんだ。

36 節子の部屋

床の間の柱に立縛りにされている絹子。

節子、その前に立って、憎々しげに絹子の耳を引っばったり、鼻をつまみ上げたりしている。

清次が一升びんを持って入ってくる。

清次 女中たちは皆んなよく寝てるぜ、大丈夫だ。

節子 そう。

節子、夜具の上にあぐらを組んで茶わん酒を飲み出した清次の所へ行く。

清次にしなだれかかるようにして、

絹子に視線を向け。

節子 そっちがそっちなら、こっちだって負けちゃいけないからね、仲のいいところを、ちょいと見せてやるよ

——ねえ清次。

節子、艶然としたポーズをとって、清次に肩を抱きしめる。

清次、茶わんを置き、節子を夜具の上へ押し倒し、節子の帯を解き始める。

節子、ハッと眼を伏せる。

節子 待って、待って、清次、また、胸が

——。

節子、急に清次の手を払いのけるようにして、苦しうにあえぎ始める。

清次 ちえっ、仕様がねえな。燃え上った火に水をぶっかけられたようだぜ。

清次、ふくれ面をして立ち上る。

節子、激しく息づきながら、清次の足に取りすがる。

節子、全くの狂乱状態になって。

節子 ね、あの女、あの女を抱くのよ、清次。

清次 ええ？

節子 あれは市太郎の女よ、ね、愉快じゃない。あんたが市太郎の女を抱く、

市太郎はどんなに口惜しがらるだろうね。ハハ——ハハハ。

清次 よし、わかった。

清次、床の間の絹子に近づく。

絹子、恐怖に顔を歪める。

節子 さ、早く、清次、私が許したげる、

その女の肉をしゃぶりぬくがいいわ、ハハハ。

夜具の上へ投げ出された絹子、必死になって、両肢をばたつかせ、抵抗する。

清次、眼をギラつかせて、絹子の上へ乗しかかる。

その周囲を狂乱した節子、異様な笑い声を発しながら、ぐるぐる廻りつつけるのだ。

節子 何してるのよ、清次、押さえつける

のよ、その女を、ズタズタに引き裂いてやるのよ。ハハハ

絹子、抵抗する気力も失せたように、ぐったりとして清次のするがままになってしまふ。

それを凝視していた節子、急に、わっと手で眼を覆い、次に嫉妬に耐えかね、眼をつりあげて。

節子 やめて！

節子、突進して、絹子から清次を突き飛ばす。

清次 何んでい、この気狂い。

清次、カッとなって、節子の横面をひっぱたく。

節子 やるもんか。

おまえは私の男よ。お前まで、こんな女に取られてたまるもんか。

清次、呆然として、節子の顔を見つめる。

清次 勝手にしやがれ、おめえとは、もう交き合い切れねえよ。

清次、ゴロリと、その場で横になってしまふ。

節子、絹子の縄尻をとって、引き起しかかっている。

節子 さ、来い。

おまえは、市太郎だけじゃなく、清次まで私から、奪おうとした。

責めて、責めて、責めぬいてやる。

節子、絹子を引きずるようにして、隣の浴室へ連れて行く。

清次、横になったまま、ニヤリとして、

清次 サジスト奴、とうとう気が狂っちゃまいやがった。

水道の蛇口から出る水音。

清次、眉をしかめて上体を起す。

37 浴室

浴槽に満ちていく水道の水。

それを見た絹子、戦慄して、浴室のガラス戸を突き破ろうとして、縛られた裸身をぶ

つける。

節子 逃げようとしたって駄目よ、たらふく水を飲ませてやるからね。

節子、絹子の口から猿轡をとり、水槽へ押し立てようとする。

絹子 気狂い、けだもの、殺すなら殺すがいいわ。必ず化けて出て、呪い殺してやるから。

節子 うるさいわね、さ、こっちへおいで。

浴室のガラス戸が、かすかに開いて清次がそっとのぞき見している。

節子、絹子の首を水槽の中へ押しこんだり出したりする。

水から首をあげた絹子、苦しげにあえぐ。

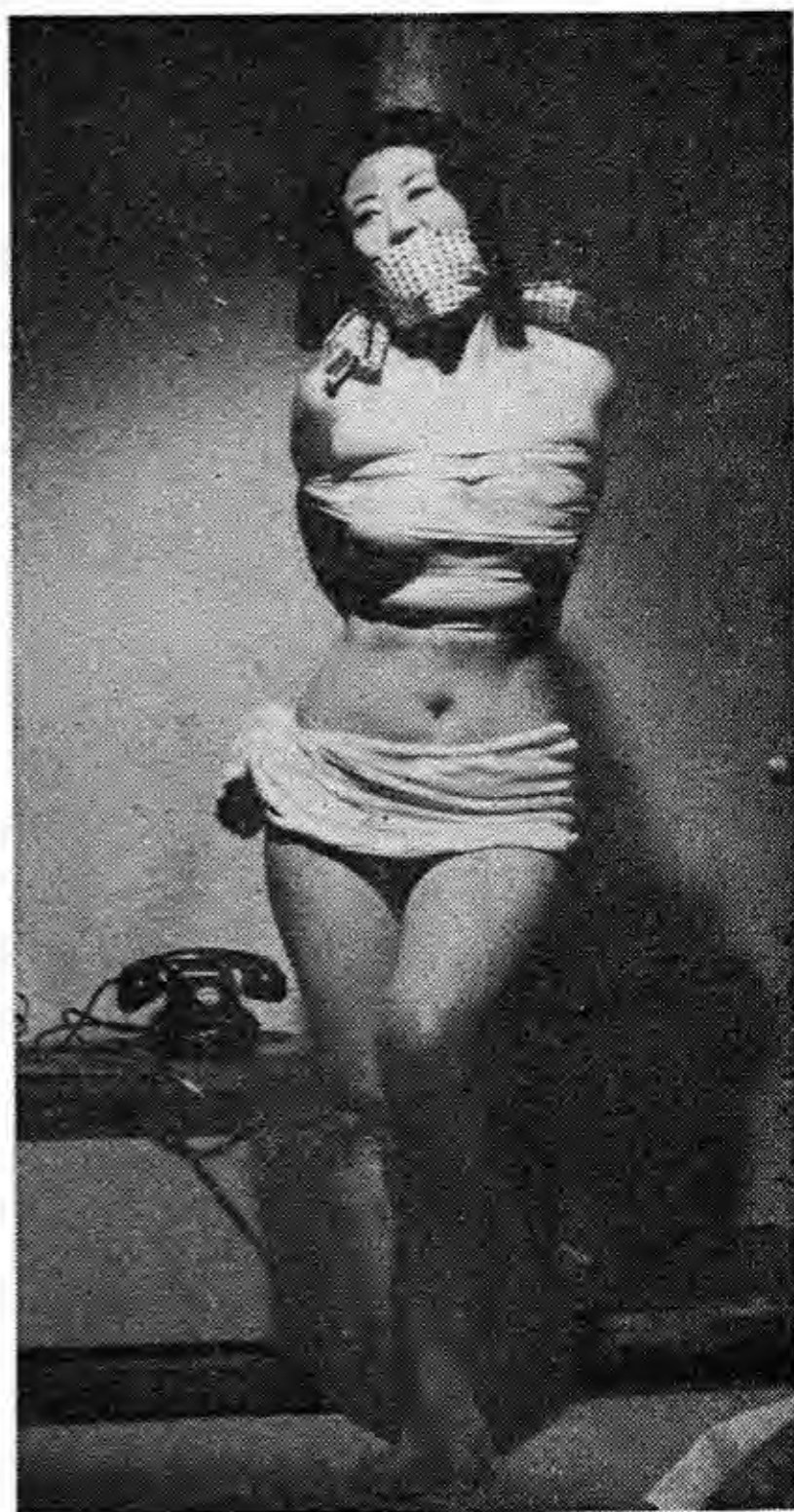
節子 どう、今度は少し、こたえたようね。さ、もう一杯、御馳走したげる。

再び、絹子の首を水槽へ押しこむ節子。

だが、次に引き上げた時、絹子、がっくり力が抜けたようその場へくずれ落ちてしまふ。

節子 どうしたのよ。——ね。

節子、絹子の体を揺さぶるが、唇から血をひき、白眼をむいた絹子の硬化した顔が上向く。



ギョツとして、立ち上る節子。

清次の声　とうとう責め殺しちまいやがったね。

清次、戸を開いて入って来る。

タイルの上に倒れている絹子を調べてみて。

清次　完全にお陀仏しちゃったぜ。

節子　ど、どうしよう、清次

清次　どうしようたって、おめえが殺しちゃったんじゃないか。

節子　こ、ころす気はなかったのよ。苦し

めるだけ、苦しめてやろうと――。

清次　そんな事、今更いったって仕様がねえよ。何とか死体の後始末をしなきゃ。

清次、絹子の縄をとき、べったりと額にまといっている髪をかきわけける。

恨めしげに動かない瞳を節子の方へ向けている死体。節子、思わず悲鳴をあげる。

38 廊下

毛布にくるんだ絹子の死体を抱いて歩く清次。そのあとから、節子、青ざめた顔で慄

えながらついていく。

清次　部屋へ戻ってねてなよ。この死体の始末してくるから。

節子　早く、早くかえって来てね。

節子、近くの窓から、ふっと外を見る。暗闇の中に懐中電灯の灯がチカチカ明滅している。

節子　清次、表に誰かいるようだよ。

清次　（窓からのぞいて）どこだよ、見えねえな。

節子　今、たしかに灯りが見えたんだけど。清次　（ニヤリとして）人魂でも見たんだろう。この女の魂がふわふわ浮いてたのさ。

節子　（慄然となる）

39 節子の部屋

布団の中で、カチカチ歯を噛み鳴らしている節子。

節子　清次、何してるんだらう。おそいな。

節子、たまらなくなつて、頭から布団をかぶる。

浴室の方で、水道の水が流れる音。

節子、ギョツとして、布団から首を出す。水の音は止まらない。

節子、震えながら、布団から出る。

40 浴室の前

浴室のガラス戸がわずかに開いている。その前に立った節子、わなわな唇を震わせながら。

節子 誰か、誰か中にいるの。

聞こえるのは、水道の音だけ。

節子、震える手で、ガラス戸を開ける。

41 浴室の中

節子、入って来る。

恐怖に歪んだ顔で、そっと中を見る。

後手に縛られた絹子が、水槽の中へ顔を押しこんでいる。ゆらゆら水に揺れている長い黒髪。

ギャーと悲鳴をあげた節子、つんのめるように表へとび出す。

42 節子の部屋

節子、這いつくばるようにして入って来る。

節子 清次、清次——た、たすけて。

節子、獣のようにうめきながら、もぐりこもうとして、布団をめくると、白眼をむいた絹子が横たわっている。

悲鳴をあげて、反射的にとび上る節子。

絹子の恨めしそうな顔が、節子の方を向く。

く。

節子、両手で自分の頭髮をひきつかみ、狂ったように悲鳴をあげつつづけていたが急にバタリとその場へ倒れてしまう。

その瞬間、生気を取り戻した幽霊は、立ち上って、硬直している節子の顔をのぞき見る。

うしろを振返った絹子。

絹子 あんた。

襖のかけから、清次と懐中電灯を持った市太郎が顔を出す。清次、かけよって来て、倒れている節子の胸に耳を当てたりし。

清次 こっちは、本当のお陀仏だ、苦勞したぜ。心臓麻痺を起さすつてのは楽じゃねえな。

絹子 ほんとに、こっちも命がけよ——ね。

若旦那が見てるじゃないの、早く着物を頂戴。

清次、手についていた風呂敷包みを絹子に投げる。絹子、急いで着物を着始める。

市太郎、襖の前から歩き出し、茫然とした面持で、節子の死体を見下している。

清次 苦勞しましたが、これでやっと若旦那は立花荘の実権を握ったわけだ。

一つ、こいつの妹の事は、よろしくお願い致します。

絹子 若旦那、長い間、お世話になりましたが、私達、今夜の急行で大阪へ発ちます。弓子の事は、くれぐれも。

市太郎 だが、あんた達、何も急に発たなくたって。

絹子 いえ、刑事がかなり嗅ぎつけてきたようなんです。これ以上、御厄介になつていたら若旦那にも迷惑がかかります。それから、この事は、私達三人だけの秘密、いいですわね、若旦那。

市太郎 ああ、口が裂けたって、弓子にはしゃべらない。

清次 というよりも、この奥さんは、勝手に心臓麻痺を起して、くたばったんだ。誰の責任でもねえ。あんまり、くよくよ考えねえ方がいいですよ、若旦那、じゃ、行こうか、絹子。

市太郎 ああ、一寸、待って。

市太郎、懐から紙包みを出す。

市太郎 こういう時に備えて、前から用意しておいたんだ。向こうでの生活費のたしにしてくれ。

清次 いけませんよ、こんな事なすつち

や、俺達夫婦は、ずいぶんと若旦那に世話をかけたんだから。

市太郎 いいから、とっといってくれ。

市太郎、紙包みを絹子の懷へ押しこんでしまふ。

絹子 若旦那、こんな。

市太郎 いいんだよ、それより、達者でな、姉さん。

絹子 (すすりあげる)

清次 それじゃ若旦那も、お幸せに——。

清次と絹子、市太郎に頭を下げ、出て行く。

市太郎 (二人のうしろに向って) 弓子はかならず幸せにしてみせるよ。

43 山花荘・近くの道

清次と絹子、手を取りあうようにして、足早に歩いて行く。

突然、ヘッドライトの光波に二人包まれて、棒立ちになる。

駐車している車の中から、刑事二人出て来る。

清次、ハッとして、うしろを向く。

そこには、警官が——。

刑事 往生際はきれいにするんだな、津崎。

44 立花荘・節子の部屋

市太郎、節子の死体を夜具の上に丁寧にかせ、布団をかける。

市太郎 許してくれよ、節子。お前の病気を直すには、お前をこうする以外には

なかったんだ。お前が生きている限り、俺は何時までたっても、この家のどれいでなきゃならない。

西村の声 そんな事は、殺人の理由にゃならんね。

市太郎、ハッとして、振り返る。

刑事の西村、入って来る。

市太郎 あ、あんたは。

西村 署の者だ。津崎の情婦のあとをつけて、昨夜から、張りこんでいたんだよ。

西村、手錠を取り出して、茫然自失している市太郎の手にかける。

西村 だが、女房の心臓病を狙って、こんな計画をたてていたとは気づかなかったね。こっちは迂濶だったよ。一寸署へ連絡している間に——。

市太郎 刑事さんッ。

市太郎、連行されようとすると、我にかえ

ったようにあばれ出す。

市太郎 待ってくれ、俺の人生はこれから始

まるんだ。俺は今まで、この女のために人間らしい思いをした事は一度だつてない。俺はこれからなんだよ。

西村 おい、おとなしくしないか。

市太郎 嫌だ、こんな馬鹿な話ってあるか。嫌だ、離してくれっ。

45 立花荘の近くの道

市太郎、放心した顔つきで、西村に連行されて来る。警察の車が止っている。その近くにいた刑事、西村に近よって、絹子の持っていた金包みを示し、何か小声で話す。

西村 (市太郎に) この金は、君が津崎に渡したんだな、殺人を依頼したんだね。

市太郎、それには答えず、車の中を、ぼんやりのぞく。

清次と絹子が、手錠でつながれ、シートに坐っている。

絹子、市太郎に気弱な視線をなげかけ、がっくり首を垂れてしまふ。

西村 ま、くわしい事は警察で聞こう。さ、入るんだ。

市太郎、車の中へ入る。

シートに坐り、空虚な眼を前に向けている、清次、絹子、市太郎の三人。

車、走り出す。

46 ネオン街（一年ほど後）

47 安ホテルの二室

若い客と脂ぎった抱擁をつづけている娼婦の弓子。動きを止め、忘我状態になってしまった男の身もとに寄った弓子、妖艶に。

弓子 どう、楽しかった、フッフ。（腕時計を見て）さ、行こうかな。

弓子、立ち上り、服を着始める。

男、上体を起し、

男 あ、いくら払えばいいの。

弓子 あんた学生さんね。じゃ、半額にしよう。といたげるわ。

48 酒場・黒猫 その表

ショールダーバッグをかけ、如何にも、玄人ばい服装した弓子、前を通りかかりふと足を止める。かなり酔っている。

49 酒場・黒猫 その内部

ドアが開いて、そっと、弓子、入ってくる。

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

この八緊縛女体アルバムは、若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさ最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚

にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。この一冊にて四人の美女の裸身のすみずみまでが、八縛りVというアクションによって、ファンの皆様方の目の前に極めて鮮明な印刷によって展開されています。どうか一冊を机上にお飾り下さい。

弓子 ママさん、お久しぶりね。

百合子 まあ、弓ちゃんじゃないの。

カウンターのの中に入って、スタンドに坐る西村に酌をしていた百合子、ふと、眼で西村を示し、弓子をたしなめるようにする。

弓子、そんな事にはとんちやくなしに、わざと西村の横に坐る。

弓子 あーら、何時ぞやの刑事さん。景気がいいのね。こんな高い店でお酒を飲むなんて、何か汚職でもやってるんじゃない。

百合子 弓ちゃん（とたしなめ、西村に）ごめんなさいね。あれから、この人、すっかり人間が変っちゃまって。

西村（弓子に）この店、とっくにやめたんだってね。それに最近、荒れてるようじゃないか。

百合子 あの事件がショックだったのよ、西村さん

百合子、弓子の前にコップを置き、ビールを注ぐ。それを弓子、飲みながら、

弓子 そうさ、何もかもショックよ。姉さんが指名犯人の情婦だったことも、市太郎さんが女房殺しをやったって事も、みんなショックよ。それよりもね。刑事さん。今、私が一番恨み

に思ってたのは、あんたなのよ。

百合子、あわてて、カウンターから出て来て、弓子の肩に手をかける。

百合子 弓ちゃん、あんた一寸、酔い過ぎてるようだから、今夜はおとなしく帰ってよ、ね。

弓子 ああ、帰るわよ。こんな男のいる横で、お酒飲んだってつまらないもんね。

西村 (ムツとして) 俺はな、悪人を捕まえるのが商売なんだ。お前の姉だろうが彼氏だろうが、悪党なら遠慮しないからな。

弓子 フン、あんたの捕まえた連中が悪党なのか、死んだ節子っていう女が悪党なのか、よく考えてみてよ。

あんたが、しょっぱいた人達はね、私を幸せにしようとして、必死になっただけなのよ。私にとっちゃ天使みたいにいる人達だった。あんたは、私の幸せをもぎ取った蛇よ。

百合子 弓ちゃん。

百合子、バーテンに眼で合図する。

バーテン、カウンターから出て来ると、弓子の腕をひきつかみ、ドアの方へ連れ出す。

す。

弓子 わかったわよ、離してよ。

弓子、バーテンと争いながら、扉の所に立ち、葉すっぱな口調で叫ぶ。

弓子 おい、刑事さんよ。私しゃ、この近くで、売春やってんだからね。現行犯でパクリにおいでよ。点数が上るんだろ、ハハハ

弓子、表へ、バーテンに突き出されてしまふ。

百合子 (西村に) ごめんなさいね。女って、転落すると、ああ人間が変わるんではないかね。いい娘だったんだけど。

西村 (考えこむ)

百合子 あら、どうしたの。考えこんだりなんかしちゃって。

西村 何だか俺、悪い事したような気になるんだよ。

百合子 (笑って) 馬鹿ねえ。バーテンさん、ビール出して頂戴。

バーテン はい。

50 ネオン街

そのねばりつくようなネオンの光波を受けながら、

弓子、千鳥足で歩いている。

けつまずいて倒れる。

通行人、笑い出す。

弓子も、笑いながら、起き上る。

再び、歩き出す。

弓子の無理に作った笑顔の瞳に、キラキラ涙が光っている。

(終り)

〔編集部註〕

映画「縄と乳房」は一月中旬封切りの予定だそうですので、お暇のある方は、このシナリオと対照して御観覧いただければ、一層興味深いことと思います。尚、挿入の写真は団氏提供のもので、緊縛されている女性性は、柵^{ます}田^だくに子。責めているのは新高恵子です。この映画に關しての詳細については、次号三月号掲載の「鬼六談義」にて解説して貰う予定です。

〔最新版〕 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G1	顔面から全身厳重縛	(東浦)
G2	アグラで縛られる	(玉田)
G3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G6	縄に羞らう裸しぱり	(長野)
G7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G10	恐怖のいたぶり	(新井)
G11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G12	全裸しぱりと浣腸器	(玉田)

G13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G18	諦観の後手しぱり	(玉田)
G19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G21	二つの乳房アップ	(長野)
G22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G26	机の脚に縛られる女	(新井)
G27	革の猿轡で責める	(新井)
G28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G34	典型的な股間しぱり	(大塚)
G35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)

G39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G40	女囚哀歎	(宇治)
G41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G42	オシメカパー縛り	(大塚)
G43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G44	トイレを前にして	(大塚)
G45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G49	厳重荷造縛りの全裸	(玉田)
G50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G51	全裸胴絞め首縄猿轡	(木村)
G52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G55	椅子に跨がされた女	(新井)
G56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G57	色魔に脱がされる	(新井)
G58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G63	強奪されたパンティ	(大塚)
G64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G67	目かくしのハリツケ	(大塚)
G68	首枷のさらしもの	(大塚)
G69	木馬責め斜め後姿	(大塚)

G70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G72	火あぶりにあう女	(大塚)
G73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G75	白肌で縄にうそぶく	(絹川)
G76	縄にもたえる美女	(絹川)
G77	美貌をいためつける	(絹川)
G78	首吊りの責め	(新井)
G79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G80	全裸後手足首連繋縛	(玉田)
G81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G88	美麗の全裸に厳重縄	(玉田)
G89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G92	六尺禪巨太臀部虐め	(大塚)
G93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)



MS・ストーリー

縛り拷問

早木夢二

1

縄をかけ終ると、彼女は縄尻りをひいて、

「お立ち！」

と、命じた。

私は、不自由な体を起して、よろよろと立ち上った。かけ縄が一ぺんに、ギュッと締まった。

縄尻りをひかれて、鏡の前に立つ。

「さあ、自分のお縄姿を、よくご覧。私は仕度をしてくるからね」

彼女はそういうと、隣の部屋に入っていた。

鏡の中には、一糸縄わない真っ裸の私が、

多少気恥しそうに、突っ立っていた。

きょうは、真新しい、やや太目の縄を、首から胸に廻し、綺麗な菱縄をかけられ、両手は後で緊縛されていた。背中を縛った縄の余りが、前に廻されて、へその上辺りで結び目を作ると、縦に一直線に走って、股間を通って、再び後で縄止めしてあった。

小肥りの肌に、縄は一分の隙もなく、ぴっちり喰い込んで、それを眺めている内に、知らず知らず、私の頬には、満足の微笑が浮んできた。

年と共に、縛りへの愛着が、いよいよ激しく、強くなってきた。女を縛り、女に縛られ

たい願望が、日毎夜毎、私の身内を責め苛むのだった。

電車などで、私の前に、若くて美しい女が坐っていると、私は、彼女を素っ裸にして、きびしい菱縄を施している情景を想像した。又、私の前を、若い女が、プリプリと張り切った尻を、揺って歩いているのを見ると、私は、その豊かな丘陵の谷間に、秘かに、ねっとり、はりついている白い二筋の縄を、思い浮べるのだった。

ある日、私は、慶子の留守を見計って、裸になると、縄を首からかけ下して、股間に廻した。そして、洋服をきると街に出かけた。

自分がこのように縄を纏っていることを、誰も知らないだろうと思うと、ちょっと得意な気持になって、わざと体を伸ばして、歩きながら、一方では、どうかしたはずみに、誰かに見付かるのではないかと、冷や冷やもしているのだった。

その内、段々縄が締まってきた。縄がかかっている両肩が、重苦しくなってきた。股間の縄が、柔い肌の部分を、ジワジワと責め立ててきた。

私は、駅の便所にとび込むと、手をさし入れて、股間縄をひいて、柔らげようとしたが効き目はなかった。

縄の重みが、ずっしりと、私の肉体に思い知らされた感じであった。

……

彼女が寄ってきた気配がしたので、私はハッ和我に返った。

「随分、お気に召したようね。どう、ご気分は？」

彼女は、再び縄尻りを手にすると、私に寄り添って、一緒に鏡の中を覗き込んだ。

彼女も全裸になっていた。これが、私を責める時の、彼女のスタイルだった。

柔い、弾んだ乳房が、私の裸の背中に触れた。案外、冷たかった。

「どうなの、ご気分は？」彼女が又きいた。

「ハイ。いい気持です」

私は、胸を張って答えた。

「エー。嬉しい？」

「ハイ。とても嬉しいです」

彼女は、ふと、眼をやると、

「まあ、すっかり、大きくなっちゃって……」

私も、流石に恥しくて、時々、両股をもじもじさせていた。

「あとで、うんと可愛がってあげるから、辛抱してるのよ」

「ハイ。お願いします」

彼女は、椅子を鏡の前に持ってくると、大きなお尻を、ずしっと下した。

そして、突っ立っている私に向って、「ここにお坐り！」と、椅子の前を眼で示した。

縛られた窮屈な体を、彼女の前に据えると、私の眼の高さが、丁度彼女の膝辺りに当たっていた。

私が頭を下げて畏まると、

「顔をあげろ！」と、彼女が、もうまるで、

お白洲の拷問役人のような、きびしい声で命じた。これも、責めの時の、私たちのやり方

だったのである。

「ハイ」顔をあげると、

「後に反らすんだ」

私は、顔を、殆んど水平になる位にまで、後に反らせた。喉がピーンと張った。

いきなり、彼女が、片手の小指を、私の鼻の中に、スッと突っ込んできた。

「アッ」

彼女は、お構いなしに、グイグイ突っ込んできた。乾いた穴の中が、ガサガサと音がして、指の爪が、チクチクと突き刺った。

「駄目じゃないか。よく掃除しておかなくちゃ……」

彼女は、なおもグリグリ擦りながら、私を叱った。

「うん……うん……」

私が唸っている内に、片方が終ると、彼女は、もう一方の穴に、同じ指を突っ込んできた。

ツーンと、鼻の奥から頭の方にひびいて、思わず、涙が眼頭にうすく浮んできた。

掃除が終わったと見えて、彼女は指を抜くと今度は、私の口の中にブスリと突っ込んだ。

「うっ」

指についた汚物の味が、ほろ苦かった。顔

をしかめて、嚙っていると、

「どうだ、味は？」

「ハイ。いい味です」

やがて、彼女は指を、口から抜くと、又、私の顔を、元のように後に反らせ、チリ紙を丸めて、私の鼻の穴にさし込んだ。

「あっ」

散々彼女に嘲られた鼻孔に、チリ紙が、カサカサと、やけに大きくひびいて、チクチク痛かった。彼女は、片方に詰め終ると、今度はもう一方の穴に詰め込んだ。

私は、呼吸が苦しくなってきたので、口を半開きにして、息を吸い込んだ。

彼女は、チリ紙の端が、鼻の穴からはみ出さないように、千切って、綺麗に揃えた。

そのため、顔を元に戻すと、鼻詰めされているのが、判らない位だった。

それから、彼女はやっと、顔を元に戻すのを許してくれた。

「苦しいか？」

「ハイ。苦しいです」

事実、チリ紙が、鼻の穴にピッタリはまり込んで、息苦しくなっていた。

私は、口を開けて、続けざまに、空気を吸い込まねばならなかった。

彼女は、私の顔を両手で挟むと、自分の股を少し聞いた。

「見たいか？」

「ハイ。見たいです」

私は、喘ぎながら答えた。

「嗅ぎたいか？」

「ハイ。嗅ぎたいです」

私は、上気した眼を凝らして、ジッと、ほのかに明るくなってゆく奥に見入った。

鼻詰めされているので、十分に嗅ぐことは出来なかったが、肌むれのした臭いが、かすかに匂った。

突然、彼女が、私の髪をグッと握った。

「お前、嘗めたいんだろう？」

私は、凶星を突かれて、慌てた。

「ハイ。嘗めたいです。どうか、嘗めさせて下さい」

「バカ！」

彼女は、怒鳴ると、いきなり片足で、私の胸を蹴とばした。

緊縛されている私の体は、一たまりもなかった。忽ちゴロンと、不様な恰好で、彼女の足許に転がった。

彼女は立ち止ると、縄尻をグッと絞って、片足で私の下腹を踏みつけた。

「調子に乗るんじゃないよ」

彼女は、下腹を踏みについた。

「ああ……ああ……ああ……」

私は、彼女の足の下で、必死に身悶えながら、呻き続けた。

しばらくすると、

「立つんだ！」

私は、縄尻りをひかれて、よろよろと起き上って、再び彼女の前に正坐した。

「少しはこたえたか？」

「ハイ。私が悪うございました。お許し下さい」

私は彼女に謝った。

鼻の穴に詰め込まれたチリ紙が、ずっばり濡れてきて、益々息苦しくなっていた。

彼女もそれに気付いたと見えて、

「どうだ、鼻詰めは苦しいだろう？」

「ハイ。息が苦しくて、苦しく……」

「とってやろうか？」

「えっ。とって下さいますか」

「お前も、大分辛抱したから、とってやってもいいよ。とりたいか？」

「お願いします。とって下さい」

「その代り、あとは、どんな拷問でも受けるか？」

「ハイ。喜んで、お受けします」

「よし。とってやろう」

彼女は、爪をチリ紙にひっかけて、器用にとり出した。ズルズルと、鼻汁が尾をひいて、ねっとり唇の上に残った。

快よい空気が、吹き通った。私は、鼻孔を膨らませて、思い切り、空気を吸い込んだ。美味しかった。

しばらく、休息を与えられた。

彼女は、私の傍に坐ると、不自由な私の上半身を、もたれかけさせた。

「疲れたでしょう？」

「だけど、責められてるのは、とってもいい気持だよ」

「好き、私？」

「大好きだよ」

次の拷問が始まる前の一刻、彼女は、私の緊縛された裸身を、ゆっくり愛撫した。

2

私は、尻を畳の上に、べったり落し、両股をグッと開いて、胡坐をかいた。

彼女は、私の両足首を合せて、縄でキツチリ縛った。その縄を、私の両脇に通し、首の後と前で結ぶと、そのまま下して、股間から後に廻し、背中の中へ結びつけた。そして、

その縄尻りを握って、グイグイ絞り始めた。

「ああっ」

絶叫が、私の口から迸った。

私は小肥りで、その上、近頃は太分下腹が突き出ているので、そんな風に折り曲げられるのは、大変な苦痛だった。

見る見る、弛んだ下腹が、眼の前に盛り上ってきた。それは、早くも、二重、三重のひだを作っていた。

彼女は、片足を私の背中にかけ、両手で縄を絞っていた。

ポリポリと、硬ばった背骨が音を立てた。全身に喰い込んできた縄が、私の体を、いくつもの塊りにひき裂いていた。

声にならない悲鳴が、絶えず私の口から、洩れていった。

「苦しいか、苦しいか？」

遠くの方で、彼女の責め言葉がした。

私は、一生懸命に答えようとしたが、涎がダラダラと口の端を伝って、言葉にならなかった。私は、夢中で首を振った。

「苦しいようだな」又、彼女の声がした。

「自分の肛門が見えるのは、この拷問だけだよ。お前も、この際、拝んでおくんだな」

彼女の声が、なおも続いていた。

その間に、私の体は、音を立てながら、段々二つに折り曲げられていった。

「そうそう。嘗めてみるか？」

彼女は、私の背中越しに覗き込むと、
「もう少しじゃないか。しっかりやるんだ」
再び、強く絞り始めた。

「ハッ：ハッ：ハッ」

私の息が、荒々しく肌に吹き当たった。全身は、極度の苦痛で、張り裂けそうだった。

「どうだ、届いたか？」

もう少しだった。

「もう少し。それ！それ！」

彼女は、面白がるように、声をかけた。

「うーっ」

私の口から、押し潰されたような呻きが、一際高く迸った。口が、殆んどすれすれの所で、きていた。

いまはもう、少しでも早く、到達したかった。

そして、全身の苦痛を少しでも早く紛らわしたかった。

「もう一息！」

彼女の声がひびいた。

彼女は、絞りあげた縄を、そこら辺りの縄に結びつけて、定着させると、前に廻ってき

た。彼女の肌に、一面に吹き出ている汗が、私の体にとんできた。

私は、必死に戦っていた。

ふっと、気が遠くなったようであった。

すると、口から滑った。私は、横ざまに倒れかかった。

彼女が、慌てて私の体を支えた。

「意気地がないな」

どこか遠くの方で、そんな声が聞えたように思った。

○

気がつくとき、私は、海老縛りの縄だけを解かれて、あとの縄はそのままの姿で、頭を彼女の膝の上に乗っけて、長々と伸びていた。

「気がついた？」

彼女が、心配そうに覗き込んだ。私は、彼女に、水の入ったコップを、あてがって貰うと、ガブガブ飲んだ。乾き切った喉を、冷い水が快よく流れた。

急に、尻の辺りが寒いような気がした。

「判った？」彼女が笑った。

やっと判ると、私は思わず赤くなった。はげしい海老責めの間で、私が洩らしていたのを、彼女が始末してくれたのだった。私は感謝を込めた眼を、彼女に向けた。

「いいのよ。仕方ないもんね」

彼女が、そういった。

「海老責めの辛さ、判った？」

「生意気いってやがる。手前は、ちっとも判ってないんだろう？」

「あら、私だって、いつか、あなたにかけられたから、判ってるわ」

「こないだは随分手加減してやったんだよ。」

よし、今度は、酷いの、やってやるから」

「してくれる？」

「してやるとも。ギョツといわせてやるよ」

「嬉しいわ。私、あなたが、一生懸命、啜えるの見ていたら、羨しくなっちゃった。私もその位、打ち込みたいな、って……」

「打ち込ませてやるよ」

「本当？ ああ、嬉しい！私も、あんな海老責めしたくなかったわ」

彼女は、躁いだ声でそういうと、唇を寄せてきた。

「お縄、そうそう、解きましょか」と、彼女がいった。

「いいよ。もう少し、このままにしておいてくれ。ひどく気持がいいんだ」

「そう。お縄、よくかかっているの？」

「とても、よくかかっているよ」

私は、わざと体を揺って見せた。

「そういつて頂くと、本当に嬉しいわ。いつも、あなたが、いいお縄かけて下さるので、あなたにも、いいお縄をかけてあげたかったの」

「ありがとう。本当に、いい縄だよ」

長い拷問の後でも、縄はちっとも弛んでいなかった。

「あなたって、お縄が好きなのね」

「本当にね。どうしてか判らんけど、此頃はいいよ、縄が好きになって、仕方がないんだよ」

「それも、菱縄、っていいたいんでしょう。でもいいわ。縛りなら、私、いつでも出来るし、それに、私も、お縄が好きになっているんだから……」

「ありがとう」

本当に、私は彼女に、何と感謝していいか判らない位だった。縛りが一番好きだという、いわば変態趣味の持主と一緒にあって、自分も全裸で縛りを受け、私をも縛ってくれるようになるまでには、彼女の心の内部でも、色々の屈折があったであろう、と思うと、私は切ないほど、彼女がいとほしかった。「でも、あなた、私を縛るの、怠けてはいや

よ。此頃、あなたを縛る方が多いような気がするわ」

「そんなことないよ。でも、僕もよく縛って貰ってるね」

「どうでしょう。でもいいの。あなたが喜んでくれれば、私も嬉しいんだから……」

私は、彼女の顔を、下から見上げながら、泌々と幸福だった。

3

長い秋の夜、責めに絶好のシーズンとなった。

彼女が、湯上りの体に、ネグリジェをひっかけただけの姿で、縄の束を持って、私の部屋に入ってきた。

私は、机の上に、様々の責めの写真を並べて、ひとりで悦に入っていた。

「あなた、お時間よ」

それは、彼女の縛りを始める時間のことだった。別に、何時と決めている訳ではなかったが、彼女が縄を持って、入ってきた時が、その時間、ということになっていた。

「いい縛りのスタイル、あって？」

彼女が、机の上の写真に眼をやりながら、尋ねた。

「いや、別にないね。やっぱり、菱縄が一番

だね」

「ほらほら、菱縄マニアが、又そんなこといつてる」

そうはいうものの、彼女の一番好きなものも、やはり菱縄だった。

彼女はネグリジェを脱ぎ捨てると、私の前に立った。

湯上りの、ほんのりした香りが、彼女の肌から、立ち上っていた。

「お縄、頂きますわ」

彼女は、そういうと、私の前に正座して、両手を後で合わせると、胸を張った。

私は、いつものように、縄を二つに折って、彼女の首にかけ、喉の下で結ぶと、左右にふり分けて二の腕を縛り、乳房の下で合わせた。

乳房を絞るように、菱縄が鮮かに裸身にかかった。その縄を後に廻すと、両手首を緊縛した。

それから彼女の後に廻ると、もう一本の縄を、首縄にひっかけ、前と同じようにして、背中にも菱縄をかけた。余縄は前に廻して、へその辺りで合わせると、一直線に下腹をおろして、結び玉を二つ作って、股間にはめ込み、後で縄止めをした。

近頃、私がちょいちょい縛って貰っているので、彼女を縛る機会が、それだけ少なくなっていた。彼女には、それが不満のようだった。彼女も、私を縛るのは嫌ではなかったが、やはり私を縛って行く内に、自分の身内に、欲望がむくむくと、湧いてきて、どうしようもないのだった。

私を一回縛ると、彼女は三回の割で要求してきた。

私も、縛られて、はげしく責められたあとは、体の節々が痛むので、その位の回数があった。

その上、彼女は、段々念入りに縄をかけるのを望むようになった。始めから、おろそかにかけてはいなかったが、長い責めの間に、どうかすると、かけ縄が弛んでくることはいではなかった。

そんな時、彼女はひどく不気嫌になった。「駄目じゃないの。こんな、下手な縛り方をして……」

胸の菱縄が弛んできて、乳房の上に、だらしなく垂れてきたり、股間縄が弛んで、二筋の流れが、乱れたりしてくると、彼女の感興は、急速度に冷却してゆくのだった。

従って、私も、彼女の縄かけは、念には念

を入れて行くようになっていた。

今も、かけ終った縄を、あれこれと点検している。

「大丈夫？ 途中で弛んだりしないでしょうね」

と、彼女が念を押してきた。

「これなら、どうだい？」

彼女も、色々な風に体を揺りながら、

「きょうはいいいようね。胸も締まって気持ちいいし、股間縄も旨くかかっているようね」

白い縄が、彼女の体の動きにつれて、なまめかしく、肉を喰い切るようにうごめいた。

拷問の時間がきた。

「立て！」

私は縄尻をひいて、彼女を立たせた。

そして、彼女の耳許で、

「したくないか？」と、ささやいた。

「えっ」

彼女は、ちょっと、何のことか、判らないらしかったが、私が続けて、「したくないか、というんだ」

今度は、眼でそこを、それとなく示しながら、いったので、やっと判ったと見えて、顔がポーッと赤くなった。

「したいか？」

「お許しがあれば、したいわ」

先ほどから、彼女の下腹が、何となく張っているように見えたので、そろそろ、その気が動いているに違いない、と思っていた。

「今の内に、しておく方がいいな。拷問の途中で、洩らすのは、みっともないからね」

「誰かさんみたいに……ね」

彼女はふふと笑った。

「お願いしますわ」

彼女は、俄かに、下半身をもじもじさせ始めた。

私は隣の部屋から、金属製の便器を持ってきて、彼女の足許においた。

私は、彼女の前に、じっと眼を据えた。

「始めましてよ」

私が頷くと、彼女は首を垂れて、かすかに呻いた。

「ああ」彼女の体が、ピンと張ったように思った。突然、私の眼の前を水の塊りが、プツと盛り上ったと思うと、忽ち一筋の急湍となつて、はげしく落下した。飛沫がパツと散った。

「ああ……出たわ」

続けざまに金属にぶち当たる鋭い音がした。

暖い湯気が、辺りに立ち込めて、私をくす

ぐった。

ややしばらく、そのままの姿で、彼女はじっと、うなだれていたが、やがて、

「終わりましたわ」と、恥しそうに報告した。

「序に、あちらもどうだい？」

と、尋ねた。

「あちらって？ ああ、あれ……」

彼女もすぐ諒解して、

「したいわ」

「この際、一挙にやっておくといいよ」

「そうさせて頂くと、すっきりとして、拷問に打ち込めるものね」

彼女は、いそいそして、ちょっと姿勢を直した。

「始めましてよ」

彼女のやや上ずった声が聞えた。

彼女の体が、二、三度、ぶるぶると動いて、又落ちた。

「どうだい？」私が声をかけると、「いいですわ。いいですわ」

彼女は顔をふり上げると、いきんだ声で答えた。

二つ……三つ……四つ……

「ああ……」

彼女は、その度に、顔を小刻みに揺っていた。

「出たな」私というと、

「出ましたわ。出ましたわ」

彼女の声は、すっかり弾んでいた。

「可笑しいでしょう、こんな恰好？」

「可笑しくなんか、あるもんか。綺麗だよ」

事実、私にとって、愛する女の総ゆる営みが、美しくない筈はなかった。

又、そのためにこそ、彼女も、縛られ責められる身の、総ゆる恥しめを、じっと噛みしめているのだ。

「嬉しいわ。そういつて下さると、私、本当に、嬉しい！」

その間にも、それは続けざまに、短い空間を貫いていった。その度に、ハッハッと、吐息が口から洩れて、彼女の体が緩やかに、伸びていった。それは意外なほどの量だった。

「終わったか？」

「ハイ、終わりました」と彼女はいつて、

「ああ、いい気持！」

緊張が、彼女の体から、徐々に去っていった。

「随分出たね」私がさういうと、彼女も、ちよつと覗いて、

「あらあら、大変……。私、ちつとも、気がつかなかったけど、臭かったでしょう？」

さういわれて、初めて私は、今まで臭いが少しもなかったのに気づいた。

俄かに、臭いがぶんと鼻をついた。

彼女は、そこから離れると、私の方を見てきまり悪そうに微笑んだ。

「ご免なさい。でも、すっかりいい気持になったわ」

私が、便器を持ち去って、帰ってくると、彼女は膝を崩して、べったりと、畳の上に坐っていた。

「さあ、準備はすっかり出来たね」と、私というと、

「そうですね。もう、どんな拷問でも、お受けしましてよ」

彼女はうつとりと、眼を閉じていた。

「又、見せてくれるか？」

「ええ、何度でも。あなたが、お望みなら……」

「さういえば、まだ、あれ、飲んでいないね」

私は、何回か試みて、その都度失敗しているのだった。

「そうね。でも、近い内、是非、飲んで頂く

わ」

彼女が、きっぱりいつた。きょうのこと、すっかり自信がついたような顔だった。

4

私は、彼女を立たせて、縄の締め具合を点検した。やっぱり、排泄の時に、かき分けた縄が、ちよつと弛んでいたの、締め直した。彼女も、満足そうに、自分でも体を絞ってみたりして、縄の具合を試していた。

……

私は乳房から手を離すと、彼女の二の腕の縄のかかっている辺りを、グッと掴んで、後に絞り上げた。

「アッ！」

忽ち、彼女の上半身は反り返った。かけ縄が音を立てて肌に喰い込み、乳房がピッと突き立った。

さうしながら、彼女の手許で、

「股を開け！」と命じた。

「ハイッ！」

彼女は、懸命に股を開き始めた。

「もっと、もっと……」

私に命じられるままに、彼女は開いていつた。余り開きすぎると、そのまま、へたって仕舞う惧れがあった。

やっと体を支えることが出来るほどに開いておかねばならない。

そして、上半身を絞り上げられているので下半身も段々に反ってきて、両足先が危うく畳の上すれすれになった。

彼女の肩越しに覗き込むと、下半身に這っている二筋の縄が、思い切り伸び切って、一直線に切り裂いているのが見えた。

「ああ……ああ……」

彼女の口から、涎れが一筋、糸をひいて、腹の上に落ちていった。

私が力一ぱい、引き絞るので、彼女の両足が、ともすると浮いてきそうになった。

「苦しいか？」

「いいえ、いいえ、苦しくなんか、ありません！」

彼女が、せい一ぱいの抵抗を見せた。

「もっと、股を開け！」

私は、無慈悲に命じた。

然し、それはもう、開けるだけ開かれています。私は彼女の体に、ぴったり私の体を押しつけると、

「歩け！」と、命じた。

「えっ？」

「そのまま、歩くんだ！」

私は彼女の体を、押し出すようにした。

「股を開いたまま、歩くんだ！」

彼女は、よっちょよっちょ歩き始めた。二、三歩歩いたかと思うと、忽ちよろめいた。

「しっかりしろ！」と、私は怒鳴った。私自身も、こんな恰好で彼女を歩かせるのは、相当労力のいる仕事だった。

彼女は、齒を喰いしばって、押されるままに、部屋の中を、あっち、こっち、よろめきよろめき歩いた。全身から汗が吹き出て、ポタポタと落ちていった。

「ああ……苦しい！」

遂に、彼女が悲鳴をあげた。

「苦しいか？」

「苦しい……苦しいです！」

彼女は、なおも、いさるように、歩きながら、悲鳴をあげていた。

彼女の息づかいが、急にはげしくなって、胸や腹が、せわしく波打っていた。喉がせいせい鳴るのが開えた。

私は動くのを止めた。

彼女の体が、がくんと折れそうになって、慌ててやっと踏みこたえた。

「ああ、苦しい……」

彼女の大きくあけた口から、ハアハア、吐

息が絶え間なく洩れていた。

乱れた髪が、汗でべっとりと、額に纏わりついていて、彼女が両股を、すぼめようとしたが、私は、まだ許さなかった。

「苦しかったか？」

「ハイ。とっても、苦しかったですわ」

「拷問の辛さが、判ったか？」

「ハイ。十分に判りました。もう、何事も白状致しますわ」

「その方の仕業と申すか？」

「ハイ。私の仕業に相違ございません」

「しかと、左様か？」

「ハイ。お役人さま」

「よく申した。あとで、十分^{いた}労わりを取らせるぞ」

「有難うございます、お役人さま」

私は、やっと彼女から手を放すと、坐るところを許した。そして正座した彼女の時に廻って、縄尻をひくと、

「今申した通り、お調べ役人に申し上げろ」と命じた。

「ハイ」彼女は頭をあげると、

「お役人さま、私こと、拷問に堪えかねて、委細白状致します。私の仕業に相違^{しおき}ございません。この上は、いかなるお処刑も、お受け

致す所存にございます」

「よくぞ申した。褒めてとらずぞ」

私は彼女の前に立った。

「ただ今より、刑を申し渡す。有難くお受けしろ！」

「ハ……ハイッ！」彼女は首を垂れた。

「女囚早木慶子、その方の罪浅からざるを持ち、江戸市中、裸引廻しの上、鈴ヶ森に於て、股裂きの刑に処するものなり」

「ハ、ハイ。有難く、お受け致します」

私は彼女の傍に坐ると、上半身をひき寄せ

た。

「お仕置が、決ったね」

「ええ、いいお仕置だわ。欲をいえば、股裂きより、ハリツケの方がいいんだけど……」

「裸引廻しっていうのは、いかすね」

「そうね。私、本当に裸引廻しされるみたい、胸がワクワクしてきたわ」

「いつか、したしね」

「あら、あれ？ ご免なさいね、あのこと」

彼女が、私を裸馬にみ立てて、四つ這いになった裸の私の上に跨って、引廻しの真似事

をした時のことをいっているのだった。

私は、手をソツとさしのべた。

「ああ」

私が縄をまさぐって、指をかけると、

「ああ、あああ」彼女は呻いた。

私の指は、縄で強く締められている所も、容易に探ることが出来た。

「労わりだよ」私がささやいた。

「嬉しいわ」

彼女は放した、体を開いていった。

(おわり)

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13種)焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K1 全裸刺青自慢緊縛(山原)
K2 恍惚たる責の境地(山原)
K3 苦悶の表情海老責(大塚)
K4 海老責にあえぐ女(大塚)
K5 全裸のぐるぐる巻(玉田)

K6 豊満な臀部を晒す(刑部)
K7 厳しき縛りに酔う(山原)
K8 荒縄で仕置される(美木)
K9 土壇に観念した女(美木)
K10 ムチ打たれる女囚(美木)
K11 縛り人形を眺める(山原)
K12 開孔器で鼻を弄ぶ(山原)
K13 足首と首を連繫す(大塚)
K14 後手の複雑な縛り(玉田)
K15 裸縛りに恥らう女(山原)
K16 夫にされる鼻責め(増田)
K17 緊縛にあう若妻姿(増田)
K18 猿轡で鼻を虐める(増田)

K19 開股縛にあう女囚(美木)
K20 罪状を訊かれる女(美木)
K21 股間縛りの全裸像(山原)
K22 荷造り縛りで晒す(玉田)
K23 革拘束衣で括らる(大塚)
K24 庭木に立縛りなる(木村)
K25 柱に晒される裸身(玉田)
K26 セーラー服しぼり(大塚)
K27 高手小手首縄緊縛(山原)
K28 黒縄豊満刺青縛り(山原)
K29 踏みにじられた女(山原)
K30 古墳にて吊り準備(木村)
K31 拷問にあう裸女賊(山原)
K32 ロープブラジャー(山原)
K33 嚴重な後手縛猿轡(刑部)
K34 エビ縛りにあう女(木村)

K35 イルリのある風景(大塚)
K36 麗しき裸身を晒す(大塚)
K37 亀甲縛り正面裸像(刑部)
K38 豊満乳房縛り上げ(山原)
K39 全裸を投げだして(山原)
K40 縛しめに哭く乙女(木村)
K41 エビ責め放置十分(木村)
K42 豊かな全裸を緊縛(玉田)
K43 観念アグラ縛り図(玉田)
K44 笑顔を縛る強烈さ(刑部)
K45 猿轡の下にあえぐ(刑部)
K46 縛りに典子の素顔(刑部)
K47 伸びやかな裸縛り(刑部)
K48 エビ縛り刺青姐御(山原)
K49 立木より逆さ吊り(木村)
K50 裸身の緊縛と羞恥(玉田)

西洋刑罰物語

(亡霊座談会)

黒田 寿

本日はわざわざお集りいただき誠に有難うございます。不肖死神メロメロス、本日の司会並びに解説を務めさせていただきます。

さて、死刑になった人間には、正式の埋葬は許されません。ために皆さんは亡霊としてこの世が続く限り、時間と距離に超越してさまよい歩くわけですが、今日はその処刑された時の模様を、お話していただくことになっています。尚適当にフィクションを入れてもよい規則ですから、そのおつもりで。

どこの国にも人類が住む限り、拷問や刑罰は存在します。それも時代を経るに従って、だんだん苛酷なものが発明されますが、それ

に拍車をかけるのが戦争であり、宗教上の争いであり、そして暴君の登場です。

古代の拷問はものすごいもので、ハリツケや火あぶりを始めとし、ムチ打ち、油でゆでる、股裂き、圧殺、破碎などありますが、これらはあとにゆずりまして、暴君の代表者ネロが最も好んだ野獣に食わせる刑を、デビーさんに話していただきました。それに続いて南アフリカのコンガ王の犠牲となったピアさんにもお願いします。

食われる美女(一)

デビー「私たちは全裸のまま円柱に縛りつ

けられ、そこにライオンや虎を放したのですから、逃げることもできず、ただ悲鳴をあげて泣き叫ぶだけ、友達は次々と無惨にも食い荒されていきました。

しかも、大勢の見物人が観覧料をはらってつめかけ、私たちが食われるのを奇声をあげて喜ぶのです。猛獣よりこれらの人間の方がよほどおそろしく見えました。

私は一頭の虎が目の前に迫った時、まだ爪が身体にふれる前に失神したのです。

しばらくしてふっと気がついたのですが、不思議なことに、苦痛も恐怖も全く感じられず、ただ大量の出血のため寒気がただけで

した。けれども、私の右脚はちぎれ、乳房はふたつとも鋭い爪でそぎおとされ、下腹も大きく裂かれて、一頭がその中に首をつっこんでいるのです。すぐ傍では、別な一頭がみちぎった美女の生首を、前脚でゴロゴロころがして、おもちゃにしています。

「もうどんなことがあっても助からない」

私はぼんやりと考えました。

そして、その数秒後に、私の息は絶えたのです」

食われる美女(二)

ピア「ここはどこだろう。あたりはまったくだし、全身がゴムの様に柔軟なものに圧迫されて、殆ど呼吸もできない。」

そうだ。私は生きながら大蛇にまるのみにされたのだ。王の命にそむいたため、同僚のマリサと共に、大蛇の冬眠用のエサとして檻に入れられたのだ。

大蛇があんなにすばやいものとは知らなかった。尾がマリサの胸にふれたと思ったら、もう彼女はグルグル巻になり、呆然としている間に頭からツルツルと吞まれてしまう。

今度は私の番だと気がついて逃げようとした時、まっかな口がわたしの首をつつみこん

だ……ここまで覚えている。

大蛇の胃のなかでもがいていると、手の先になにか丸い固いものがふれた。わかった！これはマリサの頭だ。胴体もまだ消化されずに残っている。わたしはひとりではない……何故かホッとした気分になって、無意識のうちに、その身体に抱きついた。

彼女はまだ生きています。弱々しく抱きしめてきたが、間もなく全身をきざみに、はげしくふるわせたと思うと、グンナリとなってしまう。窒息したのだ。それはまた、十分後のわたしの運命でもある。

呼吸は全くできない。どんなことがあっても助かりっこないんだ……こう覚悟をきめたら、苦痛も恐怖も感じなくなった。

数秒後、わたしは絶命した」

メロメロス「ネロにも少しは良い点があります。それは処女に対しては惨刑を加えず、せいぜいハリツケか火あぶり位でした。」

処女はいつの時代でも尊ばれますが、守らねばならぬ人間が、それを失った時は、それだけの報いがありました。

生埋めの刑は、純潔の誓いを破ったヴェスタ神に任える処女たちに支えられるものです。が、この様な場合もありました」

生埋めの処女

ジャクリーヌ「私の罪というのは、私の友達が結婚することになったので、そのお祝いの手紙に『私もお嫁に行きたい、たとえ殺されてもかまわない』と書いた、それだけなのです。」

神殿の前に掘られた穴の底に、私はただ一枚の白布を着ただけで横たわっています。

祈るの声と共に、土砂がわたしの身体を脚から腰、そして胸と埋めてゆきます。遂に顔にもひとすくいの土がかけられ、私は首をふってはらいのけようとしたましたが、あとからあとから土や砂をかけられて、目も鼻も口も埋めてゆくのです。

始めのうちは僅かに空気が通うので、辛うじて呼吸できましたが、顔の上の土砂は次第に重みをまし、全身を圧迫してきます。

大勢で身体の上をふみつけ始めました。顔の上がぐうっと強くおされ、たちまち呼吸は苦しくなってきました。

私の身体が激しくふるえます。おそらくこれが窒息死するときの疼れんでしょう。やがて意識も次第次第に、かすかになってゆきました……」

斧で斬首される女（ラスプーチン絵巻より）



に太い釘をうちつけ、そこに猿の首が梃けられていましたね。

首を斬るにしても逆さに吊して斬ったり、四肢を切断してから首を刎ねたり……特にギリシャでは、女性に対しても容赦なく、生皮はぎ、貝がらで肉をけずり、車輪にかけ、馬で四つに裂いたり、腹部に太い材木を打ちこんで虐

がついている。この上に女囚の裸体を引きずりまわすのだから、彼女の身体は文字通りズタタにわけです。

このほか中国の六所斬りに相当する刑がありますが、これはミッチイさんでしたね」

解体の刑

ミッチイ「わたしは、解体の刑の判決を受け、その日のうちに執行されました。

わたしより罪の軽いテリーとマリーは、重ねておいて四つにする刑で、まず大きな台の上にマリーをねかせ、その上におおいかぶさる様にテリーをのせます。二人の顔と顔、乳房と乳房、下腹と下腹がピッタリと、くっつきあっています。

刑吏が大ダンピラをふりあげ、上になったテリーの背中にハッシと打ち落す。何という斬れ味でしょう。『ギャァ!』と悲鳴がひとつあがっただけ、見事テリーの身体は両断されて、上半身下半身がべつべつに落下、下なるマリーの雪白の腹部は、血汐で真赤に染まったものの、傷ひとつついていません。

次の一撃でマリーもまた絶叫もろともふたつになり、次はいよいよ、わたしの番です。執行に先立ち、わたしの口のなかにタオル

メロメロス「ところが、ネロが滅びキリス

ト教徒の時代になると、今度は彼等が異教徒を迫害し、ネロにおとらぬ惨酷な処刑を考えだすのですから、世話はありません。特にユダヤ人は極刑に処せられ、最も軽い絞首刑にしても、犬や猫と共に吊しておくのですから、まるで動物並みですな。エスメラダさんが全裸で絞首刑になった時も、台の一本の柱

殺しました。

王朝時代は王室に対する叛逆が重罪で、特に女性専用で作られた『クモ』という刑具があります。この刑を受けたクラウデアさんが本日欠席されましたので、私から説明致しますよう。

『クモ』というのは、壁から二本の鉄棒が突きでており、この鉄棒には無数の曲った鉄釘

をぎゅうぎゅうつめこみます。これは悲鳴をあげぬ用心でしょうが、それだけひどい、それだけ長く苦しむ刑罰なのでしょう。

刑吏の第一刀は右の腕、肩のつけねに落ちて、何の苦もなく切り離してしまします。わたしは猿ぐつわのなかでうめきましたが、それには見むきもせず、血汐のほとばしる切断面にタイマツの火をあてます。これは出血のため早く死ぬのを防ぐためでした。

第二刀で左腕が落ちました。三度目は右の脚、太股のなかばから切断され、ヒョロヒョロとまるで歩く様に前方にとんでゆきます。四度目の刃で、わたしは胴体と首だけになったのです。

五度目で乳房をそがれ、次に下腹をえぐられ……ようやく最後の刃があがります。

「ああ、やっと死ぬのだ」

わたしはホッとして、首をせいっぱいにさしのばし、刃をまきました。

「グアーン」

すさまじい打撃がわたしの右の頸すじをおそい、肉を骨を、一気に左端まで断ち切つてゆきます。その途中、わたしの魂は肉体をはなれ、無限の世界におどりました。

亡霊となったわたしが真先に見たものは、

高々と刎ねあがったわたしの首であり、胴体から噴出する、よくも残っていたと思われる程、多量の血汐でした」

メロメロス「次にユーモラス、こんなことを言つては当の本人クロチルドさんに叱られてしましますが、クローさんがロシヤを旅行された時、その地で思わぬ罪に問われ、遂に生命を落した話です。ひとつお願いできないでしょうか」

とんだ災難

クロチルド「私はなぜ捕われたのか、わからないので警吏に説明を求めたところ、女王アンナ・イバノフはピンク色に対し異常な好みをもち、ほかの女性がピンクの衣装をつけることを、勅令で禁じていたというのです。

今日、その抜きうち検査があり、数百人があげられましたが、私もその一人になったわけです。

それにしても、何も知らぬ旅行者の私にまで適用させるとは……けんめいに抗議しても彼等は耳もかきません。

処刑が始まりました。まず手袋をはめていた女たちが女王の前につれだされ、右手を手首から切断されます。片手だけで許すのが特

別の慈悲ということ。靴下の女性も同様に片脚を膝から切り落とされ、やっと放免です。

次のブラジャー組は気の毒にも乳房をえぐられるわけです。それでもネッカチーフをしていた七人の美女よりは良い。彼女たちはくびり殺されたのですから。

最後にのこされた私は、なんとパンティをはいていたのです。これは最高の罪というわけで、女王自ら、処刑をおこなうことになりました。

私はひざまづいて、せめて首を斬ってくれと願いましたが、かなえられず、刑吏の手で太の字におさえつけられ、女王の非情の刃を下腹にうけました。

刑のあと、私は恥と怒りと苦痛のためわれを失い、河に身を投じて一生を終えました。

これがまた裁判に対する無言の抗議だと、死体をひきあげ首を斬りとして晒しものとした。全くとんだ目にあつたものです」

メロメロス「死首を晒したり、死体をあらためてハリツケにすることは割によくみられます。これら古代の虐殺は、かなり後世まで伝わりました。そのひとつ、車輪上の破碎の刑」は一五三四年以後、法例として行なわ

れ、特にオランダでは一八〇五年まで在続し、時には破砕したあと内臓をぬきとることも行なわれました。

ブリュッセルで夫殺しの罪で処刑された模様を話していただきましょう。どうぞ——」

破砕の刑

エレオノラ「私は十字架上に、四肢を四本の棒にひろげて縛られました。この棒は手足の下が二カ所凹んでいて、関節の部分だけが木にふれるしくみです。こうすると手足が碎けやすいのだから、あまり有難くはありません。

私は死刑ではなく、十三回だけ撲るということです。私が始めての受刑者なので、何回位で死ぬのかわかりませんが、助かるかも知れぬと思ったのは事実です。

一回目、すさまじい打撃が右の前腕をおそい、どうやら骨が折れた様子。二度目は左腕に、四度目で両脚も膝から下が碎けました。五度目は肩のつけねのすぐ下へ……こうして八度の打撃が起った時、わたしの満足なところは胴体しか残っていません。

あと五回、今度はどこをうたれるのか……下腹でした。痛烈な一撃が加えられ、これは

本気で殺す気になっている、だめだ、もうだめだ、と覚悟をきめました。

背中を、上腹部を、次いで胸の隆起めがけで強打され、私は一、二度激しく身体をふるわせると、パツと鮮血を吐きました。

最後の二撃は首すじで、ポキッと頸椎の折れる音が、私の感じた意識の最後でした。

こうして、メチャメチャになった私の死体を、十字架からはずして車輪の上にのせ、晒しものにしたのです。この車は多くの見物人によく見える様に、車軸で回転するしくみでした。

ぬきとった内臓も並んでいましたが、肝臓などはまっぶたつに裂け、おへソにはローソクが立てられるという、さんざんな目にありました」

メロメロス「庄殺刑では、マーガレット・クリセロウが、カトリック僧をかくまった罪で、一五八六年三月二十五日に処刑されています。

しかし彼女は天国に行ってしまった、我々の仲間としては、一八一四年、ポンベイで象に踏み潰されたフランソアーズさんが代表です。あまり虐待されたので、つい女主人を傷つけた罪でしたね」

庄殺の刑

フランソアーズ「獄長が私の独房にきました。判決がおりたのでしよう。あの冷酷な男が、気の毒そうな顔をしてるところをみると死刑らしい。でも、とっくに覚悟はできています。

私は彼の目の前で指で輪をつくり、自分の頸にひっかけ、グイと吊るまねをしてみせました。だが彼は黙って首をふると私をつれだします。

絞首刑でないのなら首を斬られるのか、と思いつながら外にでると、一頭の象がつながれています。刑吏は私を押し倒すと、両脚をロープで象の脚に結びます。

小石だらけの道は、象にひきずられる私の身体をさんざんに傷つけます。町の反対側にある刑場まで、一時間以上も、この責苦が続きました。

ようやく刑場についた時、私の両脚は完全に脱臼し、全身泥と血にまみれ、息もたえだえの状態です。周囲をみわたしても、やはり絞首台は立っていないし、首斬台もない。それなのに刑吏は、象からはずした私を地上にねかしたまま、手足を打ち止めます。

執行人はその象でした。私の胴体の上に前脚をのせると、あまりのことに悲鳴もあげ得ない私を、まるで蛙でも潰す様にギュウとおさえつける。ただこれだけで、私は紙の様にのされて一巻の終りとなったのです。

傷つかずに残った首は、ちぎる様に胴体から切りとり、女主人のもとに帰りました。彼女は鼻と耳をそいでから、店の門柱にまるで獄門の様に晒したのです。

メロメロス「顔を傷つけることは女性に対する最大のブジョクです。これではなかなか浮ばれませんね。」

王殺刑に似たものに「掃除屋の娘」があります。ヘンリー八世時代の刑具で、これはミレーヌさんでしたね。

哀れタガの中の娘

ミレーヌ「私は宮廷御用の掃除屋の娘にすぎないが、相当以上の美人とっている。或る日、父の手伝いでお城に上がったところ、王にみとめられ、侍女として出仕する様に言われたが、私はおことわりした。何故なら、私にはあんな爺さんとは比べものにならぬ、とてもすばらしい恋人がいたし、それにあの王様は美女の生首が大好きだから、私などい

つバツサリやられるかわからないもの。

王はその後もしつこく、遂には正式に側室としての出仕を命じたが、私はあくまでことわった。その結果、反逆の名が与えられ、とうとう首だけが王のもとに行くことになり、後悔したがおそかった。

それでも私は愛に殉ずるのだ、と得意になつていたが、なんと鉄のタガの中に入れられた。これは次第に圧縮してきて、脚は腿に、頭は乳房にピッタリくっついて、タガの両端を結ぶと、その圧力は最高になった。

私は遂に屈伏し「お言葉に従います」と叫んだが、肺が圧迫されているため声がでず、尚もギュウギュウ締めつけられ、とうとう肋骨が折れ、真赤な血汐がドツとあふれた。

刑吏はこの時になって「どうだ、王のお召しに従うか」と聞くので、私は夢中で首をタテにふった。ところが冷酷にも「もうおそいだろうな、その身体では」と言っただけで笑った。

三時間後、大腿骨も背骨も完全に折れ、私の息は絶えた。刑吏は私の首を斬りとると銀盆にのせ、えぐりとった心臓を添えて、王のもとへ運んでいった。

それなのに何ということだろう。苦悶の色

がいったいにでていたこともあるだろうが、王は「なんだ、たいしたヤツでなかった」と私の生首をけとばしたのだ。

刑吏はコロコロとろがった生首を、無造作につかみあげ、台所の焼却カマドに無表情のままほうりこむ。美人の私に対して、こんなブジョクはゆるされない。

以来、この刑具は「掃除屋の娘」と呼ばれることになったのが、せめてものなぐさみです。

メロメロス「十七・八世紀は海賊はなやかな時代で、その刑罰が各種多様です。海賊同志のリンチがまた惨酷で、特に女性に対しては、すこしも容赦されません。」

帆柱からの逆吊り、脚をしばって船から引きずる。或は船底を死ぬまでくぐらせる……では皆さんおまちかねのナタリーさんに、そのお話をうかがいましょう。

非惨、女海賊の最期

ナタリー「あたしは美人海賊のうちでも随一の美人といわれている。上流社会のパーティーに出席して、情報をつかむのが主な役目だから、美人でないとつとまらないさ。」

覚悟なんてものは始めからできている。海

鉄娘にて執行される死刑（十六世紀版画より）



賊がベッドの上で死ぬる筈がないもの。波止場の高い絞首台から生まれたままの姿でブランブランゆれるか、それとも獄門台上に生首となつてふんぞりかえるか、おっぱいに穴をあけられ、すっ裸のまま海にすてられるか、女海賊同志のリンチでくたばるか……これがいちばんこわいのさ。

あたしもやったことがある。ペラという年

高い波がくると顔にかかつて、さんざん苦しむわけだ。

たいてい丸一日でくたばるけど、三日目に偶然出会った時、たしかめてみたら、彼女はまだ生きていた。そこで水だけ飲ませて、大いにゲキレイしてやったさ。

「いつまでも生きて、もっともって苦しんでちょうだいね」って、

はあたしと同じ十二、三だけど、ブロンドで、シャクだけどあたし以上の美人なので、ひそかに機会を狙っていた。

まんまと彼女をつかまえて「舟晒し」の刑に処してやったのさ。

「舟晒し」とは、イカダの上に全裸のまま大の字に縛りつけ、そのままおっぱりだしてやるんだ。ちょっと

七日目にまた発見したが、その時はさすがにくたばっていた。死後四十八時間てなところかな、身体じゅうに小魚が食いついていて、ところどころから白い骨がのぞいていてね。だけど、口の中から小魚がはいだした時はゾーッとしたね。

今日はどうとう年貢のおさめ時がきた。もう二、三年生きたかったが、まあ止むを得ないものな。判決はあたしが斬罪梟首、子分たちが絞首刑だけど、何か附加刑が行なわれるらしい。

二人の子分、ロンダとジェーンの附加刑は砂の中に逆さにした上半身を埋めることだ。四本の形の良い脚が砂の中からニューと突きでて、バタバタともがいている。十分か十五分もすると、四本ともグンナリとなった。これで彼女たちの苦しみは終わったわけだ。

死をたしかめるため、真赤に焼けた鉄棒が二人の脚にあてられる。それがすむと、刑吏はまるで大根でも引きぬく様に、スポリ、スポリと引っこぬいて、ドサリと砂の上に折げだした。

二人はこのあと絞首台にかけられ、三日の間、晒しものになるだが、とんだ附加刑がついたものだ。これではあたしもただではすま

ないね。

波打際に穴を掘っている。あたしはその中に後手にくくったまま投げこまれた。顔を海に向け、首だけだして埋める「汐責め」の刑だ。これはあまり有難くない。

ひとりが何を考えたのか、あたしの脈をみていたが、こんなことを言いやがった。

「どうした、少し早いぞ、ナタリー」

あたしとあるうものが、こんなヤツに負けていられない。

「あたし、死刑になるのは始めてなのよ。誰だって初めての経験の時は緊張するわ、仕方がないでしょ」

と言ってやった。

ザブリ、ザブリと寄せる波のしぶきが顔にかかり、ガラガラと輝く太陽が、海面に砂浜に反射して強く目を刺す。

汐は次第に満ち、波がぐうんと寄せてきてはあたしの顔を越していく。引いた時にやっと思がつけるのだ。呼吸を波に合わせると、ひどく苦しむことになる。だが、満潮になって波が引いた時でも鼻や口が水面にでなかったら……オダブツっていうわけさ。

苦しい、苦しい。波がぐうっと引くのがわかる。いちばん引いたと思った時、あたしは

鼻を上につきだし息を吸ったが……ちくしゅ！空気だけでなく海水まで入りこんできやがった。

頭の中がツーンとし、気管や肺がチクチクと痛む。その苦しみをよそに、波は再びあたしの上を越えていく。今度こそ、あたしは無駄としりつつ、必死に鼻をいっばいつきだしてみたが……ああ、もうだめだ。

刑事が膝まで海の中に入り、あたしの頭をけとばしながら言いやがる。

「こいつめ、まだくたばらないのか」

くやしいが、言い返すことができない。それにだんだん気が遠くなり、苦しみまでが消えていくようだ……

こうして、あたしの魂は肉体からはなれたわけさ。干潮でいちめん平になった砂浜に、ポツンと丸いものが残っていた。それがあたしの首さ。刑事のやつ、鼻孔に鏡をあてたり瞳孔に光を入れたりしてたが、確実にくたばったのを認めて、大鎌でザクリと首を刈りとりやがった。

判決は斬罪梟首だからね。あたしの生首は大通りに晒されたが、見物のやつら、口々に刑が軽すぎるって言いやがる。それはべらよき苦しまなかったけれど、汐責めも楽じゃな

かったよ……」

メロメロス「次は火あぶりの話です。英国では特に女性に対して行なっており、正式の法律のもとで処刑されたのは夫殺しのある女性で一五一五年。名前の記載されているのは一五九〇年のマーガレット・リード、以来一七八九年のマリー・マーフィまで二百年間に約三百人処刑されています。

当時の絞首刑は上半身を裸にした死体にタオルをぬって、いつまでも晒しておく規則であり、女性に対しては火あぶりの方がはるかに寛大だということです。あの法律家は

「女性に対する礼儀から、肌をむきだしにして大衆の前に晒すことはできない。故にその処刑は絞首台に於て、生きながら焼くべきである」

と主張しました。

魔女時代は極めて多数が火あぶりになり、一人づつでなく三人四人、多い時は十数人もたばねて、大勢の見物人を前に、徐々に下から焼いたこともありますが、今回はスペインにとびましよう。

一七九六年一月十日、異教徒に対して行なわれた火刑では、改宗に対する抵抗の度によって罪に軽重がつけられ、最もガンコだった

マリヤ・ペンティラさんの如きは、絶命まで一時間半以上も苦しんだのです」

美女、灰となる

マリヤ「わたしはとうとう最後まで彼等に屈伏しませんでした。そのため、生きながらの火あぶりの刑を宣告されたのです。」

刑場では、すでに十数人が絞首刑にされていました。彼女たちは数度にわたる拷問で、遂に転宗を誓った筈です。それなのに死刑をまぬがれないとは……でも絞首刑なら幸せです。ちよっとうらやましい気がしました。

火あぶりになるのは四人です。わたしは中央の一段高いところ、ほかの三人は前に一列に並びます。両端の二人は火刑台に縛る時、頸すじを柱にギリギリと巻きこむ様に縛られて、しばらくもがいていましたが、薪が積まれる前に絶命した様です。中央、わたしのすぐ前の女性に対しては、薪が山の様につまれましたが、わたしの所にはほんの数本しかありません。これはどうしたことでしょう。わたしの罪が最も重いのでしょうか。

火が点ぜられ、前方の女性が高い悲鳴をあげましたが、みるみるその身体は焼けただれ十分とたたぬうちガックリと首を落しての最

後です。両脇のふたつの女体に至っては、もう灰と化しています。

それなのにわたしの苦しみはまだ続き、必死にもう少し薪をたす様に願いましたが、その願いはかなえられず、燃えつきた分が補充されるだけ、常に同じ温度でジリジリと焼かれるのです。死を早めるための、わずかな数本の薪の追加、その願いさえ遂に許されなかったのです……」

メロメロス「絞首刑については、今迄にも何回か語られましたが、今回新しい話をもってこられた方があるので、それをお願いしましょう。まず一六五〇年、カスルヤードでえい児殺しで処刑されたアン・グリーンさん」

絞首刑奇譚（一）生き帰った女

アン「私は死を宣せられてから尚も十分間吊され、その後太いロープを頸にまきつけたまま棺に入れようとしたのですが、その時、胸部がわずかに息づいていたのです。そこで生きながらの埋葬は気の毒だと、刑吏たちは私の身体をふんずけたり、銃の台尻で頭を撲ったりして再び絶息させ、大学の解剖台へ送りこみました。」

教授たちが検死すると、またもや僅かに呼

吸していたので、更に蘇生の手段をほどこしたところ、とうとう生き返りました。

しかし、私にとっては、あまり有難くありません。というのは、三日後にあらためて絞首台にかけられたのです。もう一度、あの恐怖と苦悶を味わうのかと、私は泣いたりわめいたり、ひざまづいて、あわれみを乞うたのも空しく、二度目の処刑で確実に「死亡」したのです」

メロメロス「余計なことですが、少々解説いたしますと、一七五二年から一八三二年まで、刑死した死体は解剖用として外科医に渡すことが法律化され、かなりの死刑囚が絞首されたのち生き返り、しかも、その場合赦免を認めることになりました。アンさんの処刑も、あと二年おそかったら、きっと許されたでしょうが、不運でしたね。」

現に一七六七年一月二十四日、パトリシヤ・レイモンド嬢が、絞首台に二十八分以上も吊され、その後、更に五時間も放置されたのに生き返り、放免の上募金までしてもらっています。

しかし大逆罪で有罪になったものは、生き返っても死は免がれません。こんな判決文があります。

「お前は刑場にひかれ、絞首刑に処せらる。もし生き返れば、乳房をえぐり取ってお前の目の前で焼き、お前の首を胴体から切断し、胴体は四つ裂きとなって、国王の命令通り処分される。さらば、神よ、お前の魂の上にあわれみを……」

幸い、このあと書きが役立ったことはありません。刑吏もやはり人の子、デボラさんが生き帰って、本当はこの惨刑をうけるわけでしたが、ひそかにもう一度締め直したことがありましたね」

デボラ「そうです。わたしは生き返ったと知った時、真蒼になってふるえていました。しかし刑吏たちはしばらく顔を見合せた後、わたしの頸にロープをまいて、両端をひっぱったのです。わたしは随分苦しかったけど、刑吏たちの好意は、よくわかったので、なるべくあばれない様に努力しつつ死んでゆきました」

メロメロス「ドイツでは蘇生の恐れがない様に十二時間も吊り下げています。第二次大戦でナチスが、レジスタンスのパリジェンヌを、三日も四日も吊したまま放置した例がありますが、これはみせしめの意味があるのでしょう。しかし、上には上があって、一四一

三年パリで処刑されたベルデナットさんは、三年間吊されたままでした。さきのアンさんにおとらぬ不運の女性としてキムさんがおります。どうぞ……」

絞首刑奇譚(二) ビールが仇

キム「私の故郷ヨーク地方では、死刑囚を刑場にはこぶ途中、ビールを与えるしきたりがあります。もうすぐ吊されるのに、うまそうに飲む男女を、おどろきの目で見てましたが、まさか私自身がその運命におちるとは夢にも思っていませんでした。」

私の処刑は一八三一年五月十九日で、ほかの四人と共にこの供応をうけました。その日は割に暑く、喉はかわいていましたが、私はビールは飲まないで辞退したところ、ひとりだけ先に刑場につれだされたのです。

刑場はもう黒山の人出で、「早くやれ早くやれ」と口々に叫んでいます。そこで刑吏はほかの人のくるのをまたず、ご要望にこたえて私を吊してしまいました。

私は十三分後に亡霊となり、あとの仲間を待ちましたが、なかなかやってきません。なんと全員に恩赦の命令がきて、彼女らは放免になったのです。それは私が吊されて数分後

のことでした。すぐに降して介抱すれば生き返ったのに、群衆が承知しないだろうと、そのままにしておいた、というのです。

いずれにせよ、私がビールを飲んでいたら生命は助かったのです」

メロメロス「只今新加入の方からレポートがとどきました。早速拝見致しましょう」

絞首女囚の最期

誰かが何か言っている。あればだれ？ あれはお祈りの言葉を言っている教誨師だ。

「……汝の魂は永遠の生命へ、アーメン」

何が永遠だ。わたしはもう、ほんのちよつとでいいから、この世で生きていたいのだ。

「これをお飲み」

わたしは女看守からコップを受けとり、一気にのみほした。ブランデーらしい。冷えきった身体に熱くしみわたる。私は後を向いてコップを彼女に渡す。その緊張した顔はぼやけて見える。

……とたんにわたしは両腕を強い力で背中にもわされ、固く縛りあげられた。いやだ、たすけて、と悲鳴をあげたが、だめ、泣いてもわめいても、もうだめ……

わたしたちは階段をのぼる……わたしたち

は十三の階段をのぼりきる……やがて彼等はわたしひとりのをのこしておりてゆく……

だが、わたしはたったひとりで、この穴の底へおちてゆくのだ。それから彼等はわたしを見にやってくる。

彼等はわたしの身体を手押車にのせて検死室へはこび、わたしが明かに女性であり、わたし自身に誤りなく、更に確実に死亡したことをたしかめる。

更に冷凍室へと移されて、わたしの二十二年の若々しい身体は、コチコチに固まってしまふのだ。

ああ、顔になにかかぶせられた。刑吏たちはわたしの脚になにかしている……ひとりで暗黒の死の世界へゆくのだ。一步前におしやられ、首のまわりになにかかけられる……。わたしは最後の息を大きく吸いこんだ。これが最後の呼吸になるのか……。

……神さま……わたしをたすけ……

「バタン！」

「ウアア……」

メロメロス「どうやら、話はつきたようですね。皆さんが、この世界においでになった時は、かなり辛いこともあったでしょうが、案外に住みよい所であることは、おわかりでしょう。座談会に出席された方々、喜んで頂けたでしょうか。御静聴ありがとうございます」

き、一目で浣腸器とわかるガラス器に薬液を満たしたものを右手にさげた看護婦さんが現れて、大声で

「××さん、早くその処置室へはいって下さい。それからトイレはあそこですからね」と左手で示すのです。これでは今から行われる処置がどんなものか誰にでも明らかに分ってしまいます。

人々の視線を浴びて娘さんは困惑しきった表情で、おずおずと看護婦さんにその部屋につれられ、やがて青ざめてトイレへ急ぎました。多忙な看護婦さんや病状の危機を救うためには思い切った処置も必要なことは理解出来ませんが、思春期の少女のためには、なんとか考慮が払われないものかと残念に思われて

浣腸通信

思いやりの足りぬ病院

矢野 恒子

突然お便りさし上げます失礼おゆるし下さいませ。思い出しましても顔の赤らむ思いでございましただけに、御挨拶も申し上げず、誠に失礼いたしました。

はからずも今日、新聞の『ひとこと』欄に、貴女様の、おなさけ深き一文を拝見致しまして、なつかしさのあまり、ペンをとったのでございます。こうおっしゃって下さいま

したわね——

「思いやりの足りぬ病院」

数日前、私が市内のある病院の待合室で順番をまわっていると、診察室から十八九才のおしとやかな娘さんが出てきて私の隣に腰かけました。胃の下あたりを押さえて苦しそうなので横にさせてそっときくと、急性中毒とかです。それから十分ほどして薬局のドアが開

なりません。(〇浜市〇北区〇原町〇木三〇子)

☆

お姉様、こうおよびしてはいけませんかしら。「どうしたの、大丈夫？」と呼びかけて下さったあの時、姉というものを知らない私はふと姉妹の感情に、ひたったのでございました。おやさしい方、こんな方に甘えてみたい、迫りくる腹痛も一時、遠のくかに思えたその時、そうです、お姉様のおっしゃった通りの、看護婦さんの、悪魔のような

「処置室へ入って下さい」の大声に、あたりの方々の痛いような視線を感じたのでした。看護婦さんの右手には、お薬を一ぱいにすい上げたガラス製の大きな——私には殊更に大きく見えました——浣腸器がにぎられていました。左手で肩を押すようにして導かれた処置室、それは死の床のように恐ろしい光景でした。

総タイルのその部屋は、白く冷たく光っていました。左手のガラス戸棚には、ピカピカ光った器具類が今にも私につかみかからんばかりに並び、真中には、ベルトの一ぱいついた、足をのせる台のある、恐ろしい手術台のようなものがあります。そこには、輸

血や洗腸に使うのでしょう、大きなガラス製のイルリガートルが二つもぶら下り、黒くて長いゴム管がたれていました。

「ああ、これに乗らされるのかしら」

私は一瞬、眼のくらむ思いでした。でも、

「そのベッドに横になって」

助かりました。左手の隅にある低い細長いレザー張りの小ベッドを指された時、本当に私は救われる思いがしました。

学校の保健や、婦人雑誌などで知っている筈の浣腸、しかし生れてはじめて浣腸されると、胸の動悸はおさえようもありません、どうしてよいのか、ベッドのそばに立ちすくんでしまったのです。

「なにしてるんです。早くパンティをぬいで上って下さい」

もじもじしている私に、浣腸器をもった看護婦さんは邪慳に言いました。

「そこに乱れ簾があるでしょう。そこに早くぬいでいれて」

せかされるままに、私は生れてはじめて人前でパンティをぬぐのでした。だって常に内湯に入っている私は、銭湯にすら、いったことではないのですもの。前ごみに、そっと下すパンティ、お尻がすーっと冷たく感じまし

た。

見えないように、両膝頭をぴたりとくっつけて、そっとベッドに上りました。どうせすぐめくられるのに、今考えると、おかしくさえなるのですが、少しでも見られないように一生懸命、前をつくろうのも、乙女心というものなのでしょう。

何も知らない私はベッドに横になったものの、両手を胸に堅くにぎりしめ、両足は揃えてのばしたまま、全身に思わずも力が入ってブルブルふるえていました。

「そんなに堅くなっちゃ駄目ね。膝を曲げて膝を——」

そう言われても、すっかり堅くなってしまった私は、どうしていいかわからないのです。

「しょうがない人ね、浣腸したことないの」

「はい、はじめてです」

「小柴さん、一寸きて」

「ハイ」

右手の洗面台で何か洗っていた見習の腕章をつけた、まだ看護婦帽をかぶせてもらえない小さな見習さんが手をふきふきかけてきました。みれば、中学を出たばかりなのでしょう。まだあどけなさの残った可愛い幼い見習看護婦さんでした。



「一寸手伝って。スカートめくって」
 ああ、こんな小さな人にまで、私のすべてが見られてしまう、一瞬、何ともいえぬ羞恥が私の全身をつらぬきました。
 「膝を、お腹の方に曲げさせて」
 今まで何か洗っていたのでしょうか。ひやっとする冷い小さな手が私の太股の後に当てが

われて、そっと、でも力強く、膝が
 お腹の方におりまげられます。
 「もっと、そう、そうね。あんた、
 まだ浣腸やったことないんでしょ
 う。よく見ておくといいわ」
 私は、すっかりはだけられたお尻
 に、四つの視線を痛いように感じま
 した。
 「お腹の力をぬいて。駄目、そんな
 に力を入れちゃ。口を大きくあけ
 て、アーンと言ってごらんさい」
 「アーン」
 ああ、何とほろろしい光景でしょ
 う。お尻を丸出しにされて、子供の
 ようにアーンと言わされる。医療と
 はいいながら、我ながら我れと我が
 身がいとおしくなるのでした。
 「小柴さん、左手の指でここを開い
 て。そうワセリンぬって、いいわ、それで」
 ぬるっとした触感、思わず、反射的にしま
 るのでしたが、小柴見習さんの二本の指は、
 情容赦なくグツとばかり、押し開いているの
 です。
 「一寸気持が悪いかもしれないけど、すぐす
 みますから我慢して、ハイ、力をぬいて、も

う一度、大きな口をあけて、アーン、ハイ」
 瞬間、ぬるっとした感じで肛門に浣腸器の
 先が入ってきます。と同時に、冷い薬液が、
 そうです。本でよんだグリセリンなのでしょ
 う。チュルチュルと音をたてるようにして、
 直腸壁をゆさぶります。ほんの数秒なのでし
 ょう、でもそれがとても長い長い時間のよう
 に思われました。
 「ハイすみしましたよ。小柴さん、脱脂綿で押
 さえて」
 その言葉が終わるか終わらないかの中に、ああ
 もう便意がはじまりました。グーッと下腹が
 張ってきます、思わず肛門が自然にしまるの
 です、それを指先に感ずるのでしょうか、小
 柴さんの押さえている指先に力が入ります。
 ああ、又一しきり強く便意が――
 「あの、おトイレ行っていていいでしょうか」
 「まだ駄目でしょう」
 年に似合わず小柴さんの声は冷酷でした。
 浣腸をすませたあの看護婦さんは、
 「浣腸器洗っというてね」
 そう言いすてて出ていったままです。小柴
 さんは黙って相変らず、じっと押さえたまま
 です。ああもう我慢ができません。
 「あの、もう、いいでしょうか」

「さあ、一寸聞いてきます」

そう言って小柴さんは、ドアの方へ行きました。洩れそうです。どうしたらいいんでしょう。勝手にトイレに行ったら叱られるはしないか、でも、もうそんなことを考えるゆとりはありません。二人ともなかなか現われません。いよいよ便意はつのります。お腹がグーッ、ゴロゴロと鳴って、丁度下痢でトイレへとんで行きたい時の気持です。ああ、どうしましょう。

二人の姿の見えるまでの何と長い時間でしょう。思わず、はしたなくも、むき出しのお尻をゆすってしまいました。そうすると、いくら我慢が出来そうです。

あっ、又一しきり強い便意、ああもう駄目です。こんなことしたら、きっと大変な粗相をしてしまいそうです。私は思いあまってベッドを下りました。急いで乱れ籠のパンティをはくと、あわててドアの方へ。その時、ドアが開いて、小柴さんを後に従えて、あのこわい看護婦さんが入ってきました。

「あの、もう我慢が——」

「そうね、一寸早いようだけど、いいでしょう。トイレ分ってますね」

「ハイ」

もうそれからは夢中でした。お姉様がおっしゃったように、我慢に我慢を重ねていた私は、全身鳥肌がたって、青ざめていたことでしょう。今洩れやしないか、粗相しやしないかと、うつむいたまま、廊下へ出たのです。「今、私は浣腸されました。これからトイレへ急ぎます」

そう全身に書いてあるかのように、待合の方々の、全部の方々の視線を全身に感ずるのでした。羞恥、でも、それは便意の方にかき消されて、ほんとうの恥ずかしさが、しみじみと私を包んだのは、下痢状の排便をすませて、ホッとしてトイレを出てからでした。

逃げかくれるように、私は人々の視線を避けて薬局へ急ぎ、投薬をうけるや、足早やに帰路につきましたので、おやさしく呼びかけて下さった、お姉様に御挨拶も致しませんでしたことを、本当にくやんでおります。お許し下さいませ。

お蔭様で、その後、腹痛もおさまり、すっかりよくなりましたが、これもあの浣腸ですっかりお腹のお掃除ができたからでございましょう。

生れてはじめての体験でございました。病院はもっと親切におっしゃって下さいまし

たのは、本当に有難く嬉しく存じます。

でも、今あの時をふり返ってみますと、何か言うに言われぬ気持が致しますの。何かに見られるということに、不思議な快感を覚えますのね。女ってそんなものなのでしょう。か。思えば、我と我が身がいやになるようでもございます。この気持、分っていただけますでしょうかしら。

それにしても、はじめての浣腸の感覚、今思いだして、心がうずくのでございます。どうしてだか分かりません。あんな恥ずかしいものが、それなのに、今一度恥ずかしめられてみたいような——

いやですわ、こんなことお便りして。でも今、御礼のこのお便りしながら、ふと、お姉様になったら、今一度浣腸されてみたい、もっともっと、強い浣腸を。

はじめてお便りしますのに、こんなぶしつけなこと、お許し下さいませ。

颱風二十五号とやらがくるそうです。雨足風音も次第に強くなってきましたようです。こんな夜、お姉様にだかれて浣腸されたら、そんなわがままな空想をしつつ。かしこ

○木三〇子様 御もとへ 矢野 恒子

＜M戯評＞ 絵のない絵本

田代俊夫

（春川ナオミ画）



今日子・実子・まり子のトリオ、颯爽と登場。はて？、岸田・芳村・加賀、そうです、テレビ・ドラマ「嫌い／好き」のヒロイン達であります。好評だった「男嫌い」の続編として今回は芳村・加賀のフレッシュな若手

を新たに起用し、そのお目付役兼コーチとして貫禄充分の岸田女史の再出馬を仰いでおります。月号発刊の頃には画面上にてあまたのMH男性どもを痛めつけておるはずであります。もっともこの心根優しき大和撫子連合

軍は、ブン殴ったりフンづけたり等の荒々しき振舞いをなさることなからうと、その点いささか残念なのでありますが、元来心理的責めのパターンを得意とするこの手の作品にそれを望むのは無理でありましょう。

今回のKYKトリオ、いずれ劣らぬその道の猛者とお見受けしますが、とりわけその活躍が期待されますのはYこと芳村嬢でございます。と申しますのも私、この型の女性、つまり己れの女たることをチットモ意識せず男などテンデ問題にもいたさず、そのくせゾクッとするお色気を発散されます乙女にすごく弱いからであります、かようなアマゾンにじろりと一瞥を食らうと即時ヘナヘナとマイってしまふのであります。何せこの実子嬢、「青春怪談」では恋人の北大路欣也君の横っつらに痛烈なビンタをお見舞したつわものですから、その将来を大いに殖望さると申さねばなりません。同嬢と同一タイプのアマゾンとしては、私の大ファンたる水泳の木原知美子嬢などその適例でありましょう。嬢よ、もし次のオリンピックにて日の丸を掲げんか、それをしおに芸能界に入り、その漲る若さ、気品ある美貌、若鮎のごときしなやかなる肢体、重量感に満つ堂々たる肉体美を誇示して

銀幕に君臨され給え。凡百の女優皆その顔色を失い、秋津島豊葦原瑞穂国の男ども、MたとMたらざるとを問わず均しくその膝下に平伏するは明らかなり。ちとオーバーだったかな？

2

さて、この番組のシナリオ、どなたがお書きかは存じませぬが、当方で作成する脚本はやや趣きを異にし、テレビでは一般公開されないのです。たとえば次のような……

——まず各人の持味を最も有効に生かすべく女狩人達の役割の分担を定める。その結果先陣を承わった加賀嬢、当日の生贄としてブレイボーイ気どりでイカレたのを、どこかその辺で一匹拾ってお屋敷へ御帰還。お色気ありそうでなさそなしくさに、この女オレにありと速断たしるドンファン先生、口に研ぎをかけボクの恋愛観・女性観を滔々とぶつ、ところが徹底的なじらし戦術にでたまり子ちゃんの力マクトぶりに、全然議論が噛み合わず笑いを誇うばかり。ころはよしと加賀まり女、

「朝顔にいばりくらせて貰い水……ジャストモーメントね」

と、天明調の神秘的一句を残してドロソ。

代って副将芳村嬢、ノースリーブ・スラックス姿で颯爽と出現。

「おまたせを……、おや、今日のはひどく弱そうなおアスパラ坊やだこと。これじゃフォルするのに五分もかからないようよ……」

いと恐ろしげなることを事もなげに言う。

「失、失敬なノ冗談はよして頂戴ッ！」

ピシヤリノ 有無をいわせず平手打ちを頂戴いたさせる。何しろ当方の脚本では同嬢、柔道二段、空手三段、合気道四段ということ

になってるんですから悪しからず。

「ボ、暴力はいけないっ……ラ、ラ、乱暴はしないでチョウダイッ！」

さあこれからが大変。再度に亘る財津一郎君の抗議も空しく、武道合計九段の同嬢のために哀れプレイ坊や、コテンパンにノサレ遂にはどっかりと馬乗り組敷かれてフォールされちまうのであります。正にその時、あてやかなる十二単を纏いたるたる大将兼参謀総長岸田女御しらずと御出馬、

「妹よ、もう許しておやり、……これ、そこな賤の童、汝はそも何故にわが禁男の屋敷に来れるや？」

自分が作戦を立てたくせに知らぬ顔の半兵衛を決めこみ、実子殿下の腎下に呻吟するア

スパラ君を慈悲の心でお助けになる。もとより無罪放免ではなく、△懲戒と説示△を与え△御奉仕△をいたさせ△止め△を刺し給う予定になっておる。その△御奉仕△と△止め△の何たるかは未だ之を審にせず、M人士の嗜好に委ねるところがミソ。題して「美容と健康によく効く総合保健剤アスパラを食べよう」のおそまつ——。尚、以上の脚本無断転載を禁ずるぞよ。

3

週刊サンケイ10月31日号に狐狸庵山人・遠藤周作翁が珍妙なる映画評を書いています。

読み落された読者諸兄にそのサワリの部分を紹介いたしますと、まずマクラとして（以下

「」の箇所が原文）

泉という青年「爺さん、……有馬稲子なんという女優知らんのか」

翁「知らんな。昔、有牛麦子という女優がおって、えろうのほせたが……」

泉「じゃあ、前田美波里は」

翁「イ・バ・リ？、前出し尿とは、これ奇妙な芸名であるの」

泉「イバリじゃない。ビバリだ」

という次第。当節人気絶頂のキングサイズ・グラマー前田美波里を御存知とは周作老隅



団先生を語る

水野良吉

に置きません。この方面にかけては臭作先生
どうも臭いと私は前々から睨んでおるのであ
りますが、前出しいばりとは先生の面目躍如
たるモジリといえましょう。次いで本番。S
F映画ハミクロの決死圏V（脳手術のため
に、細胞以下に縮小した医学者達が特殊潜航
艇に乗って患者の体内に侵入し治療するとい
うお話）を鑑賞された翁はハミクロの女体
圏Vに思いを馳せる。つまり、若くて美しく
い女性の体内にその恋人が同じ方法で侵入す
るが、果して腸の中で潜航艇エースト、出る
に出来ぬという絶体絶命のピンチ。そこで

『……医者達は考えた。このうゑは潜航艇を

患者体内の力で動かすよりしかたがない。そ
れには腸に刺激を与え、患者に大きな屁意を
催そう。そしてその屁の力で潜航艇を体外に
飛び出させるのだ。……全員ガスマスクをつ
け、……腸に刺激を与えた。……たちまち腸
は蠢動し腸内のガスは凝集し……大音響と共
に……体外に排出したのである』ということ
になります。しかも翁は次のごときオチをつ
ける。

『元の大きさにもどった医者は、まだ昏々
と眠っているおのが恋人をじっと眺める。一
時間前までは、あれほどアコがれた……女性
も、自分がその体にもぐりこみ、……屁のこ
もった腸まで通過してみると——百年の恋も

一時にさめるか——と思われる。彼は恋人に
対する夢を消したのだろうか。……いや（彼
は決然という）わたしはそれでも彼女を愛す
る……かくて、敬虔なクリスチャンであら
れる遠藤先生は『生理に対する精神の勝利』
を高らかに謳歌され、とやま大人、芳野兄の
お株を奪われるのでございます。合掌。

4

十二月号寸感。① さし絵の増えたこと。
さし絵やカットのない文章は、ワサビのきか
ぬ刺身と同じ。特に一〇八Pのものは最高。
②、評論ものが少なかったこと。「のおと・
あと・らんだむ」がなくなつて淋しい。だが
花原さんのエッセイは素晴らしい。

僕が団先生に逢つたのは、二年ばかり前、
丁度、僕がFテレビの連続ドラマの助監をや
つていた時です。その前から、団先生とは、
時折り、局ですれ違い。びよっこり頭を下げ
る程度の知り合いだったのですが、先生が、
僕がK誌に連載が始まってより愛読している
小説『花と蛇』の作者であらうなぞとは、夢
にも思いませんでした。たまたま或るスタジ
オで一緒になった効果マンから、教えられた
のですが、まさかと思ひ、信じる気にはなら

なかったのです。

ところが或る日、僕のついている監督が、団先生のシナリオで仕事する事になり、これですよ、K先生が団鬼六である事をつきとめる事が出来たのです。

僕に正体を見破られたからといっても、先生は別に嫌な顔はされませんでした。

「今日は打合わせがすんだら、どこかで飲もうか」

と、それから仕事場で逢った時、肩をたたかれたりして、僕は、感激したものです。

何度か団先生とネオン街で飲む事になりましたが、先生は自分でしゃべるより人にしゃべらせる方で、僕の下手なSM談義をニコニコして、成程と感心したようにうなずき、次々と酒や料理をすすめます。何時でも、たらく御馳走になり、僕は家へ帰ってから、何だか失礼な事をしてきたような気分になったものです。

何時か飲んだあとで先生は、必ず店から電話をかけ、彼女を飲んでいる店へ呼びつけます。それが、十一月号の鬼六談義に出ていたM子さんでしょう。すばらしい美人でした。女優の水野久美に似ています。うらやましい限りでした。赤坂の方の高級酒場で働いてい

る彼女が戻る時間まで、僕は先生の酒のお相手をしているようなもので、何だか馬鹿みただとこぼすと、

「すまん、すまん」と笑われ「こうして君に見せつけて、いらいらさせるのもSM心理の一つだ」というのでした。

ネオンの街に、消えていく団先生とM子さんのうしろ姿を見て、僕は、本当に団先生は幸せな人だと思いました。また、二人のこれから展開するであろうSMプレイを想像して、いささか頭にくるのです。

そんな事があって、僕は、先生が仕事場にしておられるアパートへ時々邪魔するようになりました。その頃、僕は、シナリオの勉強をしていましたので、先生に見てもらうのが目的だったんです。SMを通じて、先生に近づき、自作のシナリオを読んでもらおうとは、僕も思えば厚釜しい男ですが、先生への良さにつけこんだのかも知れません。

或る日、先生の仕事場へ遊びに行くと、先生は、テープレコーダと英文スクリプトを前にして、原稿紙にペンを走らせていました。その頃、団先生は、外国テレビ映画のアテレコ翻訳とテレビドラマの仕事と全く息のつく間もない程の忙がしさで、三日に一日は徹夜

されていたようです。

テープレコーダを動かしたり、止めたりし、テープに吹き込まれている外人の声の幅に合わせて、日本語の科白を作りあげるので、僕なんか、聞いていても何の事だか、チンプンカンプンの英語を聞きながら、忽ち、団先生はそれを日本語の科白に直していくのです。外国テレビ映画の吹き替え台本とは、こういう風にして作るものだという事を僕は始めて見たわけですが、シナリオが書け、翻訳が出来、小説もこなすという団先生の才能には全く恐れ入りました。

団先生が昔、出版された短篇集を僕は一冊頂きましたが(SMには関係ない)その巧みな物語と描写の適確さにはただ脱帽、幾度も読み直したものです。

テープの英語をヒヤリングして翻訳していく仕事をつづけながら、団先生は、部屋へ入って来た僕を見て

「何か君、面白い事ないかね」

と語りかけるのでした。

「お忙がしそうだから、また出直しますよ」
「いや、もうすぐだ。そこのウイスキーでも飲んで待っとれ」

そんな事をいってるとき、局の者が来て、団

先生の原稿を整理し、時計を見て、「三時まで間に合わない」と印刷の都合で十時からのアテレコが出来ません」

と、ブツブツいうのでした。

局の者に原稿渡してしまわれると、さすがに、がっかりして、団先生は、畳の上ののびてしまうのでした。でも、すぐにカバッと起き上ります。

「おい、君、飲みにいこ」

まだ夕方にもならないのに、先生は、僕を連れて、近くのおでん屋へ行き、コップ酒を飲むのです。酒の力で自分を元気づけているようでした。

「僕は、もうすぐ、こんな馬鹿げた仕事はやめるよ」

先生は、その頃、疲労の極に達していて、こういう忙がしい仕事から足を抜く事を考えていたようです。

「女を抱く閑もないなんて、悲劇だよ」

というのでした。

団先生の変っている所は、金の必要に迫られると仕事をするというのんきな所です。

相場なんか手を出して、欠損し、その穴を埋めるためには、がむしやりに仕事をするのですが、穴が埋まれば、何もせず、寝てい

るといふ今時珍らしい楽天家なのです。

人一倍遊ぶのが好きなのですが、それだけに、仕事でアパートや旅館にカンヅメされてしまうと、苦しくてたまらなくなるのでしよう。そんな時、仕事の合間を見て、欲求不満から『花と蛇』を書く事になるようです。

それから間もなく、団先生は、ディレクターY氏と一緒に局の仕事をやめ（Y氏は今やYプロダクションの社長）今までの糞真面目の仕事をつづけて来た不満をたたきつけるようにピンク映画の脚本を書き出したのです。

先生の友人であるディレクターやライター達が、わざわざ先生の所へ来て、そんな仕事はやめて、会社へ復帰するようにと覚し出したことがありました。その時、僕も先生の仕事を手伝って傍に居たのですけど、団先生のいう事が、ふるっていました。

「君達とやってた仕事の方が、よっぽど、情なく思うよ。俺は助平だから、こういう方が性に合うんだ」

意見しに来た人達は、何だか煙に巻かれた形で、その夜は、うまくもない酒を飲み、引揚げて行きました。

監督でもライターでも、会社があるから、大きな顔が出来るので、フリーになって、自

信がある奴がどれだけいるか、皆んな何だかんだと会社に不平をこぼしながら、実は必死に会社にしがみついている哀れな連中だ、と団先生にいわれた事に僕は心から同意致します。

寄ると集まると、連中は、会社が視聴率という不合理な観点で作品を見る事の不平や、こちらの意図する芸術性のあるものを取りあげぬ憤満を語り合うようですが、団先生は、一度も、そういう事の不平を洩らされた事はありません。

業者に協力するのが、プロライターであるとしておられるのです。そして、連中が口にする芸術より、芸術の事はわかっておられるのです。

海に見える静かな所へ先生は、引越される事になり、僕も、手伝いにつけたのですが、実に、頬笑ましい光景を僕は見ました。トラックに荷物をつみ、せっせと働いているのは、すべて、ピンク映画の男優女優、それから、ピンク映画の監督なのです。その監督は、元大映にいたN氏、もう一人は、新東宝にいたO氏、そんな五十年配の人達までが、団先生の引越しを一生懸命、手伝っておられるのです。この種の社会に足を踏み入れる事

になった団先生に敬意を表しておられるのでしよう。それなのに、本人はというと、新宿のどこかで、M子さんと今後の逢引き場所などを相談しているというので、あきれましたが、手伝っている人達は、そんな事に文句をいう人はいません。皆んなトラックに乗りこむと、団先生に渡されている地図を頼りに一足先に出発しました。

団先生——長い間、色々と教育くださり有難うございました。僕は、最初『花と蛇』の大ファンとして先生に接し、その後、シナリオ作法及び人生の機微について色々教授して頂きました。食えなくなれば、つまらん仕事でもして働かねばならないが、食える内は、働かずに、勉強しろ、といわれた言葉をよく考え合わせ、これより一年間、田舎へ戻っ

て、シナリオの勉強を始めます。まだ、当分、親の脛がかじれそうなので——。どうか『花と蛇』だけは続けて下さい。田舎へこもって、はけ口のない欲求不満を満たすのは『花と蛇』以外にはないのです。花と蛇ファンの一人として、心から、先生の御健康を祈ります。

十一月一日（筆者は元テレビ映画助監督）

両手吊りにもかく女

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号「むさ」

後手吊りのもたえ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号「むれ」

強烈縛りにうめく女

大手札五枚一組 六〇〇円
木村 洋子 略号「むそ」

顔を凌辱される女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号「むよ」

後手柱宙浮き縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号「むか」

大の字縛り逆さ吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
増田みゆき 略号「むの」

エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やこ」

股間首縄縦縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やひ」

後手首足首連結縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やせ」

淫らなる開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やす」

縄目に悶える裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やく」

強烈羞恥責あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「えめ」

驚つかみに責める乳房

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号「えう」

縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一二〇〇円
大塚、東浦 略号「えの」

女を縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「えわ」

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号「えな」

強烈くすぐり責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号「えぬ」

手吊り股間縛り責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号「えお」

美しきポリウムを縛る

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひか」

両手吊りにあえく女

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひお」

後手垂直厳重しほり

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号「ひけ」

一米まとわぬ裸身緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ひく」

豊胸をくびる強い縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号「ひき」

鼻責め縛りに苦悶する

大手札七枚一組 八〇〇円
木村 洋子 略号「むる」

続女性の羞恥願望をつく

三 木 徹 朗

続女性の羞恥願望をつく

前回、私は終戦直後の女子高校の教師の体験を通して同僚女教師や女生徒に見られた羞恥願望が折にふれて開花してゆく過程について述べた。

本来、羞恥願望は受動的なものであって能動的な露出願望との間に、その点に於て明らかに一線をひくことが出来る。即ち自らはずかしい目に会う機会を作ってゆく露出願望に対して、止むを得ず他人からの強制によりはずかしい目に会わされることを、ひそか望むのが羞恥願望であろう。従って本質的に羞恥願望の性向を持っている女性であっても、他動的な強制的なチャンスに恵まれなければ、

その性向を満足させるどころか自らの性向を意識し開花させることが出来ないのではなからうか。

他動的な又強制的な羞恥の機会是最もノルマルな場合は医師による診察又は治療によるケースであろう。世相安定した今日では、医師のもとに診療を受けにゆくという行為は、全く本人の自発的な意志にもとづく場合が大部分であって医師の門をくぐってはじめて医師又は看護婦によって強制的に羞恥にさらされるチャンスが生ずるのである。「いやいやながら」とか「無理矢理に」ということが羞恥願望にとって相当大きな意味をもつ。

先回の告白手記を書くにあたり当時をふりかえってみると、その頃は極めて他動的な初めから終りまで強制的な羞恥のチャンスが少くとも今よりは多くあった様である。例えば当時の新聞をくってみても

「昨夜ラクチョウで街娼狩り」とか「狩り込まれた〇〇人のパンパンはトラックで吉原病院に送りこまれた」

とかいう見出しや記事を求めるのに、さして困難を感じないであろう。

検挙された街娼たちは有無をいわず性病の検診を受けさせられたのであるが、常習的なパンパンは毎度のことでだんだん羞恥を感

じなくなつてゆくケースもあったであろう。しかし中には何度検挙されても検診の度毎にはげしい羞恥を示したのもあったという。

この街娼狩りで特に注目すべきは深夜街頭にあった女性が、それが街娼だと否とを問わず強制的に捕えられトラックに載せられて警察へ連行されたことである。従つて中には全くなかたぎの女性更には素人の娘さんも混つていたのである。これらは検診の結果が分るまでは全く差別なく、パンパンとして扱われ、人権無視も甚だしい取扱いを受けた。

同様の事は第一次世界大戦で占領下のフランスでもあり誤つて検挙され強制検診された娘が、その晩、首をつつたり、又検診結果で処女だったため釈放された娘が再び狩りこまれて来たときには手のつけられぬアバズレパンパンになつていて医師を驚かせた例もあったという。そして「私をこの様な女にしたのはあの強制検診だった」とうそぶいたということがあるが、いずれにしろ一般的には当然のことながら、この様な強制検診は女性達にとつては耐えがたいものがあり死に値する程、嫌悪すべきものであったことも事実であろう。実際にフランスのみならず日本の例でも誤つて狩り込まれ強制検診され自殺した

娘さんの例もある。

ただ筆者のひそかに思うには、これらのおびただしい被検診者の中で、幾人かの羞恥願望の女性がいて自らの性向を開花させ満足させたのではなからうかという妄想である。

占領が解かれた後で数多くのこれらの街娼狩りや強制検診の手記や記録が出されたが、それによれば狩り込まれて一夜を警察で過した彼女達は、主として吉原病院を中心とする指定の病院に送りこまれ、時として警察署内の一室で或いは倉庫内の一隅をかこつた様な寒々とした所で強制的に検診された。

病院へ送られた場合は、普通の検診台の上で行われたが、警察内やその他の場所にあつては畳の上に仰臥し或いは平らな机を並べた上に寝て検診を受けたりした様である。それも現在の婦人科病院の場合の如く外部から遮断された密室内で医師及び看護婦以外の誰の目にもさらされることのない状態と異なり、被検診者は室に溢れ検診台はいくつも並び、その間には僅かに衝立あるのみで、その屈辱的姿勢は大勢の眼にさらされ、又それを見る者も次には自分の身にふりかかることでもあり、それだけに余計羞恥心を刺戟されたことと思われる。

検診の順番を待つ間、時間を節約するため何人も前から下穿きをとつて順番が来たときに直ちに検診を受けられる様にしておかなければならなかったが、MP（進駐軍憲兵）が用もないのに、あちこちをのぞき見し彼女達の羞恥を更に絶望的なものにした様である。

彼女達の中に仮に街娼でない者がおつたとして、それが更に処女あつた場合は、必死に抗弁するが結局は看護婦によつて下穿きをはぎとられ検診台に手とり足とりで押えつけられる。それは正に氣を失うほどの屈辱の一瞬であるが、若しそれが羞恥願望の少女であつたとすれば、その屈辱の極みは同時にエクスタシーの極みに通ずる一瞬であつたかも知れない。

事実、生理不順等で母親等に付添われて婦人科医を訪れる少女達は、屠所へ曳かれる羊の如く検診台上にみちびかれるが、その未だ開かれざる花びらは透明な分泌液により濡れていることが多いという。とすれば女性は程度の差こそあれ誰もが羞恥願望の性向を多少はもっているということにもなるうか。

この様な街娼の場合は誤つて連行された場合を除き娘がいる筈もなく、むしろ病氣を背負つた筈にも棒にもかからぬ者が多かった。

しかし、それとは逆に全員いわばその方面の素人であり中には本当の処女も相当数含んでいたと思われる人達が集団で強制的に検診を受けさせられる様なケースが当時はあったのである。その一例は進駐軍将校宿舎に勤務する日本人メイドの場合であり、又他の場合では進駐軍の出入りする施設、例えばPXを始めキャバレー、ダンスホール等に職を持っている日本人の女子従業員に於ける場合である。

前者の場合、週刊誌その他で日本人メイド達の強制検診の実態が紹介され、被占領国の無惨さの象徴の様に扱われた。占領軍はそれを強制という形を避けるためにメイド達に「私は進んで婦人科検診を受けることを希望します」という英文の印刷された書類に署名させた。勿論その署名を拒否し検診も拒否し得る仕組みではあるが、若しそうした場合には衛生を重んじない不潔なメイドとして職を追われることを、覚悟しなければならなかった。

このメイドの検診の状況については、本誌二十九年十月号に「耳かきとガラスの棒」と題し角皓子さんが告白手記を書いているので詳細は省くが、カーテンの内側で下穿きを脱

ぐときカーテンの裾がみじかくて外部からその様子が丸見えであったため非常に羞恥心を刺戟された様である。検診台上でも看護婦により相当手荒く取扱われ、又その後で同僚達の見ている前で四ッソ這いにされ乱暴に検便される状況が述べられている。又キャバレーその他接客業の女性達については、本来はRAAという組織の中のいわば進駐軍専門の赤線の接客婦のみに限って検診すべきであったのだが、進駐軍兵士内の性病の蔓延から、その他の接客業にも強制検診の手が延びて来たのである。

勿論、ダンスを踊ったり、お茶のサービスをしたりしたからといって性病がうつるわけではないから、ダンサーや喫茶ガールを検診する必要はないわけだが、進駐軍の衛生対策はこれらの区別を認めなかったから真面目なダンサーや喫茶ガールには相当のセンサーションを起した。そしてマネージャーは紅唇をとがらして必死に抗弁する彼女達を説得するのにてこずり、皇室に於ける健康診断の状況などの例をひいて説得にこれつとめたが、結局は検診を受けなければ、就業を禁止され従って、マネージャーも失職するという共通の切実感、今の流行語でいえば生活がかかっている

ことが彼女達をして検診を受けることにふみ切らせた。しかし、その結果幾人もの保菌者が見つかり結局検診の必要性を証明した様な結果になってしまったのである。

彼女達は毎週一度の定った曜日に指定の病院におもむいて検診を受けた。メイドの場合、同様に集団で検診が行われ時間を節約するために病院に着くやいなや、下穿きを取り番号の入ったガラス板を持って列を作って順番を待つのである。いずれにせよ同僚達の視線の中で（そしてその同僚達もやがて同じ試験を受けるのであるが）彼女達はその最も恥かしい姿勢を強制されるのである。今日ある婦人が婦人科医をおとずれ診察を受けるとしても、それは完全な密室で医師と看護婦以外には誰の眼にもふれることがない。その点、当時のメイドやダンサー達の検診は少くとも同僚達の眼にさらされ、場合によっては医師看護婦以外の例えば事務員の眼にふれる機会も多かった様であり、若し羞恥願望の女性がいたら正に願ってもないチャンスではあったろう。

このダンサー達の集団検診については、いろいろな告白や記録があるが、小説家の宮内寒弥氏が『エミリー』その他の題名で二、三



新人挿絵応募作品 倉 真 砂

新入り女囚入牢心得申渡しの図

の小説を書いていられる。リアルな筆致で身に覚えがないのに毎週定期的に検診を受けなければならぬ女心の哀れさがにじみ出ている。嘗って本誌に九鬼氏が「特異な角度から」と題し「臨床と羞恥」なるサブタイトルで文学作品にあらわれた検診その他の描写を抜書きしていられたが、あの中にこれらの宮内氏の作品が見えなかったのは残念である。

私は女子高校の教師時代の体験から、教師をやめて後も羞恥願望の女性の体験や心理に興味をもつ様になり、折にふれてその様な体験をもった女性の話をきく様に心がけた。経験によれば大抵の女性は医療行為による羞恥の体験を程度の差こそあれ持っているが、その体験を語ることに嫌悪を示すものは少数であり、更に一部のものは無関心をよそおう

が、過半数は相当に関心をもって具体的に話してくれた。もとより、その女性が相手に信頼と親密感をもつことが前提である。そのために真面目で誠実な態度で聞き出すことが肝要である。特に水商売の女性などは健康に非常に重大な関心をもっているから、むしろ積極的に話してくれることが多い。余談はさておき、これ等女性達の体験談は改めて写實的に述べるとして今回、その中の一人、律子の体験について述べよう。

○
律子が外地から引揚げて来たのは十七才のときであった。身寄りといえは焼け跡のバラックに住む伯父一家だけとあっては、何とか一人で生きてゆく方法を見つけないければならなかった。街頭で春を売らなかつたのは奇蹟的でさえあった。住居も確保出来、それ程の技術がなくてもやってゆける職業として彼女が選んだのはメイドであった。

志願した翌日、駐留軍専門病院で胸部レントゲンその他簡単な身体検査だけですぐ米軍の主計大尉の家へ配属された。英会話の素養など殆んどなかったが、幸いにも先輩のメイドが居り彼女が主人夫婦の命を受けて、それを律子に手伝わせるといふ毎日で律子単独

の業務と言えは子供達の学校への送り迎えやメモを持たされて買物にゆく程度のことである仕事であり食事も勿論、当時の一般日本人とは相当差のある食事を支給されていた。そんなある日、先輩のメイドが皿をふいている律子に話しかけた。

「あなた今、メンスじゃないンでしょ」

「ええ」

「ならいいけど……」

「でも、どうして」

「ううん、明日身体検査でしょ」

「でも……」

と言いかけて律子は急に頬に血が上るのを感じた。まさかと思ったし、志願したときの検査は簡単だったのに、律子の心の動揺を見すかした様に、彼女は口でもりながら言いづけた。

「リツちゃん、あなた、ここへ来て身体検査初めてだったわね」

「ええ」

「若いあなたには気の毒だけど……。でも、ここに長く勤めようと思ったら我慢しなくてはだめよ」

律子は不安に今度は顔が蒼ざめてくる思いだった。

「リツちゃん、明日は、あなた婦人科の検査を受けなくてはならないのよ」

勿論、今までそんな検査を受けたことはないし、おぼろげながら恥ずかしい検査ということは分っていたが、実際にどんなことをされるのか不安でならなかった。

「でも、あなたはいわばまだ子供だし勿論病気があるわけではないし、すぐ済むと思うわ」

「……」

「どうせ、女は一度結婚前に検査を受けることが必要なのよ。結婚して妊娠でもすれば、月に一度はゆかなくてはならないし、私達は週に一度の身体検査だから、まア妊娠したとも思うことね」

「……」

「私も最初はびっくりしたし憤慨もしたわ。そして何回も検査を受けた今でも、台に上る時は無我夢中よ」

「……」

律子は、いつか皿ふきの手をやすめて緊張した顔付きで聞いてた。

「明日は私も一緒に行くンだし、きっと順番もつづいているでしょうから、私の真似したリ言うことを聞いていれば心配ないわよ」

先輩から、じゅんじゅんと言ひ聞かされ

ば、素直にうなずかざるを得なかった。

「シュミーズとパンティは新しいのにしかえていった方がいいわ。女の身だしなみというところね」

その晩、律子は仲々ねつかれなかった。一寸まどろむと検査の途中で飛び上ったりしている夢を見て眼が覚めた。

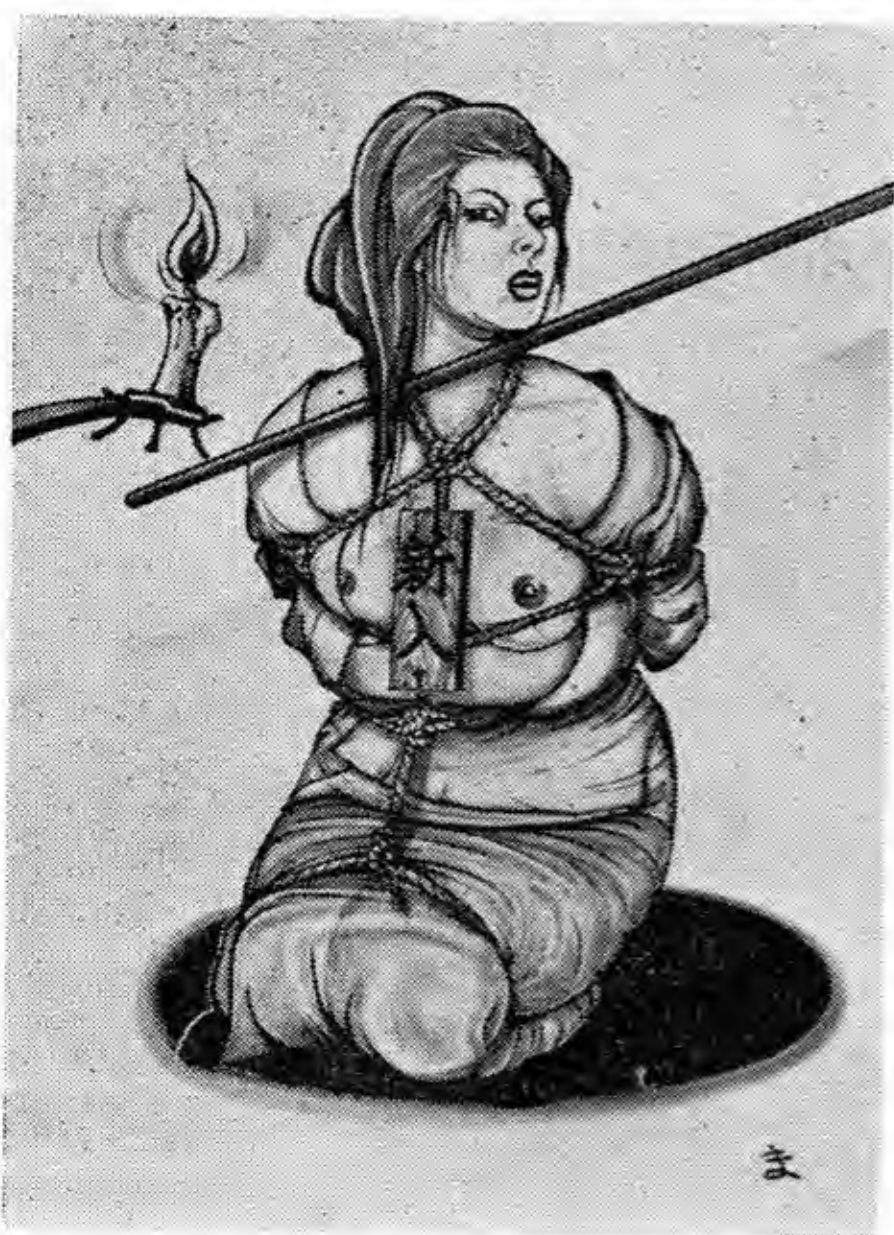
朝、先輩のとし江のアドバイスに従ってシュミーズとパンティを新しいのにかえて、とし江と一緒に主人夫妻に挨拶して連れ立って出かけた。

「ママたちは私達が、こんな身体検査を受けるのを知っているのかしら」

「多分知ってるわ。検査結果の通知が来るんですもの。この前、こんどの検査の連絡があったときママがリツコはミスだから気の毒だと言っていたわ。まるで私がミスでないみたい。フッフ」

とし江は二十六だが独身だった。しかし派手な恋愛の経験があり本当ミスであるかどうか律子には分らなかった。それにしても自分達が、こんな恥しい目に会うことを誰にも知られたくなかったし、まして主人夫妻の話題にのぼったのではないかと、あらためて屈辱に身がちぢむ思いだった。

指定の病院は意外に遠く所定の時間に少し



新人挿絵応募作品 倉 真 砂

新入り女囚の披露目の図

おくれで着いた。十二、三人のメイドらしい人達がたむろしており、雑談していたが、やがて事務員があらわれて名簿に照合して点呼をとった。律子とはし江のすぐ次なのが有難かった。

最初のレントゲン検査は何度も経験があるし、ということなかったが、内科の検査になつてシュミーズを腹まで下げブラジャーもと

つて並んで待たされた。両腕でかかえる様にして胸のふくらみをかくしていたが、とし江が背中に聴診器を当てられているとき、とし江の背中に聴診器を当てられているとき、とし江の胸のふくらみが両腕からこぼれる程ゆたかでむしろうらやましい位だった。一緒にうちに寝起きしていても西洋風呂は、ひとりづつしか入らぬので、彼女の裸をじっくり見

たことはなかった。

それから、いよいよ婦人科の検査だった。シュミーズ姿のまま予診室で待たされている間に、英文で書いたカルテのようなものにサインさせられた。そして五人くらいずつまとめて診察室へ案内された。診察室内は衝立で仕切られており、そのむこう側で医師や看護婦の声がして誰やらが検診中らしかった。そしてこちら側で今検査のすんだらしいメイドがうしろ向で下穿きをつけているところだった。その姿をみてあらためて律子は自分がこれから受けさせられる恥辱を感じ、身体がふるえて来た。看護婦が眼で人数を数えながら「下穿き、おとりになって下さい」と事務的な口調で言った。

とし江が、

「覚悟きめなくちゃだめよ」

律子をはげます様にいった。律子が一番隅へ行き、おそろおそろ下穿きをおろした。みんなが一つの籠の中にパンティをなげ入れたとき律子だけは、そっと椅子の上に置いた。

看護婦が名簿の名前を呼びながらナンバーの入ったオブジェクトグラスを渡した。やがてナンバーを呼ばれたとし江が、ちらっと律子を見て微笑しながら衝立のむこうへ入って

行った。衝立といっても白い布のスクリーンだから影の動きでむこう側の様子が分り、それが又待っている者の被虐的心理をかきたてるだった。

律子の立っている位置からは診察台のほぼ全体が見え、待っている者はお互いのエチケットとしてなるべく見ない様にするのだが、律子はどの様にして検査されるのか不安でとし江の様子をつかれた様に見つづけた。

とし江はうながされて台に上った。両足が高く上りシュミーズの裾が太ももをすべり下りて白い固太りのものもあらわになった。看護婦がおしりの方のシュミーズを腰の下へおしこんだ。医師が銀色にぶく光る検査棒を手にとし江の股間にしゃがみこんだとき、とし江は手で顔を覆った。方向が逆なので、どの様なことが行なわれているか律子は分らなかったが、とし江が必死に羞恥に堪えている様子が、あらわなものかすかなふるえからもうかがえた。やがて医師は顔を起し看護婦の持っているナンバー入りオブジェクトグラスに銀色の耳かきをこすりつけた。検査台から身を起こしたとし江は、いそいでシュミーズを下げ上気した顔で出て来た。律子と顔を見合せると

「心配ないわよ。分ったでしょ」
早口に言って律子の肩を押す様にして内へ入れた。

「十四番の方ですね」

看護婦が念を押したが、律子はうなずくのが精一杯だった。

「どうぞ、お上りになって下さい」

看護婦に背中を押され台に上ったが、馴れないことで足が宙に浮いたままだった。看護婦は生木をさくようにして足首をひろげ足台に固定した。それから先は夢中だった。

シュミーズが、おへそが出る迄位まくり上げられた時も、医者の手が最初にふれた時も、思わず声をあげた様だが、これさえはっきり記憶にない。

ただ歯をくいしばっているうちに、手が台のはしをしっかりと握っているのに気づき、あわてて顔を覆った。

「だめだな。そうかたくなっちゃ」

しばらくして、医者が言った。

生れてこの方、こんなはずかしい格好をしたことがない。前に軽い盲腸炎で外科の診察を受けたときは、大分はずかしい思いをしたが、この検診のはずかしさの比ではない。物どころついてから誰にも触れさせたこと

のないころを医者とは言え、見知らぬ異性に触れられながら話しかけられても返事のしようがない。

看護婦が顔を覆っている律子に

「口を開けて。ハイ、楽に息をしてもらなさい。そうそう、すぐすみませよ。ダメダメおなかの力をぬいて、足を開いて……。いつまでもおわらないと、かえってはずかしいですよ。そう、気持を楽にして、痛くなんかありませんよ」

一所けん命に律子の気をまぎらわせようとして話しかけて来た。律子はどうでもなれと思ひ全身の力を抜いたとき医師の手が、そこを開きアッという間に終ってしまった。

「もういいですよ」

看護婦に助け起こされ台を下りたとき、急に悲しくなって涙が出て来た。待っていたとし江に肩を抱かれたが、涙のままパンティをはいた。

○

「いやだわ。こんな話を長々としちゃって。

あなたにうまく誘導尋問された格好ね」

国電G駅近くの喫茶店で律子は私に二時間近くかけて彼女の羞恥の体験を話してくれた。彼女はそれからメイドをやめてレストラ



新人挿絵応募作品 倉真砂

新入り女囚引回しの図

ンにつとめた。その頃、私とダンス仲間、ダンスの時の会話から彼女がメイドの経験があることを知り喫茶店にさそって彼女の話を聞き出したったのだった。

「そうすると当時、そういう目に会った人は相当いるわけだね」

「そう、みんなそれぞれ心に傷を受けたというわけね」

「いや、傷をうけた人もいただろうが楽しんだ人もいたのじゃない」

「まさか、私なんか、思い出すのもいやよ。今日は、あなたにうまくひっかかって話しちゃったけど……」

「でも、何度も検診を受けているうちに平気にならない？」

「何度受けても、はずかしいことは同じ。私

は二年近くメイドしていたから、かれこれ数十回も検診を受けたわけだけど、そうね、だんだんに台の上に上っているときの意識が、はっきりして来たわ。慣れてくると医者があるのかどうするのか、どうやると終りになるのか分ったわ」

「そのへんを、もっとくわしく話してくれないか？」

「だめよ、今までお話したことで私の羞恥の限界をこえているのよ」

「そうか、残念だけど又機会があったら頼みますよ。でも、もうひとつ聞きたいんだけど検診のやり方って毎回必ず同じなの？」

「大体同じね。でもこんなことがあったわ。

検診の途中でね。診察中の先生が顕微鏡を覗いていた他に先生に何かドイツ語で話しかけたの。そしたら、その先生が立って来て私の足許へ廻ったの。今までそんなこともなかったし、一人の先生にみられるだけでも沢山ののに、二人の先生に同時にみられるなんて真平と思ったけど、どうにもならなかったわ。しばらく二人の先生がドイツ語で話していて今度は今まで顕微鏡を見ていた先生が代って私の体の中から液を採ったわ。どうして先生が代ったことがすぐ分ったかと言うと手の感

じや体温が違うのね。微妙な感じがすぐ分っちゃうの。女の体って敏感に出来ているでしょ。これが最初の頃だったら、とてもそれどころではなかったでしょうね」

「なるほど、それで？」

「わたしね。その時、憤慨もしたし、一寸心配だったから終ってから看護婦さんに私に何か病気でもあったんですか。特に今日にかぎって、二人の先生が診られるなんて聞いたんです」

「大分心臓強くなったものだね」

「看護婦さんは、いえ何でもありませんのよ。病気ではありませんよと答えてくれたけど、仕度が済んでから又、看護婦さんに詰問したんです。そしたら小声でこっそり教えてくれたんです」

「何だって言ったの」

「最初の先生が、このクランケは何カ月も娘のままなんだから毎度液をしらべることもあるまい。もう一人の先生に言ったんです。するともう一人の先生が、いや規則通りにやらないとうるさいよ。と言って代って診察したんです。だから心配なんか、いりませんよ。というじゃありませんか。つまり最初は娘でも、だんだん娘でなくなる人が相当いるらし

いですね。それを聞いて私はメイドしていることに疑問を感じたんです。そしてリーガン夫妻が離日するとき推薦状も書いてくれたのですが、メイドをやめて今のレストランへ勤めたのです」

「なるほど、身も心もきれいなうちに、やめたというわけか」

「ええ、でもあの試練のおかげで大抵のことには、がまん出来る様になったわ。レストランは食品衛生法がうるさいでしょ。去年の赤痢騒動のとき私達は一番先に眼をつけられて保健所で何度も検便させられたけど、他の同僚達は大変な騒ぎで中には泣き出す子もいたけど、私はわりと平気だったわ」

「メイドのときも検便があったでしょ」

「ええ、でも婦人科検診のあとでは、どうということもないわね。もう神経が麻痺しちゃってしまったのかしら。でも不思議ね、婦人科検診のときには、わりと落着いておとなしく台に上る子が、検便となると激しく抵抗して手古ずらせたりするのよ。人によってはずかしさを感じる部位に違いがあるのかしら」

「若干の違いはあっても、大抵はどちらもはずかしい筈で、婦人科より検便の方がはずかしいというのは一寸珍らしいかも知れない

ね。で検便はどんな姿勢だったの？」

「四っん這いよ。お尻を上にもむけて。でもね、検便をいやがった子の心理、分らんでもないわ。婦人科検診は足は固定されるし、シユミーズはずっと上までまくり上げられるし、その下は勿論何もつけていないし、全く無抵抗状態で、どうにもならないでしょ。ところが検便では中途はんばでしょ。パンティは途中までおしりが丁度出る位にしか下げないし、四っん這いといっても体は自由に動かし、それに婦人科検診ははずかしいのを除けば、ちっとも痛くないんだけれど、検便は下手な看護婦さんがやると、とても痛い。息を吸うとき吐くときのタイミングね。息を吸ってひろがったときに、すっとやってくれば、何ともないのに、逆にやって押し込む様になると、とても痛くて思わずおしりを動かしたりすると尚更痛くなるのよ」

「……」

「いやだわ、もうこんな話やめましょう。といいながら又々あなたの口車にのって、はずかしい話をつづけてしまったわ」

「いや、楽しかったわよ。ところで、あなたと同じ体験をしたメイドの手記が載っている本があるから今度見せてあげよう」

それからしばらくして、彼女に角皓子さんの『耳かきとガラスの棒』の載った奇クを見せてやった。彼女は一気に読んで

「大体同じ体験ね。でも、この方、こんなことを手記として発表するなんて、こういう体験を楽しんでいたんじゃないかしら」

「御名答だね。この人は、これをきっかけとして、いわば羞恥願望というマゾというか、そういう性向を目覚めさせられたらしい。でも、間もなく胸を病んでなくなったそうだけだね」

「そう、私はずかしい目に会いたいなどという気持はないけど、でも、この方の心理もかすかに分る様な気もするわ」

「さて、どうかな。こういう話を私にして、外面いやいやしながら、内心では楽しんでいたいだったがね。そしてその後で、又デートするというのは、満更この前の話が楽しくなかったことではないという証明になると思うよ」

事実、彼女とは、その後も何度もデートした。その度に、彼女はいくつかの体験を、そのうちのいくつかはメイド時代の、そしていくつかは、現在のウェイトレス時代の体験を微に入り細にわたって、話してくれる様にな

った。

明らかに、それは羞恥願望の芽ばえではなかったろうか。それは私の高校教師時代の同僚平松先生の如く、既に開花していたものの発展でもなく、又特異な生徒玉置の如く急激な開花ではなく、この律子の場合は、その羞恥の体験過程に於て特に芽ばえることもなく、年を経てその思い出を私に語りつづけている過程の中で徐々に芽ばえて来たことは先のたのしみを思わせるに十分だった。

しかし、彼女とても年頃の女性であり、やがて縁談もあって人妻となった。そのぎりぎりまで私に話してくれたその羞恥の記録は折りを改めて述べたいが、おそらくは、彼女の話を積極的に聞き出す私がいなくなった時、彼女の羞恥願望も、そこでストップしたのであるまいか。

思えば昭和二十年代はよき時代であった。巷にはその様な記録が溢れ、その様な体験をもった女性を求めるにこと欠かなかった。それは逆に言えば、女性の人権が無視されていたと言えよう。しかし、何度もくりかえす様に人権無視の声だけが大きく叫ばれた中でひそかに羞恥願望を開花させエクスタシーを感じた女性も数多くあったのではないか。

現在の婦人科医の下には、この様な性向をもった女性がおとずれ、出来るだけ彼女等の羞恥を刺戟する様に強制的に下穿きを脱がせられ、粗暴に体を開かせられ時間をかけてゆっくり診察されることを期待しているという。或いはその中には戦後の女性の人権無視の中で羞恥願望を開花させられた女性が混っていることであろう。

現在では、全く自らの意志によらざる受動的な羞恥は、伝染病発生時に於ける住民検便や、給食関係者、食品関係者の検便、そして極くまれな例として女子寄宿舎における性病の発生による検診等に限られる。そして羞恥願望の女性が目覚めてくるのは、主としてこの様な受動的な羞恥の強制による場合である。

だんだん数少くなつてゆくかも知れない、この様な体験者の生々しい記録を、是非書きとめておきたいので、今後出来るだけ、この様な手記を発表してゆきたいと思う。羞恥願望の女性の体験を、是非おききしたいものである。

× × × ×

おわり

「悲^{ひい}歌^か」

葉山

啓

ある心象風景の記録

—序にかえて—

以下は、一応、映画用シナリオの形式で書いたのですが、形式は、シナリオであつても、かなり、自由に書きましたので、実用的なシナリオという点からは、きわめて、不完全なものになりました、と、いって、これは勿論、小説ではなく、そういう意味では、なんとなく、あいまいで、読者には、さぞ、読みづらいものになったことと思われませんが、その点は、どうか、お許し下さい。

どうも、私には、こういうスタイルが書き易く、ついつい、こうなってしまう。こ

の点、前以て、御諒承の上、御判読願えれば、望外の幸せです。

尚、この作品は、このまま、書きますと、この、三倍ぐらいの長さになりますので、とりあえず、区切りのいいところで、その一、として、お送りし、以下は、読者の方の、お声を、聞きながら、二、三回の分載ということに、させて頂ければ、私としては、ありがたいのですが——。

今回の分は、とりあえず、その一、展開部とでも、いまして頂き、その二（主題）、その三（終結）と、続けさせて頂くかどうかと思っております。読者諸兄姉の、キタンのない

御意見、御批判を、お待ちしております。

（葉山 啓）

悲歌—ある心象風景の記録—

登場人物

余部 浩吉 (35才) 脚本家

津島都志子 (20才)

湖北の女 (24才—回想当時)

老夫婦

バス車掌、等

第一章 出合い

1 東海道新幹線、富士川鉄橋を渡る、超特急「ひかり」号

2 その車内、一等車、中程の席に、余部浩吉(35才・脚本家)が、いる。

余部の声「私は、私の中に芽生えた、一つの夢に、すべてを託して、旅立って来た……」

3 額ぶちのような窓に、「京都」の、二文字。(OL)

4 タクシーの、フロントガラス越しに、黄昏の、河原町通りが、淡く、流れて行く。

(OL)

5 同じく、平安神宮附近の、広い道が、仄白く、流れて行く。(OL)

6 同じく、フロントガラス越しに、南禅寺の山門が、見え始める。それが、フレーム

の中に、(即ち、フロントガラスの窓枠の中に)、キッチンと、おさまった時、車が止り、風景も、静止する。——と、ややあつて、その、窓越しの風景の中へ、カバンを一つ、提げた、余部浩吉が(タクシーを下りて)、その、後姿を見せて、山門の方へ、歩いて行く。

あたりには、もう、深い夕闇が、たちこめている。

——突然——その、(フロントガラス越しの)風景が、激しく、ゆれ動き、パノラマのように、流れ始める——(タクシーがUターンをしたのである)

7 同じ道——山門に向って、正面から、余部浩吉が、歩いて来る。その後の方で、Uターンをした、タクシーが、小さくなって行く。

余部、カメラ直前まで、歩いて来て、立ち止り、山門を見あげる。

8 夕闇の中に、黒く、そびえ立つ、南禅寺山門。

余部の声「——夢——私は今、この山門

の下で、生涯に、そう、何度も見ることにできない、夢を、見ようとしている……」

9 余部、山門の石段を上る、そして、太い柱の影に、佇む、広い境内には、暮色が迫り、人っ子、一人、いない。

余部、カバンの中から、一冊の週刊誌を取り出し、その表紙を破る。そして、その、表紙のない週刊誌を小脇にかかえて、タバコに火をつける。

余部の声「——その名が、津島都志子とだけしか知らぬ、見知らぬ女……その女は、本当に、ここに、現れるのだろうか……私には、信じられない。——人と人との出会いが、こんな思いと、ときめきの中で、始まるものとは、私には、信じられない——」

タバコを吸いながら、目を閉じている、余部のアップ。

近い寺で打つ、時鐘の韻が、夕闇を、ゆるがす。

余部の声「——やはり、夢なのだ……夢ならば、このまま、夢として、おいて、おかねばならぬ……夢に現実を託すなどとは、中学生なら、いざ知らず、いい年齢の大人のすることではない……」

黄昏は、更に深くなり、末寺に連る、白壁のみが、灰白く、浮び上って、見える。

余部の声「……このまま、東京へ帰ろう……そして、明日からは、又、あの、不毛と、孤独の日々の流れに身を委ね、せめてもの、夢を、楽しもう……。たとえば、津島都志子が現実の存在でなくとも、私の夢の中でだけは、確実に、存在しているのだから……」

余部、タバコを捨て、迷いから、醒めたように、太い吐息をつき、週刊誌を、カバンに、仕舞う。

そして、キッパリと、思い切った、足取りで、歩き出す——。

石段を下りようとして、フト、背後に、あ

余部、フリ返る——。

その時、何本か向うの、離れた、柱の影から、女の、白い顔が、瞬間的に、のぞき、そして、かくれる。

余部、戦慄に近い、衝撃を受けて、思わずその場に、立ちすくむ。

山門の下には、既に、静かな、夜が、訪れている。

余部、我に返り、そして、自分の目を疑うように、そっと、その柱に、歩みを移す。

——恐る恐る、柱の影を、のぞきこむ。

と、そこには、黒地の、シンプルな、ワンピースに身を包んだ、二十才ぐらいの、端麗な女——（津島都志子）が、柱に、よりかかるようにして、目を閉じている。

余部、深み行く、夜の気配の中に、一きわ白く、浮び上った、都志子の顔、その仄かな、たたずまいに、深い感動を、感じなが

ら、その姿を、凝視する。

カメラ、あらゆる角度から、津島都志子の美しさと、表情を、撮り、重ねる。

余部（深い感動と、長い、ためらいの後、ようやく、思い切って、声をかける）

「——津島、都志子さんですね……」（思わず、声が、上ずる）

都志子（——沈黙——長い間——そして、目を閉じたまま、かすかに、うなずく）

余部（大きい、深呼吸の後）「——余部です——余部浩吉です……東京から、やって来ました……」

都志子（尚も、目を閉じたまま、静かに、うなずく）

余部「……」

余部の声「——夢——、これこそ、夢を見ているのではないだろうか……これが現実とは、どうしても、信じられぬ……津島都志子——その女は、私の夢の中でだけではなく、現実——、この世に——存在し

ている……しかも、非凡な美しさと、古い湖の底のような、静けさの中に、まちがいに、存在しているのだ……」

——。この世のものとも思えぬ、儂さと淡い、はじらいを秘めた、美しい、都志子——、その、アップ——。

余部、むさぼるように、そんな、都志子を見つめる。

——長い間——

都志子、流れる、夕霧に、さそわれるように、フト、目を開く。——

澄明な瞳が闇の中の、なにかを……、そして、自分の心の中の、なにかを……見つめるように——そして——

——間——

都志子、フト、余部を、フリ返る。

影深い、つぶらな瞳が、始めて、余部を見たのである。

余部、かすかに、微笑む。

都志子の表情に、この時、始めて、一つの感情が、表出する——。

それは——誰の目にも、明らかに、都志子が、処女であることを、間違いなく、信じさせる——あの、処女独特の、奥深い恥じらいの、表情である。——

だが、やがて、その恥じらいの表情が、おずおずながら、かすかな、微笑みに、かわり、そして余部の心を、いざなうように、一度、二度と、うなずく……。

余部、そんな、都志子の風情と、たたずまいを、見つめている——

二人のいる、山門の下には、もう、すっかり、夜の帳が、たれこめている。

余部、都志子を見つめているが、突如、はっとして、目を、見開く。

(この時、まことに、突然に、余部の中に遠い昔の、ある夏の日のことが、よみがえったのである)

余部、おどろきの中にも、疑惑を感じ、けげんな顔顔付きで、都志子を見る。(up)

都志子、うるんだ、まなざしで、全部を見返す。(up)

余部の声「……この人の、この、ほほえみ……そして、この女の、この、たたずまい……不思議だ……。たった今、ここで、始めて、出会ったばかりの、この女から、どうして、あの、遠い日のことが、にあって来るのか……津島都志子……」

都志子、じっと、余部を、見つめている。(up)

余部の声「この女は、一体、誰なのか……。私の中の、遠い日、遠い思いを、よびおこす。この、瞳のほほえみ……」

余部、じっと、都志子を見つめる。(up)

都志子、それを、受けて、じっと、余部を見つめる。(up)

遠く、風の間に間に、どこかの、寺の書院で始まった、謡曲が、聞えて来る。曲は、「江口」である。

謡曲「川舟をとめて逢う瀬の波枕」

川舟をとめて逢う瀬の波枕」

余部の声Ⅱ「津島都志子——この女が、どうして、僕の中の、あの古い日のことを、よびさますのか——都志子——津島——。この美しく、そして、可憐な人との出会いが、どうして、私の中に、今も、息づく、あの遠い日との、出会いでなければ、いけないのか……？」

余部と、都志子——。

この、「夢」のような、出会いの一時を、その場に、彫り、刻みこもうとするかのように——動かず、顔を見合わせている。じっと、長く——。やがて、その時が、少しずつ、ずれ始めて遠い日の、回想の中へと、さかのぼる。

余部の声Ⅱ「私にとっては、忘れ難い、あの遠い日の、激しい思い出……そして、哀しみ深く、忌むしい、秘めごと……あれは、今から、十五年前の、私が、まだこの京都のD大に在学中の——夏も、盛りの頃だった……」

第二章 遠い日

(その一) 第一章より十五年前。夏のある日。

1 京都、嵯峨野の竹林。野の宮に近い、竹林の中の踏み切りを、蒸気機関車に索かれた、山陰線の下り列車が、フレーム一杯にゆっくりと、動いて行く。

汽笛と、プラスチックの響きが、竹林の中に、こだまし、ひろがる。

2 列車が通りすぎると、その踏み切りに、当時、20才で、大学生だった、余部浩吉が角帽を頭に、開襟シャツに、黒ズボンで、立っている——踏み切りには、まだ、煤煙が、静かに、ただよっている。

余部、ゆっくりとした足取りで、歩き始め、踏み切りを渡る。

3 (以下は、カメラが、余部浩吉の目になって、ゆっくりとした、前進移動を、積み重ねる)

竹林の中の細い道の向うに、静まりかえった、夏の日の、嵯峨野の風景が、ためらいがちに現われ、そして、かげろうの中へ、消えて行く。

余部の声Ⅱ「——京都の嵯峨野には——そば濡れた女の性^{さが}が、歴史という、長い時間を超えて、今も尚、深い香りと、そこはかとなき、たたずまいの中に、存在している……。哀しみ深く、濡れそぼった、女の性^{さが}が……」

4 二尊院から、祇王寺への道。同じように、前進移動を積み重ねる)

余部の声Ⅱ「土の香り……木の香り、そして、風の香り……この深い茂みの中の細い道——これが、女体の風景でなくて、なんであろう……」

5 山肌の、赤土の、ひだを伝って、流れる一条の山水。

余部の声Ⅱ「……水の流れ……ふくいくたる、香りの、清らかな水の流れ……この水

が、女体から、湧き出ずる水でなくて、な
んであろう……」

6 祇王寺から、念仏寺へ至る、細い道。

カメラ、長い、前進移動の末に、道ばた
に、うずくまる、数体の野仏を、つかまえ
る――

その、野仏のアップで、カメラ静止する。

余部の声Ⅱ「――水が枯れ――肉体が減び
……そして、ひとくれの土となって、祈り
の世界に入るまで、人は、みな、この風景
の中を、さすらい、そして、あてどなく、
歩く――」

7 余部のアップ――

野仏を見ているのである。

余部の声Ⅱ「――私のように――今の、私
のように――」

8 道端に、うずくまる、野仏のアップ。

気がつけば、あたりの木立の中で、はやく
も、ひぐらしが、鳴いている。

余部の声Ⅱ「……夏も、もう、終りに近い
……。やがて、この嵯峨野にも、静かな秋
が、訪れて来る……」

9 カメラ、再び、余部の目になって、ゆる

やかに、深い木立を、なめて行く。――、
と――、やがて、その木立の、深い茂みの
下に、念仏寺への、長い、石段が、白く、

見え始める。

余部（アップⅡはっとして）「おや……？」

10 その、深い木立の茂みの下の、長い石段
を、いつのまに、現れたのか、白っぽい、
和服を着た、一人の小柄な女性が、ゆっく
りと、上って行くのが、見えたのである。

余部、（この降って、湧いたような、女性
の出現に驚いて、額を伝って流れる汗を、
ハンカチで、拭いながら、その後姿を見つ
める）

女（そんなところに、余部が、いること
に、まったく気付かぬ様子で、長い石段を
一段、一段、静かに、上って行く）

余部、（その後姿を、じっと、見つめる）
女、（静かに、上りつづける）

山水の、せせらぎの上に、再び、ひぐらし
の声が、長く、聞える。

余部「……」

女（静かに、上り続ける）

余部（女の後姿を、見つめている）

余部の声Ⅱ「この、暑いさなかの、嵯峨野
の風景の中へ、突然、現われた、女性の姿
に、私の若い心は、動揺した……」

無心に、石段を上りつづける、女の後姿
を、見つめていると、なにかしら、この女
性は、今、この、私のために、この場に、
現われたのではないか、と、いうような、
気さえ、しはじめた……。加えて、その上
に、若気の至りともいうべき、卑俗な好奇
心も手伝って、私は、この場を、素通りす
ることが、出来なくなった……」

この、余部の声の、中程から、カメラ、再
び、余部の目になって、ゆっくりと、石段

を上って行く、女を追って、（常に、その後姿を、フレームの中に、とらえながら）前進移動を、始めている――。

そして、それを、長く、長く、続けながら

……。 （ゆるやかな、FO）

11 （ゆるやかな、Fi）、念仏寺境内。一名西院の河原とも呼ばれる、この寺の境内には、一万体に上る、石の仏が、野ざらしのまま、群居している。

そして、ここには、周囲の森の中で、すだく、蟬時雨が、降りしきっている。

境内の一隅に、一体の、延命地藏尊を祀るささやかな、堂宇がある。

前シーン（10）の女、その地藏堂の前に、ぬかづいて、一心に、祈っている。

年の頃は、二十四、五才、柄は、小さいがその顔立ちが、端麗である。（up）プロフイル前章の、津島都志子の面影に、どことなく、似通ったところがある）

白地の紗の着物が、しつとりと、似合い、その襟足から、のぞける首筋は、ほっそりとして、澄き透るように、白い肌である。

（up）、更に、その上に、乱れた、おくれ毛が、二三本、うっすらと、にじみ出た、汗の中に、浮んで見える。（up）

余部、長い石段を、上りきると、やがて、この境内に、歩みを運んで来る。（L）

地藏堂の前で、こちらに、背を向けて、こごみこんだ、女の姿を、みとめると、立ち止り、帽子をとって、汗を拭う。（up）

地藏堂の前の、女の、後姿――。

余部、女の後姿から、目をそらし、さりげない表情で、石仏の群れの中へ、入って行く。

石の字標――「化野念仏寺。大日本西院之河原」（up）

余部、まこと、さりげない表情で、おびただしい石仏群の中を、ゆっくりと、歩く。

カメラ、余部の目になって、石仏群を、ゆっくりと、移動撮影――。

余部の声Ⅱ「幾十、幾百年の歳月を、風雪にさらされ、鼻が欠け、目がくぼみ、指は落ち、頭が割れ……それでも尚、こうして、ここに寄り集い、じっと、時の流れと、世の相の移り変りを、眺めている、万という、石の仏達……。その心は、一体、どこにあるのか？……」

カメラ、別の一群の、石仏達を、ゆっくりと、移動撮影する。

余部の声Ⅱ「人はみな……色に迷い、欲に迷い……その日一日を、右に左に、さまざま、踏み迷い……傷つき傷つけ、そして、むなしく睦み、むなしく、憎み、争い、戦い、特には、自分自身をさえ、殺そうと企てる……人の心……それは、一体、どこにあるのだ……？」

地藏堂の前で、一心に、祈念していた女、フト、余部の気配（人の気配）を感じて、ふり返る。

と、石仏群の中を、ゆっくりと、考えごとをしながら、歩いている、学生姿の、余部が、目に入る。――と、その時、一瞬、女

の澄んだ、形の良い、瞳の奥に、「淫靡」な光りが宿る……。だが、それは、ほんとうに、一瞬の出来事で、女は、再び、正面へ向き直り、祈念の世界に入る。

石仏群の中を歩いている、余部浩吉。

一心に、祈念を、続ける女。（だが、その態度は、なんとなく、落ちつかず、祈念しながら、祈りの世界に、没入出来なく、なり始めている、余部の存在が、女の心を、乱すのである）

カメラ、余部の目になって、石仏群を、ゆっくりと、移動撮影する。

余部の声Ⅱ「仏の心——そして、人の心……戦争は終わったというものの、人の心は、荒廃に荒廃を重ね、この世には、無常の風が、吹き荒れている……人々は、又もや、新しい戦争の始る、予感を感じながら、その中で、束の間の平和を楽しみ、享樂を追い求めている……目の色を、かえて、自分の肉体の快楽を、むさぼっている……もう、誰も、みな、なにごとく、信じようと

は、していないのだ……信ずる力を失った心——それは、もはや、人の心とは、云えぬ……そんな心に、仏に祈る力があるとは思えない……」

余部、ふと、足をとめて、女の方を、ふり返る——

余部の声Ⅱ「それなのに……あの女、一体なにを、あのように、一心不乱に、祈っているのだろう……」

折しも、洛西の山脈に、^{やまなみ}かくれようとする晩夏の太陽の、斜陽が、地藏堂の前に、ひざまずいた、女の姿を、くっきりと、浮かび上らせる。

余部、女を、見つめる。（up）
女、余部が、立ち止った気配を、さとり、そっと、うかがうように、余部の方を、盗み見る。（up）

余部の視線と、女の視線が合う。（up、きりかえして）
女、はっと、目をそらし、さりげなく、目

を閉じる。（up）

その肩のあたりに、艶やかに、濡れたような情感が、ただよい始める、いわゆる、色っぽいといわれる、風情である。

余部、開襟シャツの、ポケットから、タバコを抜き出し、火をつける。女、尚も、長い間、じっと、うずくまり、祈念を、続ける——

余部、そんな女の姿を、見つめながら、タバコを、くゆらしている。

長い間がたって、女、ようやく、静かに立ち上り、あらためて、地藏尊に、手を合わせ、更に、深く、拝して、そして、キッパリと、思い切ったように、歩き出す。

余部、そんな女を、じっと見つめている。女、少し歩いて、フツと、立ち止り、余部の方を、ふり返る。（up）

女を見つめる、余部（up）
余部を見つめる、女（up）

——間——

二人の表情に、かすかながら、ある種の、
諒解と、疎通が、微笑みとともに、浮ぶ。

余部、静かに、タバコを吸う。

女、余部を、見つめたまま、再び、歩き出
す。

余部の視線が、女の動きを追う、(up)
そして、はっと、緊張する(up)、なぜな
ら、女は、帰途に就くのではなく、余部の
方へ、笑いかけながら、近寄って来たので
ある——。

余部のアップ
女のアップ

——石仏群の中へ、歩みを入れて来た、
女、やがて、余部のそばへ、やって来る。

(L)

女(立ち止り、ほつれた髪を右手で、かき
上げながら) 〓 (up) 「御参詣ですか……

……」(と、京都言葉である)

余部「……?」(女を見る)

女「まだ、学生さんで、お若いのに……
えろうおすなあ……」

余部(まじまじと、女の顔を見る)

女(微笑を浮べたまま、余部を、見つめ
ている、その笑顔も又、可愛らしく、印象
的である)

余部「……」

女「……学校は、どちらです?——」

余部(まぶしいものを見るように、目を、
パチパチさせながら、やっとの思いで、答
える)——「D大です……」

女「……そうですか……文科ですか?……
……」

余部「ええ……」(と、げんそう顔付
きで、うなづく)

女(嬉しそうに笑って)「よう、あたり
ましたやろ……顔つきで、わかりますのん
……」

余部(右手で、ほほのあたりを、そっと、
なせる)

女(笑いながら、じっと、余部の顔を、
見つめている) 〓 (up)

余部(ほほに、手をやったまま、女、見を

返している) 〓 (up)

——間——

女(その、まなざしに、深い思いを、こ
めて)「……どうですやろ……?、その辺
まで、御一緒にもらえますか……」

余部(ほほの手を、そっと、おろす、そし
て、しげしげと、女の顔を見る)

「……?」

女(ちょっと、いたずらっぽく)「それ
とも、この、お寺はんに、御用事でも、あ
りますのん……?」

余部(首を横に振る)「——いや……」

女(うなずいて)「そうどっしやろ……

(からかうように、余部の顔を、のぞきこ
んで)……あんた、私を、つけて来はった
んやもん……」(面白そうに笑う)

余部(本当のことを、云いあてられて、す
っかり、あわてる)「……っ、つけて来た
なんて——そんな——」

女(嬉しそうに笑いながら)「嘘、つい
ても、あかしまへんえ……私は、ちゃん
と、知ってたんやもん……」

余部(頭に、手をやり、てれくさそうに、
笑う)

女 (更に深く、余部の、顔をのぞきこみ) 「な、かましまへんやろ——その辺まで」

余部 (ちょっと、ためらう) 「——でも……」

女 「——それとも、私みたいな女とは、いやですか……」

余部 「——そんな——(困って)——そんなことは、ありません……」

女 「ほな、よろしおすやんか——こんな、おかしい場所で、逢ったのも、きつと、なにかの因縁どっしやる……」

余部 (女の顔を、じっと見つめる)

女 (余部の顔を、じっと見つめる)

余部 (うなずく) 〓 (up)

女 (色っぽい流し目で、余部を見て、笑う。 「……さ、そんなら……行きまひよか……」

余部 (うなずく) 〓 (up)

女 (余部を、うながすように、先に立って、歩き始める——)

余部 (タバコを捨てると、ちょっと、複雑な、表情を見せて、女の後から、歩き始める) 〓 (OL)

12 (OL) (10) と同じ、深い、茂みの下の

長い、石段。

余部と、女、仲よく肩を並べて、下りて来る。 (L)

ひぐらしの声が、やかましい。

二人、静かな足取りで、ゆっくりと、石段を、おりる。その姿を、カメラ、前からと後からと、二つ、撮る。

長い石段を、半分程、下ったところで。

女 (フト、足をとめる)

余部 (つりこまれて、その足も、とまる)

石段の中程に、立ち止った二人の姿 (L) 近くの木立で、油蟬が、ジィーと、鳴き始める。

女 (全部を、かえりみると、ためらいがちに……)

「……私のこと、おかしい女やと、思うてはりますか……?」 〓 (up)

余部 (女の顔を、ふり返る) 〓 (up)

女 (そっと目を伏せ、つぶやくように)

「正直に、云うとくれやす……」

余部 「……」 (戸迷う)

女 (目をあげて、うかがうように、余部の顔を見る)

余部 (迷っている) 「……」

女 (微笑む) 〓 (up)

余部 (ようやくのこと) 「……いや……」

—— (と、云う)

女 (余部の顔を、のぞきこんで) 「ほんまに……」

余部 「……」 (うなずく)

女 「……ほんま……どすか……」

余部 (うなずく)

女 「……」

余部 「……」

女 (目を伏せて) 「嬉しいおす」

余部 「……」

女 「ウソでも、そう云うてもろうて……」

余部 「……」 (女を見つめる)

女 (急に、気分を変えるように、明るく) 「な、あんたはん……どうして又、この暑い盛りに、こんなところへ、来はりましたん……?」 (と、聞く)

余部 (突然、話題が、かわったので、ちょ

っと、ためらうが……」

「別に——どうしてっていう程のことも、
——僕はね……京都では、この嵯峨野が、
一番好きなんです……」(と、すっかり、
固くなって、教室で、答弁するような口調
になる)

女「……そうですか……嵯峨野が、好き
やて……やっぱり文科の学生さんやなあ……」

余部「——いや、そんな……」(と、少
し、照れ臭い表情である)

女(頭の上に、伸び出している、楓の老
木の一枝に手をかけて、その緑の葉を、静
かに一枚、もぎとりながら、余部の心を読
むように、しんみりとした口調になる)

「ここ、(嵯峨野)には、長い、女の歴史
が、ありますもんなあ……平家物語以来
の、哀れみ深い、女の性の歴史が……」

余部(女の言葉に、驚いて、その顔を見つ
める、夢見るような女の表情が美しい)

女「……な、そうでっしやる……」

(そう云って、じっと、余部の目を、見つ
める)

余部(女の瞳の中の、不思議な、輝きに、
思わず心を奪われ、その瞳を、凝視する)

女の顔に、折からの、斜陽が、木洩れ日と
なって、輝く——、風にゆらぐ、木の葉の
かげりが、女の顔を、いろどり、その、白
い肌は、汗に濡れて、奥深い情感を、漂わ
せている。

余部(我を忘れて、その、素晴らしい、一瞬
の、女の顔に、見とれている)

女(余部の方を、ふり返ると、口元を、
ほころばし、そして、再び、静かな足取り
で石段を下り始める)

余部(ひきこまれるように——石段を下り
始める)

再び、二人の肩が並ぶ。

女(余部に、相談をもちかけるような、
口調で)「(up)——「な、あんたはん……」

どうどっしやる……ここで、このまま、お
別れしてしまうのも、なんとなく、淋しい

ようどすさかい……な……どうどす……？
これから、しばらくの間、私につきおう

て、くれはらしまへんか……」

余部(女の顔を見る)「……」

女「な……よろしおっしやる……どう
ぞ、そうしとくれやす……時間も、もう、
かれこれ、五時に近うなりましたし、どこ
ぞ、この近くで、一緒に、御飯でも食べて
——もう、ちょっと、お話も、しとうおす
し……な、どうどす？……そう、してくれ
はりますか……？」

余部(女を見て、立ち止り、うなずく)

女(嬉しそうに笑う)「……そうどすか
……おおきに……今日はな、私が、おごら
してもらいますさかい……」

(女、そつ云いながら、そつと、余部の手
を握る)

余部(全く、予期していなかったので、ド
キンとする、が、しかし、その、少し汗ば
んだ、柔く、暖い女の手に、自分の手を任
せる)

白魚のように、白く、なよなよとした、女
の指が、骨ばった、余部の手に、しっかり
と、もつれて——(up)

そして、女の手し、そつと、力が入る。

手をつないだ、二人の後姿が、ひぐらしの
声の、降りしきる石段を、静かに、下り続

けて行く——(ゆるやかな、FO)

13 (ゆるやかな、Fi)

鳥居本(地名)の、鮎茶屋、ここは、深い山と山に、はさまれた、溪谷である。四方の山は、暮れなずみ、山峽を流れる、清流が、激しく、岩を噛み、その飛沫が、白く、そして、くっきりと、浮び上って見える。(OL)

14 その鮎茶屋の、奥まった一室。

——その帽子かけに、かかった、余部の角帽から、カメラ、ゆっくり、後退し、部屋の全景になる——

既に、電灯のついた、座敷には、朱塗りの座卓をはさんで、余部と女が、食事の最中である。座卓の上には、数品の、鮎料理が並び、ビールびんが、何本か立っている。

清流の轟きが、この部屋へは、遠い松風のように聞えて来る。

コップのアップ。

そのコップへ、何杯目かの、ビールが、注がれる。

余部「あ、僕は、もう、だめです……」
女「なに云うてはりますの……お若いくせに……」(笑う)

二人とも、かなり、酔いが、まわり始めている。

余部「でも、僕は、余り、強くないんです……(女を見て)、どう——?、すっかり良い色になったでしょう……」

女「……私も……」(そう、云いながら、右手で、ほほを、そっと、押える)

余部(そんな、女を、じっと見ている)

女(余部の視線に気がついて、微笑み、そして、ビールを、すすめる)

「さ、……ぐっと、あけとくれやす……」
氣に……ぐっと……」

余部(女の言葉にさそわれて、コップを手にすると、今、注がれたばかりの、ビールを、一気に、あける)

女(そんな、余部の姿を、妖しい光をこめた、まなざしで、なやましく、見ている)

余部(飲みほした、コップを、座卓に置くと、フーと太い息を吐いて、女の顔を正視する)

女(余部の視線から、フッと、目をそらして、伏せ目になる……)

余部(女を見つめる)(up)

女(伏せ目のまま……ちよっと、深い思いに、沈んでいるようである)

——間——長く——

どこかの部屋で、始まった、小唄三味線が遠く、聞えて来る。(BG)

余部(ポツリと)「——僕はまだ、あなたのことを、なにも知らない……」

女(はっと顔をあげ、余部を見る)

「……」(||up)

余部「……」(||up)

二人、じっと、顔を見合わせたまま——又、かなりの時間が流れる、小唄三味線の音色が、岩を噛んで流れる、瀬音の中に美しく、溶け合って聞えている……開け放たれた、障子の向うは、もう、すっかり夜である。山が黒い——。

女(深い吐息をして、再び、余部の視線から、逃れるように、目を、そらす。——そ

して、つぶやくように、低い声で——

「そんなこと……」(と云う)

余部(じっと、女の顔を見ている)

「……」

女「……」(動かない)

——又、少しの時間が、沈黙の中に、流れ去る。

余部「……どうしても、よくは、ありません

……」(静かな口調で云う)

女(顔をあげ、余部を見る)

「……」(なんとなく、哀しそうな表情である)

余部「……聞かせて下さい……あなたのことを……」(up)

女(余部を見たままで、つぶやくように)

「……私の、——何を……?」

余部「——そう、——すべてをです……あなたの、すべてを……」

女「……」

余部「……」

(ポケットから、タバコを取り出し、火をつける、ゆっくりとした動作で、その煙を、深々と吸い、吐き出しながら)

余部「——今日——それも、何時間か前ま

で、僕は、おたがいに見ず知らずの間

柄だった……それなのに、僕は、今、こう

して、あなたと、食事を一緒にしている……

……それが、僕には不思議なんです……、信

じられないくらい、不思議なんです……あ

なたは、一体、どういうつもりで僕を、こ

んな所へ、誘われたのか……あなたは、な

にも、話してくれない……ね……あなた

は、一体、どういう人なんです……」

女(困ったように、笑う)

余部「——あなたの、名前を聞かしてくだ

さい……そして、あなたの、お住居を……

そして、どういうつもりで、行きずりの僕

を、こんな料亭に、誘われたのか、聞かし

て下さい……」

女「……」(目を伏せて、動かない)

余部「……」(タバコを吸う)

女「……」

余部(タバコを灰皿でもみ消しながら)

「——どうか、聞かして下さい……」

女(顔をあげて、余部を見る)

余部「……いいでしょう……?、ね、聞か

して下さい……」

女(哀しそうに笑って、首を横に振る)

「——いけません——今は……」

余部「……」

女「……」

余部「——今は?……」

女(うなずく)「今は、なにも、云わん方

が、ええと思います……」

余部「どうしてです……?」

女「お願い……今は、なにも、聞かんとい

とくれやす……ただ……」

余部「ただ——?」

女(思い切った口調で、激しい思いを、中

にこめて)「——私は、あんたが、好き

——好きなんです——これだけは、ほんま

どす……さっき、念仏寺で、私を、つけて

入って来はった時から、私は、あんたが好

きどした……」

余部「……」

女「これだけは、ほんまどす……ええかけ

んなことを、云うてるのとは、違います……

……」

余部「……」

女「——似てるのだす……あんたは……私

の……」(云いかけて、口をつぐむ)

余部「……」

女「……」

全部「——似てゐるって、誰に?——」

女(うなだれて、首を横にふる)

余部「僕が、一体、誰に、似ていると、いうのです?——?……」

女「かんにんしとくれやす……今は、云えまへん……」

余部「……今は、だめ……それでは、今でなく、いつになったらいいのです……?」

女(うなだれて、じっと、考えている)

余部「——え——? 今が、ダメなら、いっなら、いいんです……?」

女(しばらくは、じっと、うなだれたまま考えているが、やがて、決心したように、顔を、あげて)

「明日——」(と、云う)

余部「——明日——?」

女(強く、うなずく)

余部「明日の何時に、——どこで……?」

女「——明日の午後一時——四条大宮の、バス停で、待ってとくれやす……」

余部「——」

女「……その時、なにかも——あんたはんの聞きたいことに、お答えします。——」

「——よろしおすか……一時に、四条大宮どっせ……どうぞ、間違えんようにしとくれやす……」

余部「……」

女「……」

余部「——今夜は?……」

女「——今夜は、私……嵐山の知人の家へ泊めてもらうことになってます……(云いながら、そっと、腕時計を見る)……もう、そろそろ、行かんなりまへん……その

かわり、明日は、きっと、あんたはんの、納得の行くように、さしてもらいます……」

余部(うなずく)

女「よろしおすか……私は、あんたはんが好きどす……これだけは、ほんまどす……どうぞ、それ以上のことは……?」

余部「いいんです……今日、もう、なにも聞きません……」

女「かんにんしとくれやす……」

余部「そのかわり、明日……」

女(うなずき)「……明日……?」

余部(うなずく)

女「嬉しい……」(余部を見る瞳には、かすかに、涙が光っている)

「……私は、あんたが、好きや……明日が、楽しみどす……」

余部「——僕も——」

女(そっと、こぼれた涙を、拭う)

余部(じっと、そんな女を、見ているが、ふと、思いついて)

「あなたは、さっき、今夜は、嵐山の知人の家に、泊めてもらうのだと、云いましたね」

女(うなずく)

余部「そうすると——あなたは、この、京都の人では、ないのですね……?」

女(顔をあげ、余部を、見る……そしてちよっと、困ったように、微笑する)

余部(女の表情の中に、困惑の影を見て)

「——いいんです……答えなくても……今はね……」

女(にっこりして)

「——かましませんわ……そのぐらいのこと……」

余部「……」

女「……あんたはんの仰言るとおり……私は、京都の女とは違います……京都へは、今日、出て来ました……そして、明日は、もう、この京都には、おりまへん」

余部「——故郷は?……どこです?」

女(ちよっと、ためらうが、思い切って)

「私は、湖北の女なんどす……」

余部「湖北というと、琵琶湖の……?」

女（うなずく）

余部「……」

女（突然、発作的に、座卓を、まわって、余部にすり寄る、そして、余部のひざに、手をおき、とりすがるようにして）——

「明日は、必ず来とくれやすや……待ってますえ……きつと——きつと……好きや

——私は、あんたが、好きや……」（そう云いながら、激しく、余部の胸に、とりすがる）

余部（女の、強い力に、よろめき、思わず右手を、たたみについて、身体を支える、その、鼻先に、汗のまじった、女の肌の香りが、そして、髪の手が、迫ってくる。

余部、女の激情に、誘発され、我を、忘れて、女を、かき抱き、女の唇に、自分の唇を、合わせようとする）

女（はっと、我に返り、突きはなすように余部の胸から、脱れる、そして、荒い、息使いの下で）——

「あきまへん……今日は……今日は……明日、なにもかも、明日……」

（そう云うと、畳の上に、崩れ折れ、背中を、ふるわせて、声を吞んで激しく泣く）余部（女の気持を、はかることが出来ず、

呆然と、その、こまかく、ふるえる肩を、見つめている）

カメラ、畳の上に、くずれ折れた女の、乱れた、裾から、静かに、肩先へ、移動する……。（up）

——間——

余部（やがて、その、女の肩に向って、ポツリと、云う）——（up）

「——湖北の女……」

女、声を吞んで、泣き続ける。（up）

岩を噛む、谷の瀬音が、一きわ、高く、聞えて……（ゆるやかな、FO）

第三章 遠い日——湖北の女

（その二）前章の翌日——やはり、暑い夏の一日である。

1 （ゆるやかな、Fi）琵琶湖の西岸に沿って走る、国道一六一号線。——右手には、夏の日ざしを受けた、琵琶湖の湖面が、白

銀のように輝き、折から、海水浴のシーズンなので、その水面を、沢山の、ヨットの帆が、すべるように動いている。そして、左手には、湖西最高の秀峰、比良山塊が、黒々と、そびえている……。

国道、一六一号線は、その、山と、湖の間を、くねくねと、細く、白く続いている。

今、一台の大型バスが、ゆっくりと、北に向って、走って行く。（OL）

2 その車内。

乗客は、まばらである。中程の、二人がけのシートに、並んで腰を下している、余部と女——。

二人の手、しっかりと、握り合わされ、女は時々、余部の横顔を、盗むように見る。

——（up）余部、流れ行く、窓外の風景に、目を注いでいる。

余部の声——「——昨日の午後から、今日にかけて、私の上に起っている、この夢のようない出来事……これは、一体、どういうことなのか……お互いに、まだ、その、姓名すら名のりあっていない、私達が、こうして睦まじく、バスに乗り、見知らぬ土地

へ、向っている……いや、この旅の行先が女の、古里で、琵琶湖の北、——瀬木村というところだということだけは、聞いた……だが、それ以外のことは、なに一つとして、わかっていない——この女——」

窓から入る風を受けて、心地良さそうに、目を細めて、ほほえんでいる女（up）

余部の声「……勿論、私の、この女に対する、好奇心は、昨日にも増して深まりこそすれ、決して弱まっては、いない……だからこそ、私は——女の誘いを、断らず、こうして、どことも知らぬ、遠い山奥まで、行こうと、云うのだ……それとも、やはり、これも、若気の至りと、いうべきなのか——？」

女、そっと、余部の顔を見て、美しい、微笑みを、洩らす。——少くとも、女は、とても、幸せそうである。（OL）

3 近江今津町の、古ぼけて、暗く、狭い、町並みの中を、走り抜ける、バス……（OL）

4 湖畔の松並木の、でこぼこ道を、ガタガタ、行くバス。——その行く手には、名も知らぬ、暗い山脈が、立ちはだかっている——そして、その山脈の上に広がる、空の色は、もはや、近江路のものではなく、暗胆たる裏日本、——北陸路に連なるものである。（OL）

5 山坂道にかかり、七曲八折の道を、のろのろと、上って行くバス。（OL）

6 やがて、その、山間の、深い谷間の停留所に止るバス。

円形の標示板には、瀬木村入口、という文字が、かすかに、残っている。止ったバスから、女が下り、そして、余部が下りる——。

余部（up）「（あたりを見廻すが、この辺り、人家一つなく、四方は、山である）」

二人を下した、バスは、二人を残して、直ぐに出發して行く。

余部（小さくなって行くバスを、見送りな

がら）「——あのバスは、これから、どこまで行くの……？」（と、女をふり返る）女（タモトから出した、ハンケチで、顔の汗を拭って）「ようは、知りまへんけど、敦賀へでも行くのと、違いますか……」余部（遠去かって行くバスを、じっと、見送っている）（up）

バス、山道を、ゆっくり、去って行く。

女（道端に置いた、スニーカーを、提げ直して）「——さ、ほな、ぼちぼち、出かけまひようか……」（と、余部に、声をかける）

余部（その声にふり返り、女の顔を見る）女（鼻の横あたりの汗を、ハンケチで、おさえながら、余部を、うながす）

余部、「——ここには、瀬木村入口と書いてあるけれども、部落までは、まだ、相当（みちのり）道程があるんですね……？」

女（気の毒そうに、うなずいて）「——へえ……峠を一つ越しますんでなあ……女の足で、一時間ぐらいどす……」

余部（つぶやくように）「……一時間か……（気分をかえて）なあに、そのぐらいじ

や、大したことは、ありません……じゃ、行きましようか……」——（と、逆に、女を、うながす）

女「……ええ……」と、うなずき、嬉しそうに、笑う）

二人、肩を並べて、今、バスが、去って行ったばかりの道を、歩き始める。

カメラ、しばらくは、歩いて行く二人の姿を、いろいろに、つみ重ねて撮る。

しばらく歩くと、やがて、そのバス通りから、そして、昼尚暗い杉林の中に、一人一人がやっと、と、いう、細い道が、見え始める。そして、その道の入口に、「左、瀬木村」と書いた、木製の、道標が立っている——。

女（そこへ来ると、立ち止り、余部を、かえりみて）

「——こっちどす……」（と、その細い道を、指さす）

余部（うなずく）

女（一足先にたって、その細い道に入っていく）

余部（あたりを見廻しながら、女の後からその道に入っていく）

二人、細い道を、一列に並んで、爪先上りの道を、上って行く——。

女（いそいそと、はずんだ調子で歩きながら、楽しそうに）「——この先の山を越しますと、瀬木の部落が見えます……あんたはん——大丈夫ですか……」

余部「うん——大丈夫です……だが——少し、驚いたなあ——」

女（歩きながら）「驚いたって……？ なにをどす……？」

余部「——僕は一体、どうして、こんなところへ来てしまったのか……僕は、今日は、あなたと、四条大宮で会って、どこかの喫茶店へでも行って、あなたの、話を聞くのだとばかり、考えていたものだから……いきなり、あのバスにのせられて、ここへ行くとうと云われた時は、びっくりしたなあ……」

女「そやかて——はじめから、いきなり、こんなところへ来とくれやすと頼んでも、見ず知らずの男と女——あんたはんは、き

っと、私のことを、けったいな女やと思うて、ここへは、来てくれはらしまへんだやろ……」

余部「……だから……なんにも言わずに、バスにのせて——すべては、それから、いうわけだったのか……なかなか、智能犯だな、あなたは……」

女「かんにんしとくれやす……怒ってはいりますか……？」

余部「——いや——、折はよし、丁度、夏休みで、退屈して身体をもて余していた時だったし、あの暑い京都から逃げ出して、こんなに、涼しい所へ来られただけでも、僕は、あなたに、感謝しています……」

女「……」

余部「……それに、——あなた、という人と二人、連れ立って、と、いうことも、僕にとっては、嬉しいことです……」

女「……」

余部「……」

——間——

女（しみじみと）「——そういうてもろうて……私は、ほんまに、幸せどす……」

二人、歩いて行く (OL)

いつか、杉林が、灌木の茂みに、かわって行く、 (OL)

二人、その中の、細い道を、歩いて行く。

(OL)

歩いて行く、二人の足元の移動撮影 (OL)

二人の目で——流れるように、動いて行く

灌木の茂み—— (OL)

歩いている、余部 (UP) (OL)

歩いている、女 (UP) (OL)

そして、二人、尚も、歩き続ける (OL)

やがて——

灌木の茂みが切れ、道は、やや、開けた、平地に出る。

そこが、峠の、頂上なのである。

女 (ほっとしたように立ち止り、額の汗を拭いながら、余部を、ふり返り、そして、目の下の、山峡の景色を、指さす……)

余部 (女より、二、三步遅れて、平地に出

る、やはり、ひたいに流れる汗を拭いながら、何気なく、女の指さす、足元の景色を、のぞいて見て、思わず、叫ぶ——)

「——ああっ……」

女 (余部の顔を見つめながら) 〓 (UP)

「あれが、瀬木の部落です……」

余部「……あれが……あなたの村……そして、あれが、琵琶湖——あれが、……あの、琵琶湖なのですか——？」

女「はい——あの、古い沼のように、静まりかえった、小さな池——あれが、琵琶湖の、北の涯でとす……ここから見ると、まるで、池のように見えますけど……あの山の向う側で、ちゃんと、あの、美しい琵琶湖に、つながっているのどす……」

余部 (じっと、その景色を、喰い入るような目つきで、眺めている) 〓 (UP)

余部の声「——滋賀県と福井県の、県境にでもあたるのだろうか……？ 幾重にも幾重にも連る、峻厳な山脈——、その山と山が、迫り合い、重なり合った、深い底——あたかも、すり鉢の底のような、暗い、山峡に、古い池のように、静まり返った、濃緑色の、水たまり……、これが、あの、明

媚な風光と、豊かな、水量を誇る、琵琶湖の、北の涯とは、どうしても、信じられない……」

カメラ、この、余部の声を追うように、暗く、重なり、はてしなく連る、山々や、その山と山の、深い底に、黒々と見える、琵琶湖を、ゆるやかな、流れの中に、見せて行く。

余部の声「……そして、その、北側の山の斜面に、かろうじて、へばりついている、貧しい村……戸数は、僅か、二十戸にも、充たないのでは、ないだろうか……この、佗しい村が……この女の、古里なのか……」

カメラ、その、言葉の通り、貧しく、佗しい、村の風景を、遠く、見せて行く。
——やがて——

女 (余部を、かえり見て) 「——暗い、陰気な、村どっしやる……ここから見ると、まるで、死んでいるようや……」

余部「……」 (答えずに、じっと、谷間

の、村落を見つめている)

女「琵琶湖の水も、ここまで来ると、死んだみたいどすなあ……死んで——腐ったみたいどすなあ……死んで——腐って——澱んで——。道理で、魚も、とれしまへん……あの水は、もう、生きてえしまへんのやなあ……」

余部「……」

女「……」

二人、黙って、顔を見合す。

余部「——君の家は？——ここから、見えるの？……」

女(うなずき、余部に、寄り添うようにして)「あそこに、白い布を、干している庭が、見えますやろ……その隣りに、小さな平家が……あれどす——あれが、これからあんたはんを御案内する、私の家どすの……」

女の指さす、谷間の、その家へ、カメラ、寄り始める——ズームアップ——そして、その家が、画面一杯になって——(OL)

7 瀬木村部落の風景——画面は、次の、余

部の声を、そのまま、映像にして見せる。

余部の声「どちらを見ても、山である。そして、眼前に展がる琵琶湖は、本当に、暗い表情の、沼地にしか見えない……そして、四方の山の緑を映す湖面は、青黒くよどみ、風が吹いても、小波一つ、たてようともせず、静まりかえっている……それは、まさしく、死に絶えた、水たまりと、云っていいような風景である……そして、その水の中へ、なだれこんだような、北の斜面、その土と、水の接点、文字通り、琵琶湖最北端であり、その接点の僅かな平地が、戸数十七戸の、瀬木の部落なのだ……」

家と家の間に、道だといえば、いえないこともない、細い路次があり、その路次に面した家の、低い軒先に、「たばこ」と書いた、赤い看板が、僅かに、この、死んだような、村にも、人の生活のあることを、しのばせている。

その、路次を、女と、余部が歩いて来る。今にも、崩れ出しそうな、古い一軒の軒下

に、年老いた夫婦が、向い合って坐り、ナワを、あんでいる、どこからともなく、飯を焚く煙でもあるのか、白い煙が、ゆっくりと流れて来る。

女(老夫婦に会釈して)「……ただいま……」

老人(顔をあげて)「ああ、みなさんか……おかえり……」

老婦「——京は、どうじゃったな……」

女「——おかげさまで、なにもかも、すんでなあ……」

老婦「それは、よかったな……」

老夫「……トシ坊も、達者らしいが……まあまあ、なにもかも、すんで、それは、よかった……」

女「……ほな……又、話しに来るで……ごめんやす……」

老夫「ああ……」

女(余部を、ふり返り、そして歩き出す)

余部(さっきから、身の置き場所に困っていたが、女が歩き出したので、やっとの思いで、その後、ついて行く)

老夫婦(余部の姿に、目を見はって、その後姿を見送る、そして、二人で、顔を見合

わせ、溜息をつきながら、うなずきあう)

8 山——そして山——

太陽は、既に、西の山影に入り、すると、四方を山に囲まれた、この狭い谷間は、すっかり、夕暮の気配である。

9 カメラ、湖水から、ゆるやかな、移動撮影を始め、やがて、一軒の、小さな、家へ寄って行く、家が、画面一杯になったところで、カメラ、静止し、そして、その画面へ、女と、余部が入って来る。

女(立ち止り)「ちょっと、待ってとくれやす、今、鍵を、あけますさかい……」

余部(うなずく)

女(入口の板戸に手をかけ、そして、その鍵をあげ始める)

余部の声「——鍵のかかった、一軒家——すると、この女は、この淋しい家に一人きりで、住んでいるのだろうか——?——」

女(up)「——(立てつけの悪い板戸を、一生懸命、あけている——)」

余部の声「——これだけの若さと、美しさを持ちながら——こんな、恐らくは、どんな地図にも、出ていないような、佻しい所に一人住いしている、この女——一体、この女は、どういう女なのだろう……」

余部(なんとなく、落ちつかぬ様子で、あたりを見廻す)

女(あいた板戸から、家の中へ入ったと見えて、入口に、姿は見えない)

余部(そっと、その軒下へ歩み寄る、そして、この家の様子を、しげしげと見る)

カメラ、その目になって——

板戸の上の壁に、生田次郎、と、下手くそな字が、すっかり汚れて、薄くなった表札が上っている、そして、その横に、白髭神社のお守札が一枚、やっぱり、すすと、ほこりに、薄汚れて上っている。

家は、相当の年代もので、柱を置いた、土台の石が傾き、柱そのものも、下の方は、やせて、腐っている。

隣家との間は、かなり離れていて、その間には、葎なのか、それとも、葎なのか、それとも、夏の雑草なのか、丈の高い草が、所かまわず、群生している。

ふり返れば、すぐ、足元に、よどんだ、琵琶湖の水が、迫っている。

10 女(ガラガラという音をたてて、縁側の雨戸を、何枚か、あける——そして、そこから、余部に、声をかける)

「……どうぞ——あんた、そんなとこに、立ってんと、上っとくれやす……」

余部(ふり返る)

女(はずんだ笑顔を見せる)「さ、どうぞ……汚い家やけど、どうか、自分の家やと思うて、気楽に上っとくれやす……私だけしか、おらしまへん……どうぞ、気楽にしとくれやす……」

余部「……」(うなずいて、縁側から、開け放たれた家の中を、のぞき、見廻す)

カメラ、その目になって——

三坪程の土間に、古ぼけた、かまどと、流し台があり、その土間に続いて、六畳位の板の間があり、そこには、古めかしい、水屋戸棚と、黒ずんだ、チャブ台が置かれ、

煤けた壁には、大きな暦が、貼ってある。その板間に続いて、畳を敷いた六畳と、三畳が、並んでいて、板の間の次の、とっかかりの三畳に、鏡台と、タンス、六畳の方に、整理ダンスと、仏壇が置かれている。家具と云っては、それだけで、勿論、テレビや、電気洗濯機などは、見えない。

余部（それらを、ずうと眺めて行つて）

「——おや——」（と、眉を、ひそめる）

六畳の黒く煤けた壁に、どういふものなのか、五、六才の、女兒用の、洋服一着が、かかっているのが、なんとなく、チグハグに思えたのである——。

余部（不審気に、その洋服を見つめる）

（up）

11 その女兒用の、洋服のアップ——（OL）

12 仄暗い光の中に浮んで見える、古ぼけた柱時計——七時を、さしている。

13 三十燭光ぐらいの、暗い、電灯。

その、電灯のアップから、カメラ、静かに下の方へ、テイルト・ダウンする。

仄暗い光の下で、余部と女、チャブ台を囲んで、食事をしている——と、いっても、別に、大した、御馳走が、あるわけではなく、鮭や、かに、の二、三の、かんづめと、沢庵ぐらいが、チャブ台の上に、のっている……。

女「……あんた、おなが、すきましたやろ……どうぞ、たんと、上とくれやす……と、云うても、なんにも、のうて、すんまへん……明日になったら、新しい魚も、手に入りますさかい……今日は、こんなことで、かんにんしくれやす……」

余部「……」（うなずく。さすがに空腹を充たすのに、忙しい）

女（箸を休めて、しみじみと余部を見て）

「……そやけど、あんた——ほんまに、よう、来てくれはりました……なんや、まだ、うそみたいや……」

余部（飯をかみながら、うなずく）

女「……淋しいこと、おへんか……」

余部（うなずく）

女「そうどすか——あんたみたいな、都会

の人が、こんな、死んだような、北の田舎へ来はって……淋しい思いやないかと、さつきから、案じてました……」

余部（女の言葉に、ようやく、箸を休め）「……たまには、こんな静かな所も、いいし——それに——」（と、ちょっと、口ごもる）

女「——それに——？」

余部「僕は、あんたに、興味がある……」

女「……」

余部「正直云って、僕は、昨日から、夢を見ているような心持がしている……あなたと、あの、念仏寺で、出会った時からです……」（キザっぱい云い方である）

女「……」

余部「僕には、よく、わからない……これが、一体、どういうことなのか——だが、あなたは、僕の心を、すっかり捉えてしまった……僕の心は、あなたへの興味で、一杯です……」

女「……私の——？ 私のどこに、興味を……？」

余部（女を、じっと見つめて）「すべてです……」

女「ほんまに——？」（その瞳の奥に、淫

靡な光が、妖しく、宿る)

余部「ほんとです……僕は、あなたの、すべてに、興味がある——だからこそ、あの長い山道を歩いて、こんな淋しい所までやって来たのだと、いい……」

女「——」(じっと、余部の瞳を見つめる)

余部「——」(女の瞳を見つめる)

女「……ほんなら……(言いかけて、ためらう——、しかし、身体の奥から、激しいものが、こみあげて来て——)……私の身体にも、興味が——あります?——」

余部「……」(困る)

女「……私の身体が、欲しいおすか……? 私の身体の、なにもかも……」

余部「……」(女の顔を、じっと見つめるばかりである)

女「……どうです?……」

余部(答えに窮して、うろたえる)

女(艶然と笑う——そして、突然、余部にすり寄り、すっかり、どきまぎしている余部の手をとる)

「あんたは、まだ、学生さんどしたなあ……うぶで、まじめな、D大文科の、学生さんどしたなあ……」

(言いながら、余部の顔を下から、のぞきこむ、そして、声を低く、落して)

「あんた、女を——知ってはります?」(と、聞く)

余部(さっきから、表情は、こわばり、目を白黒させているが、女の問いには、かすかに、うなづく)

女(淫靡な瞳に、深い思いをこめて)

「——ほな……私を——私を——好きですか——?」

余部(緊張の余り、かすれた声で)「好きだ……」(と、かろうじて、答える)

女(更に深く、余部にとりすがり)「……」

それなら、私を、可愛がって、くれはりますか……?——」

余部(徐々に、大胆になって、女を抱く手に、力を入れる)「——ああ——」

女「——ほんまに?——」

余部(うなづく)

女(その瞳の奥に、ますます妖しい光が、こもり、激しい、まなざしで、余部を見つめる——そして——)

「——私は、普通の女とは違いまっせ……私は、あんたが、好きや……そやさかい、ひょっとしたら、あんたが死ぬまで、私

は、あんたを、離さんかも知れへん……私の性は、一ぺん、火がつくと、私でも、どうしようもない程、激しい勢いで、燃え上がるのや……そうしたら、もう、その火から、逃げることは、出来しまへん……それでも、よろしおすか……?」

余部(女の言っていることが、理解できない……うなづく)

女「……ほんまに……?」

余部(うなづく)

女「——私は、あんたを、離しまへんえ……どんなことがあっても……逃がしまへんえ……」

余部(少し、くだいな、と、いう様子で、激しくうなづく)「——いいよ——」(と云う)

女(激しく、余部を抱きこみ、そして、自分から、余部の唇に、自分の唇を合わせて行く)

女の力で、二人、畳の上に、抱き合ったまま、倒れる、倒れても尚、女、口づけを、やめない。

長い間——。やっと、女、男の唇から、離れ、大きく、荒っぽい、息使いの中で、余

部の耳元に口を寄せ——

女「あんたが、私から、逃げんように、縛らしてもらいますえ……よろしおすな……いやや、云わはっても、もう、あんたは、私のものや……好きなようにさしてもらいます……そして、万事は、それからや……うんと、可愛がってくれやすや……今晚から、始まる、私と、あんたの、性の喜び……あんたが、その気になって、私を、可愛がってくれはったら……私も、真実、あんたを、可愛がります……そやけど、あんたが、もし、おかしい気い、おこして、私から、逃げようなどと思うたら……その時は、かんにんしいしまへんで……家の前の琵琶湖はな……魚も住まん、死水や……」

余部（女の言葉の異常さに、思わず、欲情も消え失せて、目を開き、じっと、耳を、すましている）

女（又も、激しく、余部をかき抱き）「好きや——私は、あんたが、好きや……」（と、低いが、叫ぶように云うと、狂ったように、口づけをする）

余部（一度、消え失せた欲情の火は、容易に、燃え上らず、女に、口づけを、されな

がらも、この女の、異常に、激しい、性^{さが}をじっと見つめるように、目を開いている）

余部の声「——この狂気のような、女の口づけ、そして、その言葉——これは、一体、どういう風に、解釈すれば、いいのだろう……」

縛る——とは、一体、なんのことだ……この、一方的な、愛の表出は、一体、どういうことなのだ……

この女は……この湖北の女は……どう性^{さが}の持ち主なのだろう……深い山に閉された、この、死んだような、村に生きる、この女は、どういう、性^{さが}の持ち主なのだろう……私は今、こうして、この女に抱かれ、

この女の体臭を嗅ぎ、その、舌の動きと、湧きあがる、唾液を味わい……激しい愛の言葉を聞き——尚、それを、解釈しようとしている……いけない——、解釈しては、いけないのだ……少くとも今は、——何も考えず、この女の、愛に身を委ね——体液の中に沈みこむのだ……、それが——人生だ……濡れた、女の性^{さが}と、哀しみ深い、愛から、なにかが、始まる。知ろうとしても、なにも、わからず、わからぬままに、

なにかが、流れ、そして、終る——」

（余部の中に、再び、欲情が燃え始める。女を抱く、余部の手に、力が入り、口づけが、激しくなる）

女（余部の抱擁に、身もだえしながら、伊達めめを、とり、その下の、細ひもを取る——。ひもを、全部、とり終ると、はだけたキモノを、そのままに、身を起す）

余部（目を閉じて、動かない）

女（細ひもの、はしを口にくわえ、もう一方のはしを、右手に持ち、余部の手首に、ぐるぐると、巻きつけて行く）

余部（目を開いて、驚き、身を起そうとするが、その時は、もう、両手首を、縛られて、自由がきかない……）

余部「……なぜ……こんなことを……？」

女「逃げられたら、困りますもん……」

（そう言いながら、乱れた髪を直す、ヒモを失った、キモノは、前がはだけで、豊かな胸のふくらみが、仄暗い光の中に、ゆれ動く。）

余部「……なにも、こんなことをしなくても、僕は逃げ出したりはしないのに……」

女「——逃げんでも——これからは、もう私の言うことを聞かな、あきまへんえ……」

な……誰にも、邪魔されんと、二人きりで、死ぬまで——仲良しどっせ……」

(言いながら、立ち上り、はだけていたキモノを、すべらすように、脱ぎ捨てて。一糸まとわぬ、美しく、豊潤な、女体が、余部の目の前に、余すところなく、さらけだされる)

余部(見てはならないものを見たように、目を閉じる)Ⅱ(up)

女(そんな、余部の初心に、更に、深い欲

情を、感じて、全身に媚態を示しながら、嬉しそうに笑う)

笑う、女の、アップ——仄暗い光を、受けて、妖しい情感が、たちこめる。

時計が、八時を打ち、この佻しい、湖北の村に、深い夜が、訪れ始めたことを、告げている——。

妖しく笑う、女のアップ——(長く)そこ

から、やがて、カメラ、ゆっくりと、パンをして行くと、六畳の薄暗い、壁にかかった、女児用の洋服がある——カメラ、その、洋服に、寄り始め、アップになるまで、移動する。

女児用の洋服のアップ

妖しく、笑う、女のアップⅡ長く、つづいて——(ゆるやかな、FO)

(第三章迄、完)

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

A1	フミツケ汚辱縛り(新井)	一組一枚	一五〇円
A2	手吊り乳房責め(五月)	五組五枚	五〇〇円
A3	ハリツケ猿ぐつわ(新井)	十組十枚	九〇〇円
A4	全裸正面柱しばり(遠藤)	二十組二十枚	七〇〇円
		三十組三十枚	五〇〇円
		四十組四十枚	三〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇円

A5	亀甲強烈乳房縛り(遠藤)	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A6	豊満乳房いじめ(遠藤)	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A7	鼻責鼻梁いたぶり(遠藤)	全裸後手高小手	(遠藤)
A8	膨隆臀部さらし(長野)	全裸正面強烈縛り	(長野)
A9	うねる緊縛裸身(長野)	色褪の開股しばり	(長野)
A10	正面縛蛙股ひらき(長野)	裸自慢縛りヌード	(長野)
A11			
A12			
A13			
A14			
A15			
A16			

A17	正面アグラしばり(長野)	正面大の字開股縛	(長野)
A18	遅ましき裸しばり(長野)	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A19	両手前縛り髪首絞(大塚)	両手吊り股間吊り	(桜井)
A20	亀甲股間しばり(関谷)	疼れんする裸身像	(関谷)
A21	両股縄掛け開股縛(大塚)	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A22	乳房晒し肉体自慢(長野)	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A23	投げ出した全裸縛(長野)	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A24	羞らいの両股縛り(大塚)	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A25	荒縄全身縛り豆絞(大塚)		
A26			
A27			
A28			
A29			
A30			
A31			
A32			
A33			

A34	盛り上る乳房縄目(長野)	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A35	ムチ打悶えポーズ(関谷)	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A36	縦縄股間縛り正面(関谷)	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A37	くさり乳房責め(長野)	強制片足挙げ責め	(大塚)
A38	正面乳房くびり縛(関谷)	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A39	手吊りパンティ落(絹川)	白バンド後手吊り	(東浦)
A40	豆絞り高小手呻(絹川)	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A41	ガンジガラメ立縛(愛川)	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A42	立木縛竹棒責め(桜井)		
A43			
A44			
A45			
A46			
A47			
A48			
A49			
A50			

〔代理部新版分譲品一覧〕

光沢印画紙極鮮明焼付写真

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 四〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 三〇〇円

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 三〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 三〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 三〇〇円

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号(ねへ) 三〇〇円

椅子またぎの責め

玉田美佐子 略号(ぬと) 三〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 三〇〇円

全裸アゲラ縛り

長野 良子 略号(てへ) 三〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 三〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 三〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 三〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 三〇〇円

踊り子緊縛

絹川 文代 略号(りこ) 三〇〇円

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 略号(ゆす) 三〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 三〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 三〇〇円

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号(へな) 三〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本 ミチ 略号(いな) 三〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 三〇〇円

乳房責の苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 二〇〇円

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号(もた) 四〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 四〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 三〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 四〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 三〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 三〇〇円

色褌の開股縛り

大手札三枚一組 略号(いふ) 三〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 三〇〇円

乳房しばり

大手札三枚一組 略号(うは) 三〇〇円

鼻責めと緊縛

長野 良子 略号(うい) 五〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 三〇〇円

椅子責めの果て

大手札三枚一組 略号(いす) 三〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原 清子 略号(はた) 一〇〇〇円

碧玉裸身緊縛

山原・鈴木 略号(のん) 三〇〇円

くすぐり責め地獄

刑部 典子 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟燭責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 六〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 六〇〇円

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 略号(きと) 六〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 三〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 三〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 四〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興する女

大手札八枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 一〇〇〇円
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へけか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へけき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へけく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へけし)

浣腸後オシメ着用

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へけこ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原、東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原、東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原、東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原、東浦 略号 (かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 七〇〇円
山原、東浦 略号 (かの)

浣腸に興する清子

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 五〇〇円
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 五〇〇円
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (ると)

〔最近撮影新趣向分讓品〕

極鮮明印画紙焼付写真

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬへ)

真紅腰巻着用縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (つめ)

柱縛り全裸晒し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (つま)

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (さは)

柱抱擁全身厳重縛り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (さけ)

足挙げ全裸正面縛り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (さこ)

柱縛り臀部晒し

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (さき)

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬと)

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 略号 (八〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
木村 洋子 略号 (つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
木村 洋子 略号 (つふ)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
木村 洋子 略号 (さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
木村 洋子 略号 (さふ)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (いら)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (いさ)

凄艶乳房責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
四方 清美 略号 (きよ)

哀婉美貌女囚独居

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
柳 初子 略号 (はつ)

両手吊りの美女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
絹川 文代 略号 (けい)

一本棒宙縛り晒し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
東浦ひかる 略号 (らま)

猿轡豊満をくびる

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (らむ)

全裸の立柱しばり

大手三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (らめ)

縄股くぐり綱渡り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
木村 洋子 略号 (らち)

首縄つなぎ引回し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
大村 洋子 略号 (らぬ)

股間縛り引回し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
木村 洋子 略号 (らる)

雁字搦目吊り上げ

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
木村 洋子 略号 (らお)

全裸椅子開股責め

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (けな)

全裸後手強烈縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (けの)

強烈縛り悶悦姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
刑部 典子 略号 (けそ)

黒褌着用猿ぐつわ縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
刑部 典子 略号 (けた)

強烈海老縛りの苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (えふ)

乳枷貞操帯着用

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (もや)

落ちた下着と後手吊り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (ろよ)

浴槽内荒縄強烈縛り折檻

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (ろる)

二女をいじめる啓子

大手札十枚一組 略号 (一二〇〇円)
東浦、木村、大塚 略号 (きい)

股裂きと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚、東浦、木村 略号 (きう)

膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (なに)

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚、東浦、木村 略号 (きお)

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚、東浦、木村 略号 (きさ)

アルバム／美しき縛しめ／第九集

女性刑罰拷問特集／「西洋篇」 略号／美9

革具に拘束される女

一部 一〇〇〇円
(7共)むんむんする革の臭気にむせかえった革の緊縛女体集
「革具に拘束された美女の媚態七十二葉の豪華版」

「女性刑罰拷問特集」日本篇「略号美5」の姉妹篇として、待望の「革具に拘束される女」特集のグラフィック印刷写真集を、ここに完成いたしました。真白で豊かな肉づきの女体が、黒光りのする革具、或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられたさまを七十二枚の大小の鮮明なるフォトによって、とっくりとごらんにいれます。

内容

○T型に磔られた女正面像（くさり、尾錠付革具使用）／三葉
○皮張椅子に拘束された女（手枷革具くさり付、首、胸、胴、脚、怪、足首固定革具使用）／二葉
○革製猿ぐつわを噛まされ全身ガシガシに緊縛された女性（全身縄緊縛、革箱口具使用）／二葉
○皮張椅子に固定仰臥させられた女体のアップ／三葉
○黒覆面（革製）並に黒革褌（チヤック付）着用、両前手錠及び黒革褌単独着用の女／四葉

○黒革猿ぐつわ、首絞め股間括り両手、膝、足首拘束／五葉
○電気椅子に固定された女死刑囚／四葉
○口腔強制検査／三葉
○女死刑囚の生体実験／一葉
○黒革覆面貞操帯着用にて前手錠立姿の女／一葉
○並に同じ姿にての各種ポーズをとる女／五葉
○革製猿ぐつわ、首輪、股間並に膝固定立柱括り前手錠／二葉
○全身革具に固定される女の正面背面、仰臥姿勢各種／十二葉
○貞操帯着用にて黒革製長椅子に仰臥固定される女の肢體／四葉
○牛革製箱口具、股絞め、股間固定絞全身拘束に呻く女／五葉
○首革枷、両手枷、両足枷を鎖で繋かれた女の全身裸像／一葉
○牛革具に拘束された女性の正面背面、側面、各種姿勢／七葉
○首輪、両手枷、両足枷に鎖をつけられて引回される女／三葉
○貞操帯を着けた女／二葉
モデル—美木乃々子—大塚 啓子

限定版グラフィック印刷M結集版アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

オンパレード 頒価一部 一〇五〇円（送共） 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラフィック写真集

内容

○絹川女王様の足合になって奉仕しているマゾ男（扉一頁一葉）
○山原女王様に縛られ人間馬にされてムチ打たれる男（四葉）
○大塚女王様に後手高手小手に縛られ流腸を施される男（四葉）
○山原女王様の足の指に挟んだお菓子を食べせられる男（四葉）
○大塚女王様の使用されたチリ紙を足の指に挟んで与えられ、それをムシヤムシヤ食べる男（六葉）
○山原女王様を背中にお乗せして乗り潰され喘いでいる男（四葉）
○大塚女王様の激しいムチ打ちに歓喜の身をふるわせる男（四葉）
○山原女王様の手によって次第に後手に縛られてゆく男（八葉）
○絹川女王様のハイヒールで手錠の手首を踏まれる男（三葉）
○山原女王様の按摩をしながら足の指をしゃぶる男（三葉）
○縛られて身動き出来ぬ身を山原女王様の手で鼻責め（一葉）
○サジスチン宮井美佐子の乗馬スタイルとムチ打ちポーズ（八葉）
○山原女王様と鈴木晃子女王様に縛られムチ打たれる男（三葉）
○鈴木晃子女王様の馬にされ裸の尻をムチ打たれる男（一葉）
○絹川女王様のハイヒールで顔面を蹴弄されている男（三葉）
○絹川女王様からローソク責めにされている男（二葉）
○大塚女王様の足の踵で鼻責めにあう男（一葉）
○お化粧をする絹川女王様のスツールになって奉仕する男（一葉）
○山原女王様の激しいムチ打ちにのびてしまった男（一葉）
○絹川女王様の真白い足の裏で顔を叩いたり踏まれた男（一葉）
○絹川女王様のはいたスリッパの先をくわえる犬男（一葉）
○絹川女王様の脱いだばかりのパンティをかぶせられた男（一葉）
○絹川女王様に麻縄で後手高手小手に縛り上げられる男（一葉）
○大塚女王様の足の指を舐めさせられている男（二葉）
○絹川女王様の足の指をおいしうに舐めている犬男（一葉）
○山原女王様の足の指を無理矢理舐めさせられている犬男（一葉）
○後手に縛りあげられ大塚女王様に流腸させられている男（二葉）

☆女体切腹資料の部☆

血紅女体切腹腸露出 大手札十二枚一組 一〇〇〇円 大塚 啓子 略号 (せい12)	血紅切腹絶命ポーズ 大手札四枚一組 四〇〇円 梨花悠紀子 略号 (せん)	血紅切腹祭壇の女体 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号 (せぬ)	裸女血紅切腹 (大塚) 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号 (おお)	血紅使用苦悶悦楽表情 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号 (くえ)	肉体美全裸女体切腹 大手札五枚一組 五〇〇円 長野 良子 略号 (なせ)	瘦身女体切腹姿態 大手札二枚一組 三〇〇円 細川アヤ子 略号 (ねは)	瘦身女体自刃姿態 大手札三枚一組 三〇〇円 細川アヤ子 略号 (ねに)	血紅切腹血塗れ下腹 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号 (わい)	殿中の女性切腹 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号 (わこ)	切腹美態から絶命へ 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号 (わは)	
女体介添切腹 大手札四枚一組 四〇〇円 甘木 春子 略号 (あか)	下腹を切り裂く 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号 (やい)	下腹に刺す氷の刃 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号 (やお)	柔肌を切り裂く女 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号 (やえ)	海老縛りの表情 大手札三枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号 (えふ)	血紅切腹連続写真 大手札十二枚一組 二〇〇円 大塚 啓子 略号 (のせ)	血紅使用美しき女の屍体 大手札十二枚一組 二〇〇円 大塚 啓子 略号 (のり)	血紅使用立腹に悶える女体 大手札十枚一組 一八〇円 大塚 啓子 略号 (のさ)	血紅使用切腹した女の死体 大手札十二枚一組 二〇〇円 大塚 啓子 略号 (のい)	血紅使用屠腹される女体 大手札十二枚一組 二〇〇円 大塚 啓子 略号 (のる)	血紅使用絞首された女体 大手札六枚一組 一二〇円	
血紅使用切腹に苦悶する女 大手札十枚一組 一八〇円 大塚 啓子 略号 (のむ)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 三〇〇円 長野 良子 略号 (ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 三〇〇円 愛川悦子田中芳代 略号 (らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 三〇〇円 愛川悦子田中芳代 略号 (らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 一〇〇円 絹川 文代 略号 (らふ)	腸露出無念腹切腹 大手札十枚一組 一八〇円 大塚 啓子 略号 (せ10)	全裸の切腹悦楽 (1) 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号 (ひた)	全裸の切腹悦楽 (2) 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号 (ひと)	マニアの切腹 大手札三枚一組 三〇〇円 甘木 春子 略号 (まに)	全裸正面切腹姿態 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号 (のみ)	切腹に悶える裸身 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚 啓子 略号 (のそ)	血紅切腹決定版 大手札三枚一組 三〇〇円
血紅切腹凄惨姿態 大手札十枚一組 一〇〇円 大塚 啓子 略号 (れみ)	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川 文代 略号 (ちの)	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川 文代 略号 (ちた)	哀艶血紅切腹 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号 (るな)	刺青姐御の切腹 大手札四枚一組 五〇〇円 山原 清子 略号 (うた)	柔肌を切り裂く女 大手札五枚一組 八〇〇円 大塚、東浦 略号 (きち)	血紅使用介添切腹 大手札五枚一組 八〇〇円 大塚、東浦 略号 (きつ)	女体切腹 悦楽表情 大手札三枚一組 四〇〇円 梨花悠紀子 略号 (はる)	切腹風景十二態 大手札十二枚一組 一五〇円 大塚 啓子 略号 (せふ)	裸身の血紅切腹 大手札四枚一組 五〇〇円 梨花悠紀子 略号 (せん)	凄絶血紅自刃 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号 (ひち)	

四馬孝異色画集

女体浣腸責め図絵

大中判印画紙極鮮明焼付
八枚一組 略号二〇〇〇円

一、美しい服の少女に浣腸責め
二、捕まわりの乙女に空気を注ぐ
三、逆さ吊りの女に花に注ぐ
四、大の字吊りの女に注ぐ
五、イルリガートの菊に注ぐ
六、片足吊りで施す
七、スリン浣腸

女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付
略号一〇〇〇円

一、保健室で女学生に浣腸
二、便後カパに着用のお嬢さん
三、トイレで浣腸される乙女
四、セーラー服で浣腸される乙女

女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付
略号一〇〇〇円

一、お友達にされるB.G.の浣腸
二、エネマの管を踊子に挿入
三、看護婦にされる五〇〇C.C.浣腸
四、エネマシリンジの若妻の浣腸

美処女羞恥責悦虐絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付
略号一〇〇〇円

大中判印画紙極鮮明焼付
五枚一組 略号一〇〇〇円

一、豊麗な花を欺く深窓の令嬢
二、絶世の美女に雪の塩水を飲ま
三、拷問椅子に開股縛りになる
四、犬と激しい尿意を耐える雪絵
五、雪絵は哀れな牝犬を警う
六、雪絵は秘密の箱の中へ排泄
七、雪絵は左右に開いて受ける
八、雪絵は左右に開いて受ける

妊婦の媚態

大中判印画紙極鮮明焼付
略号一〇〇〇円

一、医師の診察を受ける妊婦
二、シャワーを浴びる妊婦
三、浴後の裸身を大鏡に写す

女学生の浣腸一態

大中判印画紙極鮮明焼付
略号一〇〇〇円

一、花恥しきセーラー服の乙女
二、高々と挙げて浣腸される真白
三、学校帰りの女高生がスカートを
四、浣腸される羞恥にたえぬ風情

凄絶、妊婦の切腹

大中判印画紙極鮮明焼付
略号一〇〇〇円

一、横なぐりの雨の降りしきる祠

大中判印画紙極鮮明焼付
九枚一組 略号二〇〇〇円

サド侯爵悦虐絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付
九枚一組 略号二〇〇〇円

一、膨らんだ腹に脇差を突き刺す
二、短刀で切った雪の腰元、上半身
三、腹を割って今にも産気づきそう
四、肉の暗夜の邸内、東屋の前で
五、地面に支えて膝下へ突き

女体浣腸嗜虐場面

大中判印画紙極鮮明焼付
六枚一組 略号一五〇〇円

一、組上のいけにえ(台上でエビ
二、女体浣腸の悪魔(百ワットの電
三、高圧ポンプの先から出された
四、光に照らされた白くした
五、高圧ポンプの先から出された
六、高圧ポンプの先から出された
七、高圧ポンプの先から出された
八、高圧ポンプの先から出された
九、高圧ポンプの先から出された

一、女体食卓(大テーブルの中央
二、仰向いてアグラにされた女体
三、逆さ吊り(膝で逆さに吊
四、針のトイレ(針の植った奇妙
五、排泄を強要されている美女
六、女体燭台(アグラ縛りの女
七、額に立てられたローソクに火
八、拷問室のベット(お前はボク
九、肌をくねらせて踊り狂うのだ
十、浴室の女神(むっちりとした
十一、吸った女体に巻きた太縄が水
十二、ムチうたれて悶えていた美女
十三、ゴボゴボ注がれる水道の蛇口
十四、妊婦のように膨らむ女の腹部
十五、お前にボクは、こんな奇妙な
十六、九、排泄の図(さあ、鏡にうつ
十七、たお前の姿をよく見てごらん
十八、ちゃんはこのように抱っこさ
十九、シメカパーをはさそうね)さあ、



新年号には又々前川様が「汝魔苦美帖」の作品を発表され、その構図も私の好みのもので大変嬉しい思いをしております。美女の生首を愛撫する裸の美女の姿態は、妖しい色気を漂わせて余りありません。なだらかな背から尻への裸女の曲線のなまめかしさ、血みどろな生首と妖しい対照の美を、醸し出して見て見事でした。これにふんどしをしめさせて、お尻の双丘にわって入った、ふんどし姿の裸

女のなまめかしさを考えると妖しい血が胸の中に湧き上ってきます。前川様の作品中、「首級をあげるふんどし裸女」は小生にとって、今は何ものにも替え難い愛玩物になっていきます。小生は絵心がなく誠に残念ですが、アイデアは乏しい頭からしぼり出します故、今後共、この種作品をどしどし発表して下さい。もう一度ふんどし裸女を扱った生首絵、例えば累々と横たわるふんどし一丁の裸女の屍の山の中で只一人勝ち残って、ふんどし一丁の御守殿が美女共の生首を愛撫しているところといったような図柄です。一度直接お便りしたく存じます。お差支えなくば連絡法をご教示下さい。(大阪・女斗彦)

○ 今月は2日も早く(24日)に店頭で見つけることが出来たのは喜びました。25日に発売され26日には確実に手にすることが出来るのは、地方によっては入手出来ない人の声を聞くにつけ幸せかもしれないませんが、一日でも待たされるのは辛いものです。待望久しい臨時増刊号「花と蛇」約束通り今年中に間に合わせて下さり、御辛苦の程を感謝します。まずは御苦勞様

でした。前の「花と蛇」の増刊号は幸いにして手元にありますが、その人気の程を思うと、一日も早く出さなくては、入手困難ではないかと取急ぎお便りしているわけですが。どうか、私達の希望がかなえられますならば、夢の又夢の世界——「花と蛇」が永遠に続くことを望みます。尚、これは御無理な注文かもしれませんが、これからの月刊誌にフォトはなくとも、いたし方ありませんが、四馬孝先生の「サシ絵」を組入れて下されば有難いと思います。それに問題があれば、切り取り形式とかなんとか、方法はあると思います。ではこれにて。(東京・菅旅人)

○ 新年号にて小説「花と蛇」の続編がいよいよ臨時増刊として発行されるのを知って、思わず快哉を叫びました。私はいち早く前篇「花と蛇」の増刊は購入し、未だに繰り返えし見たり読んだりして楽しんでおります。グラビヤ写真や口絵も豊富で、私にとっては一冊五千円でも安いと思つて大切に保存しております。今回の増刊も、予約いたします故、出来上り次第第一番にお送り下さい。それから、これは貴誌への希望ですが、

現在連載されている「心傷たむ遍歴」等の連載物も、出来ましら、単行本化して下されば有難いと思ひます。では貴誌の御発展をお祈りいたします。(大阪・喜多敏夫)

○ 奇く新年号届きました。ありがとうございます。この頃のTV、なかなかSMめいたものが放映されている事、奇くで皆さん良くて存知の事と思いますが、最近ではコマーションにまで、その影響がうかがえる様になりました。薄い絹地のようなものを身にまとっただけで、波打際に長い髪を風になびかせて裸馬を乗りまわす女性、ハイクップか何かの宣伝、そして何年前か前、大いに話題を呼んだ「白日夢」と同じようなシーンが出てくる「デンターハミガキ」か何かの宣伝。アップで写る女性の口もと、歯の治療に無理矢理？口を開けられ、思わずひきつる顔。濡れた唇もはつきりと見せてくれるし、椅子の手すりにしがみつく細い手の動きまで放映する大サーピス。是非皆さんも見て頂きたいものです。さて、読者通信欄、回を増す毎に大繁昌のようですが、僕のようなセミSM者にとっては、若い女性の既婚者を対象とするプ

レイのみに終ってしまう場合が多い(辻村様のカメラハントのせいでしょうか?)のは残念です。S M本来の姿がそうなのかも知れませんが、読者通信欄を通じ、同じ世代の者が同じ性格を知った上での友達としての愛が求められないだろうか、勝手な事を考えています。キケン物に油をそそいで火をつけるのではなく、冷静に話し合える友を得たいのです。そして、それが出来るだけの理性は持ち合わせているつもりです。二十才といえ、まだまだ子供でしょうが、先輩達の御意見が伺えればと筆をとりました。(東京・橘雅美)

○ S M心理学の泰斗辻村教授がとるに足らぬ小娘に一杯くわされたとは、近來の快事である。狸は遂に狐に抗し得ず、以って瞑すべきか。「カメラハント」を読めば、男とは本質的に嘘のつけない人種であることが、よく分る。だから「ハント」での作者の虚構もさして気にならず、安心して信頼して読めるわけだ。一月号では才媛、黒淵夫人の麗筆が辻村教授のそれと互角に組んだ名文である。さすがの才女もギリシヤ語まで御存知な

かったようで、その点、残念であるが、このような作品が「花と蛇」のごとき本格物と誌上において共存しようという点に、本誌の特色があるといえる。ともあれ、奇クは楽しい書物である。夜乃氏へ。小生への通信を拝見し汗顔の至り。貴兄は情熱の人であって、悟性の人ではない。その立場から今後のより充実した活躍を期待したい。最後に一言。四十一年度の本誌に登場した全作品中、千草氏の「のおと・あと・らんだむ」を第一位に押す。学識抜群にして論旨明快。その達意の美文まさに快刀乱麻を断つごとくであった。「読める文献誌」たる地位は、氏の評論により始めて可能となり、その基盤を確立したといつて過言でない。(天道公平)

○ 奇ク編集部の皆様、お変わりございませんか。奇クは私の心の友として、心の支えとして、S Mのことをいろいろ教えてくれる教科書として感謝しながら拝見しております。マニヤの一人として誌上からグラビヤ、口絵のなくなった事さし絵の少なくなった事は淋しく思います。これも時代のしからしむる所で仕方ありませんね。四

十二年一月号の「山小屋の怪」町陽一氏と「或る流腸マニヤの誕生」茂野礼氏は、私が夢見ている理解ある女性がおったら、是非プレイをしてみたいと思っている事柄です。でも私は外出するのに柄です。でも私は外に出てはいけない「右手両足不自由」という身体障害者です。で、こうした特殊な事だけに、理解して貰う事は難しく、思う様なプレイも出来ませんが、今年(四十二年)こそは、どの様なものになるか知りませんが、私の心の中にあるものを告白として聞いて頂きたいと思うのです。一人でも多くの方に。その時はどうかよろしくお願い致します。時節柄、編集部の皆さまはじめ、読者の皆様、お体を大切に。(茅野市・山野高)

○ 奇クの愛読者諸兄姉並に編集者の方々、明けましておでとうございます。貴誌には読者によるページが多くて、皆様の体験や手記など、大変興味深く読ませて頂いていると共に非常に身近かなものを感じております。一つ皆さまに雑誌の紹介をさせていただきます。お便りしたのは、去年の十一月から発売になっている週刊誌、もう

ご存知の向きも多いと思いますが「プレイボーイ」誌、集英社発行第五号の「敵はどいつだ」茜(あかね)マリ子というマゾヒストが登場しています。連載小説です。今後期待しています。又表紙についても創刊号の「ライオン」のほほは、女のお尻」二号は「ネコ」で、五号は「馬」にと、いろいろ工夫がこらされています。ともかく我々にも楽しい読みものが増えたと期待しています。又昨年はカップマガジン、光文社の創刊一周年特別号十月のグラビヤ、英国に魅了された魔女の秘儀の儀式の写真、手前にむちを持った全裸の女そしてその信者が全裸で後手にくぐられているという写真等八葉が

天然色(カラー)

△女相撲▽写真

雪崎京人氏直接指導

モデル△大塚啓子
東浦ひかる▽

迫力投業連続動作

略号(なる)

カラー大手札印画紙焼付

十二枚一組 五〇〇〇円

◎御希望の方には、御注文次第早速焼付の上お送りいたします

収められている。等々……、最後に今年に貴誌も増頁するなど、ご苦勞もおありになったと存じますが、今後ますます発展することを祈り申し上げます。諸兄様、何か面白い読みものがありましたらお知らせ下さい。なおこれをご縁によりしく。(福岡・高宮昌人)

昭和三十六年から奇クを読みだして六年になります。奇クもその間、内容も変わりましたが、いろいろな制約にもかかわらず絶えず新鮮味ある記事が多く、編集部の方々の努力がわかります。いつぞや書いた「浣腸と羞恥心」が十二月号に載り、本当に恥しい次第です。「奇ク」は読み出すと幾時間かかっても全部という程、読まなければすまないような魅力ある雑誌です。小生の一番好きなのは羞恥心をそそのかる記事、男性の奴隷として扱われた記事、女性の病院でのごと等、いろいろあるわけですが、ぜひ、こういう作品を発表して下さい。次に小生は少々女装趣味があり(特に下着だけになってしまうが)冬になると、特に腰巻をびったりと胸の辺からつけたいのです。勿論、色はピンクか赤のものが最良です。で

も、仲々買うことが困難で、この呉服屋ではおばさんだけで、いいなと入ろうかと思つて、若い女性客が二、三人いたりして、そんなことを聞くことは、とてもできるものではありません。読者諸兄、又は女性の方で腰巻の買い方について乃至、ゆづつてくれる(新旧いずれでも)方がありましたら連絡下さい。それから、小野田順子さんはどうなつたでしょうか。ぜひ、奇クモデルとして誌上にのせて頂きたいと思っています。(静岡・藤井正好)

縛られてみたい私、河森真理子様へ。一月号にて貴女のお便り、大変楽しく読まして頂きました。私達S派の男性にとって貴女のような方がどしどし、現われるのは大変楽しい事です。私は奇クのお付き合ひ古く十二、三年になりますが、いまだ一度も女性を縛つた経験はございません。以前、この欄をお借りして、神戸の志村善子様や、蔭山みさを様、などに呼びかけましたが徒勞に終わってしまいました。それ以後は余り手紙を書く気もせず。いずれ大阪附近でM女性でも見つかればと思ひ、専ら、分譲フォトを観たり、奇クを

☆一宮百合子△総天然色▽緊縛写真☆

可愛い小悪魔一宮百合子のピチピチとした若々しい肢体に厳しく掛かる縄目と悶える表情をそのままだにあらわすカラープリントによる美しいフォト。

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るむ▽

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るの▽

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るお▽

真紅の腰巻姿緊縛

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るま▽

羞らしいの正面縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るけ▽

若肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るふ▽

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るや▽

読んだり、SM場面の出てくる映画を観たりする位で、自分を慰めておりましたが、貴女の出現で再びペンを取った次第です。私の好みは、大体貴女の好みによく似ておりますが、先ず全裸かパンティ一枚の半裸になって頂き、猿ぐつわは口の間にかます。西洋式が好きです。特に股間縛りが好きで女性のふっくらとした腹部を縦に縛る縄、考えただけでもぞくぞくして来ます。その他、海老、逆海

老、開股、宙吊り、鉄砲縛り等が好きですね。むち打ちも軽く余り傷あとのつかない程度なら刺激があつていいですね。貴女は仲々のグラマーです故、縛り甲斐があるというもの。矢張り肥り気味の方がやせた人より魅力がありますから。申し遅れましたが。私は三十一才の会社員で、妻子も御座います。身長は一六〇センチ位で男としては小柄です。大阪市内の会社え勤めております。どうでしょ

、河森様、私と逢って頂けませうか。貴女のご希望は四項目とも承知しました。別にお逢いしたからといって、ブレイ許りしなくても私の持っている、フォトや写真集、又奇クの旧号を見ながら、色々お話をしたり、奇ク等の研究等をするのも楽しいではありませんか。貴女は月曜日がお休みだそうですね。新年の一月十六日、大阪ミナミの大劇附近迄来て下さいません。時間は午後一時。目印は眼鏡を掛け黒い靴を持っています。その中身は貴女とのブレイに使うロープとか筆とかその他色々、又フォトも沢山持っています故、又出来たら貴女も和服を着て頂けたらと思います。何故なら若しブレイの縄目のあとが、手首や、足首に残った場合和服の方が隠しやすいと思うからです。そして目印に週刊誌を丸めて持って下さい。尚私であるという証拠に名刺又は奇クフォト、更に三十四年発行のS特第二集を持参いたします。河森様、私は貴女を縛りたい、裸にむき、口にはパンティの猿ぐつわをはめ、股間縛りにした上に、ふよかな乳房を責める。貴女は全裸の肢体をのたうちながら、身悶える。こう考えただけでもぞくぞく

してきます。どうか思い切って来て下さい。私はブレイ以外の事は、決して望みません。

(尼崎市・松岡生)

ES様。八月を最後にお手紙途絶えましたが、何かお気にさわったのでしょうか。僕から三通出しましたが、皆戻りました。他に方法もありませんので、誌面をかりお便りします。お元気でたしたらご返事下さい。栗瀬様、TELをお知らせ下さい。久々に歓談したく存じます。マニア諸氏にニュースを一つ。梶季之著「非常階段」光文社カップノベル、P181-183 209 236 281 290にそれぞれ面白い記事があります。さすがにプロ作家だけに簡潔で生々しい描写は大変な迫力です。長いので抜き書きは見合いません。興味をおもちの方はぜひどうぞ(小林薫)

読者通信に始めてお便り致します。私は女性の神酒愛好者です。また実行も致しております。今迄に三人の方の神酒にありつきましたが、相手は全部水商売の女性です。何故自分だけが、このような変わったことに嗜好するのかと情なくなったり、又、時には自分だけ

が選ばれた趣味を有する人間だと慰めたり、とどのつまりは、愛情を以て、私に神酒を奉戴して下さい。美しい女性がいらないものと憧れる始末です。今迄経験した三人の女性は始めは皆いやがりましたが、しばらくすると、皆喜んで与えてくれました。不思議なものです。しかし、最近では私の方が神酒だけではあき足らず、コートの方の嗜好も起ってきて困っております。これは相手もいやがりますので、悩んでおります。読者の中で神酒コート愛好者の皆様ぜひ実行談をおきかせ下さい。又、このような経験のある女性の方からの通信をお待ちしています。(東京都杉並区・山下登)

加虐とは何か。被虐とは何か。相手の暴力に愉悅する特異な性向。相手を打ち痛めつけエレクトする性向を、言うのであるが、世間にあるSM派は、このカテゴリーに入るのである。ところで、これらのSM派はみな動作が絶対必要で、それによってそれぞれのシヨックをうける。これは当然である。しかし世間は広い、人間も数多である。我々の想像外の性向者もいるにちがいない、もし絶対に

人間の動作の伴わぬ、SなりMの性向者がいるとしたらどうか。こういうことも本誌読者も考えたことがあるのか。いやこういう性向者もいると思う。SMの世界は深遠、謎である。ふと思いついて、こんな物語をいつか書いてみようと思った。本誌の読者諸氏よ、きかない意見伺いたい。機をみて執筆するつもりである。(寄稿家・富士春秋)

須渾朔サンへ。正月号の通信、しみじみとした気持でよませて頂きました。あたかも表では秋の小雨がパラついてるのだから、一層ボクの孤独なむねに貴方の文章はしみ通りました。——「我が心にも嬉しナミダ降るか」奇クにもたまには思想をバックボーンとしたS・M小説「うんぬん」については大賛成です。それから乱歩の事についても同感です。ただし、ボクに対する「人独得な名作を」というせつかくの御要望には、いまのボクにどうお答えを出してよいか……。昭和四十一年十月も下旬のボクの状態は、書くことよりもあまりにも自殺への誘惑が強く、その破局を、ともすればアルコーにまぎらわせ、筆を取ろうとす

☆最新撮影／総天然色／写真分譲品☆

両手吊りに悶える

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てき▽

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てか▽

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てく▽

豊麗裸身の縄目

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てこ▽

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てま▽

長襦袢緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てみ▽

緋腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てむ▽

猿ぐつわに呻く

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てめ▽

柱宙吊り縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△ても▽

ポリウムを縛る

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てん▽

縄の苦悶を狙う

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てる▽

真紅の腰巻着用

大手札二枚組 八〇〇円
大塚啓子 略号△うお▽

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円
東浦ひかる、大塚啓子 略号△うて▽

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△うこ▽

るが、ややもすると、そのままねてしまふという方が多いからです。——こんなバカ野郎なボクの投稿作品への讃美、もったいない。ただ感謝あるのみ。△附記▽正月号に「幻なる国ありて」が発表されたが、これは昭和四十一年十二月号に木戸川氏のエッセイが久し振りに掲載された以前に投稿したものである。そんなわけで作品的に年月のずれがあることを御承知ありたい。(夜乃探郎)

東京杉並区の中原久美子さん。お便り拝見しました。小生始めての便りです。ふとしたことでK誌を知り以来八年になります。始めのうちは、恥かしくてお便りするのをためらっていましたが十二月号で貴女の声なき投稿する気になりました。貴女は浣腸責が好きのようにですが実は私もそうです。今は妻と子供一人をもつ二十八才の建築士です。浣腸は二十二才の時、初めて一度は必ず行っていました。最初はイチジクでしたが、この頃は特殊なゴム球を用いて大量の高圧浣腸を実施しております。このゴム球を用いると圧力がかかり信じられないほどの苦痛と快感を覚えます。誌上では今多少興を持

ち始めのように感じますが私なら責めの苦痛から快感へと導いて差し上げます。それにお望みの浣腸器も買って差し上げましょう。今の貴女に一番適当なのは自動車の部品屋で売っている比重計が一番よろしいのではないかと思います。使い方は比重計(一、五センチ)を取りのぞきそれに液を吸い上げて再び押し出すやり方で簡単に使えます。先端のゴムが五センチもありますので非常に使いやすいです。申し遅れましたが、小生は東京のある大学の法学部に学びました。現在自営しておりますがもし御都合がよろしければ心ゆくまで浣腸して差し上げます。お互い恥かしがるのは止めましょう。私も浣腸にて責めて下さい。小生は地下鉄日比谷線の越谷に住んでおります。銀座、新宿へは一時間で行かれます。お互いに楽しみ他のマニアの方にこの誌上を拝借して私達の体験を発表しようではありませんか。(埼玉県越谷市・小泉増夫)

笠井世津子様。貴女の十二月号の「浣腸レポート」を拝見して、是非貴女と文通や、いろいろな浣腸についての資料の交換など、又

貴女の文中にもあった『グリセリンよりも強い浣腸剤について』又その他の文中の事項にも意見を、出し合いたいと思います。私浣腸について興味を持ったのは奇クのおかげというよりほかにありません。半年前、初めて奇クを見て、私の感情を捕えたのが、浣腸だったのです。それからイチジク、オロナイン、などのものを買いました。しかし最近どうしてもだれかと、浣腸について話し合いたのをしたくなって来ました。そんな時に貴女の『浣腸通信』を見ましたのです。私は二十才になるサラリーマンです。では貴女からの通信をおまちいたします。なおその時によろしかったら、貴女への通信方法をお知らせ下されば幸いです。(東京・音山一)

一筆上呈、奇譚クラブのご活躍を喜ばしく存じます。江戸の爛熟文化の所産であつたらうところの好色見世物としての女相撲が、土俵四股平氏の熱心によって意外な形で一部愛好者の関心の中に復活し(宮武外骨氏の絵馬と同氏の関係は知りませぬが)それが更に異常な洗練と状況設定で貴誌に拠

る若干の方々によってイメージの開拓をすすめられているのを風俗に關心をもつものとして面白く思っている次第です。女の相撲がなぜ貴誌のような性格の雑誌に拠り所を得ているか、いささか妙な気もしますが、これは土俵四股平氏の功德にちがいます。四十二年正月号は女の相撲の記事はありませんが、いかにも土俵四股平氏好みの女の決斗の記事が原口氏の署名の元に載せられており興味をおぼえました。土俵四股平氏、なお健在というところでしょう。雪崎氏、雄松氏、円山氏、加茂氏、奮斗士氏ら(この中には同一人もおられるのかもしれませんが)、土俵氏の高弟(?)達もふくめて、健在を祈ります。女斗美の幻想は今日では好色を超えて中々高尚な所にまで来たようです。諸家の努力に敬意を表します。(京都市・北白川山人)

挿絵と作品を同時発表の「貴重な体験」を拝見していてうらやましくなりました。才能の豊かな方にはかないません。宇都宮さん、続いて発表していただきたいものです。賀集子夫人の「妖霊城」は軽妙で面白く読ませていただきました

した。次号が楽しみです。誌上の反響が少いから意欲が湧かないという気持は、投稿してよくわかるのですが、私など、諸者の皆さんには失礼かもしれませんが、一人で楽しんで書いてるようなものでマニヤの気持としては、それでいいのではないかと思うのですが、やはり淋しいのかしら……と考えてしまいます。千草氏、あまりかたくなりすぎたようです。読んでいる人は意外に多いのですよ。誌上には現われなくても、やはり不満なのでしようかねえ。藤村美香様。一月号奇クサロンにて拝見しました。通信に「いつも丸裸にされて腰紐で両手足を縛られ一尺差しでお尻をめった打ちです」などとありますので、私のバ―にトグロをまく奇ク愛読者の紳士諸氏は、頭にカッカして寄れば貴女のことでもちきりです。誌上で貴女によびかけてみるとやいやいいわれ(いわれなくても書きましたけれど)ますのでよろしかったらお手紙を下さい。私のことは「濡れにぞ濡れし」で想像して下さい。六本木にはよく飲みに行きます。深夜族ですからその時にはお誘い出来ないうが、赤坂からは近いですし、連絡さえつけ

ばよろしい時間にお誘いします。(東京都・芳野眉美)

初めて読者通信欄に載せていただきました。この異風俗の世界に両足を入れてしまった未来ある者です。一年ほど前、東京神田の古本屋めぐりをした時、二十才未満のことわりの書店で奇譚クラブを見つけました。空想でしかないと考えていた世界が、急に日の光を浴び新たな、現存的なものとして私の目に写し出されたのは、奇譚クラブを見つけた誰もが経験する事でしょう。私はその中に「おむつ」という言葉を見つけたのです。コロンブスが西に向えば大陸があると信ずる以上に難しくあった「おむつ」という文字の発見。私の世界が奇譚クラブの世界になったのです。おむつは赤児のものというものが、近代の通説でしるし現在に至っても、やはり「おむつ」は健康な人の使用するものではなくありません。これをあえて、おむつをしたと思うのは、奇譚クラブのみによって正常化され得るものです。私はマニヤというほどではありませんが「おむつ」に関して深い愛着を何故かしら感じてしまっていたのです。潜在的な

「おむつ」への意識、「おむつ」をしたいという願望。これが実現され得るのだと始めて知ったのは「主婦の友」という雑誌を読んだ時でした。その通信販売の頁に私はフト「病人用おむつカバー」という品物を見出したのです。病人用おむつカバー、大人もできるおむつカバー。そうです、これを知ったその時からおむつは最早赤ちやんの専用品ではなく全人類老若男女を問わず、することのできるものだと思つたのです。しかし私にはこれをする理由はありません。これなのにしたいと思う氣持、一体これは心のどこから出るものなのでしょう。これが汚いものだと思はれる前は赤児にとつて排泄物は親しい人への最も大切な贈り物だ。とフロイトは言っています。「おむつ」も何かしらこれに関係あるのではないかと思つたこともあります。しかし何よりも同好の人がこの世に居るといふ事、そして奇譚クラブの読者通信欄で語り合っているといふ事実、まず頭に浮んだのは私も少し正常なんだ、全くの異常じゃないといふことでした。こうして私は奇譚クラブに仲間入り致しました。これからもよろしく願ひし

ます。室にはおむつカバーが二枚、おむつは二十枚あります。天井からつるして干してあります。毎日寝る時が楽しみで、おむつをしてベッドにはいると何となく落着き安心したような氣持になつて朝までぐっすり眠れます。二十五、六才位の女の人が優しくほほえみかけておむつを整え「さア、いい子ね、おむつしましょうね」と丁寧な私の腰をおむつで包み、おむつカバーをしっかりとてくれま

す。そしておむつカバーのひもを腹のところでちゃんと結び布団を掛けてくれて、私の眠るまで傍にいてくれる。こんな事を想像しながら眠りにつきます。最近になつて重傷身体障害児の事が新聞、テレビなどで話題になつていますね。私も一度でいいから重傷身体障害児になりたいと思います。体が動かかせないからトイレへ一人で立つこともできません。これで、おむつをして、洩らしたら看護婦さんが取り替えて下さる。自分がそうになったつもりで色々空想しますがやはり彼らにとってはこれが苦痛なんだろうと思います。今のところ、希望は年上の女の人(25、26才)に優しくおむつをあたられて排泄の世話を受ける事と

○

おむつカバーの違った種類のものを買いたい事。使い古したおむつが欲しい事、この三つです。実現されれば最高です。(東京・鈴木 曉)

みちのくは仙台に住む完全M派の小生の近況をペンに託したいと思ひます。プレイの良き協力者である妻が妊娠し常人以上に病的な悪阻(つわり)のために昨夜遂に某産婦人科に入院してしまつたので暫くはアパートの一室で一人暮らしの破目になりました。元来、面倒臭がり屋の小生、食事や洗濯は全く不得手なのでその点一寸、不便をかこつて訳ですが、その半面、小生の心に、或る楽しいプランの実行出来る喜びに軽い昂奮を覚えながら四畳半の部屋のドアを開けたことでした。小生をして軽いエキサイトさせた楽しいプランとは、ワンワンSMプレイとでも名付けましょうか、小生が一人でS役とM役を同時に演ずることなのです。その夜(十一月二十二日夜)残念ながら左隣の部屋に洋装店に勤めるお針子の女性が居りましたので心置きなく、プレイに没頭は出来ませんでした。プレイに没頭して起るプレイの意欲

に抗し切れず、隣室に物音を氣取られぬように警戒しながらも、小生はワンマン・プレイをはじめてしまひました。中央にあった食卓を片付けた小生は部屋の片隅にある。大きなボストンバッグ(プレイ用の器具専用バッグ)の中から、音を忍ばせて、首輪、くさりなどを取り出し、まず両足に足錠(小犬の首輪をくさりで結んだもの)をつけ、くさり輝をつけ、次いで犬の首輪をはめます。そして最後にピカピカ光る鋼鉄製の手錠をはめます。所で特筆したいのはこの手錠のことです。この手錠は、実は十一月初め、妻と共に新婚旅行を兼ねて上京した二日目の夜、夜の浅草を散策した際あるお土産専門店で偶然入手した物です。ずっしりした重みと店内の照明に冷たい輝きを放っている、本物そっくりの手錠を見た小生の喜びは一瞬とした性的エキサイトにも似た喜びでした。この手錠は一旦施錠すると鍵で開けない以上絶対開錠出来ないという代物なので、奴隷としての被虐感を増進するのに大いに効果がある訳です。さて犬の首輪、手錠、鎖輝、足錠を密し、眺めます。そして、ややあって、私はそのままの姿で石油

今月の新版強烈緊縛写真

奴隷捨札開股縛り

木村 洋子 略号 八きむ 四〇〇円
 太い竹の柱に後手しぼりで括られた裸身に縄目は素晴しい縞模様を描いている。素肌を晒す羞恥と緊縛の痛さを耐える顔面には豆しぼりの猿ぐつわが美しいアクセントを添え絶妙のムードを展開。

菱縄強烈開股縛り

木村 洋子 略号 八きむ 四〇〇円
 胸には柔肌にぐっと喰い込む菱縄が息もつけぬぐらい強烈に締めつけ、その縄尻が両股を大の字に開けきって閉じさせない。口には上下の歯を割って豆しぼりの手拭がむごたらしく頬をくびる。

竹柱立縛り晒し者

木村 洋子 略号 八きむ 四〇〇円
 太い竹の柱に後手しぼりで括られた裸身に縄目は素晴しい縞模様を描いている。素肌を晒す羞恥と緊縛の痛さを耐える顔面には豆しぼりの猿ぐつわが美しいアクセントを添え絶妙のムードを展開。

ストーブに近付き完全に炎を消し去ります。すると室内の温度は次第に下降しはじめやがて摂氏四、五度にまで達し、寒気が直接肌を蔽いつくしてしまします。私は部屋の中央の天井から下がっている鼻責め用の環に、手錠のままの手を伸ばし鼻の穴にさし込み環の先きに続いているビニールのロープ

を徐々に引張ります。鼻の穴に二個の環が食いこみ、私の両足はそれにつれて爪先き立ってきます。私の吐く息は荒くなり、鼓動は激しさを増していきます。実は私はこの夜、はじめての実験を試みたのでした。いつか、仙台のスポーツセンターで見た「国際魔術団」の印度人のショーからヒントを得

柱宙縛り苦痛表情

木村 洋子 略号 八きむ 四〇〇円
 木村 洋子 略号 八きむ 四〇〇円
 太い竹の柱に後手しぼりで括られた裸身に縄目は素晴しい縞模様を描いている。素肌を晒す羞恥と緊縛の痛さを耐える顔面には豆しぼりの猿ぐつわが美しいアクセントを添え絶妙のムードを展開。

猿轡股間縛り歩き

木村 洋子 略号 八きむ 四〇〇円
 木村 洋子 略号 八きむ 四〇〇円
 太い竹の柱に後手しぼりで括られた裸身に縄目は素晴しい縞模様を描いている。素肌を晒す羞恥と緊縛の痛さを耐える顔面には豆しぼりの猿ぐつわが美しいアクセントを添え絶妙のムードを展開。

たのですが、私は、私の胸や腹に木綿針と注射針を突き刺してみたいと思っていたのでした。私は妻を入院させての帰途、近くの薬局で皮下注射用の針を十二本、普通の木綿針一組それにフトン用針を六本ほどを買って置いたのです。室内の寒さにガタガタ慄えながら私は両膝をつき先ずテスト用に注射針を一本右手に持ち、左手で左の胸の肉をつまみ上げ一番薄い表面の皮膚に思い切って突き刺してこみました。疼痛は一瞬でしたがすぐに止み、一本の注射針を虫ピンのように縫いつけました。一本、二本、三本突き刺し縫いつける度に数秒間づつの苦痛はやはり想像通り私にMとしての快美感を味わせてくれました。やがて、私は左胸に注射針を七本、右胸に同じく注射針を五本、それに木綿針を三本。腹に二本、腿の付根にそれぞれ木綿針を二本づつ縫いつけ終りました。私は、改めて、両手に手錠を掛け、また鏡に全身を写してみました。この姿で思い切り尻を鞭打たれたいと強い願望を抱きながら……妻の不在がその時ほど残念に思ったことは有りませんでした。薬のようなMの快美感。併し最早私の人生にとって、SM

プレイは、その殆んど占めつつあるようです。私の脳裏には私自身の肉体をどのように虐げるか、どのように責め抜くか、新しい責め手を編み出すことで一杯です。月毎に年毎にM性が強靱になってくる私自身、どのように成るか、空恐しい気さえ致します。併し、私は悔いる気持はさらさら有りません。今、私は空恐しいと書きましたがその一例として最近の私は時折りこんな空想を抱くのです。それは私の、奴隷姿、牡犬姿（全裸に犬の首輪、鎖、手錠、足錠つき）を、私と妻以外の第三者に見せたい欲望を感じていのです。併し、これを実行に移すのは私が社会人として失格することになるので多分、単なる空想に終ることでしょうが、けれどもこの空想以外には私はすべて実行するつもりです。何故なら私は、実行もてこそはじめて戦慄的歓喜を得られるのですから。（仙台・秋田一郎）

○
 当地の書店の店頭から貴誌の姿が消えてから久しくなりますが、古本屋回りをして何とか途切れ途切れに入手しています。先日高崎へ旅行した際早速本屋を探して若干入手しました。以前のグラビ

ア写真の掲載してあるのを七百元で購入してきました。大阪(天王寺)や名古屋(駅裏)の古本屋でも買いましたが関西方面は一般に高いようです。さて前置きはこれくらいにして、私はSですが、実際の血生臭いものは余り好まず、多分に空想的なものが好きです。そして責められるモデルは肉つきがよく、逞ましい感じの女性がよく、ウエストがくびれ、ぐっと腰部臀部が張り出し特に足の付根から腿にかけて太く逞ましくプリプリ張切っていて脚全体が太く長いのが好きです。但し足首の太いのは頂けない。肥満体もよいが腹部の出張ったのや体の割に脚の細いのは嫌いです。責めのスタイルとしては全裸か僅かに前を覆った黒い紐のようなフンドシ一つで後手で股間縛りにされ鞭打ち、逆エビ責め等が最も好きです。瘦身の女や着物姿の責め、浣腸、切腹等は全然興味がありません。ウエストがくびれ腰部や腿が太く逞ましい女性(美人でなくても良い)が全裸か僅か前を覆った黒フンドシ一つで思いきり、その太く逞ましい腿を左右にひろげたポーズで緊縛された写真なら万金も惜しくな

いと思います。長々と駄文を並べて申訳ありませんが、私は三十六才の公務員で内攻性が強く、妻にもこの性癖をかくしている現状です。このような文を書いて送る所があるという事は私一つの心の支えです。どうか末永く貴誌が発展するよう、心から祈ってやみませ

ん。(富山市・中島悠男)

十二月号読者通信誌上での静岡の絹輝生様と一月号読者通信誌上の越中輝二様。僕への御好意嬉しく拝見いたしました。輝を通じて誌上での、親しい友達になりました。よう。さて僕の処は貴地等とは違い、冬將軍の襲う東北なので冬に入って厳しい寒さの最中です。だから暖さの為の輝を考案して自作しています。夏向きに作っても布地により、暖さをもてる布地も有るものです。それは洋傘の布地です。寒さを吹き飛ばして素裸になり身体に合やす時は、水ばなを流しながら着けてみます。自作のものを二、三紹介してみましよう。先ず、六尺輝は白と赤にしましう。白輝と赤輝、いずれも前袋の処にチャックを縫いつけました。白は白いチャック、赤は赤いチャックです。上前も中もつけまし

た。これはプレーなどの最高潮に開ける仕組でその後はむしり取られるのがきまりです。さて次はチヨッキですが、これはむしろプレーには奴隷用として、洋傘の布地です。尚、天狗輝と名称づけたもの。これは前袋の部分に二つ穴を開けて仕立ててみると面白味があります。次にカメラの事です。今はカラーのスライドを研究中です。造ったものを素肌につけて撮影し、写真はむろん写してみようと思っっています。又この次にします。お二方、冬ですので御身御大切に。さようなら。

(東北の片隅より・山崎生)

初めてお便りさせて頂きます。小生、貴誌を愛読し始めてから一年あまりになる二十六才の男性です。長い間悶々の日を過ごしてきた小生にとって、一年前旅先に於て貴誌を拝見できる機会に恵まれた事は生涯忘れがたい喜びの日とでございます。あれから一年。月を追うに従って貴誌のバラエティに富んだ迫力にすっかり取りつかれたようになっていきます。この迫力ある奇クを編集される方々に改めて心からお礼を申し上げると共に、敬意を表する次第です。殊

に私の毎月愛読してやまないのは連載小説「花と蛇」です。今度は臨時増刊として刊行される由、双手を挙げて心から賛意を表する次第です。

(石川県七尾市・飯川明)

河森真理子様、堺市といえは私にとつては小学校時代より結婚するまで暮したことのある、思い出深い土地で、現在神戸市内に居住しておりますが、なつかしい所です。さて貴女の通信を読みましたが、二月六日堺市方違神社正面又は裏門の所で午後二時半頃会いたいと思ひますが如何ですか。奇ク三月号(一月二十五日発売)の通信欄に可否御投稿願います。目印は貴女は右足首に繻帯をまいてガーズのマスクをしていて下さい。私は電熱ノートという専門書を持って同じくマスクをするか、又はキャロル(兵庫ナンバー)の車の中に置いておきます。尚私の年齢は四十一才、一五六糎六十斤のサラーマンで本人がいうのもおかしいですが人物に間違いありません。好きなのは緊縛と海老責で経験は八人程ありますので、緊縛については自信があります。勿論緊縛は全裸にして行ない、縄は非常

総天然色刺青写真

大手札型カラー・プリント
モデル……山原清子……

極彩色刺青

大手札三枚一組

略号 (ゆき)
一〇〇〇円

刺青色模様

大手札三枚一組

略号 (ゆこ)
一〇〇〇円

刺青の全貌

大手札三枚一組

略号 (ゆさ)
一〇〇〇円

全裸の刺青

大手札三枚一組

略号 (ゆし)
一〇〇〇円

前面の魅力

大手札三枚一組

略号 (ゆせ)
一〇〇〇円

化粧中の女

大手札三枚一組

略号 (ゆそ)
一〇〇〇円

奔放の姿態

大手札三枚一組

略号 (ゆた)
一〇〇〇円

豊かな臀部

大手札三枚一組

略号 (ゆち)
一〇〇〇円

三面鏡全裸

大手札三枚一組

略号 (ゆて)
一〇〇〇円

大鏡の刺青

大手札三枚一組

略号 (ゆと)
一〇〇〇円

総天然色緊縛写真

〇柱縛りに喘ぐ刺青女
大手札三枚一組 一〇〇〇円

〇高山 清子 略号 (やか)

大手札三枚一組 略号 (やか)
一〇〇〇円

〇緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号 (やく)
一〇〇〇円

〇脱がされた着物の中で

山原 清子 略号 (やも)
一〇〇〇円

〇縄にのたうつ入墨裸身

山原 清子 略号 (やし)
一〇〇〇円

〇腰巻一つで縛られる女

山原 清子 略号 (やみ)
一〇〇〇円

天然色湖畔女相撲

モデル 大塚啓子、東浦ひかる

〇湖畔の砂上で四つ相撲

大塚、東浦 略号 (うに)
二〇〇〇円

〇大自然の中で取組む女

大塚、東浦 略号 (うひ)
二〇〇〇円

〇砂浜での必死の女相撲

大塚、東浦 略号 (うほ)
二〇〇〇円

〇吊り合いと投げの応酬

大塚、東浦 略号 (うと)
二〇〇〇円

〇砂まみれの大業の応酬

大塚、東浦 略号 (うち)
二〇〇〇円

に細い中空の袋打になつたナイロン綿の柔かいものを使用しますので非常によくしまります。Mの方であれば喜んでいただけたらと思います。縛りの責めは腕と乳房を責めながら、手首を背後で高々と挙げて首縄をかけるやり方で、緊縛感は一層強く貴女の様なグラマーな方には最も適当した縛り方だと思ひます。若し、日時目印などに變更があれば奇巧に掲載の際に載願ひます。四十二年三月号を楽しみにしております。

(神戸市・前田徹男)

中原久美子様。十二月号であなたのお便り拝見いたしました。小生もあなたと同様、毎月欠かさず奇巧誌を愛読しております。小生は当年三十四才になる真面目な一会社員です。実際にはまだ一度もプレーの経験がありませんが、いつも頭の中では、種々の浣腸プレイを空想し、それで満足しておりました。然し本音をいうと、あなたのような同じ悩みを持つ女性の方と、実際にプレーすることが出来たら、と心から望んでおりましたし、又そんな機会がありましたら、どんなに楽しいことだろうと胸おどる思いがします。ところが

はからずも、十二月号であなのお便りを読み、さっそくペンを取りました。あなたの御希望のプレイなら浣腸でも何んでも十分に満足させて差し上げます。その他種々のプレイを二人で考案してみようではありませんか。お便りは蒲田局留で出して下されば幸いです。では、お便りを楽しみにしております。

(東京・大原一夫)

突然のお便りお許し下さい。小生は中年の男性マゾヒストにて、一度貴誌の女性モデルの方の中で女王様の方に責められたく願ひている者です。勿論男ドレイとしてムチのもとに一糸まとわぬ素裸にむかれ恥しい姿を大勢の女性達の目の前にさらし、一人一人の女性の方に身体の隅々まで見られ、ムチ打ち、くすぐり責めやローソク責にあって泣きながら逃げる私の首に、犬の首輪をはめて、飼犬のように、いろんな芸を仕込まれるのです。チンチンやおあずけの芸をうまくやれないと、ムチで尻を打たれるといった、このような浅間しい自分の姿を多くの女性達の前さらして玩具にされたいのです。恥しい裸体で思ひのままに、いじめられるのが私の運命なので

す。どうかこのような哀れな男ドレイをいじめてやろうと思召される女王様、次のところで待っておられます。京都四条河原町角、高島屋百貨店四階。友の会入口の休けい所。目じるしに女王様は色メガネをかけていて下さい。

(京都市・丸裸の玩具男)

○ K誌愛読の皆さん、編集部 皆さん、お元気ですか。私もずっと以前よりK誌を愛読させていただいております。私は二十七才になる男性ですが、生来女性の下着やゴムの下着等を好みいろいろ苦労して集めています。なかなか思う様に集まりません。やはり若い女性の着用しているものに愛着を感じ、女性の体臭のしみこんだパンティ、ゴムメンスバンド、ストッキング、ゴムおしめカバー等々を欲しいと思いますが、なかなか入手出来なくて困っております。特に総ゴム製おむつカバーや前びらき式メンスバンド等、欲しいのですが、K誌愛読の若い女性の方で御恵送下さる方はございませんか。狭いアパートの一室で苦しい生活をしている男なのでお礼という沢山できませんがK誌の旧号ならいろいろありますので、差し

上げます。名古屋の水城さん、神戸の太西さん、御機嫌いかがですか。貴女達と同じ様に、いまでもゴムのおむつカバーの香りにむせびながら、今この手紙を書いています。最後に編集部の方、我ゴムフエチや下着マニアのために、是非特集号を発行してただけませんか。では貴誌の御発展を祈りつつペンをおきます。

(高知・丸山 要)

○ 奇ク編集の方々、毎日御苦労さまです。私は、いつもたのしく読ませていただいておりますが一度女性とプレイを行なってみたいのですが、なかなかパートナーになつて下さる方が、見当りませんので、通信欄をお借りしてお便りをさせていただきます。初め読者通信の頁にのせていただく山本という二十三才の男です。小さい時から女の子がしばられたりするのに興味がありました。自分がしばつたことは一度もありません。だからといって、他人をしばるのは悪いことだし、相手の諒解を得てないらいのですが、今までにそんな相手にめぐりあったこともありません。それで、どなたか僕のパー

トナーになつて下さる方をさがしております。もしもしばられ責められるのがいやなら、僕が責めてもらつても、出来れば両方いける方ならば一方的でなく、また違った面白さがあると思いますし、そのときのことを色々話したい意見を出し合つてもたのしいと思います。連絡方法としては、毎夕(日曜以外)六時から十五分までわずかの時間ですが、次のところで立っております。目じるしは青の黒っぽいコートを着て国鉄京都駅の中央口広場と待合所の間の北寄りになります。僕は孝一、二十三才、身長一六〇センチやせ方。肥えた人もしくは普通の人、年齢は若いピチピチして人でも、年増の親切な人でも、お待ちしています。編集部の方、どうぞよろしくお願ひします。もしうまくゆきましたら、告白を書いてお送りします。

(京都市・山本孝一)

○ 大津市の中河恵子様。新年号のお便り拝見いたしました。貴女様のような方の名乗りを大変嬉しく存じます。私は数年前から本誌の愛好者となり現在に至っております。その間相当以前発行の本誌並に写真集なども蒐集いたしました。

た。よろしかったらお見せいたします。私は貴女様のような方と心ゆくまでプレイしたく存じております。私は大阪で商店を経営している三十五才の青年にて、ある程度身体的自由もきますので、貴女の御希望の日時、場所お知らせ下されば、いつでもどこへでも伺い出来ると思います。お互いに自動車の型や色を知らせ合つて、車と車のデイトをしても面白いと思います。貴女は相当のベテランのようですから、一緒にドライブしても、運転歴の浅い私の方がついていけないかも知れませんが、氣にいったモデルなどでプレイ出来たら、たのしいですが。私は商用で長駆、福井、金沢あたりまで日帰り度何度も行っておりますが、冬は雪が深いので苦手です。とにかくお便りを、お待ちいたします。

(大阪・宇月三郎)

○ 藤村美香様。マニア通信で貴女のお便りを拝見している中、誠に勝手ながら、貴女こそが私の求めている方のような気がしてきて、どうしてもペンをもたずにいられなくなりしました。私は余り現代的な女性が好きではなく、むしろ表

面はしとやかで、内に情熱を秘めているとったタイプの女性にあらがれています。お便りから受ける感じでは、その点貴女は私の描く女性のイメージにぴったりあっているような気がするのです。私が奇クを知ったのは、もう大分前のことです。奇クが公刊誌であるという性質上、中々連絡することがむづかしいようですが、是非共にお便りの交換をしたいと思っています。そして、それが平凡な日々の生活に新しい変化を与えてくれるならば、本当に楽しく有意義であると思います。幸い私は都内に住んでいますし、連絡さえつけ

ばお目にかかることも可能です。私の理想は貴女とプレーをし奇クにそれをモデルとして何か書きたいということですが、それはあくまで私の夢です。

(東京・吉井作一郎)
△編集部注▽藤村美香さん宛の通信が沢山参っておりませんが、彼女は住所氏名を明記されており、そこから、承諾があり次第、可能なものは転送します。

香山玲子様。十二月四日には定刻より十分遅れて到着しましたし、のでお会い出来なく誠に残念でした。その時おいで下さったのでし

たら、お詫びの仕様もございません。お許し下さい。又十二月十一日はどうしてもはずせない仕事が出来、上京出来ませんでした。でも十二月四日はとても寒く、あれでは到底プレイどころではなかったかも知れません。結局私には女性とプレイするというのは非現実的であり、あくまでも夢物語に終ってしまふのかもしれない。今私は非幸に危険な所にいる事が我ながらよくわかるのです。いつまでもこの自分が制圧できるのか自信がなくなりました。新聞紙上を賑しているいろいろの性犯罪がいかに多いことでしょう。私もいつ

かはそんな風に報道されてしまうかも知れません。ですから貴女とプレイをして自分を制圧する因にしようとしたのですが、残念ながら、その道もふさがれてしまった様です。香山さんに限らず、東京近郊のM女性の方この記事を見て助けてやりたいと思った方は、どうかこの欄を通じて連絡して下さい。お願いします。それから香山さんのお返事お待ちします。そして若し許されるなら、私に貴女とプレイする機会を与えて下さい。私はこれから先、奇クの読者通信欄を眼を皿のようにして見ることでしよう。(東京・若小宮太郎)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な

ものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円(の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和38年12月号	(送共二七〇円)
昭和39年3月号	(送共二七〇円)
昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)

昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)
昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)

昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)

☆編集後記☆

○力作「花と蛇」と共に極めて好評の団鬼六氏の随筆「鬼六談義」で巻頭を飾った。今後二月か三月に一篇の割で寄せてくれるそうなので楽しみに待たれること切。

○山本一章氏の尻をつついて、「カメラ・ルポ」を物してもらった。先ず皮切りは「木村洋子の巻」で御機嫌を伺い、次号は新人のモデル大島照代がすでに筆になつてゐる。

○第二回あたりでいささを中だるみするかに見えた水中花。さすがに芳野眉美氏の麗筆によつて今月号あたりから生彩を増して来た。賀集子夫人の「妖霊城」は先月の滑り出しも極めて快調、今月号では更に謎を深めて次号の展開を待たれること切。

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には本誌六カ月分以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

○辻村隆氏のカメラ・ハントでは、本誌にその華麗な作品を寄せられた須磨松男氏夫妻をテーマにして貰った。引続いて読者有志の話題を豊富に提供して頂けることと思う。

○一月中旬封切予定の映画「縄と乳房」の脚本を団氏の御厚意により、この種映画愛好者の方の御参考までに掲載した。今までの「花と蛇」シリーズの映画よりは一段と迫力があるとのことなので期待していいと思う。

○久方ぶりに葉山啓氏のシナリオ「悲歌」を掲載した。早くから頂いておったのだが、枚数の関係でのびのびになつてゐた。今月号では予定していた作品を大幅に翌月回しとして発表に踏みきった。「花と蛇」と「痴人の糧」は相変らずの力作ぶりで、きつとファンを楽しませてくれることと思う。

も結構です。皆さまの平常抱かれてゐる夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでは有りません。

若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては本誌五カ月分以上贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになつた事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円△
三月分(3冊)一〇五〇円△送共△
半年分(6冊)二一〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

二月号 〔第二十二巻第二号〕
昭和四十二年一月二十日 印刷
昭和四十二年二月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうち、本来自成人として編集いたしておりますが、未成年の方には絶対販売して上げないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。